
天恋

千原樹 宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天恋

【Nコード】

N40090

【作者名】

千原樹 宇宙

【あらすじ】

是永 紀子21歳の結婚するまでの、恋と不倫の軌跡。

恋の始まり

天恋

千原樹 宇宙作

恋の始まり

．．．．．「処女をあげちゃった！」．．．．．

まだ知り合って7日目なのに、何も彼の事は知りもしないのに。
身体の奥底にかすかな余韻を感じながら、昨日の出来事を繰り返し
思い出す。思い出さずにはいられなかった。

．．．．．抱かれちゃった．．．．．本当に好きな男性なの
？これで良かったの．．．後悔してないの．．．．．

眠れなかった。

朝までずっと起きていた。何回も何回も、同じところで、思いが立
ち止まる。そう、

・・・初めて、受け入れたその時点で、・・・止まってしまう。・・・後悔している？と、何回、尋ねたかしら？・・・

何度、尋ねても、答えは「否」だった。

「ノンの部屋に行く！」と言われた時、拒否しなかった。胸が熱くなってしまったけれども拒否できなかった。

「はい！」と、応えた時から、心の中では、こうなる事を予期し覚悟していた。

・・・心の奥底で・・・実は・・・待ち望んでいたのかも・・・

出会い

初めて、彼と知り合ったのは、7日前の12月6日、月曜日、午後9時45分頃同僚の女性と会社の二次会の帰りに、彼女がたまに飲みに行くらしい、カウンターバーに入り、混んでいる店内のわずかに空いている席に座る為に、席をずらしてもらい、二人で座ると、店の暖かさに顔が緩んで「ほっと」し、ざわめいている店内の雰囲気にも少し慣れた頃、

「今晚は、寒かったでしょう」と、隣の男性から声をかけられた。「はい・・・」と、直ぐに声が出た。

「乾杯しましょう・・・こんな綺麗な女性と隣り合わせなんて、超ーラッキー！」

私の右隣に座っている、口髭の30代後半くらいの男性が、

「さあー乾杯、乾杯！」と言ってグラスを差し出した。その言い方が何と無く悪意を感じさせなかったものだから、自然と微笑みながら、グラスを差し出しお互いに、「乾杯」をした。

「カンパーイ」

「ハイ・・カンパーイ」

私はお酒は結構飲めます。お髭の男性は二人ずれで、「乾杯」の時にグラスを差し出して初めて気がついた。その時が、彼との初めての出会い。お髭の男性が、少し身体の向きを私の方に変えて、「僕は矢崎です、こっちが、森本です、僕らは同級生なんですよ、今日、仙台から来たんです、今日は本当に寒いですねー・・・飲んでますか？」と、にこにこしながら言ってきたので、

「仙台からですか？お二人で？」と、何の違和感も無く応じていた。

「いえ、僕だけです。森本は地元です」

「お仕事ですか？」

「えーそんなところです」

そんな、何気ない会話を交わしながら、向こうの彼の事が気になり出していた。

・・・・・、殆ど話さない、でも、彼の視線が強く感じられる、でも、何故？・・・・・矢崎さんとは違って、随分落ち着いている。・・・・・無口なのかしら？・・・・・

そうっと見る。

・・・・・お酒は強そう・・・何のお仕事かしら？・・・

私は、どちらかと言えば同じ年代の男の子や歳の近い男性には、あまり惹かれなかった。どちらかと言えば、年上の男性に憧れている。

・・・・・・素敵な方だなくでも・・少し怖そう・・・・

そう思った。

彼の視線を痛いほど感じる。目が大きい。瞳が綺麗。まつ毛が長い。濃紺の背広が似合っている。

「ねー、スキー出来ますか？」と矢崎さんが、突然会話を変えた。

「矢崎さんは出来るんですか？」と、尋ねる。

「もちろん、上手いもんだよ、なーんてね、でも彼の方が僕より上手いよ・・」と言うと、それまで何も言わなかった彼が、

「そんな事はないよ、3年しかやってないもの」と、初めて話した。

それまで、ほとんど聞き役だった彼が、話した。期待したほどの低音の魅力もなければ、特徴のある声でもなかった。ただ、ぼそぼそと。

「ねー安比へスキー行かない？」

「矢崎さんは、お上手でしょうけど、私は下手なんです・・お二人の邪魔になるだけです・・」

カウンターバーでの会話は弾んで楽しかった。無口な彼も結構話してくれた。ただ、ぼそぼそと。

楽しい一時は、あっさり去り、同僚とは別々にタクシーで帰宅した。帰り際に、矢崎さんが

「スキーの予約をしたかったので、連絡先とお名前教えてください。」
と言ったので、何の警戒心もなく教えた。夜は冷え込んでいた。

会社

昨夜の飲み会の事を思い出しながら、お昼頃まで仕事をしていたら、凡の電話が鳴った。

「もし、もし、ゼニオンです。」と、可愛く可愛く、応えたら、

「もしもし、是永さんおられますか？」

「ドキッ！」

と胸になる。

・・・誰？・・・誰かしら？・・・

聞いた覚えのない声。

「はい、私ですが、・・・どちら様でしょう？」

「今日は、矢崎です」

「あっ、矢崎さん」昨夜の楽しかった記憶が蘇る。

「今、電話良いですか？」

「はい・・・昨日は、ご馳走様でした。電話、大丈夫ですよ」

「あゝ良かった、断られたらどうしようと思ってた」と、言うので、

「じゃ、お断りしようかな・・・うふふふ・・・」と、含み笑いをしながら応える。

「駄目ゝもう遅いよ・・・昨日のスキーの件で打ち合わせしたいんだけど」と、受話器から聞こえた。

「スキーの件ですか？」

「今日、何時に終わるんですか？」

「えー、夕方の5時過ぎてすけど・・・」

「じゃ、6時30分にロイヤルホテルのロビーに来てください」と、早口で言われた。

「ちょっと待ってください。そんなに急に決められても・・・」
「急な事で一瞬戸惑ったけれど、

「夜、仙台に帰っちゃうから、今日しか無いんです。」と、又、矢崎さんは早口で言う。

「えー仙台帰るんですか、今日？」

・・・・・・帰っちゃうんだー・・・・・・

一瞬寂しさの感覚が、身体を走り抜けた・

「そう、お願いします」と、今度はゆっくり懇願調な声が聞こえてきた。

「はい、分かりました6時半ですよ」と、今度も何も考えずに、そう言ってしまったていた。

電話は切れた。押し切られた。いきなりの電話ながら、でも、今の電話が何故か嬉しかった。何故か分からないけど、嬉しさが湧いてくる。それからの仕事は、あっという間に過ぎ、誰にも、知らせずニコニコしていた。

午後の6時45分、遅刻。待ち合わせの時刻は6時30、15分の遅刻。部屋に急いで帰り、シャワーを浴び、お化粧し直して、タクシーで向かう。外は相変わらず、雪。路面は大丈夫。市内の中心部にあるロイヤルホテルは、何かあれば良く待ち合わせの場所として、この町の人々は使う。

急いでロビーに入って行くと、矢崎さんが、手を振って招いてくれた。

「遅くなって、ごめんなさい。」と言いながら、ソファアームまで近づく、森本さんが座っている。

一瞬、

．．．．．来なければ．．良かったー．．．．．

と、思ってしまった。とても怖い顔をしている。こんなに怖い顔しているなんて、ヤクザみたい。

．．．．．本当にヤクザだったらどうしよう．．．帰ろう．．．．．
．。

「是永さん、今晚は来ないのかな」と、今話していたんだ、さーさっ座って」と、矢崎さんが言う。

「良いんですか？．．．．．何かお仕事のお話しても．．」緊張した声が出る。

「仕事は終わったの、さー座って、コーヒーで良いかな？」

「そうですか．．」と躊躇していると、森本さんが立ち上がり、

「さっ、座って、どうぞ．．さあ」と言われて、どうする事も出来ないでソファーに座ってしまっていた。

．．．．．どうしよう、場違いの所に来てしまったみたい．．．どうしよう．．．．．

でも、矢崎さんが面白可笑しく話題を振り回してくれた。

．．．．．助かる．．．．．

それから、スキーについて、色々話しているうちに、森本さんの表情が優しそうな顔に変わっていく。あんなに怖い顔から、こんなに優しそうな顔に変わるなんて不思議な人。私の心もその頃には、恐怖感も去り、時折冗談を交えながらの会話を楽しんでいた。時は過ぎ。

「汽車の時間だから、行こう」と矢崎さんが言うと、
「是永さん、矢崎を送りに行くけど、一緒に行きましょう、ねっ！
付き合いなさい」

なんか、命令されたみたい、でも

「はい」と、応えてしまった。

・・・・断れない・・・・あゝ・・・・

ホテルを出て、森本さんの車で駅まで送って行く。相変わらず雪が降っている。

駅の表玄関前で矢崎さんを見送り、私と森本さんは車に乗り込んだ。

「寒かったでしょう」

「いえ・・・・・・」

「食事に行きましょう、美味しいところがある。」と言って、車は走り出す。私は困っていた。

・・・・・・どうしよう、どうしよう・・・・・・

「矢崎君は、面白い奴だろう・・・俺とは、高校時代以来なんだ・・・悪友だね・・・」

「はい、とても面白い人ですねー今日お電話もらった時、びっくりしました・・・まさか、お電話貰えるなんて・・・」

「迷惑でしたか？」

「はい・・・」

「エッ!？」

「嘘です」

「昨日、お店で会ったでしょう・・・こんな綺麗な女性がこの町にいるのかと、本当にびっくりしましたよ・・・だから、どうしても、もう一度お会いしたかった。俺が、電話しろと言ったんです」

運転をしながらも、じっと私を見つめている。

車は、郊外へ走り・・・していた。不思議と怖さと戸惑いはなくなっている。

「森本さん、今日、とても怖い顔していましたが、来なければ良かったと思うていました」

と、あの時の思いを言ってしまった。

「怖い顔？ですか？・・・ふうん怖い顔ですか？」と言いながら顔を触る、ミラーに視線をやる。

「こんな優しい顔はないけどなく怖い顔ねううん・・・」

「とても怖い顔でした」

「ごめん」

「どうして、そんなに変わるんですか？今はとても優しそうな顔してますもの・・・」

「どうしてって、もともと、優しい好い男なんだよ」

「嘘！」

「えー？」

「怖い」

「えー本当に？」

「嘘、」

「ま・参ったなう・・・はははう」

食事は、楽しく美味しかった。郊外の静かな料亭の様な佇まいの、お料理さんの小さな小部屋で、ふぐ料理をご馳走になった。森本さんは、お酒、飲みたかったみたいだけど、飲んだのは私だけ、ちょっぴり。森本さんは、私が思っていたような無口で怖い人では無いように安心したし、決して無口ではない人だった。

・・・表の顔と裏の顔・・・

食事をしながら、

「今日は、恐竜について講義しよう。」結構冗談を言いながら、恐竜について話してくれた。

「どうして、そんな事をご存じなんです？」

「NHKが恐竜番組を放送していたんだ。その解説だよ、面白いだろう、植物が、恐竜を駆逐していたと言う説は。この放送で、NHKは、叩かれたみたいだね。」私は森本さんのお話しに引き込まれ、楽しんでいた。

「フグ、美味しいでしょう」

「はい、全然生臭くなくて！生臭い食べ物は嫌いなんです。お刺身とかも、特に貝類はだめなんです」

楽しい時間は過ぎ去るのは、速い。

車は市街に向かって走り出している。

「送って行くよ、何処まで行けば良い？」

「はい・・・すみません、今日はご馳走さまでした」

「部屋の前までは送っていかないよ」

「浦田町の辺りまで、すみません」

「了解」

車の中は、奇妙に静かだった、二人ともほとんど無言だった。

暫く、心地良い酔いのなかで、今日の出来事を思い浮かべていると、

「お客さん、浦田町ですよ、どの辺で？」

「もう少し先のコンビニでお願いします・・・すみません・・・」

・・・もう、こんなに近くまで来てしまったわ・・・

「今日のご馳走さまでした」

「楽しかったかい？」

「はい、ありがとうございました」

「ねー是永さん、明日、会えるかな？」森本さんがこちらを見ながら尋ねてきた。目が合った。真っ直ぐ見つめる視線が痛かった。

「どうしても、連れて行きたい所があるんだ是非、会ってください。」と、強く言われて、

「明日ですか？・・・なにも予定がなければ・・・」と、小さな声で口ごもる。

「じゃ、明日6時30分頃。コンビニに迎えに行きます・・・良いですね、」

強引に時間と場所を決められてしまった。

「はい」断れなかった。

「さっき聞いた、電話番号に電話しても良いかな？」

「えー」

「明日、楽しみにしているよ」

会社

昨夜の出来事を振り返ってみる時間もないままに、朝がきて、会社へ出勤。会社は製薬会社、私はこの会社の非正規社員。経理課の事務員。入社1年未満。会社までは、毎日、徒歩、車の免許は持っていない。

「是永さん、お早う」いつも、私の味方になってくれる正社員の、加藤さんが声をかけてくる。

「おはようございます加藤さん、目が真っ赤ですよ。飲み過ぎです

か？」

「いや、昨日ね」小さな声で

「ほら、ジェームズのマスター知ってるでしょう」

「え……」

「あいつに店番頼まれてさ、仕方が無いので番してたんだけど、最後まで帰って来ないんだよ、お客は来るし、忙しいし、今朝の4時過ぎまでマスターやってたんだ」と、疲れた表情で言ったので、

「そうなんですか、大変でしたね……でも、何かあったんですか、マスターに？」と聞くと、

「それがさ、店のお客の女の子とデートなんだって。10時までには帰るとか言ってたんだけど……」と応えたから、呆れて、

「お客の女の子ですか？」

「あーそうなんだ、マスターとつかえひつかえだからなー」

「それで、加藤さん、お手伝い、してたんですか？」

「まーそうだけど」

「知りません、心配して損しました。」

こんな風に、加藤さんとは社内では、結構親しくしている。

この課には女性の事務員は全部で3人。昨日の同僚の女性は26歳の既婚者で、物事にこだわらないおらかな人。もう一人の女性、32歳、既婚者、子供なし、私と同じ非正規社員。嫌で、嫌で、顔を見るのも嫌。嫌な女。

責任は取らない、失敗は他人せい。何かあったりしたら、もう大騒ぎする。今年一年間良く我慢しました。所長が転勤させようとしたら、盛岡の支店長に泣きつき、無理矢理取り消させ、所長のお顔を潰しても、翌日には、所長にニコニコ笑いながら、「おはようございます。」と平気で挨拶。信じられない。加藤さんが今まで何回かかばってくれなかったら、会社辞めていたはず。天敵みたいな女性。

朝の忙しさを、いつものようにこなしていると、加藤さんが寄ってきて、

「是永さん、今日の夜時間空いてる？ちょっと話があるんだ」

「ごめんなさい、今日用事があるんです・・・」

「そうか、じゃー今度にしよう」と、残念そうに言う。

「また今晚もマスターですか？」

「そうなるのかなー？一人身は寂しいからねー。」

「この間の女性、どうしたんですか？」

加藤さんが女性と歩いているところを偶然見たものだから、いつか聞いてみようと思っていた。そうしたら、

「えっ？何、それ？僕知らないよ！」と、何故か慌ている。

「見たんです！」

「な・何・・見たんです？」

「ほら、先週の水曜日小出町の繁華街を女性と歩いていたでしょう見ましたよー」

「み・見られたんだ。イヤー看護婦さんなんだ」

「何でも無い、本当に何でも無いんだ！」むきになって否定しようとする。

「へえーそうなんですか、怪しかったですよ。」

「何でも無いよ営業に行く病院の看護婦さんだよ、いつもお世話になってるから・・・」

「仲良くやってください、応援しますよ」

「そうじゃない！」

「おい加藤ー出かけるぞー」と、所長の声がした。会話はそれで途切れたけど残念そうな声で、

「誤解だよ、誤解・・・行ってきます」

「頑張ってください」

加藤さんって、本当に良い人。

仕事は何事もなくこなしていく。時間だけ過ぎてゆく。午後3時を過ぎた頃から、今日の約束のことを思い始めた。

「連れて行きたいとこって、どこかしら？」なんとなく胸がときめく。終わるまで何事も起こらないで。夕方までの時間は、短かったその間に加藤さんから電話があり、

「今朝の看護婦さんの事だけど、何でもないから誤解しないで」と言われた。

「はい、はい、看護婦さんに宜しくお伝えください」とからかい、
「誰にも言いませんから！」

「言っても良いけど、是永さんに誤解してほしくない」

「はい・・・」

ホテル

・・・今日は、6時半、遅刻はしない。近くだから大丈夫・・・

コンビニには森本さんの車が待っていた。今日は、雪は降ってはいない。車は白い排気を出しながら、静かに私の側まで寄せてくれた。私は躊躇なく後部座席に乗り込んだ。

直ぐに、

「済みせん、お待ちになりました？」　と言って見る。

「うん、3時間くらい待った・・・はっははー」と、言われたので、
「そうですか、嘘ばかり」と、言い返す。

「10分くらいかな、でも、良く来てくれたありがとう」

「いえ」小さく応える。

車は、走り出していた。

「ちよっと、ドライブするよ・・・」

「はい・・・」

盛岡市

車から降りると、外は冷え込み澄んだ空気の匂いがした。駐車場からホテル内に出入り出来るドアを開け、促されるように入り、短い廊下を歩き、再びドアを開け、ホテルのロビーに入って行く。ロビーはそんなに混んではいなかった。それでも、盛岡市内では名の知れたホテル。結構、人の流れはある。でも、私達に目を向ける人はいない。フロントを横目に見ながら、エレベーターの前に立つ。森本さんは私の横に立ち、エレベーターのドアが開くのを待っている。身長は、私より少し高いくらい。気にならない。上目遣いに見ると、顔がちよっと怖い感じがして、

「森本さん・・・」

「なに？」こちらを見ずに言う。

「お顔、怖いですよ」

「あゝごめんごめん」と言いながら、お顔をしかめながら、困った顔をした。ドアが開き中へ入る。

エレベーターは動きだした。二人きりでそのまま、最上階へ上がって行く。最上階の、レストランは私には、初めての場所だった。

マネージャーが、

「いらっしやいませ」と声をかける。

「予約してた、森本です」

「お待ちしております、森本様ですね、ご案内いたします」と奥の方へ案内されながら、レストラン内を見渡すと、お客はそれほどもなく、静かな雰囲気の中で語りあっている男女が数組。皆さん窓際に席を取っている。店内は照明の薄暗さの中にも調度品などで雰囲気を出している、なかなか素敵なお店。又、各席のテーブルの上にさりげなく置かれたローソクの炎が冬の寒さのなかに、

仄かな暖かさを演出しているようにも感じられる。奥へ案内されて見ると、周囲からは隔離されているかのような、まるで個室のような佇まいの空間だった。周囲からは見えにくく、人目を気にする事もない。

「さー座ろう・・・」

「はい・・・」

椅子を引いて貰いながら席に座る。

「ほうっ！」とする、瞬間。

ブラインドを引き上げると、席の右側に盛岡市街の夜景が飛び込んできた。初めて見る盛岡の夜景。ありふれた言い方だけど、宝石をちりばめたように輝いている。

「綺麗・・・」と、声が出る。

森本さんが、じっと私を見詰めていた。その視線に気付いて、見詰め合ってしまった。

・・・優しそうな眼差し・・・

短大時代の札幌市の円山から夜景を見た時以来の夜景。美しさの比較は出来ないけれど、今日のほうが綺麗な気がする。

「なかなか、素敵だろこの辺りじゃここが1番かな？寒く無ければちよっと郊外に行けば良いところは有るけどもう12月、外は寒いからね・・・」と、子供のようにニコニコしながら言う。もう、怖い顔はしていなかった。随分変化する。不思議な人。いたずらっ子のような、子供のような表情を、今はしている。

「是永さん、ご満足してくれたかな？」

「はい、ありがとうございます」私は少しふわふわした気分でした。「ワインで良いかな？それとも、ビールにする？」

「ワイン、お願いします。」

「森本さん、ワインお飲みになって、運転、大丈夫ですか？」帰りがちょっと心配。

「そんな事は気にしないで、飲まないから、大丈夫だよ。本当は、飲みたいんだけど！」

お酒は結構強いらしい、矢崎さんが、そんなこと言っていた。

「是永さんは、どんどん飲みなさい、さっ、どうぞ。」

「乾杯」

「乾杯、いただきます」ワインは口の中でじつくりと広がってゆく。

「今日は、付き合ってくれてありがとう・・・もし来なかったらと思うだけで、今日は仕事が手につかなかった・・・」

「・・・」

「来てくれてありがとう」じっと見つめながら申し訳なさそうに言う。

「いえ、私の方こそ、お誘いして頂いてありがとうございます。」と、応える。

「是永さんは、近頃の若い女性と違い、言葉遣いが丁寧なんだね、そんな言い方する女性と話するのは、久しぶりだよ、なかなか素敵だよ」ワインを口に運びながら言う、でも、飲むわけじゃない。

「そんな事ないですよ、父がとても煩いんです。それに、森元さんは、私より20歳くらい年上でしょう・・・うふっ」と、じっと目を見つめて言う、

「ちょっと待った、20も離れてなんかいないよ、失礼だなー俺はまだ32歳だよ・・・そう見えるでしょう、ほら・・・是永さんは幾つ？」初めて私の年齢を聞かれた。

自慢気に、

「21歳です」

「やっぱり、それじゃ10歳しか離れてないでしょ。」と森元さんは早口で言う。

「……うふふー嘘を付けない人かなーうふふー、だって表情に出ちゃうもん……」

「森元さん、嘘ついててもバレちゃいますよ、だって矢崎さんが、おっしゃってました……37歳だよって、引き算すれば16歳も違うんですよ」と、自慢げに再び言う。

「是永さんは若すぎるんだよ……ふん」と水を飲みながら、無然として言う。私はその仕草が可笑しかった。

「お爺さんですね、私にとっては」と、追い打ちかける。

「ひどい奴だな」

「もう歳の話しは止めよう、今日はインターネットについての講義をしよう」と話題を変えようとする。

「お歳のお話が良いな……」わざと聞こえるように言ってみる。

「駄目……」 間髪を入れずに言われた。

「歳の話しは、今日は禁句」

「イヤですー?……歳のー……」

「駄目だったら!」

楽しかった。

森元さんは困らせて見れば、結構子供のような表情をする。可笑しかった。お料理もワインも美味しく、会話は楽しかった。時間はとても素早く過ぎて行く。森元さんは私を笑わせたり、質問したりと、話題は豊富で飽きさせない。身振り手振りで話す。私は突っ込みを入れたりしながら、ほとんど聞き役。ワインも知らずに結構入ってゆく。でも不思議と酔わないでいる。

「お嬢さんは、ご満足いただけましたかな?」と森元さんは顔に笑

みを称えながら言った。

「はい、十分楽しくてお料理も美味しくて、ありがとうございます
た」

「じゃ、そろそろ出ようか・・・」

「はい」

帰ろうとして店内を見渡せば、ほとんどお客はいない。私達が最後らしい。エレベーターのドアが開くのを待っていた。やっと1階から最上階までやってきて乗り込むと ドアが閉まり動き出す。

突然、抱き締められた。

「きゃっ」

そして森元さんの唇が私の唇に重なる。

一瞬の出来事。沈黙の後に森元さんが、

「怒った？」と聞く。

私は黙って頷いた。

・・・ 驚いた・・・ 驚いた・・・ 驚いた・・・

「そうか、ごめん」

エレベーターは1階フロアーに着いた。人は殆どいなかった。

私達は無言だった。私の胸は熱く、心臓が「ドキン、ドキン」と音たてて、鳴っている、身体が熱い。そう感じられた。駐車場へ向かうドアを開けて、静かな廊下に出る。冷気が頬に感じる。もう時間も遅く人の気配はしない。廊下の灯りは心なしか暗かった。

少し歩いたところで森元さんが、私の身体を側に抱き寄せ強く抱き締めてきた。私は抵抗出来なかった。私の頬に両手を添えて、強引に唇を重ね合わせた。私はされるがままに、ただじっとしている。

何が起きたのかは、あのエレベーター内の一瞬の「キス」から、思考が止まってしまっている。重ねられた唇は離れ抱き締められながら、又すぐ重ねられた。そしてまた繰り返される。

「人が来ます、・・・」と抱かれながらも、私は上目遣いで森元さんに言う。

「構わん、今この時が大事なんだ」と、抱き締める腕に力を込めて言う。私は、ときどきしながらも、どこか心で「ホッ」としていた。再び、唇が重なり私の唇は少しずつ開いてゆく、少しずつ。

「がちゃ、ギー」と音がした。駐車場から泊まり客の男女が入って来た。抱き合っている私達を見て、気まづく思ったのか、

「今晚は、外は寒いよー。」と言って私達の前を通り過ぎていく。その時私は、森元さんの胸に顔を埋めて見られ無いようにしていた。恥ずかしかった。

「今晚はー」と森本さんが挨拶を返し、私を横に引き離し、肩を抱くようにしてドアに向かって歩き出した。外は冷え込んでいた。車に乗り込みエンジンが動き出す。私は助手席に乗り込み、じっと前を見ていた。心は少しずつ落ち着きを取り戻していた。吐き出す息が白い。車はマジエスタ、居住空間は思ったより広く車内は静かだった。暖気運転の音もあまり聞こえない。

「怒った?」と、森本さんは同じ質問をした。

「はい」と同じく応えた、

すると、森本さんが身体を寄せてきて、右手で私の顔を押さえ、唇を重ねてきた。私はただ黙って応じた。何秒かは分からない。唇が離れた、時、間近で森本さんが私を見つめながら、

「怒った?」と聞く。

私は目を伏せ顔を横に振った。

また、唇を重ねられた。

怒るものなにもこんなにされたら

・・・諦・・・め・・・かな・・・

車は走り出している。無言、静寂。通いなれた道のように車は国道を走り盛岡市内から離れて行く。郊外へ出るまでほとんどお互いに話さなかった。今日の出来事が目の前を過ぎて行く。食事の事も、夜景の事も、ワインの事もまるで夢の出来事みたい。今こうして、森本さんと車に乗っているのさえ、夢の出来事。男の人と「キス」をしたことは短大時代にある。でもキスだけだったしお付き合いした男の人私もそれ以上は望まなかった。何より幼かった。ある人に求められたけれど、私は応じる事はなかった。

「本当に好きな人に。」それが私の願い、古いわよと、友達に馬鹿にされたけど。

「処女が大事」とは思わなかったけれども、簡単に身体を許すのは馴染めなかった。そんな風潮も好きではなかった。

「ねえー是永さん？」

「はい？」

「いつも何て呼ばれてるの？紀子さん、かな？」そんなことを聞いてきた。車はどんどん進んで行く。スピード感を感じられない。

「はい、普通は、是永さん、友人はノリチャン、親友はノンちゃんかなー。」

「ノンって、呼んでも良い？」

「駄目です」直ぐ言葉に出た。心の思いとは逆の事を言いたくなる。「がっかり！」と言うなり、運転しながら首が、がくりと落ちた。

「駄目かー」と寂しそうに言う。

「良いですよ、ノンで・・・」前を見ながら聞こえないくらい小さな声で言った。

許容は始まっていた、一つ許せば、次も又次も。

「聞こえたー、今良いって言ったよね、ノンで良いんだね」

「はい」

「しょっ、しょうがねえくなあ〜おい越後屋〜き、聞いたか〜うおほっほっほー、う〜んこれは重畳、わしは満足じゃ〜満足じゃー」と、突然声を噎らして、時代劇の悪役がやるような感じで私に言った。

「うふふふふ〜はははは〜悪党ですな本当に」笑ってしまった。その言い方が可笑しく違った面を見たような気がした。

・・・可笑しな人・・・

「似ているだろう、うちの会社の人間で、これが上手い奴がいるんだよ！」少し声が大きかった。嬉しそうに私を見る、じっと見る。

「危ないです。前を見て運転してください」

「大丈夫、その為に車間距離空けて走っているんだから」

深夜にかかる国道には流石に車はあまり走ってはいない。会話はあまり弾まなかったが、決して気まずいわけではなかった。住んでいる「A」市内に近づいてきた。国道から逸れて市道に入る。人通りもなく車もあまりすれちがわない。知らない道路を、小路をどんどん走ってゆく。まるで人目につかないような道路ばかり。

車は走り続け、市内中心部へ来るにしたがって、明かりが増してくる。ちよっとした小路の灯りの無い場所に車は静かに停車した。

「ノン、今日は、有り難う。」直ぐ「ノン」って言った。

「はい」と応える。

「明日も逢いたい」じっと、私を見つめて言う。

「明日は無理です」と、直ぐに応えた。

「なんで？」

「明日は、ロイヤルホテルでカクテルパーティーがあるんです。会

社の人達と一緒に行く事にしていたんです。無理です。」

「す、す、杉田屋、しよ、しよ、しょうがねえ、なあ」又悪代官のような言い回しをしながら、

「あゝ思い出した、バーテンダー協会の毎年恒例の奴だろ？」

「はい、ジェームズのマスターのお付き合いで、うちの会社で何枚か購入したらしいんです。森本さん、ジェームズってご存知ですか？」

「うん、知ってる・拓ちゃんの店だろ」

「えーそうなんです。良く行かれるんですか？」不思議だった。

「たまにだけど、俺より、矢崎君が行くんだよ」納得。

「俺も、招待券あるんだ・付き合いで、会社の宣伝出しておいたから」やはりこの街は狭い。

「明日は、途中で出られないかな？」私の顔を覗きこむようにして言う。私は目を合わせない。

「無理だと思います、所長も一緒ですから」

「二次会へ行くの？」

「多分行くと思いますよ。いつも、二次会まではお付き合いしないとやはり無理。」

「俺、二次会終わるの待ってる。終わったら携帯に電話して」

「・・・もう、無理ですーどうしよう。・・・」

「何時ごろになるか分かりませんよ。無理ですー」囁き声になる。

「それでも逢いたい、どうしても逢いたい、待ってるから」強く言われた。

「・・・どうしよう、何時ごろになるか分からないし、お約束できない、どうしよう・・・」

「ノン！」

「はい。」

「絶対に逢いたい！」また、強く言われた。

「はい、お電話します」断れない。許容はまた進む。

「じゃ、明日会場で会おう」

・・・えっ・・・それって・・・

「森本さんも来られるんですか？」

「もちろん行くよ。スポンサーだからね」

「知らないお顔してて下さいね」

「もちろんだよ・・・俺も友人と行くから、遠くから見ているよ」

「明日も、逢うからね待ってる」

「・・・はい・・・」

そして車は、浦田町方面に向けて走りだした。夜も大分遅い。車は相変わらず信号機のない裏道ばかりを走って行く。浦田町の私の部屋の近くまで来た時に森本さんが言い出した。

「部屋の前まで送って行く」

・・・えっ、えー！・・・

「近くで良いですー」

「いや、知りたいから前まで送ってく」と又強く言われた。

「はい」と小さく応える。

私のアパートは、住宅街の奥まった場所にあり、通りからは見えない。入り口は三方向から有り、車の往来がほとんどない閑静な目立たない建物。車は静かに部屋の前まで来た。アパートの住人はもう眠ってしまったている。灯りは階段の灯りだけだった。私の部屋は、二階の左側と知らせると、私の頬に両の手を添え、私の顔を自分の

方に向かせ、今日何度目かの唇を重ねてきた、私は静かに応じる。私の唇が開いてゆく。

夜は更け行くばかり。

お見合い話し

「ルルルルルル」、「ルールルルル」遠くで電話が鳴っている。耳に遠くかすかに聞こえていたものが次第にはっきりと聞こえはじめた。

「ああーうーんー誰ー」まだ、眠いの、誰？受話器に手を伸ばし、

「もしもし」と話しかける。すると

「いつまで寝てるの、起きなさい！」

「あっ、お母さん、あーお早うー!」、母だった。私と母はとても仲が良い。

「起きなさい・・・」

「はーい起きてますー」途端に甘え声になる。

「昨日、電話したのに、いなかったでしょ、あんまり、遊んでばかりでは駄目よ」いつも開口一番、お小言をいう。

「昨日は、お友達と飲み会でした、もう朝から・・・」

「今日、夜、時間とれないの？」

「残念でした、今日も会社の飲み会なの！」

「又なの、しょうがない娘ねーホントに明日は、夜、居て頂戴ね。」怒ったように言うので気になって聞いてみた。

「何か、あったの？」

「従妹の玲子おばさん・・・」

「結構です。要りません。お断りしてください。」従妹、玲子と聞いた途端口に出ていた。「お見合い、縁談」何としても私にお見合いを、させるつもりらしい。

「やっぱりね、そう言ったんだけどねー、どうしてもって、お見合い写真置いて行ったのよ!」

「嫌ですー。」

・・・もう断然、嫌・・・

私はまだ21歳、結婚なんてまだまだするつもりなんてない。その事は、何度も母にも叔母さんにも伝えてある。

「お断りしてください。もう、会社に行きますから、お母さん、電話切るわよ!」

「明日、ちゃんというて頂戴ね。」と、母は声を落として念じるような言い方で言う。

「今週は駄目。予定が一杯ですから、来週にしましょう。じゃーね」と言っって電話を切った。

・・・もう朝から、お見合いなんて・・・

ふと、森本さんが聞いたらどんな表情するのかな?と思った。

・・・困らせて、見ようかな・・・

朝の会社

会社は朝は忙しい。出勤してみると、加藤さんと、嫌いな32歳の事務員と何か、話している。私は興味が無いので自分の仕事を始めた。

「ねー、小池さん、僕が先週、A病院の注文、頼みましたよねっ」

「何か、頼まりました？」

「先週の水曜日、注文して頂戴と、小池さんに伝票たのんだでしょう。今日、納品なんですよっ」

「私聞いてませんでしたよ」と、平気な顔をして言う忙しい時は、経理だろうと事務方だろうと、関係ない。そばにいる誰かに頼んでゆく。

確認しなかった、加藤さんも悪いけど、頼まれたはずの小池さんも悪い。

「今日納品なんですよ・・困るんだよ」段段、声が大きくなる。私は、沈黙するしかない。

「おい、加藤君、至急注文して、盛岡まで取りに行ってきたさい。時間は多少、遅れても大丈夫なんだろう？」所長が、水を向けてくれた。

「はい、そうします・・小池さん、きちんと仕事してくださいよ」加藤さんは、怒り声で言った。

「はい」と小池さんは返事はしたものの、多分、反省なんか、していないだろう。

「加藤さん、おはようございます・・大丈夫ですよ・・ほら、この間の看護婦さんの所の病院でしょう、加藤さんが、お詫びすればきっと大丈夫ですよ」と、言ってみた。

加藤さんはこちらを見ると、怒ったような顔で、げんこつをつくり、殴るような仕草をした。午後に加藤さんから電話が入る。

「今朝は、ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

「腹が立つよ、あいつには」

「いつものことです。気にしないでください。」いつも私が慰められている立場が今日は逆。

「今日のカクテルパーティ、行くでしょう？夕方、皆で行こう」

「はい、でも、小池さんは？」

「冗談じゃねーよ、誘わないよ」

「そうですね・・・」

夕方までは、何事もなく過ぎていった。

逢瀬

夕方、6時30分には、ロイヤルホテルの会場に入っていた。凄い人数みたい。立食のパーティ形式で、私たちの会社からは、6人が前のテーブルに陣取っている。結構な人数が来ていた。見知らぬ人が大半だった。自然と、会社仲間同士や友人同士になる。わたしたちのテーブルには結構、色々な人が出たり入ったりしてゆく。小さな市では、結構、顔見知りがいるみたい。知らないのは、私だけ。

「是永さん、飲んで。」と、言って、加藤さんが、カクテルを持ってきてくれた。

「ありがとうございます。」カクテルを手に持ち、お礼を言う。そして、また、テーブルを離れ、料理を小皿に入れて持って来てくれる。

「加藤さんも飲んでください・・・さあ〜」と言って、ビールを注ぐ。加藤さんは、ぐいと飲んで、席を離れる。忙しい人。

会場は騒然としている。壇上では、生バンドの演奏が始まった。すると、身も知らない男性が私の傍に来て、話し掛けてきた。

「今晚は俺、木村っすよろしく一緒に飲もう、今一人？」

「ごめんなさい、今日は、会社の人達と一緒にですから」と言うのと、「何だ、お高くとまってやがんの・・・」と言って離れてゆく。加藤さんが傍にきて、

「大丈夫だった？」と聞かれる。

「見てたんですか？」

「目を離さないよ」と言割れた。

・・・嬉しいような・・・

見知らぬ何人かから声をかけられた。結構、皆さん勇気がある見たい。でも、私には、引かれる男性はいなかった。でも声をかけられるのは嬉しい。

その時だった、人々の混雑がそこだけ途切れ、チョットした空間が奥まで覗く。

・・・あっ・・・

微笑んでいる人がいた。胸が、「ズキン」と鳴った。私が、気がつかなければ、ずっと見ていたのかもしれない。血が身体中を駆け巡る。喜びが湧いてくる。

「森本さん」だった。

・・・いらしてたんだ・・・

相変わらず、紺のダブルの背広を着ていた。私は、真っ赤な顔をしたと思う。何か、気恥ずかしいような、そんな気がした。私は、髪をかき上げながら、思いっきり微笑んだ。最高の笑顔を。

不意に森本さんとの瞬間の逢瀬は途切れた。人の流れが遮る。今度は、私が森本さんを目で探し始めた。身体を動かしながら、不自然な動きを悟られないように。

「いた!」、カクテルグラスを口に運んでいるところだった。

「友達と一緒になんです・・・どうすっか?」誘い方も色々みたい。私

は、手を横に振りながら、お断りして、直ぐに森本さんを捜すように視線を走らせる。

・・・帰ったのかしら？・・・

そこには、それから誰も帰って来なかった。急に、寂しく感じられた。急に、この場から離れたくなった。

「ねー加藤さん、そろそろ、二次会行きませんか？」と尝试してみた。

「そうだなー、でも、ビンゴゲームがあるから、それを待ってからにしよう。」

「はい」と、応えたが、ますます、この場が色褪せたものになってゆく。

夜の社交界

会場を出て二次会のお店に向かったのは、午後8時を過ぎた頃だった。

急に、存在感が薄らいでゆく会場で、ざわめいている周囲の人間達は、遠くの存在のように感じられた。自分でも気がつかないうちに、森本さんの存在は私の中で大きくなっていた。

いつも支店長が使っているスナック「ピアノ」は、これで、何度目だろう。

一人では来たことはないけど、会社の飲み会では、必ず、使う。

「いらっしゃい、お待ちしてましたー」とママが迎えに出てくれる。「はーい、今晚は、あれーママはパーティー行かなかったの？」と加

藤さん。

「行きましたよ。さっき戻ったばかりよ」と、笑いながら応える。

「会わなかったですよね？」

「すぐ、会場出たの、皆さんが来ると言うんだもの・・・」と、ママ。

お店のママは30代後半の髪がロングの素敵な女性である。決して、美人ではないけど、どこことなく、女の魅力が表情や全身に滲み出ている。女らしい女性。多分、お客さんは皆さん、ママが目的で通っていると思う。

今年のいつかは忘れたけど、私に、

「お店手伝わないかしら？あなたなら、綺麗だからきつと、大丈夫よ」と、誘われた事がある。

もちろん、お断りしたけど、それからは、結構私を気にしてくれる。男の人達は、めいめい席につき、他のお客さんはいない。

「水割り、ビール、」等と声をかけて、二次会らしく、無礼講になってきた。私の隣には、いつも、加藤さんと所長が座る。今日は、女性是我だけ。

ホステスさんが二人ほど、間に座る。皆さん、知った顔。

「是永さんって、相変わらず綺麗ね。私、うらやましいわー。」とママがこちらを見て言う。

「お世辞を言っても、なにも出ませんよー」と、私は、すぐに応じた。

「そんなお世辞じゃないわよ、ねー加藤さん、そう思うでしょう。」加藤さんは、水割りを飲みながら、

「我が社のアイドルだからね。綺麗ですよ。」と言う。すると、沼田さんが、口笛を「ピュー」と、吹いた。

沼田さんは、加藤さんの先輩にあたり結構仲が良い。その彼が、

「紀子ちゃんは、うちの社の宝ものだから、誰か、悪い奴がいれば、俺と加藤がやつつける係りなんだよ。悪い虫がいたら教えてくれよ。なー加藤。」と、言う。少し、酔ってきているみたい。私は結構、お酒は飲む。

「あの一、悪い虫がいるんです。困ってます。」と、私は笑いながら言った。

「ほんとか、何処のどいつだ？うちの会社の奴か？」と高木さんが言う。

「えー、うちの社の男性なんですよ。」「誰、それ、誰？」と興味ありそうに皆さん私を見る。

「それはですね、加藤さんなんです。」と笑いながら言った。すると、

「そうかやっぱりそうだったのか。」と沼田さん。

「いやー俺もそうじゃねーかと思っていたんだ。」と高木さん。

「普段の様子を見れば、やはりストーカーをやってたんだね、加藤君は！」と所長までニヤニヤしながら言い出した。

「あら、加藤さんって、是永さんをストーカーしてたんですか？」と、一人のホステスが言ったものだから

「チョット、待ってください、それじゃまるで自分が犯罪者みたいじゃないですか。」と、加藤さんが言う。

「え、ストーカーって、犯罪者なんだよ。」と所長は笑い出した。

所長がおお声で笑い出したら、皆さんも、笑い、一緒に私も。ハハハハ。・・・

「もう止めてくださいよ、是永さんもひどいな。」

「えー、私、加藤さんのファンだったのに、・・・・・・」とホステスさん。

「結構、夜の社交界でファンがいるんですよーでも、ストーカーと聞いたら、教えなくちゃ。」と別のホステスさんが言う。

「ストーカー、なんですか？ほんとに？」ホステスさん。

ははははは・・・

「おいおい、加藤くん、反省しなさい。今日は加藤君を反省させる会だな、こりゃ。」と言って、所長が再び笑った。加藤さんが、私のグラスに、ウイスキーを持って、黙って、注ぐ。それも、かなり強く。

「飲んで、さー飲んで。」

「加藤ちゃんよ、セクハラは良くないよ。」

「良いんですよ。もう、俺、今日は犯罪者になっちゃいましたから、今日は、遠慮しないで、セクハラ大王になるんです。！」

加藤さんが言う。

「うわー、加藤さんって、私に、セクハラしてるんですかー？ええー嫌だな〜」と私が言ったものだから、またまた、皆さんで大笑い。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ね！」と加藤さんに謝ったら、加藤さんはプイッと横を向いて怒ったようなふりをした。

「加藤さんって、女性にもてるんですね。？」とホステスさんに聞く。

「えー、私の知ってる女の子で、結構、いますよ。タイプだって女の子が！」

「そうなんですか、加藤さん、ハンサムですものね。それに優しいし、面倒見も良いし、スポーツマンだし、えーと、後は・・・」

「と言うと、

「ま〜〜飲みなさい、さ〜〜〜食べなさい、」と、加藤さんが笑いながら、言う。

「全く、是永さんには、加藤ちゃんもかなわね〜な。こりゃ」と、高木さんが真面目な顔で言う。

「いらっしやいませー」と声がした。それまで、店内に、私たちしかいなかった。店は、賑やかになりだした。そっと、時計を見れば、

午後9時を少し回った時刻だった。

他のお客が来てからは、私たちは、カラオケを歌い出した。

私は、カラオケは苦手。歌は、下手。だから、歌わない。加藤さんが、サザンオールスターズの曲を歌う。結構、上手に歌う。

でも、ほとんど誰も聞いていない。カラオケの本を懸命に読んでいる。読書のお時間みたい。酔いも手伝って、結構、歌う。

「是永さん、酷いよ。」と、加藤さんは私に言う。

「何がですかー？」と、とぼけて見るけど、「ごめんなさい！」と謝りながら微笑みを向ける。

「いいけど、本当じゃないよね。ねっ！」。

「ほんとですよー。」

「えっ」、

「うそ、ですー」、

「あーもー」。そんな、会話を加藤さんと交わしながら、私は時間が気になりだしていた。

時計を見ると、10時20分を過ぎている。森本さんとの約束。早く会ってお話したい。パーティ会場での心の隙間を埋めたかった。

・・・待っててくれるかしら？きつと、待ってる。・・・

加藤さんは目敏く、

「どうしたの、誰かと約束？」と、聞く。

「いえ。そうじゃないんですけど。」と応えて、ママさんとひそひそ話していた所長の袖を引き、

「今日はこれで帰ります。」と言った。所長は、時計に目をやり、

「そうか、今日は少し早いね。まゝ良いでしょう。気をつけて帰りなさい。ママ、タクシー呼んでやって。」と所長は言う。

「もう、帰るの、皆さん、寂しく、なるわよ。」。

「後は、ママさんに、お任せします。すみません。」加藤さんは、所長が言ったものだからそれ以上引き止めるわけにもいかず、

「気をつけて、送ってくかい？」と言う。

「大丈夫、大丈夫ですよ、タクシーで真っ直ぐ帰りますから。」私は、笑みを浮かべて応えた。

「はは、加藤ちゃん、振られちゃったよ。」と沼田さんが言った。タクシーはすぐ来た。

「おやすみなさい！」を言って、乗り込み、

「真っ直ぐ行って下さい。そして、電話ボックスのあるところで、止めて下さい！」、

「はい。」と返事を言って、タクシーは走り出す。すぐの角を曲がり、信号を左に曲がると、すぐに電話ボックスがあった。市内の繁華街の裏手側はあまり、人通りもない。

「待っていてください。」と言って、タクシーから降り、電話ボックスに入る。森本さんは電話を必ず待っているはず。そんな、確信めいたものがあった。受話器を取り上げ携帯電話の番号を押す。外は、結構冷え込んでいる。ボックスのガラスは吐き出す息で、曇ります。

「ルルルルル、ルルルルル・・・」と聞こえる。

「もしもし、森本です。」と、とても聞き取りにくい声がした。

「是永です。」素早く応える。別のタクシーが窓の向こうに通り過ぎてゆく。

「今晩は、待ってたよ。今何処？」

「今、電話ボックスの中です。」と声を抑え受話器を強く握りしめ言う。

「何処の？」

「小出町のI銀行の向かいです。」

「じゃ、タクシーを拾ってね、桜木町の、スナック、モレナおいで。」

「えっ、モ、モなんですか？」

「モ・レ・ナ、そう、タクシーの運転手に言えばすぐ分かるよ。」
ふと、からかってみようと思って、

「駄目なんです。これから、3次会へ行かなければならなくなったんです。」言ってみた。

「どうして？二次会までじゃなかったの？」と、意外な感じで聞いてきた。

「じゃ、今日は会えないの？」と、はっきり聞こえる声。

「え〜〜・・・」

「待ってるから、モレナへおいで、待ってるから。」

「ツーツー・・・」電話が切れた。切ってしまったみたい。怒らせ
たかしら？電話、切られた。

・・・・・・もう、短気なんだから・・・・・・

タクシーに乗り込み行く先を告げた。

桜木町は、繁華街の小出町からは少し離れている。市の東側の住宅街の入り口辺りにある。この周辺は、新興住宅街。タクシーの運転手は何も言わず、小路を進んでゆく。5分ぐらいで、「モレナ」に着いた。外からの見た感じは、スナックには見えず、看板がなければ、普通の住宅と間違える感じである。近隣りには、それらしき店もなく、ひっそりしている。こんな所があったんだ、と、なんとなく感心した。お店は2階にある。建物の横に階段があり、通りには面していない。結構急な階段である。

「カラ〜ン、カラ〜」と、店のドアを開けると音がした。

「いらっしゃい！」と、カウンター奥から声がする。マスターがでて来た。20代後半ぐらいの感じの、長髪で髪を後ろで束ねている。

「あのー、森本さんと言うお客さんいらしてませんか？」と私は、周囲を見渡しながら尋ねた。お客さんは誰もいないように思えた。

カントリー風の音楽が静かに聞こえる。

「あれー、たった今、出てったよ。」と、タバコを口にくわえながら言った。

「えー、帰ったんですか？今ですか。」と言いながら、急に後悔しだした。

「そう、ふられちゃったよ、とか言って、たった今だよ。」と、タバコの煙をはきだしながらマスターの視線が私から外れ、後ろの方に移した時に、私は肩を触られた。

「ハッ」っとして

振り向くと、森本さんが、笑いながら立っていた。

「ようこそ、モレナへ、お嬢さんは、驚いたみたいです。」

「森本さん、帰ったんじゃない？」

「ははー・・・」

「騙したんですね」

「そんな事はないよ。たった今来たばかりだよ。さー座ろう」と言っ
て私を奥の席へ案内する。奥の席は、カウンターからは、見えな
いように作られていた。

「マスター、カクテル作って、お任せでいいよね。」私は頷いた。

「良く来てくれたね。ありがとう。」

「騙したんですね？」私は、森本さんを睨みながら言う。

森本さんは、いたずらっ子のような表情をして、笑っている。

・・・もう、ホント悔しい。・・・

「乾杯」

「機嫌を直して、ね。」

「飲もう、ね」・・・

「私、急に不安になりました。」、知らないお店に一人では、嫌。
「ごめん、ごめん、来れない、と、言ったものだから、もし来たら、
からかってやろうと、マスターに頼んだの。」、

「どうして来た事、分かったんです？」

「ほら。この窓から、通りが見えるだろう。ずっと、待ってたんだ。
」・・・

「もう、止めてくださいね、一人では嫌ですよ。」

「ごめん、もう勘弁してください。」

「許しません。」

「ハハハハ」と森本さんは特徴のある笑い方をした。カクテルを
少し飲む。美味しい。森本さんは、結構飲んでいるみたい。でも、
酔っているという感じがしない。強いんだ。

「今日、早く会場出たんですね？」と聞いてみた。誰とですか？心
の中で聞いていた。

「あゝ、あそこに居れば、ママさん連中、うるさいんでね。」

「そう言えば、素敵なママさんとお話していましたよ。」と、思い
出しながら言う。

「あゝたまに行くお店のママだよ。そんな事どうでもいいよ。」と
言いながら、

「ここは、なかなか、素敵だろう。」

「のんと二人で会うのにちょうど良い。何が良いつてお客がいない
ところ。」と笑いながら言う。

お客は相変わらずいない。11時を過ぎている。マスターの好み
はカントリーみたい。バンドの為の小さいステージがあり、ドラ
ム、とか、ギターがおいてある。多分、金曜日とか、土曜日には、
満席になるのかもしれない。友達には秘密にしておこう。森本さ
んが、私の目をじっと見ながら、

「良く、来てくれた、ありがとう、会いたかった。」視線が痛い。
昨日の出来事が思い出される。この数日の事が折り重なるように思

い出される。

もう、自分の心は占領されてしまった気がする。どうして、そうだったのか、自分でも、とても不思議な気がする。今こうして、お会いしている事が現実ではないような、気がする。さっきまで、会社の人たちと飲んでいた。それが、当たり前前の現実なのに、今こうしている状態は、どうしても現実には、感じられない。不思議な感じ。

「森本さんが、会場から見えなくなった時、急に寂しくなりました。」と、言って森本さんを見る。考えもなく言ってしまった。黙って私を見つめている。私はその視線をただ黙って受け入れるだけ。その視線は、穏やかになり始めていた。

「のん・・・」

「はい。」、なに？

「明日も会いたい。時間を取ってくれないか？」と、真っ直ぐ見ながら言う。直接的にこの人は言う。それが、心地よく聞こえるから不思議だと思う。

「明日ですか。明日は、ちょっと、お部屋に居ないと、・・・」と、今朝の母の電話を思い出して言う。

「少しの時間だけでいいんだ。誰か部屋に来るのかい？」と、言われたので、

「いえ、母がお部屋に来ると思うんです。今朝、母から電話がありましたから。」母と聞いても、怯む事もなく、

「ふくん、」と言いながら、突然、

「何時頃になるんだい？・・・どうしても、会いたくない。」と言って、森本さんは

神社にお参りする時のように、拍手を、

「パン、パン」と、打ち、私の方を見て拝んだ。

「お願いします。」と頭を下げた、その仕草がとても可笑しく、私は笑ってしまった。

「ははは、ふふふふ、一一。」

「駄目ですよ、拝んでも。私は、神様ではありませんから。」意地悪したくて言う。

「いや、のんは紀子大明神様だから、お願いします。」と言って、手を合わせる。

「あゝ大明神様、わしの願いを聞いておくんなせゝどうか、明日も会えますように、おねげゝだ。紀子大名人様ゝ」

「どうしようかしら？」ほんと、おかしな人。

「もうー、」

「よし、決まりだね。明日、仕事終わるのは5時過ぎだから、6時に部屋の前に行くよ。よし、決まり、決まり。あゝ良かった。」と、勝手に言う。

「勝手に、決めないでください。母が何時に来るか決まってないんですよ。」

「電話すればいいよ。8時までに間違いなく、送るから。電話しなさい。ね。そうしなさい。」

決まった如く言う。森本さんの目が笑っている。

「もう、強引なんですから！」言う、身体を目の前に乗り出してきて、

「のん、会いたくないのか？俺は、会いたい、どうしても。」と、強く言う。

それには、応えず、仕方が無いなゝといったげの表情をして、

「分かりました。お部屋の前より、この間の、コンビニにしてください。」と、言ってしまった。

「OK、OK、時間は、必ず守ります。」ふっふふと微笑み、ニコニコしている。明日の約束をして安心した心したらしく、森本さんは、時計を見て、

「そろそろ、帰ろう。」と言う。もう、24時を回っている。結局、お店にはお客さんは、一人も来ず、私と森本さんの二人だけだった。マスターは遠慮して、奥に引っ込んだまま、出てこない。貸切状態。

「もし、もし、あつ森本ですけど、。」

「もし、もし、あのね、森本ですけど、モレナまで、一台回してください。」と、携帯から、電話した。

「のん、君は、携帯電話持っていないのかい？」と聞く。

「今は、必要ないので、持ってません。」

「そうか、珍しいね、今時の若い女性は皆、持ってるのに。」と、不思議そうに聞く。

「私、嫌なんです。これ見よがしに、手に持ってお電話してるでしょう。歩きながら、何処でも手に持って、メールとか見てるでしょう。そういうのってあまり好きになれないんです。一人ぐらい、そうじゃなくてもいいかな〜と、思っで。」と、日頃感じていることを言う。

「そうだよな、携帯手に持って歩いている人間って結構いるよな、常時手に持って歩く必要あるのかな〜とは、思っでたけど。それに、結構うるさいからなく管理されてるみたいで嫌なところあるよ、俺も。」と同じような事言っでた。

「格好良いとは思いませんもの。」、

・・・何処でも、電話〜〜なんて要らない。・・・

「いや〜のんは偉い。今時の女の子じゃ無いな〜。」

部屋と会社の往復に携帯電話は必要性はあまり感じなかつたし、電話はほとんど、夜、部屋でかけるので、そんなに欲しいとは思わなかつた。

「タクシー、来まじたよ〜」と、マスターがのんびりした声だ言つたので、

「よし、帰ろう」と言っで、席を立ち上がった。

お会計を済ましている間に、私は、ドアを開け、外廊下に出て

待つ。暫くすると、森本さんは出てきて、2階の階段の折口手前で、私を、引き寄せ抱きしめる。その行為は、ごく自然の振る舞いで、私が嫌がるなどとは全く考えていないようで、当然の如く、抱きしめ、私の唇を奪う。

「人が来ますう。」もう、言い訳みたい。

「構わないよ。」全く気にする事もなく、私の唇を吸う。私もそれが自然のように応じる。酔いのせいかも。長い時間のように思われた。でも、ほんの短いひととき。嬉しかった。強く抱きしめられ、

「明日、会いたくないのか？」と耳元で囁いた。

・・・・く、くすぐったい。・・・・

「お待ちしてます。」

「会いたくないのか？言って！」と、言う。私の顔の前に近づけて、覗き込むように見ている。

「はい、お逢いしたいです。」無理に、言わせられたわけじゃない。「ようし、さく帰ろう、送ってく。階段から落ちないでください。」と声の抑揚を変えて言う。私の手を取って、降り始める。

タクシーは結構な時間待っていた。私たちは、乗り込む。

・・・・運転手さん怒ってないかしら？・・・・

「今晩は、いつも、すみませんね。」と森本さんが、話し掛ける。「社長、何処まで行きます？」と、応じた。ご存知みたい。ホッとする。

「浦田町のコンビニのところで、頼みます。」

「はい」と応え、タクシーは走り出す。私の右手をそうっと、握ってきた。私は、黙って、握り返す。深夜の時間帯とはいえ、タクシーの往来が激しい。外は、相変わらず冷え込んでいる。

「疲れたろう。今日は、どうもありがとう。」と、言って、手に力を込める。

「いえ、大丈夫です・・・」・・・タクシーの運転手は、何も言わず、黙って、車を走らせる。夜の小路をすいすいと通りぬけてゆく。コンビニが見えてきた。

「その信号を右に曲がって、そう、そうしたら次の交差点を左、そう。そう、そこを、左に曲がって突き当りまで。」

もうすっかり慣れた道のりみたいに言う。タクシーは私の部屋の前に、着いた周りは静かに眠りの世界に入ってるみたい。

「今日のご馳走様でした。ありがとうございます。」森本さんは、

「お休み！」と言って、手を離してくれた。私を降ろすと、タクシーはすぐ走り去っていった。タクシーが曲がるまで見送って、階段を登り始める。

火照った身体は、まだ暫くかかるだろう、鎮まるまでは。

「もし、もし、紀子、起きてるの？」

「もしもし、あ、お母さん、おはようございます。起きてまゝす。」と、いつもの甘えた声を出して母に言う。やはり、朝早くに、電話がなった。留守電を切り忘れていたので、急いで切りかえ、電話に出た。母だった。

朝、7時過ぎ。カーテンの外は少し暗い、テレビのお天気予報に、この地方は今日は、晴れ。今日は、お天気が良いみたい。寒さも、緩んだみたい。

「昨日の電話の続きなんだけどね、・・・」と、母がきりだした。やっぱり、お見合い。

・・・あゝいや・・・絶対・・・いや・・・

「叔母さんにお断りして。」と、すぐ言う。お見合いに巻き込まれるのは嫌。

「玲子叔母さんと昨日話したんだけど、結構、良い人らしいのよ。」と、言う母。

・・・どこが良い人なの？でも・・・叔母さんのことも蔑ろに出来ないし・・・

「結構です。もう、いいです。いりません。」と、断ってみる。

「今日ね、お写真持って行くから、お部屋にいて頂戴ね。」と、母はもう決めているみたい。

「えゝゝ来なくてもいいのに。困るなゝゝ8時過ぎじゃないと駄目なの。」、今日の、約束を考えてしまう。今は、母より森本さんを優先に考えてしまう。自分なりに、予定を組み立てて見る。

・・・早く帰らなければならぬし・・・

午後6時にお会いして、8時までに戻らなければならない。どうしよう。やはり、今日は部屋には母が来ない方がよい。

・・・お見合いなんて、今の自分にとっては、とても迷惑。どうしよう・・・

その時ふと、思いついた事がある。

「実家に帰る」という考えだった。母にも、父にも、叔母さんにも、帰る事にすれば、嬉しいに違いないし、お顔も立つだろう。森本さんとの約束も叶えられるし、お会い出来るし。

・・・そうだ、実家に帰る事にすれば良いんだわ。森本さんに送ってもらえれば。お願いすれば、きっと大丈夫。そうすれば、2時間以上一緒にいられる。・・・

どうしても、森本さんの事を思ってしまう自分がいる。森本さんに相談してみよう。きっと「NO」とは言わないはず。

・・・でも、嫌われたらどうしよう・・・ずーずーしい・・・

と、思われたら？

「紀子、聞いているの？」

「あ、はい、何？」

「8時過ぎには帰るの？何かあるの？」いぶかしげに聞く。

・・・土曜日の会社の事もあるし、どうしよう、帰ったら母に送ってもらいましょう・・・勝手に、決めた・・・そうしましょう・・・森本さんにお電話しよう・・・

「ねーお母さん、紀子、お店に帰るね。久しぶりだから、何かご馳走作ってよ。」

「午後8時過ぎには帰れると思うー。」甘えた声を出してしまう。母には、いつも甘えた声を出してしまうのは、母はたいいの頼みごとは叶えてくれる。久しぶりと言っても、1月も経っていない。

「そう、お父さんも喜ぶわよ、土曜日は会社はお休みなの？」

「仕事なのー、だから、会社まで、朝、送ってね。」

「バスで来るの？」

「えー、そうする。」

「迎えに、行こうか？」

「大丈夫だから、美味しいお料理食べたいな。」

「土曜日にこっちに来れば、いいのに。」そう言い出したので、

「土日は約束があるの、だから駄目なの。」と言った。その後すぐに電話は終わった。

・・・ちよつと悩んじゃうわ。これで良かったかしら？・・・どうしよう？・・・帰ることになってしまいました・・・

「お電話しよう」そう思って、受話器を持ったけれど、時計を見ればまだ、早かった。会社に行ってからお電話しよう。そう決めると、もう迷わなかった。

会社

「おはようございます。」、

「おはよう。」

・・・朝は全国どこでも、「おはよう」なんだろうな

と、思いながら、席に着く。着くなり、加藤さんが、側に、やって来て、

「おはようー、是永さん、ちよつと、良いかな？」

吐き出す息は、アルコールの匂いがした。昨日は、相当、飲んだみたい。

「おはようございます。加藤さん、大丈夫ですか？かなり、匂いますよ。」と、顔を向けて言う。社員は出たり入ったり、いつもの、朝の騒めき。

「あれから、ジェームズに行って、今朝まで飲んでた。マスターの部屋に泊まってしまった。もう、今日は最悪。・・・」目が、真

っ赤で腫れていた。

「また、何か悪い事、したんでしょう。」思いつきで言う。

「何も無いよ。・・是永さん、今日、時間取れないかな〜」

「どうかしたんですか？」

「いや、チョット、話があっただけ。今日も無理？」そう言えば、昨日も誘われたっけ。

「ごめんなさい。今日、実家に帰らなければならなくて。・・今朝、母から電話があって・・・」

「それこそ、実家で、何かあったの？」お見合いの事は言わないでおこう。

「何でも、無いですよ。」

「そうしたら、え〜と明日は、スキーに行くから、・・・」手帳を見ながら言う。

「看護婦さんですか？」と、聞いてみた。驚いた顔をこちらに向けて、

「違う、違う、マスターの仲間だよ。」

「マスターのグループですか？」

「うん、そうだよ。」

「危ないな〜」と、私は笑いながら言う。すると、

「月曜日、月曜日なら時間取れるでしょう。」自分の手帳を見ながら言う。

「月曜日ですか？多分・・大丈夫とは思うんですけど？」

・・・・・・自動車学校も始まるし・・・・・・

と考えながら言う。自動車学校は、来週から行くことにしている。やはり、運転免許は必要、自分の車も欲しいし、好きな所へ行って見たかった。

「自動車学校へ行くの？」

「え」

「時間取れるかな？月曜日は大丈夫？」、これ以上、お断りするのは、加藤さんとの関係を気まずくしてしまう。それは、避けなければと、思う。

「月曜日ですね・・・」と考えながら、

「お仕事、5時に終わりますから、5時30分に、アップルに行きます。」と言った。アップルは、喫茶店であり、私たちのお昼の食堂みたいなものである。夜は、お酒も提供する。

「アップルか」

「駄目ですか？」

「いや、そんな事はないけど・・・」 加藤さんは、決めかねていたが、意を決したかのように、

「月曜日5時30分、アップルで、待ってるよ。」、

「はい」と、応えた。

「スキー、頑張ってください。」 加藤さんは笑いながら、側を離れて行った。

それからの、時間は、仕事に追われ、年末と言う事もあり、忙しく電話の応対も結構大変だった。問題の天敵とは、出来るだけ、会話を交わさないようにする。お昼の時間に、森本さんへ電話する。ずっと、気になっていたから。

「もし、もし、是永です。」携帯に電話する。直ぐに、

「もしもし、大黒屋ですが！」と、言われた。また、いい加減なお名前を、と可笑しく思いながら、私も合わせて、

「ご主人様、いらっしゃいますか？」と、言ってしまった。

「おーわしが、主の、羽黒屋 吉右エ門だが？」と、それらしく言ったものだから、

「はははは、今、大黒屋と言いましたよ！」

・・・もう、いつもこんなのかしら？・・・

「そうか、大黒屋だった、間違ったよ、うわっはははは。しょっくがねえくくなくく」

豪快と言えば豪快、でも、特徴のあるTVの悪代官風に笑う。ひとしきり笑うと、

「どうしたの？」と聞いてきた。

「いつも、そんな風に、お電話出るんですか？」

「はははは・・・のん、ただだよ。」と、笑う。笑った時の表情が浮かぶ。

きつと、悪代官の表情しているに違いない。

「そうなんですか。安心しました。馬鹿と思われますよ。」と、応じた。

「馬鹿とは、ひでく言い方で、やんす。あちきは、傷つきやんした。」

「もう、普通に話してください・・・」 声を、普通に落として、

「何か、あったの？」

「良い事意外は、聞く耳を持たないからね。」と、機先を制して言われた。

「悪い事です、お耳空けてください。」と、含み笑いを浮かべながら、小さな声で言った。

「悪い事は、聞こえないんだよ。」

「聞いてください。」

「嫌だ、聞きたくない。」子供みたい・・・

「今日のお約束・・・」と言いかけると、電話の声が重なった。

「何で・・・」

「あゝ、聞きたく無い。」

「森本さん、聞・い・て・ください。」と、強く言う。

「分かった。」

「今日のお約束駄目になりました。」と、嘘を言う。言ってしまった

た。

「そうか、……」そう言って、黙り込む。

「森本さん、……?」

「森本さん、聞いてます?」

「うん…… なにか、あったの?」

「はい。」

「なに?」

「実家に帰らなければならなくなりました。」と、早口で言う。……少しの沈黙……

「何か、あったのか?ご実家で。」

「はい、」

「そうか、父上か?」

「いえ」

「母上か?」

「なにがです?」

「亡くなったんだろう。」

「誰がです?」, どうしてそうなるの?と、思いながら、

「不幸事があったんだろう?ご実家で、それとも、じいさんか?」

何か、沈んだ声で言う。きっと、冗談で、言ってる、そう、思った。

「もう、冗談言わないで下さい。どうして、そうなるんですか?」

「違うのかい?……でも」あきれてしまった。

「違うのか?じゃ、何で、実家へ帰るの?」声のトーンが高くなった。

「お見合いです。」言ってしまった。

「お見合い!!」表情が浮かぶ。

「誰の?」意外な風に聞く。

「私です。」

「本当にかい?」

「はい。」すると、以外にも、

「のんの実家は何処?」と聞かれた。

「A市です。」

「A市か・・・」

「今日、お見合いするの？」と聞く。

「いえ、」短く応える。

「何時までに帰ればいいの？」

「夜、8時30分頃までには・

・・・」

「よし、実家まで送ってやる。」多分、そう言うかなーと思っていた。

「いいですよー。ご迷惑ですから、」口元に、笑みが浮かぶ。

「1時間くらいだろう。何で帰るの？送ってもらうの？」と、言う。

「いえ、バスで・・・」

「じゃ、決まりだ。」

午後の時間は何事もなく過ぎてゆく。冬の夕暮れは早い。午後の3時を過ぎると、周囲の明るさは、まるで暗さが大きな口をあけて待っているかのように、暗さの中に吸い込まれてゆく。

あまり好きな季節ではないし、本格的な冬にいたる前のこの時期は寒さが身にしみる。

学生時代の札幌は、それでも、華やかさがあり都会の生活が楽しく、寒さも気にする事もなかった。こちらに、帰って現在の会社就職してから、この一年間は、あわただしく、社会人の生活を学習する日々だった。今の生活に何の不満もなく過ぎてきた。

ただ一つ、嫌な事と言えば、同僚の事務員。不愉快な思いは数多く経験した。周りの人たちは、皆さん私には優しくしてくれる。

残業を言い渡されないかと心配していたけれど、問題もなく、時間通り、会社を出て、急ぎ足で、部屋に戻る。森本さんとの約束の時間は6時。もう、あまり時間は無い。留守電を聞きながら、お化粧

を軽く済ませ、身支度をして部屋で待つ。

「ルルルルル、ー」と、電話が鳴る。急いで、受話器を取り上げると、

「もしもし、・・・」

「のん？」

「はい」

「準備は出来た？」

「はい。」

「じゃ降りておいで、下で待ってるよ。」と言うので、カーテンを少し開けて見ると、見覚えのある車が止まっている。身支度を整え、階段を静かに下りる。

私は、車の後部座席に素早く滑り込んだ。車は、それを合図のように、静かに走り出す。

走り出して、間もなく、

「今晚は、お嬢さんはお元気ですか？」と、森本さんはこちらを振り向き笑いながら言った。

「今晚は、・・・すみません。」私は、精一杯の笑顔で応える。

「いいね、相変わらず、可愛いね、その笑顔素敵だよ。」バックミラーで私の姿を見ながら言ったので、

「誉めても、何にも出ませんよ。」と、返した。

「どうして？俺は、素直に言っただけだよ。」

私は、それには応えず、前を見ていた。車は、信号の無い交差点ばかりを過ぎて行く。まるで、裏通りばかり、小路ばかり。

「森本さん、良く道路知ってますね、！」と感心して言うのと、

「うん、裏街道の哲郎と言われるよ。」と、真面目な声で言う。

「うふふふふ」

私は、小さく笑った。

「えゝゝ越前屋、越後屋、大黒屋さんに、今度は、裏街道の哲郎ですか？」

「そうだよ、まだあるな」と、思案げに言ったので、
「良いですよ、覚えきれません。」と、笑いながら言った。

そんな会話を楽しみながら、車は、市内を離れ、どんどん闇に向かって走り出す。人家の明かりは、後方に過ぎて行き、遠くにゆらゆら揺れている。農道を走っているみたいだけど、暗いし、知らない道だった。まもなく、車は、静かに道路わきに止まると、

「のん、前においで」と森本さんは、振り向いて言った。私は、小さく頷いて、車を降り、コートを脱いで助手席に乗り込む。外は、暗く、冷え込んでいたが、寒さは、それほど感じられなかった。

車は、再び闇の中へ静かに走り出した。静かな時間が流れた。

そして、

「お見合い、するの？」と、私を見ながら聞いてきた。

「はい。」

「ほんとに、するの？」と、再び、私を見ながら言う。森本さんは、信じられないと言うような表情をしている。

「危ないですよ、前を見て、運転してください。」

「大丈夫だよ、横顔が素敵だから。」と言って、又こちらを見る。

「お見合いするの？」

「はい。」同じ事を言う。

「ふゝゝゝん？」

「しませんよ。叔母さんが、お見合いを、母に持ってきたんです。私はしたくないんです。」とはっきりと言うと、

「すれば良いのに」と、意外なことを言う。

「・・・・・・」

「後学の為に、良いかも・・・・。」と、ニヤニヤ笑いながら言うので、

「じゃ、します。」、

「するの?」

「えゝゝゝします。」と、なんとなく言っただけだった。
「無理しない方が言いと思うけどな。」

・
森本さんは、どっちなんだろうゝゝ気になるゝゝ・
・

「のん、ご実家はどの辺かな?」

「A市内の駅のそばです」

「あゝゝ駅の側ねゝゝ了解。」

車は、国道ではなく、山越えの道を走ってるらしい。市外の道はかなり走り、道は坂道を登り始め、中腹に差し掛かった頃、道路の左手側の空き地に車は勢いよく入り込んだ。すれ違う車は来る途中、ほとんどなく、こんな山道、一人ではいやだな〜と思っていた。空き地は、道路からは、全く見えない。

周りは低い樹木が生い茂っている。車の灯りを消すと、周囲は漆黒の闇に包まれる。

「うっ、」私は、声にならない、声を出す。

「いっ・・」

抗うもりはあったが、出来なかった。身体を硬くした。唇に唇が重なる。直ぐに、森本さんは唇を離して、私の身体をシートに押し付け、左手で私の髪を横にすくい、そのまま、右手を頬に添えながら、緩やかに身体を私に傾け、再び、上から唇を重ねてきた。私は、顔を上方に向けて応じる。そうするのが自然なように思えた。何も他に思い浮かばない。この瞬間に、心は満たされ始めている。至極、当然のように思われた。暗闇は、私を大胆にしていた。

唇を吸いながら、唇を開くように促し、上唇と下唇の間に舌が滑

り込んでくる。唇は少しずつ、開き、それを受け入れてゆく。

身体力は抜けてゆき、そのまま、私は、シートを背に身を委ねる。少し、身体に重みを感じた時、シートが後ろに静かに倒されてゆき、仰向けにされ、身体が重なった。森本さんの吐息が少し荒くなった。私も……。唇が離れると、そのまま、首筋に唇を感じた。その唇の動きに、

「うっあっあぁ〜」と、小さく声を出す。顎が上に反る。

……く・くすぐったい……

腕が自然にしがみつく。又、軽く吸われる。

唇は、少しずつ、動き出す。髪が乱れて、顔に被さって来ても構わない。

……あ〜吸われてる〜強く〜吸わないでえ〜・あ〜感じるわ〜……

髪を上方にかき上げられる。目を開けることが出来ない。また、唇を吸われる。苦しい。

……なに……が……

私の左手を上方へ導き握り締め、森本さんの上半身が、胸の上に動く。胸に動きを感じる。身体が熱くなってくる。

「あっ、」と驚きの声を出す。私の胸に、森本さんが顔を埋めた。モヘヤーの白いセーターの乳房の上に、森本さんがいた。

薄目をあけて覗く。

「あっいっや〜……あっ……」そんな声を見捨て、森本さんは、

私の動きを握り締めた手と身体で押さえ付ける。私は初めて、抗った。身体を動かそうとする。足だけが少し車の床を踏む。力はあまり入らない。

・・・胸を触られるのは初めて・・・

「ああゝうっ、いつ、やゝゝ・・・」はっきりと、

「嫌です。」とは 言えず、身を振り、声にならない声を出す。セーターの上からとはいえ、身体が火照って熱くなってくる。乳房を、右に左にセーターの上から翻弄される。

「あゝゝだ・駄目ゝゝゝ」頭の重さを感じる。乳房が押しつぶされている。

森本さんが、身体をずらし、また、唇を重ねてきた。そして、耳元で、

「怒ったか？」と、囁く。

私は目を開け、首を小さく横に振る。私の前髪を上にかきあげ、額に唇をあて、「ちゅっ」と音を立てる。目を瞑る。左右の目にも軽く触れ、再び、唇を重ねてきた。私は、そのまま、されるがままに受け入れる。セーターの上から、左の胸を触られる。もう、声は出なかった。その手は、少しずつ力を入れてくる。

「ふうゝはあゝふうゝ」息が、苦しくなってくる。その動きを感じたのか、唇は離れ、首もとに吐息を、感じる。森本さんの手は、胸の上を自由に動き出した。セーターの上から確かめるように、胸を触り始める。私は喘ぐ。

・・・くゝくすぐったいゝゝゝそんなにゝゝしないでゝゝあゝゝ恥ずかしいゝゝゝゝゝゝ

セーターが不意に、首元までたくし上げられる。

・・・・あゝやはり・・・・

「いやっ!」と、声が出た。無視される。ブラジャーの上から、乳房を包み込むように握り締められた。

「あつくうゝ」

握られた乳房に強い、圧力を感じた。そのまま、ブラジャーがずり上げられる。乳房が、重たげに横に広がる。目が開く。目が合う。恥ずかしさが、体中一杯に広がる。

「いや! 止めてゝゝゝ」、剥かれた乳房にひんやりとした空気を感じる。身体を振る。

乳房を直に持ち上げるように、強く握られ、触られた。

「あっいいいやあゝゝゝゝ」

・・・・握られている・・・・

森本さんの掌はとても熱く感じられ、顔が火照りだした。

森本さんは遠慮なく揉んでいる。私には、強く感じたり、弱くなっただけだったり、そう、乳房を確かめているように思えた。

「あっいいゝゝいううゝゝはふう、ふっふうゝゝ」息も荒くなる。暫く、乳房を確かめられるように揉まれていた。

「怒ったかい?」と、乳房を握ったまま、私をじっと見つめて聞く。

「はい!」とは言えなかった。言っても多分無駄なような気がした。

「怒った?」と、再び聞いたので、

「はい」と、返事した。

・・・・・・・・恥ずかしい・・・・・・・・

シートの下に手が滑り込んでくる。あっという間に、慣れた手つきで、ブラジャーのホックが外された。押さえつけていたブラジャーは、外れ、セーターの下に押し込まれた。乳房を、露にされ、遠慮なく乳房を揉まれる。私の乳房は、結構大きい。少し、垂れ気味なのが悩み。乳首を直に触られるた。

「あーうふーはあー」と、甘い声を出した。乳首が異常に感じた。

・・・・・・・・えっ嘘おーえええーうそー・・・・・・・・

と乳首に触れた、初めての感じに戸惑う。

・・・・・・・・びり・びり・する・・そんなーこんなに、感じるなんて、初めて・・・・・・・・

強く握られた乳房の先の乳首を口に含まれた。

「あっあー・・あー」声が出る。私は、森本さんを、目を開けて、見てしまった。信じられなかった。

・・・・・・・・こ・こんなに、感じてしまうなんて・・・・・・・・嘘おー・・

見ずにはいられなかった。私の、右の乳房を揉んでいる右手を、乳首を含んで、吸っている、森本さんを、見ずにはいられなかった。初めての経験。乳首が、乳房がこんなに感じるなんて。離れられなくなりそうな、そんな予感が、心に浮かんた。私は、夢の中にいるような気がしていた。経験した事の無い感覚を追っている。自分で触っても、こんな感覚はこれまでの人生で経験した事が無い。心が追

っている。身体全てで、その感覚を追っている。

・・・熱い。熱いわ！・・・どうしたんだろう？不思議な感覚。身体中が驚いている、感じている・・・好きなようにされている・・・あゝ私はその動きを追っている。・・・

右の乳房も左の乳房も好きなようにされている。どれだけの時間が過ぎたかは分からないけど、長いようであり短いようでもあった。身体に感じていた重みが、不意に軽くなる。薄目を開けて見る森本さんを見る。視線が会うと、直ぐに目を閉じる。セーターが引き下げられた。乳房が隠れるて、ほっと、する。

・・・あゝ感じたわ・・・乳房で・・・乳首で・・・

セーターの中に手が入り込み、ブラジャーが乳房に被せられた。森本さんの身体が、完全に私から離れる。目を開けると、森本さんがじっと、私を覗き込んでいた。私は、横を向いて、目を閉じて仰向けのままじっとしていた。

再び、目を開けて上を見ると、視線が合った。

「嫌いです。」と、頼りなげに、か細い声で言う。精一杯の思いを言う。多分、無視されるだろうと思った。

「そうか。」と、森本さんは言って、再び、私に覆い被さってきた。唇が重なると同時に、セーターの中に右手が滑り込んで、乳房を、強く掴まれる。そんな、強い力だった。私の手が、セーターの上からその手を押さえる。添えると言った方が適切な言い方。唇が離れると、森本さんは、静かな声で私を見ながら

「嫌いか？」と、再び聞いてきた。

「嫌いです。」と力なく言っただけ、これも無視されるだろう。下から乳房を「ぎゅっ」と、持ち上げるように強く握られた。

「嫌いか？」、いつもそう。強引。必ず、確認を取る。

「のん、怒ったのか？」、わたしは、目をつむり首を横に振る。
「うん、それで良い。」と言って、納得したかのように、私の身体から離れた、森本さん。

・・・ あきらめ・・・許容・・・悔しいような・・・

私は、身体を起こした。電動のシートは静かに起き上がる。

私は、顔を横にして、森本さんを見ないようにして、ただ、沈黙していた。

「のん、怒ったのか？」と、再び、聞かれた。私は、身支度を始める。森本さんが、じっと見ていたので、顔に手を伸ばし、

「横を向いていてください。」と言った。

「見ないで下さい。」と言って、睨みつけ、素早く身支度をしていく。

車は、闇の中へ走り出す。私は、ずっと無言でいた。怒ってはいないけど、ふりをしていた。

・・・困らせよう。・・・

森本さんも、何も言わない。車は、暫く走って、坂道を登りきり、下り始める。すれ違う車はなく、曲がりくねった道は、何処までも続くようだった。道は、凍結してはいなかったが、道路端には、雪が所々ある。車のスピードはそれほどでもない。結構、安全運転。ただ脇見運転をするのが悪い癖。

車は、道を曲がったところで止まった。そこは、山の連なりが切れ遠くが見渡せる場所だった。

「のん、寒いけど、ちょっと車から降りて。」と言う。

私は、

「どうしたんですか？」と聞く。

「さあ、降りて」

車から降りると、森本さんは私の側にやってきて、肩を抱きながら、歩き出した。

吐く息が白く、寒さが頬を打つ。ほんの少し歩くと、目の前が開けて、遠くに町の明かりが、きらきら輝いているのが見える。

「綺麗いっ」森本さんは、ただ、無言だった。少しの時間、無言で夜景を見ていた。

「さー戻ろう、寒いだろう。」と言って、戻り始める。

「初めてかい・この場所」

「えー初めてです・・・綺麗でした」

「ここしかないんだ、おー寒い。」と言って、車に乗り込む。

「寒かったろう？」寒かったけど、火照った、身体には、気持ち良かった。

「怒ってるかい？」と私を見つめながら言う。

・・・・・気にしてたんだー・・・・・

心配そうな表情をしている。私は、目を反らし、前を見ながら、小さな声で応えた。

「怒ってませんよ。」反対の事を言いそうになる。

自然に、静かに唇が重なる。当り前のように、唇が重なっていく。吸う、絡む・・・・・そんな、キス。

「あーもうこんな時間だ。」離れると、森本さんは腕時計を見ながら言った。

「行こう。」

「はい、」

何事もない様に車は、暗い夜道を走り出す。下り終えると、人家の灯りが遠くに近くに目に付くようになる。途中、あまり会話はしなかった。満たされた雰囲気包まれていたと感じたのは私だけではないようだった。市内に入る頃に、

「のん、ご実家は商売かなんかしてるの？それともサラリーマン？」と聞かれた。

「駅の側で、お店やってるんです。」

「何の？」

「料理屋さん、主に、お寿司と、日本蕎麦なんです。」

「料理屋さん経営してるんだ。」

「はい、」

「じゃ、今度食べに言って見るよ。」 と言うものだから、

「だめー、止めてください。絶対駄目です。」

「どうして？」

「どうしてって、駄目なのは駄目ですー。」森本さんは、言い出したら本当に行きかねない。

「お約束してください、行かないって。」と強く言ったものだから、
「分かった、約束するよ。」

「約束ですよ、」

「約束……する。」

「もし、約束破ったら、お会いしませんよ。」

「OK、OK・・はははは」

「約束は守る、だからね、
・
・
」

「なんですか？」と聞く。車は、市内中心部へ入ってゆく。もう少しで、駅に着く。

市内には雪はほとんど降り積もってはいなかった。少し、所々に黒くなっている。自分が育った町。

「のん・・・」

「はい、？」

「明日、のんの部屋に行くよ。」と言う声が、はつきり、聞こえた。「えっ！お部屋にですか？」少し驚いたけど、なんとなく、驚かされる事に慣れてしまったような・・・気分。

「のんの部屋に行く。決めたよ。」と、再び、聞こえるように強い口調で言われた。黙っていると、追い打ちをかけるように、

「嫌かい、俺が行っちゃ」

「嫌じゃないですけど」

・・・どうしよう・・・どうしよう。・・・

直ぐには、応えられない。

「嫌かい？」

「いえ、嫌じゃないですけど・・・何にも、無いですよ。」

やはり、断れない。ずうと、断れないできた。押し切られる。今日も。

「ようし、明日、6時30分に行く。二人で、飲もう。」

・・・お掃除とか、グラスとか、あ～～どうしよう・・・

そんな、事を思い浮かべていた。

「お酒と、料理は俺が買ってゆくから、心配しなさんな。」

「えーでも・・・」

・・・どうしよう、・・・お部屋にですか？・・・

「のんの部屋に行く。いいね。」と、駄目を押される。

「はい。」

承諾してしまった。森本さんは来ると言えば、来るだろう。断れない。

車は、駅の近くまできた。森本さんは、車を止めて、

「お店はどの辺？」と聞く。

「すみません、この先を曲がってください。」車は、走り出す。車はすぐの交差点を曲がる。

「真っ直ぐ行ってください。」

「あっ、次の信号を左に行ってください。」もう、お店はすぐ近くでも、ご近所の人達に、見られたくない。

……少し、離れたところに止まって頂いて……。

信号を左に曲がると、お店の、通りの裏通りに入る。裏通りの灯りがない場所で止まって頂く。

「ここで良いの？」

「はい、今日はありがとうございました。」

「こっちこそ、ありがとう。楽しかった。」と、嬉しそうに言う。

「のん、明日、行くからね。必ず行くよ。変更無しだよ。」

「はい、分かりました。」と言って、車から降りる。森本さんは、それ以上言わずに車を出した。そのまま、走り去ってゆく。

……明日、お部屋に来る……来る……。

処女

処女喪失

「ただいまー」と言って、お店の裏から調理場へ入る。

「あ、お嬢さん、お帰りなさい。」と、お店の、明さんが驚いたように声をかけた。

時間は8時30分を少し過ぎた頃だった。

「お帰りなさい、」

「お帰りなさい。」と、調理場の叔母さんたちが挨拶する。

「お母さんは？」と、叔母さんに聞く。

「社長と奥さんは、奥のほうにいますよ。」と、言う。奥は自宅になっている。

「ただいま、今帰りました。」と、居間のドアを開けると、

「お帰りなさい。」

「のりちゃん、お帰りなさい。」と母の声と玲子叔母さんの声が聞こえた。

叔母さんが来ている。

・・・やっぱりネ・・・来ると思ってた・・・

「玲子叔母さん、今晚は。来てたんですか・・・」と、言いながらソファーに腰掛ける。

「遅かったねー、バスで来たの？」と母が言う。

「ううーん、友達に送ってもらったの。」

「友達って、まさか、紀ちゃんの恋人？」、叔母さんが、すぐに聞いてくる。

・・・・・・そうですよと、言いたかったけど・・・・・・

「まさかですよお母さん、食べよう、お腹すいちゃった」

母の料理がテーブルに並んでいる。私の好きなものが並んでいる。優しい母。

「あれ～～お父さんは？」

「今お風呂・・・もうあがる頃よ」と言っ、立ち上がった。

「私も手伝う・・・」台所に入って、直ぐに、母に、

「玲子叔母さん呼んだの？」と聞く。母は笑いながら、

「昨日、電話しておいたの・今日来るってね・・・」

「もう嫌なんだから、お見合いなんて」

「良いじゃない、なかなかのものよ。」と母が言うので、

「なにが良いの？」

「おっ、帰ってたのか、お帰り。」と、父が入ってきた。

「ただいま、お父さん。」

「バスで来たのか？」

「ううん、恋人に送ってもらったの。」と、笑いながら言えば、

「そうか、今度紹介しろ、しかし、叔母さんどう言うかな？」

「まさか、冗談ですよ～～お友達に送ってもらいました」

「そうか」と言っ、冷蔵庫からビールを出しテーブルに座りながら「ごく、ごく」と美味しそうに飲み始めた。

「玲子叔母さんが待っているから、居間で飲んでください。」と母が言う。

「ね～～紀ちゃん、良い縁談があるんだけど、ねっ」と、ソファに座るなり、言い始めた。

「ね、お写真見て、ほら、なかなか好い男でしょう」と言っ、写

真を私に渡す。

「叔母さん待って、お食事食べてからにしましょうよ、お腹空きましたぁ」

「そうね、はい、お兄さん」と言って父にビールを注ぎ、

「紀ちゃんにも、はい」

「ありがとうございます。」と言って、三人で「乾杯」をする。

「お父さん、お店はいいの？」

「あゝもう今日10時で閉めるから、いいんだ」父は、嬉しそうに言った。

「紀ちゃん、今幾つになったけ？」と、叔母さんが聞く。

「今月の23日で、22歳です。」

「そうなんだ、22歳なら、お見合いしても大丈夫。」と叔母さんが言うものだから、

「はっはははー、紀子、お見合いだってよ、どうする？」と父は私を見て笑いながら言う。母は、ニコニコしている。

「まだ早いですよーまだ」

「そんな事はないわよ、22歳と言えば適齢期よ。」と、もうなにが何でも、押し通すらしい。

・・・食べる事に専念しよう・・・

お料理は、美味しい。母の手料理は大好き。

「紀ちゃん、どう、なかなか好い男でしょう。歳はね27歳、銀行マンで、長男、お父さんは、米屋さんを経営しているの。財産もあるし、将来は、社長婦人よ、こんな良い縁談は無いわよ。」と、叔母さんは得意そうに言う。

確かに写真の男の人は、真面目そうで、いかにも銀行員らしい雰囲気。

でも、写真を見ても、興味は湧かなかった。森本さんの事が無くて

も、まだそんな気持ちにはなれない。

「紀ちゃん、付き合ってる人いるの？」

「いませんよ……」

「ねえ、紀子、お見合いしてみたら？」と母が言うので、叔母さんはますます調子に乗り出した。父は黙って、聞いている。

「お父さんはどう？なの？」と聞いて見る。

「紀子の好きにすれば良いだろう。自分で見つけるもよし、見合いもよしだよ。」と、ビールを飲みながら言う。

「お兄さんは、まだお嫁にやりたくないんでしょう。」と、叔母さんが言ったので、父は、にやりと微笑んだ。

ルルルルルと、電話が鳴った。

母が出て、

「明さんからよ、」

「うん」

お店を閉める時間らしい。もう十時近い。

「叔母さん、分かりました、少し考えさせてください。」言って、この場を納める。

お湯の中で、自分の乳房にそっと手を当ててみる。乳房に触る自分の手に、記憶が蘇る。少しの時間しか経ってはいない。思いは遠い記憶をたどるようである。でも、さっきの出来事。

乳首にそっと触れてみる。その感覚はやはり、微かにではあるが残っている。

自分の顔が火照っているのがわかる。お湯の中の乳房は、歪んで、広がって見える。

好きなようにされた。揉まれた。吸われた。強く握られた。

……見られたわ……強引なんだから……恥ずかしかったわ……

暖かいお湯の中の身体は、心地よく、目を閉じて 思い起こす。
思い出さずにはいられない。

そう、あの時の感覚を。心で、身体であの時の感覚を追う。未体験
の感覚を。

自分でどうしようもなくなってしまうたあの感覚。

・・・初めての感覚・・・

心が、弾む。

・・・困る・・・困ってしまう。・・・

又、両の乳房を手で包み込見ながら、ふと、思う。

・・・好きなのかな？・・・、初めて、お会いしてから、
まだそんなに時が経っていないのに、森本さんを、思ってしまう・
すっかり心を占めている・・・どうしても思い出して・・・しま
うわ・・・こんな事は今までなかったのに・・・今までこんな気持ち
になったことはないわ・・・怖い顔、笑った時の顔、子供のような
顔、困った時の顔、照れた顔、その仕草・・・可笑しな人・・・

・・・もう、帰ったかな・・・明日も、会えるわ・・・

部屋

・・・急いで、支度しなくちゃ。あーどうしよう・・・森本さ

ん、もうすぐ来ちゃう・・・

昨夜の出来事の総括も出来ていないのに、どうしよう。カーテンを開けると、外は、鮮やかに晴れて、優しい冬の日差しが差し込んできた。日曜日の朝は、ご近所さんは、まだ動き出しはしないようだった。もともと人があまり行き来する事もなく、人目につく事もあまりない場所に、アパートは建っている。

・・・森本さんは車で来るのかしら・・・駐車場は大丈夫かしら？・・・

急いで、シャワーを浴び、軽くお化粧をし、身支度を整え来訪を待つ。

・・・あゝもう10時を過ぎたわ・・・昨日ゝ初めてこの部屋に迎え入れたわ・・・

そんな思いがした時に、

「ピンポーン」とチャイムが鳴った。

・・・来た、森本さんだわ・・・

ソファーから立ち上がり、ドアを開け廊下に出て、玄関ドアの覗き窓から確認する。そこには、森本さんが立っていた。レンズのなかの顔は変に歪んで、とても可笑しかった。

「カチャッ」とロックをはずし、ドアを少し開けると、

「是永さんのお宅ですか？国税局の者ですが、お話を伺いたいのですが、」と、変に、声を落とした声で言いながらも、その様子が、すぐ嘘だと分かってしまうほど、真面目な顔をしていた。服装が可

笑しい。ジーンズにジャンパー、そして、靴は紫色の長靴。背広姿しか見ていないから、かなりギャップを感じる。それでも普段着を着ているのを見ると、とても若く見える。童顔のせいかも。私は、笑いながら、

「違いますよ、うちは、水谷です。何かのお間違いで、・・」と、言いかけた時には、森本さんはドアの中に入ってドアを閉め、内カギを回していた。

「おはようございます。」

「おはよう、上がってもいい？」

「はい、どうぞ」といいながら、スリッパを差し出す。森本さんは、スリッパを履く。

「あっ！」と声が出る。その時には、彼の腕の中にいた。

「あっ・・うっ」唇を吸われる。私の背中の手に入り、身体がしなる。

薄暗い廊下で、私は、目を閉じて、されるがままに身を任せる。嬉しかった。

その情熱が。その仕方が。

「確かめに、来た」狭い廊下の壁に身体を押し付けられながら、私の右側の耳の下辺りに唇を寄せながら小さな声で言う。

「何を、ですか？」目を見つめながら、言う。

・・・・くすぐったい・・・・

「昨日の夜の事、夢なのか本当の事なのかを。」私の耳に口をつけて言う。

その囁くような声の響きが耳をくすぐる。身をよ振る。

私は、黙っていた。

「あつ、」と声を出した。居間のドアを開けて、続き間の私の寝室まで強引に私を引きずり込む。声を出すゆとりもなく、ベッドの上に私は押し倒された。

ジャンパーは脱ぎ捨てられる。私が、起き上がろうとする前に、私の上に森本さんは、いた。

「うっ、．．．いつ、いつ．．．うっ．．．」倒されると同時に唇を奪われる。

身を任せるしかない。目を閉じながら、私は、森本さんの身体を抱しめていた。

私の唇を楽しんでいるみたい。深く押し付けてきたり、軽くいなしたり、舐めま回したり、私の口を舌で開いたり、私の舌を吸ったり．．．．私は、応じる、．．．．胸が苦しい。

「のん．．．」

「はい」小さな声で応える。目を開けると、天井が見える。現実が戻る。また目を閉じる。

「今日は、お前を確かめるよ。」私の耳元で囁く。私は森本さんの身体を抱しめながら、小さく頷く。

「昨日は、勢いで、のん、君を愛したけど、今日は、全てを確かめたい。良いね。」

私は、返事はしなかった。ただ目を閉じてしがみついていた。

森本さんの左手が、服の上から、私の乳房を握りしめてきた。押さえつけるような手の感触に私の手は、森本さんの手を押さえて、乳房から外そうとしたけどそれは意味のない仕草のように、私の手を払いのけて、強弱をつけて揉み始めた。

「い、いや．．．うっ．．．」声にならない声が出る。服の上からでも、揉まれ、触られる感触はいやでも感じてしまう。森本さんの手が背

中に回り、腰の辺りのセーターをたくし上げてきた。

・・・・あ~~~~裸にされるう~~~~・・・・・・

そう思いながらも、身体は、森本さんに協力するようにセーターから片方ずつ腕を外していく。

そして、頭から、そっと、セーターが脱がされた。乱れた髪を森本さんは、片方の手でかきあげて、唇を重ねてきた。私は、見られないように、身体を寄せて、応じる。ブラジャーで覆われた乳房や素肌が森本さんを感じる。唇を吸われながら、森本さんの手は、私の腰の辺りをまさぐりだした。そして、スカートのボタンを左手で外そうとしている。

私は森本さんの舌を受け入れて吸っていた。何も考えられない。スカートのボタン外され、私の腰を持ち上げるように手で合図された。私は、応じて、自分の腰を上を持ち上げる。

「すー」とスカートは、脱がされた。直ぐに、腰の下に手を感じる。ストッキングがお尻の下からすると簡単に脱がされてゆく。私は、無意識に足を動かし、協力していた。

・・・・・・あ~~~~いよいよ、脱がされる・わ・・・・どうしょ・・・・・

「あ~~~~」声にならない声を出している。

私の唇を離すと、首筋に彼を感じた。舌が、私の首筋を愛撫している。

森本さんは、起き上がると、私に毛布をさっとかけてくれた。私は、薄めを開けて見ると、森本さんは服を脱ぎ始めている。それを確か

めると再び、目を閉じた。閉じていたほうが良い。直ぐに、布団にもぐり込んで来て、私を抱き寄せる。森本さんの、素肌の感触が直に伝わる。暖かい。

「ほっと」する。

上から、私を見つめながら、

「のん、愛すぞ。」とまるで宣言するかのように言う。

私は、黙って、頷いた。

・・・・許容は止めどがない・・・・わ・・・・

昨夜の出来事がまた再び始まる。

昨夜は、初めて森本さんに裸の全身を見られ、触られ、もみくちゃにされたけれど、森本さんは、それ以上は求めず、「明日また来る。」と言って、帰っていった。その明日が今で、部屋に向かい入れベッドで裸にされ毛布の中で抱きしめられている。昨日の出来事と今が重なっていく。思考が止まっている。なにも考えず、ただ森本さんの動きに合わせて海の上で波に翻弄されるヨットのよう、森本さんの体の動きに合わせ漂っている私。されるがままに、私の身体は歪み、動き、懸命について行く。そして、その時が、やって来た。本当の許容が始まった。

加藤さん

「お早うございます。」と会社の皆様に挨拶していると、加藤さんがやって来て、小声で

「是永さん、今日の約束午後5…30で良いよね？」

「今日のお約束は、駄目になりました。」嘘を言ってしまう。する

と、加藤さんは、顔をしかめて、寂しそうに、

「駄目なんだ」と言っただのを見て、

「嘘です、大丈夫ですよ」嘘ついちゃいました」うふっ」

「あゝびっくりした」もう、脅かさないでよ」あゝ安心した。

じゃ、今日、アップルで待ってるよ」と、嬉しそうに加藤さんは言った。

「はい、5..30に行きます。」

「オーケー、じゃ、仕事頑張ってくるよ。」

「看護婦さんと、スキーどうでした？」加藤さんは、ほんとに良い人。看護婦さんの事と話すと、必ず、慌てる。

・・・今日は・・・どんなお話があるんだろう・・・

会社の仕事は、問題なく過ぎてゆく。でも仕事をしながらも、初めての余韻が身体の奥底にある。思い出さないように心がけていたけど、思い出す。どうしても思い出してしまう。頬が一人でに火照り赤くなる。

「抱かれちゃった。」昨日森本さんが帰ってから、ずっと、同じ事を繰り返し、繰り返し思い出しながら、自分に聞いていた。

「これで良かったの？」、

・・・後悔してないの？・・・心の奥深いところでは、喜びが、嬉しいが、満足が在ったはず・・・

・・・森本さんが私を上から見ると顔が浮かぶ。また頬が赤くなる・・・周囲の人に気づかれないかしら？浮き浮きしてるかしら？私、変かしら？・・・森本さんは、どうしているかしら・・・

「今日も行くよ」と言われたけど、

「会社の人とお約束があります。」と言ってお断りした。加藤さんとの約束は、お断りするわけにはいかない。会社では大事な人。

夕方になって、アップルに入った。

「アップル」は喫茶店。会社の近くにあり、良く休憩時間に利用している。店に入ると加藤さんが奥のテーブルに座っている。まだこの時間にお客さんは多くはない。

「わー加藤さん早かったですねー」

「会社寄らないで、こっちに真っ直ぐ来たんだよ」と、にこっと微笑んで言ったのを見て、

「良いんですかー？」と言うと、

「大丈夫、所長には連絡しておいたから」と、その言葉で安心した。

「是永さん、なにを頼みます？」

「そうですね、おビールはまだ早いですから、オレンジジュースにします。加藤さんはおビール飲みます？」

「ははー、駄目だよ、今日は禁酒さ。僕は、そうだなーココアにするよ、コーヒーはもう沢山だよ、ははー」と、加藤さんは苦笑いをした。

「そうですねー営業先ではコーヒー出るんでしょう、大変ですよーねー」

「飲まない分けにはいかなーでも今日は何時もより少なくて良かったよ」小さなお店には、仕事帰りや待ち合わせの為に寄るお客さんが入って来てざわめきが増してきた。とりとめのない会話が暫く続いた。

「是永さん、少しドライブに行こう、付き合ってください。」と、加藤さんは私に断れない雰囲気と言った。

「良いですよー。」

「良かったー断られないかと心配してた。」

「でも、あまり遠くは嫌ですよ。」

加藤さんの車は、会社の車。いつも会社からお部屋まで乗って帰る。たまに会社の用事で一緒に乗った事があるから、心配はしない。車は、走りだした。冬の夜道を郊外へと向かう。

暗い道路には雪が所々に道端にある。車は、当たり一面暗い闇のなかを登り続け、市外にある小高い、公園、市民公園の一番高い駐車場に入って、停車した。

雪は殆んどなくむき出しの黒いアスファルトが、駐車場の白いラインを車のライトに、浮かびあがらせている。この公園は市民公園つまり市が管理している施設でテニスコート、サッカー場、野球場、陸上競技場等、スポーツ施設が、小高い山に散らばっており、車が停車した場所が一番高台にあり、夜の視界の前方に市街の灯りがゆるゆらと輝いているのが見える、展望台にもなっている。

「綺麗ですね〜お友達と何回かは来たことがありますよ」

「都会なら光の洪水だけど、この町じゃここが一番綺麗だって、マスターから聞いたんだ。是永さん知ってたんだね、一緒に見れて嬉しいよ。」

森本さんと見た、あの夜の遠くに見えた夜景、あの盛岡のホテルから見た夜景、車から見る走り去る遠くにゆらゆら見える民家の灯りが急に目の前の夜景と重なった。

・・・・・・逢いたい・・・・・・

という思いが広がった。

「どうしたの？」

「あ、ごめんなさい、ちょっと、大学時代の夜景を思いだしちゃったの、ごめんなさい。」

私は前を見ながら言った。

「ねえー是永さん、真面目に聞いて欲しいんだけど。」

「はい、何ですか？」

「僕と、結婚を前提に付き合ってください。絶対に幸せにします。」

「えっ！えー？」驚いた。驚いた。私は加藤さんに顔を向けて見た。加藤さんは、じっと前を見たままで、身動きしなかった。返す言葉がない。結婚を前提に付き合ってくださいと確かに言ったわ。

・・・確かに言ったわ・・・どうしよう・・・

そんな事は、今まで考えた事はなかった。そんな風に私を思っていたなんて思ってもいなかった。だからとても驚いたし、びっくりした。

「是永さん、僕は本気だよ。」そう言うのと身体の向きを私に向けて、「是永さんを見た時から好きになってた、ずっと好きで好きで堪らなく好きで、どうしようもなくて、今、言うよ。俺は是永さんが大好きだ。大好きだー付き合ってください。」

一氣に言われて、私はますます驚いた、自然に自分の頭を前に少しだけ下げて目を閉じると、その言葉に急に、心が甘酸っぱい懐かしい、忘れていた記憶を引き出した。忘れていた、その懐かしい記憶に小さな感動が湧き始めた。とても嬉しく感じ涙が少し滲んでいる。本当に嬉しかった、こんな風に直接言われた事は、今まで無かったし、こんな真剣な加藤さんは見たことはなかった。私を見つめる加藤さんの眼差しは何時もの優しさはなかった。強い目差し、それを感じた私は、私もきちんとお応えしなければならなかった。

・・・からかいや、冗談や、嘘は駄目・・・

「ありがとうございます。そう言っていたただけで、私、とても嬉しかったです。忘れていた、懐かしい感情がわきました。」

「じゃ付き合ってくれるの？」意気込んで、加藤さんは言ったけど、「ごめんなさい、ごめんなさい、加藤さんの気持ち嬉しかったです、そんな風に思ってくれていたなんてとても嬉しく思い、涙が出るほど嬉しかった。」

私は、加藤さんに顔を向けて言ったけど、加藤さんは車の前を見たままだった。

「加藤さんのお気持ちはとても嬉しく頂きました。今直ぐのお返事は待って下さい。思いもしなかった事ですから、少し考えさせてください。」と、加藤さんを見詰めて言った。

「そうか、そうだよなーいきなりじゃ是永さん、驚くよなー、タバコ吸っていい？」

「どうぞ、遠慮しなくても良いですよー。」車の中では遠慮して今まで吸ってはいなかった。タバコに火をつけ吸っても、私に顔を向ける事は無く、前をただじっと見ている。

「加藤さん、ごめんなさいね、直ぐお返事出来なくて、急なんですもの、驚きました。」と言うと、

「是永さんは、僕の事を少しは好きだと思ってた」と、直ぐに応えた。

「好きですよー但しー恋愛感情じゃなくーなんて言ったら良いのかなー、頼れる兄みたいなの そんな気持ちで思っていましたー」 本当の事。

「頼れる兄かーうーむ」私の言葉にがっかりしている加藤さん。

「そうですよー、いつもかばってくれて、助けて頂きますもん。本当に感謝してますよーありがとうございます。」

「そんな事は無いけどさ、是永さんの事は、大事に思ってるからさ、

気にかけてたんだ」

「ありがとうございます。」

「そんなつもりで言った分けじゃ無いよ。好きだから、いつも気になってる。」

「分かりました。少しお時間下さいね。考えさせて下さい。ねー加藤さんそれで良いですよ。」

「うん、分かった。待つよ。」

「それじゃ加藤さん、帰りましょ、今日は。私のアパート近くのコンビニまで、送ってくださいね。」

「是永さんには、かなわないなー、晩御飯食べない？」

「今日は良いですよー少し疲れました。お部屋でゆっくり休みたいです。」

「じゃ、そうするかー、ちゃんと返事してくれる？待つよ。」

「はい、待っててください。良く考えてお返事します。会社では何時ものようにしてて下さいね、加藤さん、そうして下さいね。お願いします。」

車は来た道を戻り始め暗い道を市内に向かって行く。

部屋

私はコンビニで、食べ物とジュースを何点か購入して暗い道を歩き、アパート前まで来た時、突然後ろから声をかけられた。

「お嬢さんは、今デートのお帰りですか？」

その声に驚き振り向くと、森本さんが立っていた。

「も・森本さん、どうしたんですか？どうしているんです？」驚いて少し声が高い。

森本さんは笑いながら、

「ただの通りすがりの他人だよ」

・・・又、いい加減な事を・・・

「本当に驚きました。こんな夜道に女性に声かけるなんて、痴漢に間違われますよ。」と言ってやる。

「痴漢とは酷いでやんす。部屋の前でまだ掛け合いする？」

「あっ、どうぞ！」

「おー招待してくださいさるのか、それは重畳、なによりで御座る」と言うと、私より先に階段を急いで上がり、部屋のドアの前に立って、私が来ると、

「ようこそ、居酒屋森本へ」と言って片手でどうぞと言いながら右手を動かした。鍵を開け玄関に入るなり、身体を壁に押し付けられ、唇を開かせられた。無理にはない。

「うっ！」

・・・嬉しい・・・今日もお逢い出来た・・・

「今日も逢いたくて、ずっと部屋の前で、寒空の中待っていたんだ」
ソファーに座るなり森本さんが言う。

「本当にお部屋の前で待っていたんですか？何時間も？」

・・・嘘・・・絶対・・・嘘・・・だわ・・・

「そうだよ・ほら・・・ワインとお寿司買ってきたから食べよう」

「はい、準備します・・・」

小さな白いテーブルに広げられた、お寿司は美味しく頂いた。ワインは身体を熱くし始める。私は素早く着替えていた。

「ねえー森本さん、本当に待っていたんですか？怪しいですよ？」

私の質問には応えず、部屋の中を見ながら、

「綺麗に片付いてるなーあっちこち見て良い？」と、きよろきよろしながら言ったので、

「駄目です！見たら嫌いになります。」森本さんならやりかねない。
「だめ？」

「駄目です。」

「今日は会社の車で彼氏とデートだったの？」と、言ったので、
「えっどうして知ってるんです？」と、驚いて森本さんを見つめて聞く。

「実はねー今もコンビニに車置いてあるの、車のなかで、のんが車から降りるとこ見たんだ」

「じゃコンビニにずっといたんですか？」

「いや、9時前までは仕事してた。それで、のんに逢いたくなって部屋の前を車で何回か回ってさ、電気が消えていたから、コンビニで少しだけ休んで、後一回行って駄目なら帰ろうと思ってたら、のんが彼氏に送られて来たんで、後をつけたの。脅かそうと思ってさ、」と、気にしているようだ。

「そうだったんですか、それじゃストーカーとかわりませんね」

「ストーカーって、本当に思ってるの？」と、森本さんは、目を見開いて言ったので、

「はい！！ストーカーですよ。それに私には彼氏はいません」と
応えた。

「あれ、目の前にいるんじゃない？」
「いません！！」

「のん」と言って立ち上がるなり私の右手を掴み強引に立たせた。
そして、そのままベッドに引き連れ押し倒し、私の上に身体を乗せる。ベッドが軋む。私は森本さんの背中に両手を回し抱きしめると、それに合わせるように、私の身体を強く抱きしめた。

「のん？」

「はい！」

「好きか？」

「はい！」と頷くと、抱きしめた力が弱まり、少しでも身体を離すと、セーターの中に手が滑り込んできた。そのまま、ブラジャーのプロントホックが外され、私の左の乳房が下から上に揉み上げられた。

「いっ、いっ」

私は目を閉じてその動きを追う。セーターが下から上に、左腕から右腕そして頭へとたくしあげられ、上半身は裸にされた。すっと太ももに手を感じ脚を動かそうとしたら、私の右脚を森本さんの右脚で抑えつけられ、上半身は森本さんの腕の中で殆んど動けなくなっている。乳首をすつとなぶられた。

その感触に、

「あつ、ああ〜」と声を出す。

なんて感じるんだろう。乳首が口に含まれ舌でなぶられ、転がされ、強く吸われ、そしてその時、齧られた。

「いつ、いいよやあーうううん」

身体中に電気が走ったみたいに刺激が駆け抜けた。目を開けて森本さんを見ると、乳房に顔を埋めている。

・ ・ ・ ・ ・ 齧られた ・ ・ ・ ・ ・ あつまた、齧られた ・ ・ ・ ・ ・ くうくう ・ ・ ・ ・ ・

「あゝゝゝゝあゝゝゝ」齧られる度に声が出る。弱く強く、甘く齧られる。

．．．．．なんて刺激的だろう．．．．．あ．．．．．感じるわ．．．．．

スカートの中に手を感じ動かそうとしたけど、動けない。抵抗してみる。動けない。パンティの中に暖かい森本さんの手が入る　と、私の、

「女の子」に掌全体を押し当てたみたいと感じ、

「森本さん、汚れてます〜シャワー使わせてえ〜」多分、駄目だろうと思いついて言ってみた。

「構わないよ、全部知りたいんだ、何もかも！」

そう言うと、手が「女の子」を確かめるように、動きだした。乳首は吸われ続けている。

パンストとパンティがお尻からずりりと剥かれる様に下げられた。温まった部屋の空気が素肌に感る。そしてそのままに、森本さんが服を脱ぎ始めた。私は、毛布を手で探したが、触る事は出来ない内に、裸の森本さんが私の身体に覆い被さってきて、身体を密着させ、強く抱きしめる。私の乳房が森本さんの胸で押しつぶされる。横になった森本さんは、スカートを脱がせる。そして、動きが止まった。

素裸の私を、森本さんは、上から見ている、私が薄目を開けると私と目が合った。

・・・は・恥ずかしい・・・やはり恥ずかしい・・・

じっと見られていた私はうつ伏せにされ、また動きが止まった。

・・・また・・・私をみている・・・

お尻にキスをされ仰向けに再びされた。

「恥ずかしいですー」抗議したつもりだったが、乳房をぎゅっと掴まれると、諦めた。

「のん！」

「はい……」

「愛すぞ、」

「知りません」と横を向き目を閉じる。

昨日も愛された。初めてのセックスだった。処女だった。余韻は、今日一日あった。そして今日は二度目。森本さんが、私の脚を広げて、「女の子」に口をつけてきた。

「あっ、いやっ、いやあゝん」脚を閉じようとしたが、強い力で太もを押えつけられた。親指が 食い込むほどの強い力に抵抗は諦め、されるがままになった。

……あゝ抵抗出来ない。……森本さんの好きなようにされるわ……あゝ……森本さん好みの女にされるわ……

会社

「お早うございます、加藤さん目が真っ赤ですよ。大丈夫ですか、コーヒー入れますね。」

……辛そう、お顔……

「いや、是永さんコーヒーは今日は遠慮するよ、コーヒー飲めばますます具合悪くなるよ。水にするよ、俺。」

「どうしたんです？」

「誰かさんに振られちゃたからさージェームズで朝まで飲んでた。」

「加藤さん！約束ですよ、昨日の事は！」

「ごめん、未だ酔ってるみたいだ。」と言うと事務室を出て行った。

・・・もう一度加藤さんをお願いしなくちゃ・・・

その朝は加藤さんには会えなかった。年の瀬も迫って来ると、会社はいつにも増して朝から忙しくなっている。朝の準備が一段落すると、同僚で会社の先輩である、香織さんが傍に来て、

「是永さん今度ね、合コン有るんだけど、どう参加しないー？」
「いつです？」

「今週の金曜日なんだけど、相手は公務員よ、予定あるー？」

「わぁー行きたいなーでも、今日から、自動車学校いくんですよ。行きたいけど無理ですよー。」自動車学校には、今日から行くのは本当の事だけど、森本さんが、

「明日も来るよ。良いね。」

「駄目ですうー、明日から自動車学校へ行くんです。」

「自動車学校行くの、頑張ってるね、で、何時頃帰るの？」

「9時前には、」

「じゃ9時過ぎに来るよ。」

「えっ、でもー」

「のん！」と言いながら腰を強くぶつけてきた。深いところでそれを感じ取りながら、

「はい。」と応える。

「逢いたくないのか？」私の「女の子」に深く入ったままで、乳房を強く掴まれ揉まれながら耳もとで囁くように言われた。

「逢いたいです。」、両手で森本さんの背中を抱きしめながら応えた。昨日の夜の出来事が甦る。

「ごめんなさい、暮れも近づいているし、免許証取りたいから、今回は遠慮します。」

「自動車学校行くのら仕方ないわ、頑張って早く取りなさい。いっぱい良い男いるから、免許取ってからにしょ。」おおらかな人。私

より二つ上。

今日も来るわ。多分明日も明後日も来るような気がする、私を、「愛しに。」

「どうしたの、免許の事はあまり気にしない方が良いよ。なるようにしかならないよ。」

そう言って、仕事に戻って行ったので、少しだけ、「ホッ」とした。

自動車学校

今日は会社が終わるまで加藤さんとは、会えなかった。年末だからきつと忙しいんだわ。迎えのバスに乗って、郊外にあるA自動車学校に向かう。生徒は私を含めて五人程が乗っている。今日から、いよいよ始まる。父に免許証取りに学校いきますと報告すると、母が次の日、私の部屋までお金をもって来てくれた。

「自分で出します」と言ったら、

「その部分は親の責任よ!」と言われ、

「ありがとうございます」と素直にお礼を言ったのは、森本さんとお会いする前。先週は夢を見ているみたいに過ぎた。出逢いから私の心は、どこかふわりふわりとしている。

今日もお部屋に來ると言った。

バスが明かりのついている夜の学校に着いた。わぁー校庭みたい広い教習所の中に、ライトをつけてゆっくり走行している車が見える。

……私もここで運転するんだー……

不安が少しだけ湧く。今日からは道路交通法の単位取得が始まる。中へ入って見ると、生徒がかなりいるみたい。知ってる人いないかなーと見渡しても、見つからなかった。

授業が始まった。先生は、かなりのご老人。

「皆さんの中で、今日ミニスカートを履いて来た女性はいいますか？いたら手を挙げて下さい。」

そう言われて、私はそつと手を挙げる。

「はい、分かりましたもう良いですよ。今日は机ですから、ミニスカートで良いんですけど、乗車する時にはですなー、ミニスカートは止めて下さい。実際にあった事ですが、ある生徒さんが仮免の試験中に、運転に夢中になってたんでしよう、ミニスカートが捲れて中の下着が見えたのに気が付いたその生徒さん、ハンドルから両手を話して、スカートを直したんですなーその場で試験は中止、落ちました。こういう事例が有りますから、ミニだけは止めて頂きたいと思います。但し着るなどは言えませんが、各自で判断してください。」

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ そうなんだーはい分かりました、もう、履いて来ません。
・ ・ ・ ・ ・ 自動車って結構色々有るんだわー覚えなくちゃ。 ・ ・ ・ ・ ・

部屋

・ ・ ・ ・ ・ あー直ぐシャワーしなくちゃ、森本さん来ちゃう。
・ ・ ・ ・ ・

自動車学校からのバスが近くのコンビニで私を降ろしてくれ、急ぎ足で帰って来た。

シャワーを急いで浴びて、着替えて、ベッドを直し、寝室の戸を閉めてソファ―に腰かけた。時計を見ると、午後9時15分をまわっていた。

「ピンポーン」森本さんだわ。玄関に行き、覗き穴から見る森本さんは、やはり、歪んで見える。ドアを開けると、森本さんは素早く中へ入り、手袋のまま私の頬を押さえ、唇を重さた。コートの冷気が私に伝わる。

部屋の中に入ると私の前で右手を高く挙げてくるりと回転して、「やぁーお嬢さんはご機嫌いかがかな？」と言った。私は、笑いながら言う、

「お年寄りはお怪我しますよ。」

「温かいなー、さぁービールとピザ買ってきたよ。未だだろ晩御飯？」

「えー」

「ピザ嫌いかい？」

「いえ、大好きですよーありがとうございます。準備します。」

森本さんがコートと上着を脱ぐ。私が受けて衣紋掛けに両手を挙げて背広をかけると、背後から乳房を下から揉みあげられた。後から首筋に唇を感じる。

「あっ、・・・い、いやー」

森本さんの掌が強く感じられる。

「もう、ピザ冷めます、食べましょう。」

「じゃ食べよう、さぁー座って！」

・・・もう・・・

「乾杯」

「乾杯」

「ピザ、美味しいですね。」ピザは札幌の狸小路にあった、ピザ屋さんでよく食べた。

「美味しいなー、お腹空いてたんだ。のんと一緒に食べたくてね。」

「ありがとうございます。私もお腹空いてました。」

「のん・・」

「はい？」

「今週の土曜日、休みかい？」

「土曜日は私はお休みですけど、どうかしました？」

「じゃ決まりだ。土日一泊旅行行こう。」

「ちょ、ちょっと待って下さい。」

「嫌かい？俺と行くの？」

「いえ、でも、どこ行くんです？」

「スキー場」

「えっスキーですか？」

「そう、近場の安比高原周辺の静かなスキー場なんかどう？」

「どうって？」

・・・・・え・・・スキー道具は何もないし・・・・・

「嫌なの？」

「いえ、嫌じゃありませんけど。」

「行くの？行かないの？」

「はい、行きます。」

「よう・・・し、よし、うあっはっはっは・・・」と、いつもの笑い方。

「ホントに悪党ですね、もう強引なんですから、私にだって予定があるん、」

「行きたくないのかい？」と見つめられた。

「ううーん、嫌じゃないですよ、行きます」

「何にも心配しなさんな、スキー道具は途中で揃えればいいからさ、身一つで来ればいいさ！」

「まるで、誘拐みたいですよ。身一つ連れ去るみたい。」

「行くよ、良いね！」

「はい。」

いつも強引いつも確認を取る。いつも押しきられる。でも、心のどこかで嬉しさがある。

友達

「モシモシ、ノンチャン、どうしたの、又苛められたの会社の天敵に？」高校時代の友達、大親友。彼女はずっと実家があるA市に住んでいる。

「ううん、違うの。今日のはね、違うの。会社の加藤さんから交際申し込まれたの。」

「まあー良かったじゃない。加藤さんって、いつも味方になってくれる人でしょ。」

「そうなの、そうなんだけど、どうしようかなーと思って。」

「断ったの？」

「ううん、断ってないよ。ただ考えさせてって言ったの。」

「なんで、誰か好きな人でも出来たの？」

「まさかー誰もいないわよ。加藤さんの事はそんな風に考えた事無いから、びっくりしたの。真面目に結婚を前提にお付き合いしてくれて。」

・
・
・森本さんの事は秘密・・・圭子が親友でも言わない・・・

「ふーん、結婚前提ね、良い人なんでしょ、加藤さん。ノンちゃんいつも良い人って言うから、好きなんだわって思ってたよ。結婚かー少し早いねー」

「良い人なんだけど、どうしようかな？でも、本当に結婚なんてまだ早いし、考えた事無いから、でもね、加藤さんの言葉に泣いちゃたわ、嬉しくて。」

「なにそれー加藤さんの前で泣いたの？ノンちゃん嬉しくて泣いたの？それは罪だわ。加藤さんますます混乱するよー。」と、驚いた声で言うので、

「ほんとにね、私ってしょ、しょうくがないわくく」と言ってしまった。

・・・あつ、不味いは・・・

「なにーそれーのんちゃん、そんな言い方するのー変わったわねー」と、声がひっくり返っている。

「違うのー会社にくる印刷会社のねー社員さんがちよくちよく悪代官風に、面白く言うの、」

「ふーん、可笑しいよのんちゃん・・・どうしたの？結婚申し込まれて狂ったあー？ははっははー。」

「ねえー圭ちゃん、土日にスキー行くんだけど、なに準備すれば良いー？」

「スキー行くの？誰と？」

「会社のお友達とか・・・」

「ほんとに？」

「ほんとよ」

「そう、スキーやった事は有るよね、確か一緒にやったよね。」

「えー、でも道具とかないの」

「じゃ借りるしかないよー、ウェアは有るの、手袋、帽子、ゴーグ

ルは？」

「なんにも無いの、買うしか無いわねー」

「ウェアは借りるとして、手袋とゴーグルは用意しなくちゃ、後は帽子とか、でさぁーどこいくの？」

「安比高原みたいよ。先輩が準備してるって。」

「加藤さんの事はどうすんの？一緒に行くの加藤さんも。」

「ううん、別なグループよ、あ、今ね自動車学校通い始めたの、今日が初日。」

「やっとな。のんチャン、ごめんもう寝るよ。」

お喋りし始めると止まらない。

・・・今日も抱かれ愛された・・・男の人って凄い・・・知らない事ばかり・・・あんな事をするなんて・・・

私はただされるがままになっている。

・・・森本さんがそうしたいなら私は拒否しないし出来ない。だから好きなようにされたわ、もう、脚を、あんなに開かなくても・・・本当に恥ずかしい。・・・

明日も来ると言って、さっき帰って行った。愛されている最中に、木製ベッドの音がうるさいと言われた。

・・・明日は、和室にお布団敷かなくちゃ・・・あゝ今日も全て見られて・・・全身にキスされたわ・・・明日も愛される・・・嬉しいいゝ・・・

朝のセックス

「アンニョ〜ンハセヨー、グッドモーニング、モシモシ、のーん、起きたかい？のん、泉屋の若大将、羽黒屋 吉右衛門だよ・・起きたー？」

「・・・森本さんだわ、どうしたのかしら、こんなに暗い朝なのに・・・まだ眠いわ・・・」

「モシモシ、私には羽黒やさんとか、朝から電話して眠りを邪魔する、頭のおかしい、ストーカーみたいなお馬鹿さんの知り合いはいません。どちらにおかけです？」と言ってしまった。

「あれー旅籠、のん宿ではないのかなー？」

「そんな宿は知りません、もうーどうしたんですー？まだー朝の6時過ぎですよー」

「のん！」

「はいい〜？」

「声聞きたかったんだ・・・昨日は良かったよ」と、言ったので、「し・り・ま・せ・ん。朝からどうしたんです？」 話題を変えた。

「逢いたいんだけど、今すぐ」

「もうー無理です、今日はお仕事です」

「そう〜冷たいな〜暗い朝の、のんの部屋の前に一人寒さに震えているんだけどな〜」

「えーうそっ！嘘ですよね？、えー？ホントですか？」

「そうだよ、窓から見えてごらん。」

眠気が醒めてしまった。部屋の電気をつけて、カーテンを少し開けて下を見ると、階段の薄明かりの中に白い息を吐き出している森本さんが立っていた。

「も、森本さ、ん？」 森本さんの腕がゆっくり挙げられた。急いで

受話器を取り上げ、

「モシモシ、どうぞ上がって来てください。」と言う。

玄関に行き鍵を開け、ドアを少し開けて待つとドアが静かに開いて、森本さんが入って来た。冷気が私に迫る。鍵をかけた森本さんに押されるように居間に入る。暖房は朝6時に入ったけど、暖まるほどではない。森本さんはジャンパーを脱ぐと、私を抱きしめ、昨日の夜に敷いておいた和室の布団に押し倒した。

「森本さん、駄目、いつ！」

唇が塞がれ、パジャマの下に、冷たい手が差し込み、乳房を強く揉まれる。身体が離れると森本さんは、服を素早く脱いでお布団に入り、私の身体を抱きしめ、

「おはよう。冷えた身体には、のんが一番、」

「嫌ですよ。私の身体を使わないでください。」すると、パジャマを脱がし始める。下着は着けない主義だから簡単に裸にされ、強く抱きしめられた。これで何回目？森本さんは自分の肌で私の肌を味わうみたい。胸と胸とが密着させ緩やかに抱く。今もそう。私も味わう。森本さんは、乳房を吸いながら、

「女の子」をまさぐり始める。私は目を閉じて、森本さんを感じる。

「あっううん」

・・・あうう入ったわ・・・あうう今日も又受け入れたわうう嬉しいうう

「あつ、あつ、うつ」と、動きに合わせて、小さく声が出る。

「どうしたんです？」乳房を左手がやわやわと揉んでいる。

「あー犬の散歩さ、散歩しながら部屋の前に来たら会いたくなっさ。」

「犬はどうしたんです？」

「うん、放してやった・・・」

「嘘ばかり！」

「会いたくて来たの、嬉しいか？」

「はい。」

・・・あつ乳首を・・・齧られた・・・くう・・・

「森本さん、会社へ行く準備しないとー」

「分かった・・・」と応えると私の上に身体を起こし、私の両脚を広げると再び充たされた。

「あつんーあゝ」

行為はすぐ止んだ。目を開けると、森本さんは、もう脱いだ服を着ている。

「のん、今日・明日は、来れないよ」

「はい・・・」私はお布団の中で、パジャマを身に着けていた。

「土曜日は朝の7時に迎えに来るからね・・・一泊の準備だけで良いよ」

「はい・・・」

「後は、電話するよ」

「森本さん？、今日みたいに、今晚もとか明日も突然お見えになるってことないですね？」

「いや一応、多分無いと思うけど、部屋にいて」

「嫌です」

・・・嫌じゃないけど、・・・待つのはー・・・

「そうかじゃ今日も明日も万難を排し、我、のんに突撃を敢行す。これでいいかい？」

「嫌です・・・もう土曜日まで一人にさせてください」そういうと、私の腕を引き寄せてパジャマの中に右手がスルリと入り、

「女の子」を強く抑えつけるように掴み、

「嫌か？」と手に力を入れて聞く。

「あついー、」私は身を振りながら森本さんに身体を預けて、

「いえ、嫌じゃないですよー」甘え声になる。

「さあー準備しなさい。遅刻するよ。」そう言いながらも手は動いている。

「手を取って下さい、準備出来ません！」

「じゃ、朝帰りだ。行くよ、放した犬を探さなくちゃ。」

「又嘘ばかり行って、気をつけて下さい」

「はーはっはーうーん・・・初奴じゃーわしは、満ぞーくじゃあーうおっほっほー」

「止めて下さい、私にまで移ります」

「じゃ行くよ。」

玄関で軽くキスする。

急いで準備しなくちゃ。朝から抱かれた。もう当たり前みたいに私を好きなようにしていく。私はされるがまま。でも、森本さんは最後までしない。男の人って最後まですると思ってたけど森本さんは、しない。今日もそう。

・・・スキン、使わないからかしら？それとも妊娠気にしてかなー。

スキー

「来ない、来ないわあー・・・電話が来ない、どうして？」

昨日の朝、森本さんに抱かれ愛され、帰りに

「今日、明日は来れない。」と言われたけど、でも、電話は貰える

と思つてた。昨日一晚電話を待ったけど、とうとう電話は鳴らず、「明日はきつと来るわ、お電話下さい。」願いながら知らずに眠ったみたい。

今朝も、早く目覚め、電話を待ったけどやはり電話はなく、会社でも森本さんの電話を1日中待った。やはりこなかった。会社の電話が鳴るたびに、電話の音に胸がざわめき、ドキドキした。どうしたのかしら？どして電話してくれないのかしら？昨日から今日1日、待っているのに。

・・・連絡する・・・と言ったのに・・・忙しいんだ・・・きつと・・・

そう自分を納得させるけど、仕事をしていても、自動車学校へ行つても、誰かとお話しをしても上の空。急いで部屋に帰って留守電を聞いても伝言は無く、寝室をじっと見てると、これ迄の出来事が浮かんでくる。又ベッドを見ると、森本さんがいるような、そんな思いが途切れなく続く。

・・・こんなに連絡がない事に不安を覚えた事は無いわ・・・明日は・・・

「7時に迎えに来るよ。」と言われて、スキーの準備は済ませている、後は森本さんからの連絡を待つばかり。

「のん！準備は出来たかい？3分で着くよ、下で待ってて」「はーい」

階段下で待っていると見慣れない車が、スキーを積んで道幅の狭い小路を走って来て、私の前に静かに止まった。森本さんが車の中

で笑っている。私は後部座席のドアを開けて素早く乗る、車は直ぐに走り出す。

「アンニョンハセヨ、のんお嬢さんのご機嫌はいかがですか？」

「おはようございます。どうしたんですか、このお車？」

「あー、初めてだったかい？会社の車だよ。雪山に行くから、4駆じゃないとね。少し走るからね。」

「はい。」

車は朝の渋滞を避けるように、信号の無い小路ばかりを抜けていく。雪は道路には無く、アスファルトの表面は融雪剤で、白くすんでいる。お天気は晴れている。

「本当に、裏街道の哲郎ですね」

「あれ、覚えていてくれたの！」

「沢山有りすぎて覚えきれません」

「いやいや、のんは賢いからどんどん新しい名前考えないと、」

「やめて下さい。覚えきれません」

森本さんは、いつもの笑い声をあげる。私は嬉しかったし、これからの事を思ってウキウキしている。車は市街を抜けてはや郊外。雪に覆われた田、広々と見渡せる郊外の田を見ると、これからやって来る本格的な冬を思ってしまう。

「どうしたの？」

「何でもないですよー雪を見ていたんです」

「ふーん？今年は雪が早いから結構積もるんじゃないのかなー。スキー場は忙しくなるなー、のん、前においで。今停まるよ」

私は、冬の白いコートを脱いで、バッグを持ち助手席に座ると、

「甘い素敵な匂いだねー、白いセーター似合ってるよ。」

「ありがとうございます。この香水とても好きなんです。」

「俺も好きだよ。のんに良くあってる」

直ぐに、車は高速を目指して走り出す。

車は高速に乗り、走り出している。スピードは少しずつ上がりはじめていく。黒いサングラスをかけた森本さんは、ちよくちよく横を向いて私を見る。とても黒いサングラスが似合ってる。でも、危ない。

車窓から見る景色は、飛ぶように過ぎて行く。遠くに見える畑や田そして民家には、雪が所々に白くある。

東北自動車道を盛岡目指して巡航速度120KM弱で安定走行しているけど、ほとんど他の車は走っていない。

「キーン」という金属音を出して追い越していく車は速すぎる。

今は私と森本さんの専用道路みたい。二人だけの空間そして止まった時間。そう感じている。又、車の事は良く分からないけど、自動車学校へ行っている私には全てが今までと違う感じかた、見方を知らずにしている。

「そうか、のんは今自動車学校行ってたんだ、どおりで運転している俺を見ないで、手の動きばかり見てんだ、納得したよ。」

「自分で高速をですねー運転した時の事を考えてたんです。」それもそうだけど、半分以上は、

「この時」。

「じゃ運転してみるかい？」

「嫌ですよーまだ免許もらって無いんです。」

・・・もう・・・

「のん、車の運転は、きちんと覚えなさい、ゆっくり覚えるのが大事だよ。おしえ、」

「あつ危ないですー前を見てください、！」

「大丈夫だよ、俺くらい安全運転している人間はいないよ」

「していません。私を見ないで前を見て運転してください。まだ死にたくないですよーお願いしますー」

「あゝのんに怒られた怒られたーおっ、怒られたら、お腹すいてきたなー次のサービスエリアに停まろう」

「はい・・・」

サービスエリアは、混んではいなかった。寒い。

「のん、お腹すいてたら、サンドイッチ食べよう・・・食べながら行くよ・・・」車は走り出す。

「はい、」

車は、走り出した。

「のん、サービスエリアから高速に入る時は注意するんだよ。後ろから高速で突っ込んで来る車は大概車線を変えてくれるけど、変えない奴もいるからね」

「はい」一気にスピードが上がり走り出す。

「のん」

「はーい？」

「食べながら聞いて、今日は、シンクについて講義しよう。」

「講義はいやだなー」

「じゃ、お話、お話したら良いだろ」

「はい、お話したら、聞きますよー」

「こいつーはっはっはーしょうがなーいーいなー」

「はい、のんは、しょうがなーいーこの前、この言い回し、友達に出ちゃいましたー移ってしまいました。困りますーなんかその内、小泉屋の是永ですーとか出そうで」

「はっははー、そうかいよいよ伝染したかーその内すっかり染まるよ、良かつ」

「いやっ、嫌だなぁ森本さんに、染まりたくないー、わぁーイヤー、いやー」短い間の時間で、染まってしまったみたい。

「のん！シンクって言葉、聞いた事はあるかい？」

「ありません、シンクですかー？」

「じゃシンクロナイズスイミングは？」

「それって聞いた事がありますよ。」

「そりゃー聞いたことあるさーシンクロナイズドスイミングって、そのシンクってどう思った、あっ、つまんなかったら止める？」

「そんなこと、ないですよ、シンクってどう言う意味なんです？」

車は何の障害も無く、前に進んで行く。

・・・・朝の高速は初めて・・それも男の人と二人きりなんて・・・・・

「シンク、呼んだ本の題名なんだ、日本語名は、同期、同時の同期間の期、分かる？」

「はい、同時期の時がない同期ですね」

「うん、そう。それはね、」

「森本さん、お願いですから、前を向いて運転してください」

「あー御免、ごめん！のんが綺麗だからさ。つい見たくなる」

「もうー前を、」

「のん、」

「はい？なんですか？」

「好きか？俺の事？」

「嫌いです、どうしたんです？同期ってなんですか？」

「はーい、強いなー、のんはさ、シンク、同期ってさー同じ振り子時計を二台並べて、実験した学者がいたんだ・百年以上前」

「え？振り子時計って？それで何を実験したんです？」

「それがねー、同じ形の振り子時計を二台並べてね、片一方の時計

の振り子が、ちく、たくと動くよね、その一方の動きが、例えば右に、ちく、と、動いたら、もう一方の振り子を左に、たく、と、同時に動かすようにしたらしい。二つの振り子は互いに、動きが違ふよね。」

「はい、右へ振れて、片一方は左にふ振れるんでしよう。」

「そう、ゼンマイ仕掛けの器械だから、ずっと変わらないよね、動きが、」

「変わらないと思います、だって時を刻む時計ですよ、ねー」

「そう、そこなんだよ、大事なところ。器械、機械は同じ動作を繰り返すから機械なんだよねー実験の結果は、何度繰り返しても、同じだったらしい。」

「変わらない、ですよね？」

「結果は、30分くらいまでは互い違いに動くらしいけど、それを過ぎると、動きは、同じになるらしい。つまり右、左に」

「ええゝゝゝ？そんなゝゝ」

「シンクしたらしい。なんかさ、振り子時計を置く位置も関係有るらしい。ホテルの部屋で何回も実験を繰り返したらしい。結果は全て同じだから、論文を発表したらしいけど、シンクという概念までには至らなかったみたいだなー。」

「同じ動きに何故なるんです？機械ですよねー？」窓から見える前方に薄い雲に隠れた、岩手山が見える。

「トイレは？」

「大丈夫ですよー」

「ダイナマイトって、知っているよねー」

「はい」

「原料は、詳しくは分からないけど、ニトログリセリン。そのニトロって物質は、非常に不安物質だったらしい」

「不安定！どういう事です？」

「少しの振動でも、爆発するとか？」

「そうですかー？でもダイナマイトって、安定してますよね！」

「そう、その安定なんだ。ある時、何かの原因である一部のニトロが安定した物質に、変わった、安定した物質に成ったらしい。そうしたら、世界中のニトロが、安定した物質に変わったんだ。」

「えっえー？なんで、です？そのニトロだけなら分かりますけど、世界中のですか？」

「そう、世界中のね、シンクしたらしい。なんか化学の世界ではよく興る現象らしいよ、Aという物質に、なにかの作用を加えたら、その物質がAダッシュになったら、世界中がAダッシュになるらしい。つまりシンクする。」

「分かりません、じゃ鉄に何かの作用を働きかけて、その鉄がもしも金に成ったら、世界中の鉄が金になるなんて、あり得ません。」

「あり得るかどうかは分からないけれど、俺はね、じゃそうなら、物質は生きてる、現実に見て、触って、加工して使っている”物”は、実は生きていて、安定なんかしてはいず、意思があり、俺達人間を見ているんじゃ、ないだろうかと、思ったんだよ、その本を読んです。」

「でも不思議ですよ。昔の何でしたっけ？鉄を金に、」

「錬金術！」

「その錬金術って、シンクするってこと知ってたんですねー」

「面白い事を考えるなー俺とのんもきつと、シンクしたんだ。」

「いいえ、してません、騙されたんです。」

「騙したと言うのですか、おまはん、おいは傷つきました。」

「もう、普通におっしゃってください。」

「好き？」

「はい」

岩手山

岩手富士とも呼ばれ、山の裾野は広く大きな山。岩手山の頂きは

雲に覆われている。雪は、今は降ってはいないけど、目に入る景色は雪、雪、雪。車は高速を降りて随分登ってきた。岩手山麓にある、東八幡平スキー場の駐車場の中には、周辺には雪が積もっているけど、ほとんど雪は積もっていない。駐車場に車が停車すると、森本さんが車のトランクを開けて、なにか大きなビニール袋を取り出し、私に渡して、

「スキーウェア、帽子、タイツ、手袋、ゴーグルが入ってるから中で着替えると良いよ。今準備するから待ってね。スキー板は中で借りよう。」と言って、自分の準備をし始める。森本さんは車の外で人目も気にせず着替えている。袋の中を見て、

・・・うわぁー買って来てくれたんだー、ウェアは、帽子の付いた上下一体揃のふっくらしていて暖かそうなウェア。・・・色は白・・・ゴーグルは白の縁取り・・・手袋、タイツも白、帽子も白だわ、フーン森本さんって、「白」色が好きなのかしら・・・私は白色は大好き・・・偶然かしら、でも、嬉しいい私のために、買いい行ったんだ・・・

スキー場のメイン建物の入り口はクリスマスの飾りで、艶やかに色付けされていて、気持ちほもうクリスマス、森本さんと明日まで一緒にいる。でも、不思議な気がしない、当たり前のような、当然のような、自然のような、私って変かしら？

建物の中に入ると、もう周りはクリスマス一色、聞こえる音楽もクリスマスソング。広いフロアーには、色とりどりのスキーウェアを身につけた、スキー客もたくさんいて、ざわめいている。今日は、土曜日。

・・・ウキウキしちゃうわ、・・・でも、知ってる人に見られたら、どうしよう・・・でも、良いわ・・・

「おゝ似合ってるゝやはり美人は何を着ても似合うなゝゝ白い妖精みたいだ・雪に溶け込むなよ、のん！」

「えゝ褒めても何も出ませんよゝ色々ありますがございます。買って頂いて」

「スキー板と靴は今度にしよう、じゃ行くよ、大丈夫かい？」

「はい」

「このスキー場は、初心者向きだから、ゆっくり滑れるよ」

「森本さんは私に遠慮無く、滑ってくださいね」

「離れないよ、ずうっと、ストーカーみたいに後ろからついていくよ。お尻ばかり見てさ」

「わあーいやらしい、そんな人とスキー滑るなんて、いやゝゝ」

「あれー迷子になればどうすんのかなー？泣いちゃうよ」

「いいえ、泣きません、迷子にもなりません。」

「フーン、なるよ。」

「なりません。」

リフトの側まで来ると、森本さんは言った。

「リフトに乗る瞬間が危ないから、気をつけてね。」

「はい、大丈夫です。」

森本さんが先に乗り私も続く。カタカタと音を出しながら、登って行く。周りの樹木の木肌や枝葉には雪が降り積もり、所々についている。振り向いて私を見ている森本さんに、手をふる。森本さんは、黒いサングラスをかけている。とても似合ってる。

「おゝいい、次で降りるぞゝ」と大きな声で言ったので、私はストックを持ち上げ応える。リフトを降りてゲレンデを見ると、目の前に広い空間が広がる。山の中腹から見る景色は、素晴らしい。あまり高い場所ではないけど、遠くに見える森林や小高い丘より、上に

いる感覚は、自分が宙に浮いているような、そんな感じがする。

「高い場所じゃないからそんなでも無いけど、安比、雫石は此より高いから、景色は見事だよ。今度連れて行くよ、今日は練習。」

「はい・・・」

「さあー滑ろう！」

なだらかなゲレンデ、幅広いし、あんなにいたスキー客も散らばってしまっただけで、気にならないわ。

・・・滑るわ、上手くいくしら。・・・

スキー板を八の字にして滑りだす。そう、身体が覚えている。そう谷側の脚に体重を乗せればゆっくりとまわる。その繰り返し。少し滑っては止まり又、滑る。あまり風は感じない。止まっている横に森本さんが来て、

「のん、上手、上手、上手いもんだー」と言って手袋をした手を、バンバンと叩いた。サングラスの森本さんが私を見て、微笑む。サングラスがとても似合ってる、素敵な笑顔。私も微笑みを向ける。

何回かリフトを使い滑っている間、森本さんはずっと私の側から離れなかった。まるで父親みたい。滑り終わり再びリフトに乗り、一番高い地点のリフトから降りると、

「先に行って下で俺の滑りを見ててね。」

「はい。」

応えて滑り出す。もうすっかり、雪とスキーには慣れ、止まる事は無く下まで滑る。少しずつ風を感じる。でも八の字。下に滑り降りて、ゲレンデの上の遠くに見える、森本さんに、二本のストックを高く上げて、合図すると、森本さんが滑り出す。

一気に真っ直ぐ滑り出す、スピード出てる。このまま真っ直ぐかしら？ どんどん近づいて来るわ。あっ、少しジャンプしたと思ったら、上半身が動かず、揃えた脚だけがスキー板とともに右に左に動き出す。

・・・わぁー、CMか、何かで見るわ、あの滑り方。凄い、かっこいいー・・・

森本さんはどんどん私に近づいて来る。そして私の側に雪を飛ばしピタリと止まり、

「どうだった？」 自慢気に言ったので、

「全然下手くそでした。」 反対の事を言う。

「言っただろ」

「言いましたーうわぁーお顔怖いですーうふふ！」

「こらっーのん」

「うっふっふふー、はい、怒らないで下さいねー。森本さんをかかってみたんです。」

「安倍屋庄三郎は、怒ってはおらんですぞ、しかし、のん殿には負けるでござるなー。」

「はい、勝ちましたあーっうっふうふう上手でしたーCMで見ると滑りでした。初め、違う男の人かしらって、思いました」

「こらこら、」

「ごめんなさい、あまりに上手なんで、少し悔しくて。」

「しかし、上げたり下げたり、のんには負けた、まあっけえーまあっけえー」 又、いい加減な歌を。

「お腹空いた。食事しよう。」

「はい・・・」

昼食は

「レストランI W A T E」で、並ぶこと無く注文出来た。まだまだシーズン初め。でも、クリスマス前の土曜日だから混んでいるはずなのに、広いお店の中を見渡しても空席があり、混んではいなかったのはきつと、時間がだいぶ遅かったからかなー森本さんは、カレーライスとラーメン、私はスパゲッティ。森本さんは決して大食漢、

大食いではない。少しずつゆっくり食べるから、途中で食べ物に飽きるみたい。

食べたのは先に醤油ラーメン。美味しそうに食べるけど、半分は食べないで残している。次は、冷めかかったカレーライス。やはり、これも残したので、私は森本さんに言っておきました。

「森本さん、もったいないですよ。どうして残すんですか？食べ物の神様に感謝が足りませんよ。」そう言う私の目をじっと見つめ、「ごめん、感謝が足りませんかーそうだなーその通りだ。よし、のんの言う通りだ、食べるよ。」

そう言っただけでラーメンを食べ始めた。

「そんな、無理しないで下さい。」

「いや、今までそうやって食べてたから、気がつかなかった、ありがとう、良く言ってくれた。お礼に今晚、おもいつきり、」

「いりません、結構です、知りません。」

私は少し怒ったふりをした。でも心の中では森本さんの、あの愛撫を待っている私がいる、あの感覚、感触を私の身体が覚えている。

午後のスキーは瞬く間に過ぎる。私は相変わらず八の字滑行でゆっくり滑る。

午後には太陽も顔をみせ、ゲレンデの雪が輝き、きらきら輝いて眩しいくらいだった。けれども、傾きかかった冬の日あまりに短い。森本さんは物足りない顔をしていたけど、ずっと、私の側を離れないうで滑ってくれた。とても嬉しかった。側にいてくれなければ、きつとつまらなかったに違いない。ずうっーと私を見ていてくれた。安心して滑れた。

「ようし、のん、切り上げよう。そろそろ時間だ。」

「はい。」それからの時間は、瞬く間に過ぎて、今は車の助手席に座っている。

「さあーホテルに行こう。楽しかったかい？のん、疲れたろ？」

「いえ、楽しかったですよ、ありがとうございました。」

不意に森本さんの手を顔に感じると、唇に唇が重なる。森本さんの舌が素早く滑りこみ、私の舌に巻き付くみたいに絡め取られる。私はその動きに合わせて舌を絡ませる。不意に乳房が下から握りつぶされる

「うっ！」声にならない声になる。でも、その交歓は一瞬。

「さあー出発するよ。疲れた身体には、温泉だー」

車はスキー場の隣にあるリゾートホテルの駐車場に入る。車から降りて、スキーウェアのまま、荷物を持ちながら入る。男の人と入るなんて、少しだけ緊張している。

ホテルのカウンターには森本さんが行って、手続きをしている間に私はお手洗いに行く。森本さんがトイレ前で待っていた。

「さあー部屋に行こう、7階の15号室、ツインにしたよ。」

「はい」

エレベーターに乗ると森本さんが、私の顔に近づいて唇を尖らせ、唇を求めた。私は、軽く

「ちゅっ！」とキスをする。森本さんの両手は、荷物でふさがっているから、これ以上の悪さは出来ない。これからいつもその作戦でいこう。

ホテルの7階15号室。

中へ入るとお部屋は以外に広く、壁に垂直にベッドが2つ並んでいる。荷物をフロアーに置いて、すぐ窓際に行きカーテンを開けると、目の前はゲレンデ。窓越しに周囲を見る。薄暗くなったスキー場に灯りがともっていて、スキー場が浮きあがって見える。ずうっと1日滑ったんだー此処で、森本さんと一緒に。ふと気付く。知らない間に、森本さんが横に立っていた。

「のん、楽しかったかい？」

「はい」

「よし、着替えよう。とにかく、全部脱いで片付けよう」

「全部脱ぎません、」

「いや、そう言う意味じゃなく、」

「分かってますー、森本さん早く脱いで下さい。」

「おっ素っ裸になっていいの？」

「だめー駄目です。スキーウェアとか乾かしますから脱いで下さい。」

「……本当に、裸になってこの部屋を歩きかねないわ……」

「森本さん脱いで下さい、乾かします」

「はい、はい、姫の言う事は聞くよ」と言いながら、やっと脱ぎ始める。

「のん！誕生日！おめでどう、少し早いけど、それと、メリークリスマスかな？今日は良く付き合ってくれた、ありがとうございます！のん」

「私の方こそ、ありがとうございます。私の誕生日、覚えていてくれたんですかー」

「のん！誕生日おめでどう。確か、明日、明後日だよ、これ、プレゼント。」森本さんはそう言うと、包装された小さな包みを私の前に置き、あのいつもの戸惑いの表情をしながら私を見る。

「22歳。おめでどう！ホント若いなー！」

「ありがとうございます、ホント、森本さんより、うんと、若いんですよ、私って！」

「ふん！」と言って、ビールを飲む。困った表情が好き。

「開けて良いですか？」

「うん、サイズが分かんなかったから、合うかなー店の女の子の指を見てさ、のんの指と思い出しながら、比べて、買ってきたんだ。

合うかな？」

「ありがとうございます。」、私はゆっくりと包装をはがす。はがした中からは、小さな箱が現れた。その現れた箱を森本さんの前に

置き、開けた。

・・・うっーわぁー指輪・・・・・・・・

「うわぁー指輪！これを私に、？」

「指に嵌めてみて、さぁー合うかなー」私は促され、そっと取りだし、右の薬指に差し込んだ。

・・・ほんの少し、大きめかなーでも、ピッタリみたい・・・・・・・・

「のん、俺と一緒にの時だけで良いから、その指輪して欲しい。」

「はい、ありがとうございます。とても、うれしいです。」

・・・連絡のなかったあの二日間、私の為に色々買ってくれたんだー・・・・・・・・

「さぁー、食べよう、お腹すいた」

「はい、おビールどうぞ・・・」私は、森本さんにビールを注ぐ、その私の指輪をした指を、森本さんはじっと見ている。嬉しそう。

「ううーんふ、風呂あがりのビールは、格別に旨いなくましてや美人のお嬢さんのお酌じゃーうーん、わしは、まーんぞくじゃーふつふつふー、さぁーちこうーちこうー」

「聞こえますよ、普通にしてください。変に思われますよ、ほんとに。」

ここは、ホテルの中にある、焼き肉レストラン。ほぼ満席。

「のん、温泉一緒に入ろう。」

「嫌です」

「背中流してあげるのになー」

「結構です。一人で入ります」

断固拒否し、別々に入った。温泉は疲れた身体を温め、癒してくれ、のんびり、ゆったりと時間をかけた。目を閉じて今日の出来事を追う。

・・・ほんとに森本さんとホテルに泊まるなんて・・・抱かれるわ・・・愛される・・・綺麗にしくちゃ・・・

お部屋に戻ると、森本さんが浴衣のまま、私の帰りを待っていた。部屋に入るなり、待ちかねたように私を抱締め、唇が重なる。私はその動きを追う。そのまま抱き上げられ、

「きゃっ！」と小さな声が出る。私は森本さんの首にしがみつかながらベッドに運ばれる。私はされるがままにしている。まだ身体から湯気がたつくらい温かい私の身体は、すぐ身につけたものを剥ぎ取られ素裸にされる。裸を晒すのはやはり恥ずかしい。森本さんはいつのまにか裸になっていて、強く抱きしめる。森本さんの温かさが伝わる。

「くるしい、あゝん」胸が森本さんの胸に押し潰される。抑えられた太もも、顔を押し付けられた乳房。

「女の子」に手を感じる、いつも手のひらで確かめるように、全体を包む。それから、乳首は吸われ、なぶられ、転がされ、
「くにゅっ」と齧られる。その瞬間、身体に波紋が広がり、ビクツと押さつけられた脚が反応する。

「あっ、あゝん」

・・・なんて感じるの・・・乳首がこんなに感じるなんて・・・あゝゝ感じる・・・

「おビール、どうぞ。はい、お肉どんどん食べてくださいね。焼けてますよ。」

「うん、柔らかくて美味しいよ、さっ、のんも食べて。飲んで。」

「はい、戴きます。おビール美味しいです。」冷たくて美味しい。

「火照った身体には、ビールは美味しいさ。良かつ、」

「知りません、聞こえますよ。止めて下さい、ほんとに」さっきまで抱かれていた身体には、まだ火照りは残っている。さっきまで愛されていた。

「森本さん、今朝のシンクって不思議ですよー」話題をふる。

「そうだね、不思議な事は色々有るよ。」

「どんなです？」

私は流れを変えた事に、ホッとした。焼き肉を焼きながら、ビールを注ぐ。

「おっ有り難う、のんは、植物のなかでさ、ある植物なんだけど、植物の葉、その葉が、昆虫にソックリに擬態と言うか、昆虫になる、昆虫に化けるって聞いたことないかい？」

「植物がですか？植物の葉が昆虫に化けるんですか？」

「そう、昆虫が擬態するなら知ってたけど、葉が昆虫ソックリに化けるって不思議だと思わないかい？」

「えっ、何が不思議なんです？」

「ほら、食べて、うん美味しい、あのね、昆虫が何かに擬態するって言うか化けるのは、昆虫は大概、目を持ってるだろ、見えるから真似出来ると思うんだ、俺はね」

「あっそういえば、そうですね」

「植物って、目を持ってるんだろ？テレビでやってたけど、昆虫の羽の筋まで、ソックリに化けてる。見えないと真似出来ないと思うんだ」

「はい、飲んで下さい。その植物はきつと、未知の能力かなんかあるんですよ。目を持たなくても、見えるんですよ、きつと。植物の超能力」

「成る程、未知の能力かー、知らない事が多すぎるよなー」
「そうですね」

「今朝、車で言ったよね、物には目があり、俺達人間を見ているってさ、俺達人間は何も、分かってないんだ。植物、例えば、大根にしようか、のんは大根って造れるかい？」

「大根ですか？畑に種を蒔いて作るんですよね。」

「そう、食べて、俺も食べるからね。そろそろ、日本酒頼もう」

「はい」

森本さんは、日本酒の熱燗を飲みながら、再び話し始めた。

「なんで、種を蒔いてさー芽が出てくるのかなー、春になったら、枝には芽が出てくるよね」

「はい、」

「では、なんで芽が出てくるんだろうね？」

「なんでって言われても、森本さんはどうしてそんな事を考えてるんです？何か宗教でもやってるんですか？」

「馬鹿な事を言わないでね、俺は宗教は信じない男なの。宗教について、今度するよ」

「ごめんなさい、」

「いや良いんだ、近頃本を読んでね、俺の趣味は、読書。色々読んで、考えて見たら分からない事ばかりなんだなー」

「でも、大根の何が不思議なんです？」

「それは経験的に作ってるだけで、初めから大根を造れるかってことさ」

「初めからってとは、どういう意味です？」

私は、お酌をしながら森本さんを見ている。一生懸命に話す森本さんは、真面目。

「たんぱく質、糖分、水等大根の成分がわかってるものを集めて、現代科学の粋を集めて造れるかってことさ。なに一つ造れないと思うよ。命をいかに、吹き込むか？多分、神様の仕事さ」

「森本さんは、良く本読んでるんですねー普通、そんな風に考えませんよ。はい、先生飲んで下さい。」

「うーん、可愛い生徒だなーうっふっふっふー」

「取り消します、先生は取り消します、きつと、セクハラ先生になりますから。」

「なんだよ、上げたり下げたりさー、ひ酷い奴でやんす。おもしろかったかい？」

「はい、お肉も美味しく、ビールも飲みました。お話しも楽しかったですよ。いつも楽しい話題ありがとうございます。それに、誕生日のプレゼントまで頂いて、嬉しいです。」

「よし二次会はカラオケに行こう。」

「えっ！カラオケですか？」私は、歌は苦手、どうしよう、困った。

ホテルのカラオケには結構、お客がいて、飲んだり、話したりしている、もちろん、歌っている女の人もいるし、踊っている男女もいて、賑やか。

席についても、話す声が聞こえず、森本さんは、お酒を飲みながら、リクエストした曲を待っている。私は、もう十分、お酒はいただきました。やつと、森本さんの番になり、森本さんは勇んで、壇上に上がり、曲が入ると、私の方を見ながら、歌い出した。私の知らない歌。私は演歌は知らない。渋い声、歌いなれている、上手。曲の合間に、森本さんは、

「盛大な拍手ありがとうございます、歌手は、拍手が命ですー」とマイクで言って、拍手を求めた。

・・・・・・信じられない・・・・・・ほんとに・・・・・・どうしてこんなのかしら。・・・・・・

「のん、シャワー入っておいで。」

「は・い、」

小さく頷く。

・・・又、抱かれるんだー・・・

森本さんは、カラオケで、あの歌を歌い終わったら、部屋へ戻ろうと言って部屋につくなり、シャワーを浴びてしまっていた。

森本さんは、そう言いながらベッドに、腰掛け、冷蔵庫のビールを取りだし、私の方に視線をむけてニコニコしている。私は、森本さんに向かって舌を出してシャワールームに入り着ているものを脱ぎ、裸になる。鏡に写っている、現在の自分がいる。

・・・不思議だわ、当たり前のように振る舞っている私は変？・・・

鏡に向かって、微笑んでみる。

・・・大丈夫・・・少し、お化粧しなおさなくちゃ、口紅はどうしよう？・・・

そして少し温めのシャワーを浴び始めると、さっき、森本さんに愛され、揉みしだかれた乳房にシャワーを当てると、乳首がこそばゆく感じてしまう、自分がいる。

・・・期待してるの？良いのこれで？ほんとに？・・・

目を閉じてシャワーを浴びながらそんな思いが沸き上がる。

「あー、気持ちがいいわ。」

・・・しっかり、綺麗に洗わないと・・・全部見られ、触られる・・・

そして愛される……

……これから、森本さんと朝まで一緒にいるんだ……朝まで一緒に愛される、抱かれる、抱かれるんだ……これから……

「こっちへおいで、のん！」待ったよって、言いたそうな表情をしているわ。

「嫌です、森本さん、もう休みましょう。ねっ！」心にも無いことを言いたくなる。すると、直ぐにベッドから起き上がり、私の側に来て、浴衣を着た私を抱きしめ、浴衣の上から、乳房を強く痛いくらいに、掴まれた。

「いや、いっ！」

そのまま、背中に回した手で浴衣の帯びを器用に、ほどかれる。帯が床にするりと落ちる、抱きしめていた私を少し押し離すと、浴衣の前が、ゆりりとはだけ広がる。森本さんは、前に回した両手で、私の浴衣を素早く左右に広げ、後ろに剥ぎ取る。乳房が揺れながらこぼれる落落ちる。

「あっ、いや、い、い、」

私は、腕で乳房を隠そうとしたが、森本さんに払われ、乳房さがむき出し露になる。裸が晒される、森本さんに、立ったままの裸を。下着しか身につけていない私の裸身を、森本さんは、じっと見ている。私と目が合う。真剣な眼差し、怖いくらいだわ。その時、パンティーがすつと、下げられる。女の子が、むき出しになる。

「きゃっ、いやいや〜だめー」

森本さんが膝まずき、足首からパンティーを外し、そのまま両手を裸の身体に沿わせ、少しずつ上がるのを、私は見ている。森本さんの顔が私の

「女の子」に埋まる。

……はぁーうー森本さんだめー……

私は上から、薄目を開けて見る。立ったままの裸の私は、森本さんの頭を押さえ腰が落ちそうになるけど、その私のお尻を森本さんの手が、強く押さえて動けない。

．．．．．あつ、広げられた、いやーあつ．．．．．

暖かいものが、下から上に動いた、下腹と下半身に力が入る。上半身は森本さんに甘えたいけど、寄り添えない。

．．．．．広げないでー．．．．．

足を開けと、足首に力を感じ、少し開く、もっと開けと、力が加わる。

．．．．．あーそんなー立ったままで、裸のままで、女の子を愛されるなんて、あー、広げる指に力が入るわ。あつ、吸われた、そんなーあつ、あー、吸わないでー、なにもかも、初めてなのー．．．．．

「のん！」

「はい？」

私は立ったままの裸を晒しながら、上半身をゆらゆら揺らして、私の下半身の前に座り込み顔を埋めている森本さんの、

「女の子」に加えられる恥ずかしい愛撫に耐えている。森本さんの愛撫の「仕方」が初めてだから、今まで、男の人に触れさせた事はない、そのように馴らされ、それが当たり前、普通になり、森本さんの好みの女にされるんだわ。

．．．．．でも、嫌じゃない。そう思う、そう、これで良いの。そう。．．．．．

・・・「女の子」をこんなにされるなんて、私だっただけのこと
が無いのに男の人って凄いわ。ちっとも遠慮しないもん。男っ人って・

でも、

「乳首」程には感じない。刺激が緩やかに感じられる。でも、全く
違う刺激だわ。恥ずかしいと思う気持ちが強く、耐えるだけ、顔を
埋めてる森本さんを、薄目を開けて見る、

・・・あゝそんなー、あゝ舐めないでー、そんなに、広
げないでー、・・・

どこを愛されているかはわからない。でも、間違いなく、「女の
子」。身体が火照ってる

・・・あつ、・・・

「あついつやー、」すると、何かが入って来た。目を開けて下を
見ると、森本さんと目が合った。

「あつ！いや、」

両脚に力が入り、身体が緊張する。

その感覚はきつと指だわ。確かめるように、そのまま、動きだし
た、その動きが私を、私の身体を支配する。私は、その動きを、そ
の感覚だけを追う。森本さんが立ち上がり、左の乳房を揉み上げ握
られる。その手から、はみ出した乳首がツンと先を尖らせているの
が見える。見らずにいられない。森本さんの「仕方」を。その乳首
を森本さんの舌尖が、下から上に舐めあがり、又動く。

「あゝ、んゝゝ」

立ちながらも

「女の子」は解放される事はなく中で指が蠢いている。

「森本、さ、ん」

「なに？」

「ベッドに、」

ベッドの上で、私は森本さんの腕枕に頭を乗せ、舌を動かし、絡め、吸っている、そうするように、促され、馴らされてきた。たった短い間のセックスが私を急速に変えていくみたい。私の乳房は森本さんの左手でゆっくり揉まれている、たまには吸われるし、齧られるし、自由にされている。

「のん！」

「今日の記念に、キスマークつけて良いかい？ いっぱい、ねっ！」

「えっキスマークですか？」目を閉じて、想像してみる。

「駄目、かい？」

「いえー、良いですよーどうぞ！」

「じゃ、この裸の上を車で女体発見ツアーをはじめよ。」

「何です、女体発見ツアーって？」

「のん、のんの知られざる女体の神秘さ、」

「いやです、キスマークも、だめー」

「可愛い、のんちゃん駄々をこねないの！」乳房をしっかりと、握られている。そう言いながら、乳首の近くを、強く、吸い始めた。

「あうん、くうー痛いわあー。」強く吸っているながら、乳首が転がされる。なんて、感じるのー、。

「ぶるん、ぶるぶるん、さあー女体発見ツアーが足首からはじめるよー」

既に膝まで、森本さんの指が這ってきた。太ももの上に来た時、森本さんが身体を両足の間に移動し、座り込んで思い切り、広げる。すっかり広げられると、動きが止まる。見ている、そんなに、広げられても私の抵抗は、形だけ。

・・・でも、そんなに開かないでー。・・・

「女の子」のすぐ側を強く吸われ始めた。痛いくらい。すぐ横に痛みを感じる、吸っている。

・・・あゝゝゝ刺激的だわゝゝゝ・・・。

「あん、あゝゝゝ」

「指」が入って、動きだす。強く吸われる場所が移っていく。

「のん？」

「はい？」

「この辺りね、少し手入れしなさい。」顔を押し付け、動かしている。ーお手入れって、何かしら？ー

「うーむ、女体発見ツアーでわかった。」

そう言いながら、指が動いている。

「のん！」

「はい？」

・・・「女の子」をこんなにされるなんて、私だっただけとが無いのに男の人って凄いわ。ちっとも遠慮しないもん。男の人って・・・

・・・女体発見ツアーかあー・・・、ほんとに可笑しな森本さん、うふふふー・・・

私は、小さく笑い溢している自分を見ている。

森本さんの言う、女体発見ツアーで施されたキスマークの痕が、

鏡に写っている私の乳房を赤紫薄黒く染め、下半身周囲に集中しているキスマークの痕が、愛撫の激しさを写し出している、そんな裸身を見ている。

・ ・ ・ ・ ・ 抱かれたわ、ずっと、愛され、翻弄された、 ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ ほんとに嬉しかった、 ・ ・ ・ ・ ・ でも恥ずかしかった ・ ・ ・ ・ ・
・ ・

私は、そつと触れてみる、乳房に加えられたあの愛撫の痕を。鏡に写っている私は、いつも馴染んでいる、いつもの私ではなく、違う私、私ではない私がいる。

・ ・ ・ ・ ・ もう、あの初めての時から、私は私ではなくなったわ。
・ ・ ・ ・ ・

男の人ってほんとに凄いわ、私の身体を遠慮なく好きにされたわ、ほんとに恥ずかしい、でも、私は全部許してる、森本さんの「仕方」に応じている。

ホテルのベッドで、朝、未だ眠っている私は、身体に重さを感じて目覚めたら、森本さんが私の浴衣の前を広げて、乳房を揉んでいる。

「い、いや、いつ」

目覚めた、目覚めされた。乳房を揉まれて目覚めたのは、生まれて初めて。

・ ・ ・ ・ ・ あっ森本さんと一緒なんだー、泊まったんだー ・ ・ ・ ・ ・

自分で納得した。

・・・・・・・・一人じゃないんだー・・・・・・・・

私の身体は未だ目覚めていなかったのに、「女の子」を無理やり晒され、触られ、顔を埋められ、広げられ、そして、受け入れられた。

・・・・一緒にいれば朝も抱かれるんだー・・・・・・・・手入れしろと、森本さんは言ったわ、手入れて、なに？・・・・・・・・

私は鏡に写る黒い翳りを見ながら、今度聞いてみようと思った。部屋のシャワーを浴びながら、ホテルの部屋での行為を思い出している。男の人と旅行したのは初めての経験。

・・・・・・・・これから、馴らされ続けるは、きつと。・・・・・・・・

森本さんは、別れ際に2、3日は、会えないと言って、素早く、唇を重ねて、走り去って行った。

・・・・・・・・ルルルルルルルルルル・・・・・・・・電話が鳴ってる。

「モシモシ、のりこーモシモシー」

「はい、おかーさん、なにー？」

「昨日、何処に行ってたの？何回も電話したのに！」

「昨日は、お友達とスキーでした。」

「そうなの、遊んでばかりいないのよ、明日お誕生日でしょ、予定あるの？」

「はい、お友達が祝ってくれるの、なにかしたの？」

「お父さんが、一人じゃ寂しいだろうって言うの。」

「もう子供じゃないんだからって、お父さんに言っておいて下さい。」

「そう言ったんだけど、お父さん、紀子が心配なのよ。」

もう後戻りは出来ないわ。父の心配を裏切る事になってしまったけれど、後戻りは出来ない。

・・・・・・・・ごめんなさい、お父さん。・・・・・・・・

誕生会

23日は、私の誕生日、もう22歳になる。時間、時の流れが速すぎ。もう22歳なんてなんだか速い気がする。速く大人になったかったけど、大人になってみると1年はあっという間に過ぎて行く。まだまだ若い私のままでいたいわ、自分の為に、森本さんの為にももう、以前の私ではなくなったわ。父にも母にも言えない。でも、

・・・・・・・・私・は・私。・・・・・・・・

「お早う、是永さん、お誕生日おめでとう。」

「お早うございます。ありがとうございます。」ニコニコしているいつもの所長と朝の挨拶をしていたら、加藤さんが入って来るなり、私の側に来て、

「是永さん、誕生日だったよね、おめでとう！」と、周りを気にしない声で言ってくれた。

「おっ加藤ちゃん、朝から元気だなー」

「プレゼントは何にも用意しなかったから、せめて声だけでも大きくと！」はははーと、照れながら笑う。

「加藤さん、それだけで十分ですよ、ありがとうございます。」良かったー、加藤さんにはまだ、

「あの、」お返事してない。年を越したらしようと、思ってた。あれから、あまりお話しもしていなかったし、加藤さんが私を避けているように感じていたから、あー良かった。加藤さんとは、良い関係でいたい。良かったー。

「モシモシ、是永さん誕生日おめでとう。」

「はい、ありがとうございます。」

「今日ちよつと会えないかなー」

「加藤さん、ごめんなさい！今日、お友達が、誕生日祝ってくれるの、加藤さんも来ます？女友達ばかりですけど。」

「そう、そうだよなーいや、女の子ばかりの所に、男一人ってわけにはいかないよ。」

「そんな事、ないですよー」

「そんな事有るよ、変だよ、男一人ってさーまるで恋人みたいじゃん、それってさー」

「・・・あつそうなんだー、私って駄目ねーちつともそんな風に考えなくて、お馬鹿さん。・・・」

「ごめんなさい、」

「駄目、駄目ー、もう今日は無理です。」

「わっはっはっはー、銭形屋半太郎は行かんですよ。わしが行った
らおかしいからなー」

「さつきと、お名前違いますよ。」

「うむ？寅吉だったっけかなー」

「森本さん！今日は無理です。2、3日会えないって言いましたよ。」

「予定は予定だし、逢いたくなっただの。友達と合コンじゃ、し、し
よ、しょうがーないなー越後屋ー寅吉は、諦めーやんした。」

「はははーまたいい加減なお名前を。でも、合コンじゃありません。」

「誕生日おめでとう、それが言いたくてさー楽しんでね、じゃ切る
よ、おめでとう、のん、逢いたかった。」

電話は切れたけど、少しの間、受話器を耳に当てていた。

.....私もお逢いしたいわ。.....

昨日の お誕生会は、楽しかった。

いつもの気心が知れたお友達ばかりだから、いつもの様に盛り上がり、最後はカラオケで盛り上がり、帰宅したのは深夜の12時を過ぎていた。皆優しい人達。もうすぐ結婚する友達もいて、色々聞かれました。絶対結婚なんか遅いと思ってた圭子が、もうすぐ結婚するみたい。でも羨ましいとは思わなかった。楽しかったわ。幸せになってくださいね。

タクシーで部屋の前に着いた時、階段の周りに、いないはずの森本さんの姿を探していた。でも、その姿はなかった。

今日は、クリスマスイブ、朝から小雪が舞っている。いよいよ本格的な寒い冬が来るんだわ。思い出すわ、あの八幡平のスキー場、森本さんに行ったあのスキー場、そして、あのホテル、あの部屋。会社に向かっていつものように白い息を吐き出しながら、いつもの狭い通り道を歩いていると、前方から車が近づいて来る、ゆっくりと。近づいて来た。

すると、
「ぶつぶつー」とクラクションが小さく、短く鳴る音に、車に不安な視線を向けると、フロントガラス越しに微笑んでいる男の人がいた。

「あっ森本さん、森本さんだわ。」声を出さずに叫んだ。

・・・えーっ！・・・

森本さんだわ、手袋を履いた手で髪をかきあげそして、私は最高の微笑みを、車の中にいる森本さんに、飛びきりの微笑みを返す。森本さんも微笑んでいる。

・・・森本さん、私に逢いに来てくれたんだわ。・・・

喜びが沸き上がる。

白い車はスピードを弛めて私の前に来て、ずっと停まらずにそのまま後ろに走り去って行った。束の間の出逢い。胸の何処かが苦しくなった、でも、嬉しかった。

・・・逢いに来てくれたんだーこんな朝早くに、嬉しいわ。・・・

寒さが何処かに飛んで行ったみたい。・・・身体が熱くな

ってるわ。・・・最高のクリスマスプレゼント。・・・

会社

「お早うございます。加藤さん、目が赤いですよ、又、いつもの、マスターですか？」

「嫌だなーそんな風に言われると、昨日はA病院の先生の自宅で飲んだの。」

「あーあの看護婦さんの病院ですね、」

「そうだけど、今日の会社の飲み会、行くよね。独身者だけのね。」
そう、昨日はお誕生会、今日は

「イブの会」独身者と単身赴任者だけの会社の飲み会。参加自由、毎年恒例の会社の行事。

「はい、参加しますよ。今日は、イブですから、楽しましよう、ね、マスターさん」

「参ったなー、昨日は先生と、」

「はい、分かりました、ココアいれますか？」

「お願い致します。」

・・・加藤さんはきつとマスター手伝ってたんだわ、イブイブだし独身者だし、十分楽しんで下さい、やっと普通になってくれたみたい。・・・

会社も年度末だから、ほとんど残務処理と来年の準備に追われている。私の天敵は、元気に仕事している。1年良く我慢しました。加藤さんがいなければ、辞めていたわきっと。午後は既に薄暗くなっている。冬の夜は早い。

「モシモシ、是永さん夕方何時ごろ行くの？一緒に行きよう。」加藤さんだった。

「そうですね、一旦帰ります、着替えとかしますから、タクシーで行きます、心配してくれて、ありがとうございます。」

「良いよ、何人か迎えに行かなければならないんだー、会社の車で6時半に迎えに行くよ良いね。」

「ありがとうございます、待ってますうー。」
迎えにきてもらえる。

イブの会

「こんばんはー、わぁー皆さん、お早いですねー」と言いながら、此方を見て視線で合図している大好きな先輩の香織さんの隣の空いている席に、

「すうー」と回り込んで座る。

丸いテーブルが貸し切りの会場に3つ並んでいる。テーブルには色とりどりのお料理が並んでいる。少し遅れて入って来た加藤さんは所長の隣に座るしかないように、空いていた席に座り、既にビールを飲んだ所長のグラスにビールを注いでいた。これで全員集合したことになる、この会場に入った時よりざわめきが増し始めた。

このホテルのレストランには度々お邪魔しているから、緊張する事はない。クリスマスの雰囲気はホテルに入った時から、飾り物で満ち満ちていて、いやが上にも、

「まぁーほんとにクリスマス」って感じ。

「おーやっとな来たなー加藤君、遅いぞー」と、単身赴任の所長が席から立ち上がりながら言う。

・・・所長も大変だわ。・・・イブもクリスマスも関係なく仕事だし、この会社恒例の「イブの会」に出席するのだって、本当のところは、子供さんとか奥様とかとイブの夜くらいは過ごしたいに違いないわ。でも楽しそう、今日、イブの日を一人で楽しんでるのかも知れない。単身赴任だし、お一人で過ごすイブは嫌だわ、きつと。・・・

・・・森本さんはどうしてるかしら？・・・

「さあー皆さんそろったから、そうだな、是永さん、乾杯の挨拶をやって下さいね。」指名されました。

「おっ良いぞー、わが社のアイドル、のりちゃんの、挨拶、清聴ー清聴ー。」と、野田さんが言ったものだから、皆さん囃し立て始める。

・・・えーなんでー私なのーしょ、しょうが、・・・
・・・待って、駄目ー、ない、危ない、・・・

もう少しで森本さん流が口から溢れでそうになり、

・・・わあー駄目ーダメ、・・・私には似合わない、止めなさい、言わないの、どうしたの？。駄目だわ、どうしても森本さんの言い回しを思い出す。でも今はダメ。絶対だめー。覚悟固めてやるしかない。仕方がないわ。・・・

覚悟して、席を立って、

「はい、それでは、お疲れ様でしたー、乾杯！皆さーん、カンパイ！」立ち上がると直ぐに、グラスをもって乾杯を大声で言った。

「乾杯」

「カンパ〜イ」の連呼となり、待ちかねたように、箸が動きだし、グラスを飲み干すように飲み始める。さあー私も頂こうっと。

暫く賑やかな食事が続いた後、幹事の庄司さんが、

「これから、パターゴルフゲームを始めますよー。皆さん順番にチャレンジしてください。1ホールから出発して3ホール目の丸い円の中に、ボールを入れて下さい。ボールはここに置いてある、ジャガイモです。各自籠のなかのジャガイモを1個取り、このパターで始めます。一番打数の少ない人が優勝です。」小さな舞台の上にビニールテープでコースが造られていた。

「優勝賞金は、使われたジャガイモです。さあー始めて下さい。所長からどうぞ。」

「はっははー、僕は、パターは得意だから、任せなさい。」と言いながら舞台上がり、籠のジャガイモを取り上げ此方を見ながら「お手本をお見せしよう。」と大見栄を切る。皆さん舞台の前に集まって、所長の動きを見る。打ちはじめた。ジャガイモをパターで転がし始めた。

「あっ、こら、そっちじゃない。違う、あっあー」

「はっはっはー、所長真っ直ぐ、真っ直ぐですよー」

「真っ直ぐいかないんだよ、あくだめだー」

「はい、続けて、順番にやって下さい、」見えていても、ジャガイモはあっちへころり、こっちへころり、可笑しくて大笑い。次々に舞台上がり加藤さんの番。

「加藤さん頑張って下さい。」

「まかせなさい。」と言いながら転がし始めたけれど、やはり、ゴルフボールのようにまともに前には進まない。ゴルフをやった事がない人も、ある人も皆さん悪戦苦闘。

私の番。パターを握り見よう見まねでジャガイモに当ててみた。

「あつ、落ちたーあゝ」強く打ち過ぎて舞台から転げ落ちた。

「はっはっはー是永さん、もう少し力を抜いて、それじゃ打ち過ぎ。はっはっはー落としちゃったよー」加藤さんが笑いながら言ったので、

「加藤さんの意地悪、嫌いですー」言ってみた。

「おいおい加藤ちゃん、是永さんに嫌われちゃったよーはっはっはー」すると、

「是永さん、はいっ、良いですかーここを狙って静かに、・・・そう、ほら、上手、ね、今みたいに、ゆっくり、おー上手い！」

加藤さんが舞台上がり、私に指導しはじめると、取り囲んで見ている皆さん大笑いになり、

「加藤さん、今さら是永さんにごますっても駄目ですよ。」

「そうだ、そうだ、是永さん、もつといじめちゃえーうっわはっはゝ」

「是永さん、加藤さんの事、嫌いになったみたい。」

「そんな事、ないですよ、嫌いになったりしますから。」と言うと、はっはっはーいつもの所長の笑いにまた皆さんの笑いがでる。

「加藤君、結婚すれば尻に敷かれっぱなしになるよ、きつと。」

「ホントに弱いよなー是永さんにはさー」

「酷いなー皆して、」

・・・加藤さんが私に告白したことは、知ってるのかしら？・・・

結局ゴールにたどり着いた頃には、幾つ打ったか分からないほど、打ちました。

ジャガイモって、結構重いし、真っ直ぐ転がってくれないわ。もうたくさん打ちました。加藤さんが、ここに、ころがして、はい、力

を抜いてとか優しく、とか、指導されながらジャガイモを転がしました。そんな加藤さんと私だけが舞台の上で一生懸命にジャガイモを転がしているのを、皆さんで、笑いながら見ているのに、私はちっとも気がつかない。

ジャガイモパターゴルフの優勝者は、営業の岩崎さん。加藤さんの同期。

「今回の優勝者は、舞台の上で手に、ジャガイモを持ちながら感謝を込めて、ご挨拶を、どうぞ。岩崎君です。」

・・・ワァー結構人気者。・・・

拍手が鳴り止むで、舞台に上がってジャガイモを一個取り上げ手を高く掲げてみせた。なかなか素敵な人。

「えー、ゴルフはしたことは無いです。これから始めたいと思っています。加藤君はかなりやっているみたいです。僕もやってみたくなりました。しかしながらジャガイモ転がしはとても難しかったです。簡単に見えましたけど、やると見るとじゃ、うーん違いました。さて賞金のジャガイモ、感謝しながら食べなければ罰が当たります。そこで一緒に食べたい女性がいいます。それは、是永さんです。お願い致します！」と、言って右手を前に出して舞台の上で私に向かって頭を下げた。

・・・えっ？えー急に、なにー？告白ー？まさかー！・・・

「是永さん、さあー舞台に上がって下さい、ご指名です。」

・・・ご指名って、・・・

私が戸惑っていると、香織さんが私の腕を取り、私を舞台に押し上げた。

「のりちゃん、ご指名よ。」と言いながら背中を押され岩崎さんの前まで来てしまった。舞台の上でジャガイモを持っている岩崎さんと向かい合い戸惑っている私に、幹事が

「これから告白タイムの時間がやってきました。是永さん本当は今日は、ささやかな合コンパーティーでした。優勝者の権利です。どうぞ告白してください。」

「……えーうそー、どうしょ。……そんなの聞いてないわ。困る、皆さんの前でするなんて、困るー、……」

「是永さん、僕と一緒にジャガイモを食べましょう。お願い致します。」と言って、ジャガイモを差し出した。

「……出来ない、出来ません、私には森本さんがいる。……」
「……お断りしよう。……」

「ごめんなさい。」と頭を下げお断りしたら、ひゅーと鋭い音がした後、直ぐに笑いが巻きおこった。

「エッなに？」

舞台の上で見る誰もが、笑っている。加藤さんなんか大笑いしている。岩崎さんも下を向きながら笑っている。

「……なぜ？ どうして？ ……」

「本日の優勝者には、是永さんへの告白が義務付けて有りました。知らなかったのは、是永さんだけでした。1日遅いけど、是永さん誕生日、おめでとう。本日の公演舞台、ジャガイモの告白は、お開きとなりました。主演、岩崎雄一君、相手役、是永紀子さん、他多

妊娠

新年の部屋

「新年おめでとう、のん」

「はい、おめでとうございます。」

「逢いたかったよ」

「はい、私もです」

冷氣と共に玄関に入って来た森本さんの冷たいコートの胸に抱きしめられ、今年初めての森本さんの唇を受けながら、薄いブラウスの上から乳房を強く握りしめられる。掌の冷たさが、薄いブラウスを通じ、乳房に感じる、

「……くーそんなに強く握らないでー・痛いわーでも嬉しいわー・……」

「年末は忙しくて、電話しか出来なくて……ごめん」そう言しながらも、森本さんは乳房を揉んでいる。

「いえ、良いんです、お電話、嬉しかったですよ、毎日頂いて、どうぞ中へ」と言いながら、抱かれた身体を少し押して離れる。

クリスマスイブの夜から始まった……「女の子」

「……毎月きちんとやって来る、満月の使者……森本さんとお逢いしても……がっかりさせるだけ……」

「女の子」を告げると、いつもの悪代官風に、声を枯らして、
「しょっ、しょうがねえゝなあゝ姫、いいゝゝつまでゝゝ続
くのかなゝゝ」と、如何にも悪代官風に言うので、
「ずっと、永遠に終わりません」と、応えていた。

「こらこら、のん姫、嘘はいけません、いつ終わるの、・・言いな
さい」いたずらっ子のような表情を見せる森本さん。

「えーと、1月の、えーと25日頃・・・」と応えると、

「ほうゝゝお嬢様の女の子は40日も続くのかい？」と、言われ
た。

「はい、毎日女の子です・・・うふ」

「よし、構わない、女の子でも構わん、いざ突撃だゝゝ」

「イヤですー、ずっと・・・」

「のん！」

「はい、」

「いつ？」

「3日頃・・・だと・・・」

「よし、じゃ3日の午後行くよ」

「駄目ですよ、未だ、終わってませんよ、10日頃まで待って、く、
」と、心にも無いことを言う。

「のん！3日、・・・3日の午後に行く」強く言われた。

・・・嬉しい・・・あゝゝ又始まる・・・

「はい、」

「嬉しいか？」

「はい、」

新年を迎え早々に実家を出て帰って来た。会社の休みは5日まで。
今日は森本さんが約束した日、ずっと待っていたわ、この日を。

森本さんは、部屋に来た。

「ようし、今日は俺が鍋を作るよ。のんは見ているだけ」と言う。
テーブルにグラスやお皿が並べてある。

「ほんとに作れるんですか？心配だなく、わあー食べれなかったらどうしよう、」と言ってみると、

「こらっ、のん、食べれば分かるさ！材料は用意してある？買って来てくれた？」と、聞かれた。

「はい、冷蔵庫に、」

「じゃ、お嬢様はテレビでも見ながら一杯飲んでなさい。」と、言
って台所に立った。

・・・あゝほんとに、上手なんだわ・・・

森本さんは、手際良く鍋に材料を置いてゆく。包丁を器用に使っている。

「はい、寄せ鍋一丁あがり。」私はパチパチと、手を叩き、

「あっという間に出来ましたー凄いー素早いんですねー感心しました。でも、味ですよー最後は味ですよー」と、言うと、森本
さんは、私を見ながら、

「ほんとに、この姫はーーーー食べてから言いなさい、美味しかったら後でお置きだからねっ」と、呆れた表情をしながら言った。

「イヤですーーーーお置きはイヤですーーーー」と、嬉しくて、嬉しくて甘えた声が自然に出ていた。

「乾杯〜おめでとう〜」

「はい、乾杯〜」

「……今年も……宜しく……うふふふ……森本さん……」

「さっ、美味しいかな〜食べよう、俺は、せりが大好きなんだ」

テーブルのガスコンロの鍋はくつくつと音がして湯気が出ている。

「私も、お鍋のせりは大好きです、いただ〜きます〜うわあ〜美味しい、あっさりしていて、美味しいです……うわあ〜森本さんお上手です、凄い……あ〜美味しいい〜お店で食べてるみたい〜」

本当に、そう思った。

「うん、美味しい、冬は寄せ鍋が一番、温まるし、簡単だしさ、」と、森本さんは満足そうだ。

「期待以上の美味しい鍋ですよ〜うっふふふ、美味しいですよ……」

「ありがとう、さあーのんも、熱燗飲みなさい、ほら……」

「はい、お正月ですから、頂きます……」

「じゃ、改めて今年も宜しく〜」

「こちらこそ、宜しく願います〜乾杯!」

喉を取り過ぎたお酒は、急に身体を熱くし始める。森本さんも赤くなっている。あっさりしていた味が旨味を増してきた。

「はい、どうぞ。」

「おっ、お〜〜わ、わしは、う、嬉しいぞ、うわっはっはっ〜さあ〜ちこう、ちこう、どうじゃな、うわっはっはははは〜」と、今年も始まった、いつもの豪快な笑い。

「全く、悪代官ですよ」

「しよ、しよ／＼うがない／＼さあーまずは1パイ」

「のん、初夢・見たかい？ さあーもう一杯」と、お酌をしてくれる。

「はい、頂きます、はい、もちろん見ました、見ましたよ。あゝもうー大変でした。お正月早々、もう大変でした。・・・怪しい男の人が出てきて、最初は誰かは分かりませんでした、だって、大根、大根持って追いかけて来るんですもの、どうして、どうしてよ、私、逃げてても逃げてても、追いかけて来るんです。うなされました。酷い初夢でしたゝゝゝ」と、冗談交じりで言うど、

「うはっはっはあー大根持つて追いかけて来る奴って……誰？ おかしい夢見るな……遊び過ぎで疲れてたんじゃないの……でも、気になるな……まあ……飲みなさい、で、誰？ 知ってる男？ ……その大根持つて追いかける奴なんか知らんよ、誰？ ……ひよつとしたら……まさか……俺……？ そう、じゃないよな……」

「はい、あゝ当たりゝゝゝ大ゝゝゝ当たりです。もうゝ気が付けば、森本さんでした。怖い顔、必死で来るの、なんで、どうして？大根持って追いかけてくるの！怖いんですからゝゝゝ初夢に大根持って出て来ないで下さい・・・もうーほんとに」

「しょ、しょぅぅがねえぅぅぅわっはっはー夢でも優しい男だったろう?」と、意外な事を言うので、

[illegible]

「正月早々、人を、変態扱いした夢見たなんて言ってくれたよねー
覚えていなさいよ、そんなに言うならさ、今日は、のんがどんなに
嫌がっても、ほんとに変態になつてやるからさーふふふー楽しみだ
なー」

「うわあ～～嫌だな～～、今年はまだー止めようかな～～お逢いす

るの、」と、心にも無い事を言ってみる。

「可愛いのんちゃん、背後霊のように、くっついて離さないから、いつでもどこでもドアから出てきて、のんを抱いてやる。ふん・・」

「それを、ストーカー、大根持ってやってくるストーカーって言ってるですよ」

そう言うと、森本さんは、

「のん、シャワー入って来なさい」と、私に命じた。

「・・はい、」小さく頷く。

酔いが心地良い。

「そうだ、一緒に入ろうか？のん！」と、又、変な事を言う。はっきりと、言下に、

「駄目です。」

「たまには良いだろう、洗ってやるの、・・」

「結構ですー、いやらしいですよー」そう言いながらぺろりと舌を出す。

「しょうがないなく、じゃ先にシャワー借りるよ。」と言うと、立ち上がり、着ている服を脱ぎ始めた。

・・・まっ、待って下さい・・・もう・・・

「森本さん、」

「なに？」

「ここで、裸にならないで下さい・・」

私は立ち上がり森本さんの脱いだ服を拾い上げ、シャワー室に行くように促した。

「何だよ、俺のヌードを見せてやろうと思ったのにさ！」と、不満そうな表情をしたので、

「いりません、止めて下さい・・ほんとに！」そう言うと、私の側に近寄り、服を持った手を掴まれ、抱き寄せられる、そのまま、強

く。

「見たくないのか？」

「はい、」と言うと、身体を離してシャワー室に入って行った。

・ ・ ・ ・ ・ 森本さんなら、裸になりかねないわ ・ ・ 今の内に、パジャマに着替えなくちゃ ・ ・ ・ お布団の準備は森本さんがやって来る前に済んでいるし ・ ・ ・ ・ ・

森本さんは、直ぐに出て来た。今度は私の番。シャワー室に入ると素早くパジャマを脱ぎ、シャワーは二度目だから、素早く洗い流す。

・ ・ ・ ・ ・ 抱かれる、今日は何をされるんだろう ・ ・ ・ ・ ・

「のん、こっちへおいで ・ ・」

森本さんはお布団に仰向けになっている。私は言われるままに森本さんの右横に素早くも潜りこむように入る。直ぐに私の身体の上に重なり、パジャマのボタンを外し始める。

脱がせ易いように脚を少し広げる。ボタンが外れたパジャマは左右に広げられ、少し歪んだ乳房が露になる。上から、見られ、直ぐに乳首を口に含まれ、そして吸われながら、腕からパジャマが脱がされ、上半身がすっかり裸にされた。森本さんが身体を離して起き上がり、お尻からスルリとパジャマを下げられ、抜き取るように、脱がされる。

・ ・ ・ ・ ・ これですっきり裸にされたわ ・ ・ ・ ・ ・

目を閉じて森本さんの次を待つ。

・ ・ ・ ・ ・ また、私の身体を上から見ているんだわ ・ ・ ・ ・ ・

すると、

「パンパン」と手を叩く音がしたので、薄目を開けて森本さんを見ると裸の身体が飛び込んできた。そして、畏まって、手を合わせて、拝んでいる。

・・・・・・・・えーなにー？・・・・・・・・

「のん、」目が合う。森本さんが微笑んでいる。

「はい？」

「今年も宜しく！」

「はい、宜しく願います。何をしてたんです？」

「のんの観音様に今年も宜しくと拝んでたの！」と言って、またパンパンと私の、女の子、に向かって手を鳴らした。

「知・り・ません、」

・・・・・・・・可笑しな森本さん・・・・・・・・

私の身体と森本さんの身体が重なる、温かさが伝わる。

私は森本さんの背中に腕を回す。

森本さんはいつものように、全身で確かめるように、私の身体を抱き締める、強く、柔く、弱く、硬く、そして脚も絡め、擦り、押し付け、脚を開かされる。

・・・・・・・・あつ、うつ伏せにされた・・・・・・・・

森本さんの胸が背中に感じる。お尻にも森本さんを感じる。背中への手と、確かめるように動く、唇と舌の動きを追う。その動きは下に向かう。

・・・全て確かめられるんだわ。・・・

お尻を、

「ぎゅっ!」と強く掴まれ、また確かめるように揉まれる。後ろから「女の子」を見られないように脚を閉じていたけど開かされた。お尻を、後ろからこんな風にされるのは初めて、

・・・あっ開かされた、やめてー・・・私は顔を埋めて耐える。・・・全部見られる、確かめるのね・・・

不意に、私の身体が離され、森本さんが、私の身体を仰向けにさせ、私の横になり、私の手を握りしめる。私も強く握り返した。握られた手を、森本さんは、強く導いた。

「触って、」

「えっ!」手が、身体が固まった。

「さあー、握りなさい!」私は薄目を開けて森本さんを見ると、唇が重なって来て、軽く吸われ、そして耳もとに囁いた。

「触って下さい・・・」

私は、上から、少し触れた。その触れた掌を、森本さんの手が強く握った。私は、触れるのは、初めて。

「さあー、握りなさい。」

「は・い・・・」私は、初めて、森本さんの「もの」を握った。

現在まで、男の人の

「もの」を触った事は無いし、握った事なんて無いわ。目を閉じてその掌の感覚を追う。

・・・これが私の「女の子」に入り、受け入れ、何度も何度も私を翻弄した「森本さんのもの」なのね・・・私を翻弄している間・・・私はただじっと耐えているばかりだけど、でも、嫌じ

やない、翻弄されるのは嫌じゃない。．．．．今日も翻弄される、嬉しいわ。．．．．でも、ホントに、今こうして握っている事が信じられないわ。．．．．どうしよう、どうすれば良いのかしら。．．．．軽く手を添えるみたいに、握っていて良いのかしら。．．．．

「のん．．．」

「はい．．．？」

「感想は．．．？」

「．．．．．．．．．．」

「あつ、離さないで、握っていなさい」

森本さんはそう言いながら、私の唇を吸い始める。私も応え、舌を絡める。乳房が強く、弱く揉まれている。乳首が指の間に挟まれて揉まれている。乳首が、

「こりっ」と強く弾かれた。

「うっ！」

声が出そうになる。

「．．．あゝ・乳首は感じすぎるわ．．．」

でも、私の手はくっついたみたいに、握ったままでいる。

「のん？お願いがあるんだけど、」

「何です？」

唇を離した森本さんが上から見ている。その真剣な眼差しと私の眼差しが合う。

「今握っているここにキスして下さい。」

「えっ！」

「．．．．こ・ここに．．キスって．．．．」

また、身体が固まった。握っている私の手を上から握り締め、

「嫌かい？」

「いいーえーでもー・・・」

「のん、キスして下さい、お願いしますだ〜」

「はい、」触った事もない「もの」を触り、握りしめ、

「キス」まで求められた。

・・・ええ〜どうしよう〜？・・・

森本さんの、

「もの」に「キス」して下さいと、お願いされた。そのまま握り続けている森本さんの

「もの」に。まるで生き物のように、私の手の中で動いている、

・・・あつ、少し大きくなった・・・みたいに感じられる。
・・・不思議だわ・・・

「さあー、して下さい！」

そう言いながら、私の身体の肩あたりに腕を差し込み、力を入れて起こそうとする。私はその力に上半身を合わせるように起こすと、握っていた森本さんの「もの」が自然に離れた。

・・・いえ・・・離れた・わ・・・

少しの時間しか経っていないのに、私の手に馴染んでいるみたい。起きて目線を下にとすると、私の長い髪に見え隠れしている乳房に重さを感じ始める。少し垂れているのを見られるのは嫌。高校生の時は、乳房が目立たなかったけど、短大時代に急に大きくなって、戸惑っているうちに、社会人になり、今は、森本さんに乳房をもみくちゃに愛され、そして、全てを晒している。

・・・・・・フフフゝ可笑しな・・・・私だわ・・・・

裸の上半身を森本さんは下から見ている。視線が合う。

「さあーしなさい」

と、言われるみたいに背中を押される。

そんな私の目の前には、裸の森本さんが、全てを晒して、仰向けに寝ている。

・・・・ホントに恥ずかしく無いのかしら、さっきは私の前で裸になろうとするし・・・・

そんなことが一瞬過った私の視線は、吸い込まれるように、その陰りのある一点に釘付けになっている。こんなに間近に見るなんて、ドキドキしている。

・・・・キスするなんて信じられないわーどうしよう・・・・

又、背中を押された。その力は優しく、促すように。やはり拒否出来ない私は、腰を折るように、森本さんの中心に顔を近づけ、左手の人差し指と親指の二本とで押さえて、先端に唇を押し付けた。一瞬だった。

・・・・・・したわゝゝしました、・・・・・・

「おーエンジェルキッスだー」

私はその声に手を離し森本さんに背を向けると、すぐ起き上がった森本さんが私の身体を後ろから、滑るように差し込んだ両手で乳房を

「ギュッ」と握りしめ抱き寄せる。

「あつ、うーん」

強く握られると、力が抜けるわ。後ろから乳房を揉みながら、森本さんの唇が、私の耳たぶを齧り、囁く。

「のん、ありがとう・・・嬉しかったよ・・・」

「はい、」

・・・森本さんが喜んでくれるなら、私も嬉しいわ・・・

「まだ、お願いがあるんだけど。」

「えっ？」

「聞いてくれるかい？」

「嫌です！」

乳房をやわやわと揉んでいた両手が這うように下がりはじめた。私は森本さんに寄りかかって、乳房への愛撫に耐えていたけど、「女の子」がいきなり、私の身体を這うように下がった両手で左右に広げられた。

「いつ、いやっ、」

森本さんの胸に背中をぶつけるように反る。受け止めた森本さんの指が、広げられた

「女の子」の核心である感じる部分を剥き出しに晒した。一瞬違う温度を感じる。

「すうー」と下から上になぞられた。

「あっあゝん・・・うむむ」

・・・なに・・・なに・・・今の感覚、感じはなに・・・乳首の感じ方とは違う・・・もっと深い所での、感覚・・・あゝ離れられなくなりそう・・・駄目・・・そんなに広げないで・・・

森本さんの腕枕で少し眠ったみたい。

・・・愛されたわ・・・後ろから愛された・・・あんなに高くさ
れるなんて・・・

激しくお尻を動かされた。私は夢中でその動きに驚きながらも合
わせ、動き、その感覚を追った。まだまだ感覚を追いきれない。で
も少しずつ馴れているみたい。段々と、思い浮かんで来る、少し前、
ホンの少し前の事。

「のん？」

「はい？」森本さんの腕枕で、目を閉じたままで、小さく応える。

「感じたかい？」

「知り・ま・せ・ん」

「少し眠ったよ。」

「はい、私も眠りました。」

「今年の姫初めは、最高だよ。本当にさ、素晴らしい、感激だよ、
ありがとう、のん・・・」

「いえ、姫初めって、なんです？」

「ははあん、姫初めってさー若いから知らないんだー今のがそうさ。
」

「な・何が・・・そうなんです？」

「今年、最初の睦合さ、男と女が肌を合わせる事を、姫初めって言
うのさ、間違っているかなー俺はそういう風に解釈してた。今日が
俺の最初の肌合わせさ、今が、のんを抱いてる途中、のんが今年初
めての女さ・・・他の誰でもない・・・のんが最初・・・」

「私で良いんですか？」と、いつも、心の片隅に在る、気がかりを
言った。

「のん？」

「はい？」

「俺の事好きかい？」

「はい、好きです、森本さんは？」聞いて見たかった、ずっと。

「あゝのんが思っている百倍も好きだよ、」そう言う唇を重ねて舌を差し込んで来る、私も差し出し絡める。

「うゝゝん、怪しいですよゝゝ、でも、嬉しいです。」私は森本さんに寄り添い、森本さんの胸に手を置いた。

「のん！」

「はい？」森本さんが身体を少し起こし、再び唇を重ねて来た。

「剃りなさい、少しお手入れしなさい。」

「えっ、お手入れって？なんですか？」

「ほら、ここ、ここから、こちら側を少し、剃りなさい。」森本さんの手が、私の「女の子」の周りを触りながら、

「ここから、この辺りまで、剃りなさい」と、言ったので、驚いて、

「えっ、そ、剃るんですか・・・どうしてですか？」

「剃った方が、綺麗だよ、お手入れは大事だよ。」

「剃るんですか？」

「嫌なら、俺が、剃ってやるかい？その方が、綺麗だし、剃って、欲しい」

「変ですよ、森本さん、どうしてですか？」

「いやー、ハワイに連れて行こうと思ってさ、いつだったかなーハワイの海岸で、ビキニを着て脚を広げて座っていた、若い女の子が居ただけど、おケケがはみ出していたんだよ。あれのさー印象が離れないんだ、パンツからはみ出しているんだよ、だからさーのんには、そういう事態にならないように、えー今から、そのーお手入れして、準備など、あゝゝ」と、最後はなんだか言い訳のように話した。

「森本さん、ハワイのお話し、怪しいですよ、ほんとですか？」

「ほ・本当だよ・ほんと」そう言いながらも、森本さんの五本指がかき分けるように、引っ張りながら触っている。私は、好きなようにさせている。

「のん！剃って下さい、剃りなさい・・・お願いだ～～」

・・・もう、剃れって、・・・今まで考えてみたことないわ・・・

「嫌かい？」

「はい。」

「じゃ、しょうがない、今から、紐で縛って身動き出来ないようにして、剃ってやるー」

「きやつゃ～～森本さん、止めて下さい、縛られるのは、嫌、嫌です」

「じゃあ、言うこと聞かない？」

「うわあ～～それって卑怯ですよ・・・イヤ～～」

「ぐわっはっはっ～～お～～う可愛いのんちゃん、言うこと聞くんですよ～～」

「段々、スケベオヤジになってきましたよ・イヤらしい、オヤジ～～」

「くうう～～縛ってやる～スケベオヤジって言ったな～～スケベオヤジになってやる～～」

私は森本さんに、触られ動いている手を上から抑えながら、

「森本さん、剃って欲しいんですか？」

「うん、」

「森本さんが、そうして欲しいのなら、剃ります・・・」

「剃ってやる！」

「駄目っ、駄目です」

「じゃあ、良いかい、ここから、こっちは、剃りなさい、そして、ここからこっちは、剃りなさい。お風呂に入ったら、毎日、剃りなさい・・・綺麗になるよ・・・柔らかいから剃りやすいよ、う～ん、綺麗になるよ」触りながら、森本さんは嬉しそうに言っていた。

「はい、」抱き締められ、そのまま起こされ森本さんの胸の上に、身体を乗せた。

「キスして！」

会社

「明けましておめでとうございます。加藤さん、今年も宜しく願い致します」

久しぶりの加藤さんの顔は黒く日焼けしてたくましく見える。

「やあー是永さん、おめでとうー久しぶりだねー今年こそ宜しくね！」と、微笑みながら言う加藤さん。

「はい、宜しくお願い致します。ご実家に帰ってたんですか？」と、加藤さんを見ながら言うのと、

「帰ってたのは1日だけで、ずっと志賀高原でスキーしてたよ」

「うわあーうらやましいなあー日焼けして逞しく見えましたよ。」

志賀高原って素敵などこなんでしょうー一度行ってみたいなー」

暮れの、スキー旅行、森本さんと一緒にスキーをした記憶が浮かんで来る。

「うん、まあまあかなー結構、混んでるからさー人、人、人ばかりで大変だったよ」

「彼女はお元気ですか？一緒だったんですか？」と、聞いてみる。

「こ・是・永・さん、友達と一緒に、大学時代の友達と一緒にだよ・・・それに、まだ返事もらってないよ・・・是永さんの・・・」少し、加藤さんの表情が曇る。

・・・怒らせれば駄目・・・駄目・・・

「加藤さん、怒らないで下さい、新年早々、怒れば、大きな大福が逃げますよ・・昔の人が言ってますよ・」と、最高の笑みを投げかける。

「ねー是永さん、今日、時間取れないかなー少しで良いんだけどさ！」

「あれー加藤さん、今日は会社のお友達だけの新年会ですよ、加藤さんも参加ですよ・ね？」

「もちろん行くよ、ただ、その前にちょっと話がしたかったんだ・・そうか・・じゃあ明日はどう？」

「明日から、自動車学校始まるんです・・免許取るまで、少し、お時間下さい・・」

・・・自動車学校は、本当に行くんですよ・・・

「そうかー忘れてたよ、自動車学校通ってたんだよね、始まったばかりだって、忘れてたよ・・そうかーごめん」加藤さんは、何かを考えているような表情を見せて言った。

「今月は、自動車学校に集中します・・早く、免許取りたいですから、あつ、加藤さんをお願いしたいことが有るんです。」

・・・ご機嫌を直さなくちゃ・・・

「なに、お願いって？」急に、表情が緩む。

「加藤さん、私、免許貰えば、中古車買おうと思ってました、アドバイスして下さい、ちっとも車の事は、分からないんですもん・・」と、甘えて見せる。

「えっ、俺で良いの？お父さんとか？」と、嬉しそうな表情に変わった。

「だって、私、男のお友達いませんもの、父に相談すれば良いのか

も知れないけど、自分で見つけたいんです」

「そうかー俺で良いのなら、心当たり有るよ、免許取るまで車探してみるよ・・どんな車が良いか、考えておいてね後で、予算とか聞くからさ」

森本さんに言えば、直ぐにでも、

「買って来たよ」とか言って、車がアパートの前に、置かれるような気がする。

・・・まだ、言えないわ・・・自分で買ってから言うわ、そう、そうしよう・・・

新年会

「明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願い致します。」

新年会の会場には、皆さんもう集まっている。近づく後ろから声をかけられ振り向くと、加藤さんと男の人がいた。

「是永さん、おめでとう、宜しく、」

「あつ、岩崎さん？おめでとうございます、でも、どうして？」

・・・あの・・・イブの夜以来だわ・・・

「加藤君に、無理を言って、参加させてもらったんだ」と、岩崎さんが私を見つめて言う。

「ホント、課が違うんだから、どうかなーって言ったんだけどさ、どうしても参加させろって言うからさー」と、加藤さん。

「加藤さん、今日は会社の親しい人だけの新年会よ、新人さん大歓

迎よ。岩崎さんなら大歓迎よ」と言った岸浪さん。

「もちろん大歓迎だけど、ちょっといきなりだったものだからさ、皆さんの了解取らないで、」

「実は、私が誘ったの、そしたら是非とも参加したいって言うから、加藤さんに了解もらってって言ったの」と言ったのは、岸波さんだった。

「あっそうなんだ、岸浪さんが、誘ったのかー良かったじゃん」

「わりい、わりい、暮れのイブの会でさ、岸浪さんにさ、飲み会あったら、誘ってってお願いしてたんだ」岩崎さんは、すまなそうな表情で応えた。

「加藤さん、新人さん大歓迎ですよ、岩崎さんには、貸しが有ります、すっかり騙されました・・・ですから新人イビリ楽しみです・・・」と、あの夜の事を思い出しながら言ってみた。

「うおー、こわあー、是永さん、根に持ってるんだー」

「ずうーとです」

「いやーあれは、加藤君の発案なんだよ、」

「ち、違う、違うよ、岸浪さんだよ」

「私いゝ知らなくゝい、さっ、座りましょう。」

岸浪 さくらさん、独身、29歳、気が強い、男勝り、面倒見が良い、姉御肌、優しい、強い女、何回も助けて貰いました。そんな先輩。

・・・あん、なんか変・・・苦しいわ、ピッタリ密着して息が出来ないみたい・・・

気づかれないように、腰を横にずらしてみる。

・・・アン・・・パ・パンティーが・・・「女の子」に密着し過ぎるわ・・・あゝんこそばゆいし、息苦しい、なんか変だわ・・・

・

この三日間、森本さんに毎日、激しく、優しく翻弄され、抱かれ続けた。そして帰りに必ず言うわ。

「明日も来るよ。部屋に居なさい」と。

「はい、」と小さく応える私。明日も抱かれるわ。

森本さんに、

「剃って!」とお願いされ、指示された通りに、その日から毎日シヤワの度に剃っている。剃る度に、森本さんを思うわ。森本さんは、

「剃ってくれて、ありがとう、ほら、やっぱり綺麗だよ」と言いながら、必ず触れて、じっと見て、その感触を確かめる。剃ったのは、生まれて初めて。考えてみたこともない。それでも、剃って見れば、確かに違う、そう今までの私じゃない私が鏡の中に写っている。

・ ・ ・ ・ ・ 他の女の人も剃っているのかしら? ・ ・ ・ この事は、私だけの秘密 ・ ・ ・ 誰にも言えない秘密、少しずつ馴れるしかないわ ・ ・ ・

「どうしたの? 是永さん? 少し、雰囲気変わったね」と、目ざとく加藤さんが言ってきたので、

「え〜え? 変わってませんよ、一つ歳を取っただけですよ」と、応える。

「そうかな〜少し、変わった気がしたんだけどな〜」

・ ・ ・ ・ ・ 変わりましたよ ・ ・ ・ のん ・ ・ ・ は ・ ・ ・ ・ ・

「かんぱ〜い」

「今年も宜しく〜」

加藤さんは、本当に良く私を見ている。

・ ・ ・ ・ ・ 加藤さん、ごめんなさいね、私には好きな人がいるわ。
・ ・ ・ ・ ・ 毎日、抱かれているわ ・ ・ ・ ・ ・ もう後戻りは出来ないの ・ ・ ・ ・ ・

おトイレから出て、会場に向かう広い廊下に岩崎さんがこちらを見ながらいた。私が歩き近づく、と、待っていたかのように、前に来て、

「是永さん、イブの告白、本気だよ、ずっと是永さんを思ってた、加藤君が、是永さんの事好きな事は分かっているけど、俺もアタックする、今度時間取って下さい」と、はっきりと言ったのを聞いて、「えっ！ ・ ・ ・ ・ ・ う ・ ・ ・ ・ ・ 嘘 ・ ・ ・ ・ ・ 」と、声が出ていた。

「嘘じゃないよ、本気だよ」

岩崎さんは、そう言う、と、すうーと離れて行った。

・ ・ ・ ・ ・ え ・ ・ ・ ・ ・ 嘘 ・ ・ ・ ・ ・ 驚いたわ、え ・ ・ ・ ・ ・ え ・ ・ ・ ・ ・ まさか ・ ・ ・ ・ ・ 岩崎さんが私を好きだって ・ ・ ・ ・ ・ え ・ ・ ・ ・ ・ ？ ・ ・ ・ ・ ・

「是永さんが会社に入る前にね、会社にいた若い男の子なんだけどさー本当に生意気な奴で、周りの女の子達に嫌がられ、嫌われていたのね、だから私、その男にね、私言っただの、小さな声でね」少し赤くなった顔の岸浪さんが話始めた。

「あーあの子ね」と、言ったのは、佐藤さん。

「是永さんが会社入る前に辞めたから、是永さんは知らないわ」

「で、なんて言ったんですか？」

「椅子に座ってる後ろから、囁くように言いました ・ ・ ・ ・ ・ ねえービデオ、裸のビデオ有るの、興味ある ・ ・ ・ ・ ・ って言ったら直ぐにさーは、裸のビデオ ・ ・ ・ ・ ・ うん、見る ・ ・ ・ ・ ・ はははー見たいって言ったわ、言いました」と、岸波さんは笑いながら言った。

・・・裸の・・・ビデオって・・・あっち系・・・嫌だあゝ・・・

「裸のビデオ？うわぁーエッチ系ですね。」私はまだエッチビデオは見たことはない。

「ワクワク、興奮するわよー裸で、汗だくで絡み合うの、激しいわよー外人さんも出てるわ、白人も黒人もよって、息も荒く上に下に、興奮するわよーって！言いました。」

「か・貸したんですか？そのエッチビデオ？」と私が聞くと、
「もちろん貸しました、返さなくても良いよってね」と、いたずら顔で応えていた。

「想像したー？エッチな画像頭に浮かんだでしょう・・・うふふ」
「うん、僕も見えたかったなーそんなに、激しいものならさー」田中さん。

「イヤらしいですよー田中さん、やはり、加藤さんも見たいですか？」私は言ってみた。

「いや、僕は見たいとは思わないよーでも、少しだけなら・・・ははははゝゝ」

「はははー加藤さんもやっぱり男ね」と、岸波さん。

「うっ、まあゝねゝ」

「次の日に、彼が、私の傍に来て、小さな声で言ったわよ」

「なんて言ったんです？面白かったのかしら？」

「彼は・・・こう言いました・・・岸浪さん、あれーなんか間違ってますかー？なんか違うような気がするんですけどって・・・ははゝゝ」

「何が、違うんです？」

「だから私言いました。あら、そう、でも違うわいよーって！」

「あっ、分かったー・・・はははゝゝそうか・・・はははゝゝ」

「私もゝゝ」

「なにー？エッチビデオじゃないんですか？」

「もちろん、三時間の裸のビデオよ・・・白人も黒人も汗だくで、激しく動くわよ」

「岸浪さんも人が悪いな」

「私、嘘はついてません、彼に貸したのはねーテレビ、千代の富士の引退放送のビデオなの」

「はははー彼はすっかり騙されたんだー」と、言ったのは、加藤さんだった。

「えええええーエッチビデオじゃなく、相撲のビデオだったんですか」

「俺は途中で分かったよ。でも、岸浪さんもやるねーはははー!」

新年会は、盛り上がりました。

部屋

「森本さん・・・!」まどろみの中に入ろうとしている森本さんと呼ぶ。

「うーん、なに? どうしたのー? もっとするかい!」と、掠れた声で応えた森本さんに、

「はい、もっと、もっと愛して下さい」と言う。

「おおー珍しいなーどうしたの?」

さっきまで吸われ、齧られ、キスマークが付けられた乳房が、再び揉まれ始めた。森本さんが起き上がると私の両脚を広げ、そのまゝ、私の

「女の子」を満たすようにゆっくりと押し入って来た。そして、満たしたままじっとして動かない森本さんを、私は、目を閉じたまま包み込んでいる

「森本さん」を感じている。

・・・・・・・・あれ〜〜どうして、動かさないのかしら？・・・・・・・・

「のん・・・」

「はい？」私は目をあけて森本さんを見る。視線が絡つく。

「のん、締めてごらん！」

「えっ？」

「きゅっ、きゅっと、そして、強くぎゅっと、締めてみて！」

・・・・・・・・し・締めてみろって、どうするのかしら・・・・・・・・

締めてみろって、初めて言われた。初めて。

「下腹に力を入れて締めてみて！」

「はい！」再び目を閉じて、下腹部に力を入れて、言われたままに締めてみる。

・・・・・・・・う〜〜むむ、こ・これで・・良いのかしら？・・・・・・・・

力を入れてみると、森本さんを少し強く感じる。

「そう、それで良いよ。今度は少し長く締めてみて、う〜んそう、あ〜良いねー」

「これで、良いんですね」私は少しずつ力を緩め、少しずつ力を加えてみた。

「うん、だんだん覚えるさ・・」そう言うとき森本さんが動き出した。私は締めていようと思った、けど。

締め付ける事を、続けれる事は出来なかった。

森本さんの腕枕で、火照った身体を冷ましながら、心の奥底にあ

る不安が蘇る。

・・・・・・・・困ったわ・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・

妊娠

もうすぐ春。お正月から殆んど毎日と言うくらい抱かれている。

自動車学校から急いで帰り、シャワーを浴びて森本さんを待つ。お友達の誘いは、自動車学校を理由に殆んどお断りしていた。そんな毎日の生活に急速に身体が馴染んでいる。森本さんは約束の時間にやって来て、そして、私を当たり前のように抱く。私も抱かれる。

「満月の使者」の間は別。毎月決まってやって来るのに、3月は遅れて今月に入ってもまだ来ない。

・・・・・・・・困ったわ、・・・・・・・・不安が・・・・・・・・募るわ・・・・・・・・

「どうしたの、今日はもっと愛してとか、変だよ、何かあったのかい？」

「うーん、なんでもありませんよーあー」私は森本さんの胸に腕をのせ寄り添った。

「おかしいな〜なんか気になる事でもあるのかい？・・・・変だよ・

・・」

「いえ、何にも無いですよー」

「ほんとかい？」

「ほんとですよー・・・・・・・・」

「今週の土日、旅行に行こう、仙台に連れて行くよ・・・・なんか予定ある？」

「いえ、無いですよ・・・・仙台ですか？」

「行くよ、のん！」

「はい、楽しみです。」

会社

「是永さん、今週の日曜日、車、見に行かない？免許も取れたしねーどう？なんか予定ある？」加藤さんが、傍にやってきて、にこにこしながら言う。

「……明後日は……森本さんと仙台に行くわ……」

「おはようございます、加藤さん、残念でしたー今週の土日は、実家に帰らなければなりません。そうですねー次の休みはどうです？」

「……加藤さん、色々、探してたんだわ……」

「そうかー車屋さんに行くかもって言ってたんだけど、じゃ、次の休みにしよう、時間とか近づいたら打ち合わせしよう。」残念そう。

「……加藤さんには、次の休みにお返事しよう……随分またせたわ、加藤さん、ごめんなさいね……」

「是永さん、三番に電話よ、又、男よ、」

「……なんて嫌味な言い方、大っ嫌い……なんで居るのよ、ほんとに、消えて欲しいわ……残念だけど天敵は、益々今日も元気……あーイヤ……」

「もしもし、是永ですけど、？」

「あっお早う、小泉です〜」

・・・・自動車学校の先生だわ・・・もう・・・

少しシツコイ。教習中にデートに誘った先生。お断りしても誘い続けた先生。卒業してからも、電話が来ている。

・・・・はつきり、お断りしなくちゃ・・・

「是永さん、週末、時間とれないかなー？」

「無理です！！ねえー小泉先生、会社まで電話するのは、もう止めてくれませんか。それに、今、朝のお仕事が始まったばかりですよ、お願いですから、もう、電話しないで下さい。」

「いゃ〜ごめん、ごめん、ちょっと早かったね〜、是永さんの素敵な声が聞きたかったんだ〜」粘着質の音がする。

・・・・あ〜気持ち悪い・・・

「結構です、もうお部屋にも会社にも電話しないで下さい！・・・迷惑です・・・私には、今お付き合いしている人がいます・失礼します」

・・・・何度も断っているのになんてしつこいのかしら。・・・

「是永さんも、大変ねえー、」

「もう会社まで電話してくるなんて、最低だわ、今度もし電話が来たら、自動車学校に報告します」

「あの、学校の先生なの？」

「そう、」

「報告したほうが良いよ、早い方が良いよ。ストーカーされる前にね。」

「はい！」

仙台旅行

森本さんは、何時ものように、車をアパート前に静かに置いた。

私も又、何時ものように後部座席のドアを開け、素早く乗り込む。そして車は何時ものように、信号機のない裏道を走り始める。人目につかない裏道、山道ばかり。森本さんが名付けた、「不倫街道」。

高速道路目指して春の農道を走り抜ける。出会う車は殆んどない。田舎道の朝。今日は、約束されたような快晴。心はウキウキしている。今日から二日間一緒にいられる。木曜日と金曜日は電話だけだった、今日の日の為に。

車は高速道路を仙台に向かって時速120kmくらいで走っている。スピード感はそれほど感じられない。

「のん？」

「は・・い？」

「この前から、なんか可笑しいよ、何か、あったの？」と、私を見ながら聞く。

「うーん何にもないですよ！」

「俺の事、嫌いになったのかい？」と、運転しながら、再び、私を見て言う。

「はい！」

「えっ、嫌いになったの？」

「嘘です、嘘ですよー好きですよー森本さんの事」

「いやー驚いたよ、安心したよ」と、何故か、普段の森本さんとは違う。

「嫌いになったりしませんよ」

「今日は、途中、松島に寄る、なんか行きたいところある？」

「お・ま・か・せです・・・うふ」

松島、日本三景の一つ。中学生に行ったきり。森本さんは、車のなかで色々なお話しをしてくれた。

「のん、今のマスコミ報道やテレビ番組見てねーどう思う？」

「どう思うって言われても、テレビあまり見ないんで、分かりません、なんて言ったら良いのか？」

「あまりテレビ見ないかい、そうだよなーあまりに、あまりに、くだらないからなー、落ちた犬は死ぬまで叩けだものなー散々、他人の足引っ張ってさ、毎日足引っ張る放送してさ、ほとぼり冷めた頃、真面目な顔してさ、子供達よ、いじめはいけません、なんて、同じ番組で説教したってさー誰がまともに聞くかよ、自分達で、散々火をつけて、今度は水かける。マッチポンプやりやがってさー」

「そうですねー、ワイドショーは、特に！」

「ワイドショーもそうだけど、あのお笑いタレント番組も、止めて欲しいなー誰かの陰謀だな、日本人をアホにする陰謀。」と、前を見ながら言ったので、

「うっふふふー陰謀ですかー？」

「あー陰謀だよ。あの芸能番組さ、仲間だけで話、回してさ、クラス会みたいな話、なんで聞かなくちゃならないんだ、要らん、要らんよなー」と、声を大きくして言ったので、

「森本さん、楽しんでる人もいますよー。」

「まあーテレビはつけないに限る。ハイビジョンテレビなんてさ、

今の放送が続く限り必要ないわ。バカなタレントをハイビジョンで見る？」

「見ません、」

「だろ！」森本さんがテレビの批評するなんて、ちょっと意外。

・・・いつ、森本さんに言ったら良いのかしら、今日しかないわ・
・・・

国分町、仙台、初めての街。

流石に東北一番の歓楽街。

・・・凄いわー・・・・

人、人、人が多すぎる。札幌のすすきの賑わいと同じくらいだわ。国分町の入り口にあるRホテルに入ったのは、午後四時すぎ。部屋に入るなりシャワーを浴びさせられ、何時ものように、抱かれた。

「森本さん、」

「うーん、なに？」

「聞いて欲しい事があります」

「うん、言って！」

「・・・は、い、」

「言いなさい、」

「出来ちゃったみたいなんです」

「ほうー、のんお嬢さんが妊娠したんですか？」

「はい、来ない、来ないんです、先月から来ないんです」

「なんだー先月来ないだけで、出来たかどうか分からないだろう。様子がおかしかったのは、それだったんだー気にしなさんな。」

「でも、出来たらどうしよう？」森本さんが私の右の乳房を、強く握り、

「出来たら、産めば良いよ」と言った。

・・・・・・産めば良いって・・・・・・

「産めば良いって、森本さん、冗談はやめて下さい」

「冗談かー！冗談は言っていないよ。産みたかったら産めばいいさ。まだまだ分かんないよ」

森本さんを見ようとしたけど、森本さんは上を見たまま目を閉じている。

「そうですねーまだ分かんないですよね」

「思わず溢す一滴かな、だなー」と、意味不明な事を言ったので、
「何ですか？ひとしずくって？」

「あゝ、のんと知り合いずっと、のんを抱いて来たけどさ、今日まで、俺は最後まで達したことはない、ずっと我慢してきたからさ。きっと、零れたんだなー一滴！」

・・・・・・あゝ分かりました・・・・・・その意味ですね・・・・・・

「そうですね。いつも途中でしたよねー、大分前に、気が付いてました。それで良いのかなーって？」

「じゃ、今日からオープンだなー解禁日だよ、今日はさー」と、言いだした。

「だめー、駄目です。赤ちゃん出来てしまいます。」

「何だよ、出来たんだろう、だったら、遠慮しないよー俺は。」

「ダメー、ダメです。今まで通りにしてください。」

「なんだよなー今まで通りですか？ハイハイ、お嬢さんの言う通りにしますよ。そろそろ、夜の国分町にくりだそう。腹が減った。お

嬢さんには驚かせられたし、さあー起きて行こう!」と、身体を起こす森本さんの背中に向かって、

「はい!」と応えた声が少し嬉しさに上ずっている。

「森本さん、先に着替えて下で待っていてください。」

「え〜? 着替えるところ、じっくり見たかったのになー、その裸をさー」

「森本さん、本当にイヤらしい、スケベ親父ですよー、もう、絶対見せません、早く着替えて下で待っていてください。」

「しょ、しょうがないな〜姫様には〜か〜な〜いっ〜い〜ま〜せんな〜」と、変な言い回しでシャワー室に入って行った、裸のまま。

シャワーが心地良い。髪は洗わない。

さっと洗い流し、鏡のなかにいる自分を見る。

陰りが左右程よく剃られ幅狭く縦長に揃えられている。

何度か言われて、その度、剃った。確かに違う、剃る前と剃った後では。すっかり森本さん好みの女にされたわ。今も剃った。又、抱かれる。

・・・産んで良い・・・そう、言ってくれた、でも、そう簡単じゃないわ。父や母、森本さんには、奥様や子供さんがいるわ。今は、考え無いようにしよう、初めての仙台の夜、今夜を楽しまなくちゃ。・・・

「遅いんだからさー朝になっちゃうよー」

ロビーで待っていた森本さんが、呆れたような表情をして言う。

「あら〜森本さん、素敵だわ〜背広とっても似合ってる〜」森本さんに近づく言う。

「また〜またーのんは上手なんだからさー、親父殺しだなくでも、なかなか似合うだろ、これ!」そう言いながら焦げ茶色と深緑の混じった少し大きめの背広を触りながら言う。

「えー？親父殺しって酷いなー、森本さん似合ってますよー若い男の人って、背広着てるぞって雰囲気有りますけど、森本さんは落ちてますし、似合ってます。ホント！」

「こらこら可愛いのんちゃん、ホントに、上手いなー脅かすし、褒めるしもう、越後屋吉右衛門は負けましたぞ、うっはっはっはー」

「も、森本さん、ロビーですよ、皆さん見えますよ。もうー」

「構わん、そうか、ようし腕を組んで行こう。愛人風にさ！」

「いやっ！」

「愛人風にが嫌なら、恋人風にはどう？」歩き始めてている。

「それで良いですから待って下さい、もう」

「どう？、松島良かったかい？ちよい寒かったよなーどうもさー大きな声で言うのは憚られるけど、松島、イマイチ、良さが分からないよ、俺はさーのんはどうだった？」

この牛タン屋さんは、国分町でも有名らしいけど、場所はわからない。同じようなお店に看板の羅列、さっき、この道通って来たよな、違うような、そんな感じだわ。

「私は、良かったですよー、松島、お天気も良かったですし。」

「三陸リアス海岸、海を畑にして、耕してんだなー海の畑！そうかいのんが、そうなら俺はなんも言わないよ、どう、牛タン、初めてかい？」

「ええー初めてですよ、食べれるんですか？これって？」

牛タンを食べる習慣は、生まれた町にはない。札幌時代のジンギスカン鍋もやっとなんだったわ、やっとなん食べられるようになった。

「ほら食べやすいように、切ってくれているから食べてみなさい、美味しいから！」

「そ・う、ですか？」びくびくしながら食べてみると、あっ結構柔らかいし、牛肉の味が、口の中に急に広がるわ、美味しいかも、で

も、でもねー。

「うーん、はい、美味しいですよ。」

「無理しなくて良いよ、残り。食べてやる。」

「ありがとうございます。おビールどうぞ。」森本さんは美味しくに飲み干す。

「国分町にさ、この近くだけど、ちっちゃな店でピアノの生演奏してくれて、ワインと料理を出してくれる店があるよ、そこに行こう、お勘定！」と、言いだした。

「えっえっまだ食べたばかり、」

「良いの、お店の選択を間違えたわけじゃないよ。一度は仙台名物牛タンを食べて見る、百聞は一見に如かずだろ。お土産は、笹カマボコってね。」

「はい、でもー」

・・・なんだかお店の人に悪いわ。・・・

森本さんは、お会計を済ますと外に出た。私も外に出ると、森本さんの腕を抱き締めるように寄り添った。街はネオンの羅列、洪水。乳房の谷間に森本さんの腕がちようど埋まり、乳房が押し潰されるのを意識した。

「おっ良いねー感じて来たよ！」

「すけべっ！」耳元に囁きながら胸を腕から離れたけど、腕は離さなかった。

「密着はもう終わരിക്കい？」

「終わりです。」

「うわぁー、素敵なお店ですー」ほんの少しの距離に感じられた。私は、腕を離さず、寄り添い離れなかった。嬉しかった。

「いらっしやいませー！」お客は数組のカップルばかり、店内の照明は薄暗く、テーブルの上に置かれてあるローソク風のライトの灯りが、その周辺だけをほんのり照らしている。丁度空いていたピアノの前に席をとり、私達は向かい合い座る。何度目だろう。直ぐにピアノの生演奏が始まった。長い白髪をきっちりオールバックにした、初老の男の人だった。多分マスターかもしれない。何十年前の時代にタイムスリップしたみたい。ジャズみたいな曲を静かに弾きだした。

「カンパイ、のん、夜を楽しもう。」

「カンパイ！」

あまり、会話はしなくても、音楽とお料理とワインで、もう十分満足。そして森本さん。ワインはとっても美味しいし、お料理に合っている、この小さなレストランだから、森本さんと一緒に素敵なのかしら？楽しいのかしら。ピアノの音が心地良く響く。

・・・来て、良かった・・・

ホテル

「のん、シャワーを浴びて来なさい。」いつものように森本さんは部屋に着くなり、目の前で裸になり、シャワー室に入り、あつという間に出てきた、全く、ほんと。

「のん、おいで、」

私は備えつけの部屋着を素肌に着けていた。

私は黙って横に寄り添うと、唇が重なってきた。キスは好き。侵入してきた舌を絡めあう。唇と舌を楽しんでいる。森本さんの左手が器用に部屋着を脱がせて、裸にされ、唇を味わいながら右の乳房を力強くギュッと握る、そういういつもギュッと握る、今日も、そう。握

られると、身体から力が抜けてしまう、私だけなのかしら？

「のん、握って！」仰向けに寝ている森本さんが当たり前のように静かに言った。返事しないで、手を伸ばしそっと握る。初めてじゃない、けど。

「良いぞー、じゃ、そのまま、キスして！」

「えっ！」最初に求められてから、今日まで言われた事はなかった行為。

「握ったままで、唇でキスして！」

私は言われるままに、顔を近づけ、そっと、唇を触れさせた。

「のん、ありがとう、そのまま、口にくわえてみて！」

「えっ、えーえー！うそ、うそー！出来ません、そんなことは！」

森本さん見ながら顔を横にふる。森本さんと視線絡み合う。

「こうやってするの！」そう言いながら、私の左手をとり、森本さ

んの口のなかに、私の親指を入れて顔を動かし、舌をまわし始めた。

「こうして、するの、嫌かい？」

「い、やー」

……えーえ、男の人のものを口に咥えるなんて、初めて、
どうかしてるわ、変態だわ、出来なくい、出来ない、えーそんなこ
と考えたこともない……

「さあー、しなさい！」強く言われ背中を押され促された。

「どうしてもしなくちゃ駄目？」

「駄目！」仕方がないわ、その言葉に逆らえない。私は上半身を折りながら顔を近づけ、再び握っている、森本さんの先端部をそっと口にくわえて、直ぐに離れた。

「森本さん、私って、変、ですか？」

「変じゃないよ、皆しているよ。さあもう一回してみてください！」

「森本さん、どうしてもして欲しいんですか？」

「どうしてもして欲しい」

「森本さんがそうして欲しいのならします」

「是非、して欲しい。嬉しいよ」

「変な女だと、思わないでくださいね。」

「思わないよ、なんでそう思うのさ、さあーしなさい」

「はい。」今度は、ゆっくりと、含んでいった。下に垂れた乳房を揉まれ始めた。

「……信じられない、こんなことをするなんて……
……男の人のものを、口に入れるなんて……」

「あん、あー気持ちが良いーのん、そのまま、深く、うーん良いぞ
ー」私は、森本さんの言われるがままに、深く動かした。

「うっ、うっ、うえーうー」吐き出しそうになり、直ぐに口から離し、森本さんの胸にしがみついた。森本さんを覗きみながら、尋ねた。どうしても。

「森本さん、私って変ですか？」

「変じゃないって、男と女の間じゃ普通に、やってるよ」

「ほんとですか？」

「ほんとだよ、じゃ、今度、裏ビデオ持っていくから、一緒に見よう」

「裏ビデオって、エッチものですか？」

「OL、のんちゃん生主演、」

「いやー、森本さん、本当にいやらしいオヤジ！あーいや、こんな、スケベなオヤジを好きになったのは間違い、のんの一生の不覚ー、あーいや、いやー」言ってみた。

「のんちゃん、今更ながら、おーそーいーのーよー♪」変な調子で声をだしながら、私の身体を仰向けにして、

「今度は、俺が、口ーでしーてーあ、げーるー」とオペラの歌手のように声をだしながら、わたしの両脚を左右に大きく開き、私の女の子をじっと見始めた。見られるのは、馴れたけど、やはり、

少し恥ずかしい。森本さんは、

「女の子」に、顔を埋めて顔で確かめるように左右に動かした、いつもそうする、そして、

「うっくん綺麗に剃っている、チクチクしないよ、すべすべして気持ちが良いよ。そう、いつも剃っているのが分かるよ、俺の為に！」

「はい、」

「のん、好き？」

「はい！」

「良いね、いつも指輪をしているし、いつも剃っている。」

それには応えずにしていると、森本さんが、

「女の子」の中心を左右に広げ吸い出した。

「くうっ、いつ、やっ」生暖かい舌が下から上に、強く、弾いた弾かれた。

「うっ、うっくん」その刺激は痛いほど、私の身体中を駆け抜ける。

・・・えっなにー今の？なにー？・・・

森本さんの舌が、優しく絡みつくように、動き、強く弾き、強く吸う。

・・・あん、そ、そこだけ、吸わないでっそこだけ責めないでっあゝ感じる、感じるのっ・・・

私は、無意識に森本さんの舌の動きにあわせて身体を動かしているらしい。動かした後に気が付く。爪先に力がある。脚を閉じようとすれば、内太ももを強く抑えられる。もっと開けと、押される。その間も、舌の動きが止まる事はない。

・・・あゝそんな、あゝ変なかんじゝなめないでーあゝ

「ん身体があついあゝ吸わないでゝあゝあつゝあつ、あゝあゝゝど
うしよう、あつ、また、あゝゝ変、あゝまたゝあつあつ、うゝうっ
うっ、ううゝゝんゝゝ、・・・・・・・・・・」

風が頭先从上へ抜けていった。

・・・・・・・・・・な、なにー今のなにー・・・・・・・・・・

力が急速に抜けていく。

「良かったー、初めて感じたねー感じない女なのかなーと思ってた。
良かった、感じたぞー」なんか森本さんが言ってるけど、意味が分
からない。身体中が熱く、ぼうつーとしている。力が入らない。私
は、脚を閉じてうつ伏せにして余韻を追っている。

・・・・・・・・初めての経験だわ。男の人って凄いわ。・・・・・・・・

「すぐ、していいかい？」

「少し待って下さい。身体が変なんです。」

「じゃ少し休もう、なんて、嘘ー。するよ。」その言葉に応えずに
いると、身体を仰向けにして、両脚を広げ、

「女の子」の剃っている中心に圧力を感じて入って来たものを、

「きゅっきゅっ」と締めた。

「おっ良いぞー、そう、そうやってしてくれと、あゝ迎えてくれ
てんだーと思うよ。」

「知りません。」森本さんがゆったりと動き出した。

「この中で、今日は感じるね。良いかい？」

「だめゝゝだめです、」直ぐに強く深く打たれた。

「うっ、あつ、あゝ」

「しないよ！心配しなさんなー」森本さんがしたいなら、良いかな
ーとも、思う。

「どう、ここは？一応、仙台市街が一望出来るみたいだけどさー夜の方が綺麗かもなー」

目の前下方に見える仙台市街のビル群が霞んでみえる。これが仙台市ね。朝、早目に 国分町のホテルを出て、真っ直ぐにここに登って来た。ここ青葉城址、戦国時代の武将、伊達 政宗の居城、馬に乗った伊達政宗の銅像が立っている、大杉を背に。観光客がまばらにいる。

「そうですねー、ちょっと見たたけじゃ、わかりませんねー」

「今日は日曜日、混まないうちに下りよう。ちょっと寒いだろう？」

「はい。」

「ねえーのんは蔵王、蔵王見たことないだろう？」

「えーまだ見たことないですよ。」森本さんの腕にしがみついた。

「おっ嬉しいねー」

それには応えず、腕を強く抱き締めた。

「今の時期、上までは登れないなーまだ、雪があるからなー」

「良いですよー今度にしましょう。充分ですよ。」

「そうか、お嬢さんは満足したかなー？」

「はい、とても、満足しました。充分ですよ、楽しかったです。」

鳥居を抜けて駐車場に向かう。もう、充分に楽しかった、森本さんと初めての事ばかり、ずっと森本さんの側にいられた。そして濃密な時間を持てた、そして昨日の夜は初めての経験をさせられ、一つの思いが壊された。今朝も身体を開かせられた。今日も抱かれ愛された。一緒にいられる事が、今は嬉しい。

車

「ほら、これ、この車、この車、是永さんにぴったしだと思うよ。」

値段も手頃だし、それに、軽自動車だし、距離もあまり走って無いんだ。もちろん事故車でもないよ。色も良いしさ。」

「ありがとうございます。私には、勿体無いみたい、一生懸命に探してくれたんですね。ありがとうございます。」

「うん、まあ、ここは、ジェームズのマスターのいとこの店で、安くして貰えるみたいだし、アフターも心配ないみたいだよ。」

「そうですねー、明日もう一度、父と来てみます。父が車をみたいと言っていましたし、明日加藤さんは来てみます？」

「明日は、ゴルフなんだ、残念だけど来れないなー、お父さんと相談して良かったら、決めて。」

「はい、加藤さんが一生懸命見つけてくれたんですから、多分、決まると思いますよー」

「いやー無理しなくても、いいよ。お父さんと良く相談してね。じゃ、これから、ランチでも、どう？」

「はい、連れてって下さい。」

「今日は土曜日だから、少し走ってもいい？」

「はい、今日は、加藤さんの為に時間取ってました。」

「うれしいな、俺の為にねー、」

春まだ浅き、郊外の小さなレストラン。周りの樹木に溶け込んで、その存在をわざと消しているみたいな小さな佇まいの建物。加藤さんは、通い慣れているみたいに、駐車場に車を止めた。外見は木造で小さな造り、ウッドハウスみたいな造り。

「うわぁー、綺麗な人、加藤さんも隅におけませんね。」

・・・いらっしやいませー・・・

と、言いながらグラスと水を持ってきた女の人、本当に、綺麗な女の人。周りのお客様は、良く見れば男性ばかり。納得。

「ここは、所長と良く来るんだ、所長のお気に入りなんだ、この店。」

特に、彼女がね。」

「ふーん、そうなんですか？それって、加藤さんの事なんじゃないですかー怪しいですよ、ほんと！」

「違う、違います。お昼ご飯食べに来るとこだし、是永さんに、知って欲しかったし、たまにはね。」

「分かりました、でも本当に綺麗な女性ですよね、」

「是永さんの方が、綺麗だよ。」

「だめー駄目です、ごまかされませんよー、加藤さん、彼女とお付き合っているんですか？」

「まさか、ない、ないそんな事は無いよ。誰かさん一筋さ。」

「それでね、加藤さん、私、」

「ちよっと待って、食事しながらにしよう。俺はハンバーグ定食、是永さんは？」

「同じで。」

「すみません、ハンバーグ定食2つ、」

「はい、分かりました、加藤さんの恋人ですか？」ニコニコしながら聞く。

「違いますよ、会社の同僚だよ。」

「そうですかーちよっと、怪しいぞー」

その微笑んだ横顔は、造り物のように整い、綺麗過ぎる、でも、嫌みなところはない。私より五歳位は、歳上かも。森本さんは来たこと有るかしら？今度お逢いしたら聞いてみよう。

「ねえー加藤さん、この前のお話なんですけど、」

「ねえー是永さん、結論は聞かない、答は聞かない、聞かないことにしたんだ。」

「えっでも、？」

「ねっ、聞いて欲しい、俺は、ずっと考えたよ、悩んだよ、初めの頃は、なんで返事くれないんだろう、嫌いなら嫌いで、仕方がないし、早く結論が欲しくて、もうだめだって何回も諦めてもみたよ。」

何回もね。でも、駄目だった。」

「ごめんなさい。私、」

「聞いて、今日は、俺の話を聞いて、」

「はい。」

「ずっと、恨んだ時もあった。忘れようとして、違う女性とも遊んでもみた、まず聞いて、」

「はい、」

「悶々とした日々を過ごしている内にね、このままの方が良いって気が付いたって言うか、思ったんだ。断られて、話もしない関係って、虚しいよね、だから答は聞かず、是永さんと、お茶したり飲み会にいたり、今まで以上に側にいた方がよりベストだって、思ったらさ、胸の重しが取れたんだ。好きな気持ちは今も変わらないよ、でも、無理強いするものでもないし、是永さんの側にいながら見ていることにしたんだ。」

「加藤さん、ありがとうございます。私の方こそ宜しく願いします。ごめんなさいね。」

嬉しかった、涙が滲んできた。

「だからさ、泣くことはないんだ。その代わりといっちはなんだけど、たまには、食事とか飲み会、つきあってね、楽しくやろう。」
加藤さん、なんて心の広い人なんだろう。こういう関係が終わるのが怖かった。でも、加藤さんに救われたわ。

「加藤さん、ありがとう、宜しくね。」

不安な日々

……あゝまだ、来ないわ、……

今月の予定だと昨日から始まるのに、まだ、来ない、どうして、来ないのかしら、まさか本当に、出来ちゃったのかしら、出来てたら、どうしよう？・・・

ずっとその思いは重く心に溜まっていく。

・・・困ったわ、森本さんは、産めば良いって言ったけど、簡単にはいかないわ、本当にどうしよう？もう4月も終わるわ。・・・でもまだ来ない。・・・あゝどうしよう・・・

仙台から帰った後は森本さんは、暫く大人しくしていようと云って、先週は、木曜日に来ただけ。昨日は父と母と一緒に、加藤さんの紹介の車を、決め、久しぶりに食事をし父も母も、喜んで帰って行った。でも、どこか、心は晴れなかった。おりが溜まっていくみたい

・・・本当に困ったわ・・・

「ぴゅんぽゅん」と部屋のチャイムが鳴った。

・・・あつ、森本さんだわ。来たわ！・・・

覗き穴の中に、歪んだいつもの森本さんがいる。森本さんが玄関に入るいつものように、抱きしめられ、唇を吸われた。でも私はそれ以上は拒むように押し離れ、部屋のなかに入って、森本さんを待つ。

中に入って来た背広姿の森本さんを見て、
「うわぁゝゝいや、いやだー」と小さな声で叫んだ。

「いきなりなんだよ、なにが、いやだーなんだよ？」

「いや、いや、だってー森本さん、背後に病院が見えるんです。もう、病院が迫って来るんです。」

「び、病院って？なに？病院がどうしたの？」

「だって、だって見えたの、病院が！病院が部屋の中に入って来たの、森本さんと一緒に、見えたの！」

「のん、大丈夫かい？病院なんて、俺、なんも言ってないだろ、おかしいよー？大丈夫かい？どうしたんだ？」

「だって、お顔に書いてますもん、早く病院に行けって、病院に行っておろしなさいって！それに、凄い辛そうな表情してますもの。森本さんの後ろに病院が見えたんです。」

「どうしたの、いきなり、のんらしくないなー考えすぎ、考えすぎだよ、大丈夫かい？」そのまま抱き締められた。強く抱き締められた。た。

「ごめんなさい。」

涙が出てきた。

強く抱き締められ、気持ち落ち着いていくのがわかる。

安心感が広がる。

「ごめんなさい。私、どうかしてたわ、」

「落ち着いて、さあーもう一回、俺を見て、さあー見て！」

「病院が、白い病院が見えたんです。しろいびよ、」

「のん、のんっ！よく見ろ！さあー俺を見て、さあー！」抱き締められていた身体を少し離し目と目を合わせるように前後に動かされ、やっと視線が合った。

「ご、ごめんなさい、わ、私どうかしてたわ、ごめんなさい、」

「大丈夫だよ！のんっ！」

「すみません、ごめんなさい！」

そう応えた唇が、森本さんの唇で強く塞がれ、直ぐに、唇を開かせられ、舌が絡め取られ、吸われ出した。私も夢中で舌を絡め、その動きに合わせている。そのまま、力が抜けて身体が崩れだし、抱かれ

たまま、ソファアーにゆつくりと倒れても森本さんは、唇を離さない。私はその行為に夢中で応えている、今の不安から逃げるように。

森本さんが白いブラウスのボタンをはずし始めた。

外すと、左右に広げ、器用に、背中のブラジャーのホックをはずし、乳房を剥き出しにして、あっという間にスカートに手を入れて、お尻のしたからツルリとパンティを剥いて剥ぎ取ってしまった。そして唇を離し、私を抱き起こしソファアーの背もたれに、目を閉じている私の上半身を置いた。そして、徐に、裸の両脚をソファアーの上に持ち上げ、折れ曲がった両脚の足首を思い切り左右に広げた。抵抗して閉じようとする膝頭を更に掴み力強く左右に広げた。

・・・あゝ恥ずかしい。・・・

でも抵抗もそこまで。

「あっ、い、やっー」

「女の子」が森本さんの前に無造作に広げ晒された。私は垂れた髪に見え隠れする、それを上から見て、

・・・なんて、恥ずかしい格好、なんていやらしいの！・・・

そう、思わずにいらなかった。目の前に膝だちしている森本さんと視線があう。

・・・なんて、恥ずかしい格好させるの！・・・

哀願の視線は当然に無視された。視線をそらして再び、私は顔に被さった前髪の隙間に見え隠れする、そのままに広げられ、剃られ形を整えられた陰りのある下半身を見た。お腹の肉が振れ重なるほど両脚を上半身に押し上げられ、そして、広げられ、すっかり、何も

かも晒している自分の姿を薄目を開けて見ている、私は、

・・・変?・・・

そう思った。森本さんが、広げられた「女の子」に顔を埋めて動き出した。舌が動き、舐め回している。

・・・あん、・・・吸い出した。そんな森本さんの行為を、薄目を開けて上から見ている、私は、・・・変?あゝでも、見たい!見たい。・・・

不意に立ち上がった森本さんの下半身はいつの間に脱いだのか剥き出しの裸だった。ちょうど森本さんの、「もの」、がワイシャツの影に見え隠れしながら、目の前にある。私は広げられた素肌の両脚を素早く閉じて見られないようにした。それを見て確めたかのように、

「のん、口で愛してくれ!」と少し大きな命令口調で言われた。

「えっ!」

「口でしなさい。」

森本さんは目の前にそのまま立ちながら、ワイシャツのボタンをはずし始めている。裸になるつもりだわ。

「さあー」と腰を、森本さんの、もの、を目の前に突き出され、促された。

「は、い、い」と森本さんの、もの、から視線を外さず、外せず、小さな声で応えて、右手でユックリと触り、軽く指で添えるように握り、口にくわえやすいように持ち上げ、おずおず顔を近づけると、その行為を待っていたかの如く、森本さんが私の頭を両手で押さえ、身体を前に押し出した。それは、少し半開きにした私の唇を押し開くように、ず、ず、ずるり、と、ゆっくりと侵入してきた。全身が震えた、慌てた。身体が動きだす。

「う、う、うっ！」

「ああー良いぞー」森本さんの、もの、が口の中で大きくなったような気がした。

その感覚は全身に、怖れ感、違和感のような、例えようのない刺激が身体中を走り抜けて行った。

「……まだ二回目、まだ二回目なの、まだ馴れないわー。な、慣れてないのー……」

そのまま、それは、止まらずに、奥まで達しそうになり、「うっ、うえっ！」と咽び涙が目尻に滲み、瞬間的に口から吐き出そうとした。だけど、頭を押さえつけられ、そのまま、くわえさせられた状態でいる。でも、森本さんは、それ以上は動かないでいてくれた。じっと馴れるのを待つように。お陰で、くわえている状態に馴れてきた。

「さあー、ゆっくり、動かして、そう、おっ良いぞーそう、上手だーうーん、気持ちが良いぞー」

私は、言われ、教えられた通りに、前後に顔を動かしている。奥まで届く前に引く事も覚えた。初めの時の感覚、違和感は今は無。無い。

「そう、奥まで入れる時は口は弛めて、出すときは少し締め付けてごらん、あっ、歯をたてないの、痛いから。そう、うーん」

私は、言われるままに動かしている。

「のん、！」

「うっ、うー」

口から抜きだそうと、動くとき頭をおさえられ、両手で顔をもたれ、くわえたまま、上を向かされ、森本さんと視線が合う。森本さんの

表情はホンノリ上気している。私は多分真っ赤になっている。身体が熱い。なんて、淫らな格好かしら。口にくわえた私を上から見ている、見られている私。

・・・あー恥ずかしい。・・・

「のん、今度は、舐めまわさない！」

・・・舐めまわさないって、どうすれば、良いのかしら？でも、・・・言われたわ、やるしかない、・・・こうかしら、これで、良いのかしら？・・・

口から出した、もの、をユックリと、舌尖だけで、チヨロチヨロと舐めてみた。

「うん、良いぞーそう続けて、そう、今度は裏側も、そう、たまには加えて、そう、深く、口の中でも、そう、そう、舌を使って。」
そう言っていた森本さんが、口の中から滑るように、ユックリ引き抜いた。私の口はそのまま、開いている。

「のん、おいで！」

「はい！」

裸のまま、和室の部屋に敷かれ、準備しておいたお布団に森本さんと一緒に入った。

実家

「上手い、上手い、随分運転上手なんだねー免許取ってから車運転

してたの？」

「いえ！運転今日が初めてですよー凄く、緊張してます。もうさっきからドキドキですよー」

「いやー上手いよ。驚いたなー」

「誉めても何にも出ませんよ、」

「誉めちゃいないよ。上手いからさー」

「えー？そうですかーじゃーそうですねー自動車学校の教え方が上手だったんですよ。きつと！」

「自動車学校って、あっそうだ、先生、シツコイ先生からまだ電話くるの？」

「たまーに來てるみたいですよーでも、電話出ませんから。」

「はははーあーそれが良いよ。シツコイ奴だなー全く！」

「加藤さん、今日は、せっかくのお休みなのに、お付き合ひして頂いてありがとうございます。少し遅いけど、ご飯食べにいきましょう。ご馳走しますよ。少し走ります、運転のご指導お願いします。」

「じゃお言葉に甘えて、是永さんと一緒にドライブ出来るなんて、なかなか無いからなー今を大事に！」

「加藤さん？」

「なに？」

「彼女元気ですか？」

「はははー是永さんにはかなわないなー」

「いらっしゃいませーあら、お嬢さん。」

「オバサンこんにちは、今日はね、お客様よ。さっ加藤さんお座敷にどうぞ、さあー。あがって。」

「う、うん」靴を脱ぎながら、周りを見るときもなく見る。

「どうしたんです？加藤さん、座って下さい。」

「う、ん！」座ってもまだ、視線がとんでいる。

座敷卓の向かい側に座った私に、

「いま、お嬢さんって呼ばれなかったー？お嬢さんって？」と聞いた。

「はい、言いました。実は、ここ、このお店は、私の実家なんですよ。」

「じ、実家ー？」

「そうですよ、あれー加藤さんに言ってますませんでしたっけー？」

「う、うん、前に聞いた気がするけど、まさか、いきなり実家に来るなんて、どおりで、」

「どおりで、って？なんです？」「いやー随分、走るなーって！」

「あれー加藤さん、実家じゃ駄目ですか？嫌でしたー？」

「い、嫌じゃないけど、そ、その、お父様とかお母様に、」

「大丈夫ですよ、今、呼んで来ますから、」

「よ、呼んで来るー？い、いや、わざわざ呼んで来なくても良いよー忙しいだろうからー良いよ。」慌てた加藤さんって、子供みたい。

「ちょっとお待ちくださいね。今呼んで来ますから。」

「是永さん、いいよ、無理しな、」

「やあー良く来てくれました。初めまして、紀子の父親です。」

「は、初めまして、加藤です。」

「母です、貴方が加藤さんですね。いつも娘が、助けてもらって、お世話になっております。いつも加藤さんに助けて貰ったって電話くれるんですよ。本当にありがとうございます。」

「い、いや、た、助けたなんて、はははーいつもお世話になっているなんてーはははー参ったー」

「この度は、娘の車を選んで貰って、感謝しています。助かりましたよ。」

「いや、そんな事はないです。」手を振りながら、言う。

「お手数かけましたなー。なかなかの掘り出し物で感謝してます。どうぞ、此れからも娘をよろしくお願いしますぞ。ユックリしてい

って下さい。」

会社

昼食の後の社員食堂。

今日は課の月一回のミーティングの日。

社員の加藤さんは自分の用事がない限り、必ず参加する。ミーティング日は大概いつも一緒。加藤さんの向かい側に座って久しぶりに一緒に昼食を食べ、私はペットボトルのお茶を、加藤さんは食堂のお茶を飲んでる。この前、実家で初めて父と母に会い、その後、父にすすめられ日本酒を、かなり飲んで、帰りは車のなかでほとんど寝ていた、加藤さん。うんと距離が近づいたように感じられる。

「この前、ごちそうさま、すっかり酔ってしまっさーなんか、迷惑かけちゃってさー、そのー是永さんに、痴漢みたいな事しなかったかなー」と覗きみるように私を見ながら言うので、

「しましたよー！、加藤さんって、もう、あんなに酒ぐせ悪いとは知りませんでした。車のなかで、凄く動くんです。脚も腕も手も好きなように動くんです。！」と言ったけど、そんな事は何にもなかった。ただ大人しく寝ていただけ。

「えっ、うっそうー、そんなに酒ぐせ悪くないよー僕は。」

「あれー加藤さん、覚えてないんですかー？」加藤さんの目をじっと見て言う。互いの視線が走る。何故か慌てだした加藤さん。

「いやー眠ってしまったからなー、」

「加藤さんって、あれって、寝癖なんですか？触ろうとしたんですよー運転中にですよービックリしました。」言ってしまった。嘘、ちょっとまずいかなーでも、言っちゃいましたー。

「えっ！やっぱり、そうか、やったのかー不味いなーなんか、ばつ

の悪そうな仕草をした。

「やっぱりって、なんですか？」興味が沸いてきた。

「あまり良い事じゃないんだけどさ、たまーに、酔ってさー、勝手に、手が触るらしいんだよ、眠っていて僕自信は、認識してないんだけど、またかーわあーやっちゃったのー？是永さんのどこ触ったの？まさか、まさかその胸？」

「うわあーイヤらしい。加藤さん！覚えてないんですかー？本当に。」急に、目線が胸の辺りまで下がる。

「いやー実はさー触るみたいなんだ。ごめん、」頭を下げた。

「はははー加藤さん、嘘ですよ、嘘、だましたんです。嘘でーす、加藤さん大人しく眠っていましたよ。」私は笑いたがら、得意気に言っただけど、

「嘘って、是永さん、庇ってくれなくても良いよ。きっと、この手が、悪さしたんだ、酔えば、わけが分からなくなるってマスターが言うんだ。ましてや是永さんの実家て日本酒ごちそうになったし。」深刻な表情になってきた。触るってほんとかしらまずいかなー？

「そうですねー、結構飲んでましたし、でも、何にも無かったですよ。ほんとに！」

「いやー参ったなー、ごめんねー是永さんと一緒にいられて嬉しくてさーそれで飲んじゃったんだー！美味しくてさー、日本酒飲めば、たまーに、正体不明になるってマスターが言ってたし、」

「あの一？加藤さん、本当に日本酒飲めば、分けが分からなくなつて、手が勝手に動いて触るんですか？痴漢するんですか？なんか、恐いなー本当に、そうなら、お付き合い考えなくちゃ。」真面目に考えよ。そんな一面が有るなんて。

「うそ！嘘だよ。」

「えっ？」

「うそーはははー嘘だよーん。」

「嘘って？あーだましたんですね。」

「いや、騙したわけじゃないよ。是永さんが最初に僕を騙そうとし

「だから、乗ったの。」

「うわぁーすっかり騙されました、本当に、酒ぐせ悪いんだったら、加藤さんとの、お酒のお付き合い止めようと思いましたよ。」

「嘘、嘘、そんな事はないよ。」

「ほんとかも、なんか怪しいわ、マスターに今度聞いてみよ。」

「おい、加藤君、ミーティングの時間だ、行こう。」

「あれ、いらしたんですか？」

「さっき、来たらさ、二人で深刻そうに、話してるから遠慮して、隅っこで見てたの！」

「気を遣わせました、じゃ行こう。」

「はい。」

「今日は我慢しないよ、キツチリ言ってやるからな。」きつと又何か有ったんだ。私の天敵と、加藤さん、応援します、頑張って。

「どうだったの？」

「・・・うーん、困りました。どうしよ、・・・」車に乗り込むとすぐに言われた。

「何て言われたの？のん！」再び言われた。

「えー。うーん・・・」それには返事せず、下を向く。

「そうか、やっぱり出来ちゃたのかーしょうがないさー医者が診断したんだから、しょうがないさ、」と、一人納得したみたいと言う。

「森本さん、う、産んで良いんですか？」

「のんは、どうなんだい？」

「森本さんはどうなんです？」

「結果がそうであるなら、考えてもしようがないだろ、いくら否定しても事実が消せないさ。お腹好いたろ、食事に行こう！人生なるようにしかないさ！」

森本さんは私を見ないで言ったけど、表情は暗そう。産婦人科の近くの駐車場で私が出てくるのをずっと待っていた、森本さん。一人で産婦人科に行くと言ったら、俺も一緒に行くと言いだした、森本さん。一泊の準備をしろと言われて、会社に休みの届けを出し、今日金曜日に盛岡の産婦人科に森本さんの車で来た。もちろん予約はしたから待つことは無くスムーズに診察してもらえた。私と同年代の女性が結構いたから気恥ずかしさはあまり感じなかったし、先生は女の方だったから、ホッとした。駐車場から車は静かに盛岡市街に向けて走りだした。暫く、無言が続いた。

盛岡市街はすっかり春めいて、すれ違う人達もどこか優しく見えるのは、どこか心に安心感があるせいかも。

「すっかり春になりましたねー」少し、埃っぽさがあるのは春の恒例。

「うん。」森本さんの声は心なしに低く聞こえた。

「ねー森本さん、ほんとに産んで良いんですか？ほんとに。」運転中の森本さんの横顔をみながら聞いてみる。すると、すぐに、

「良しさ、産みたいんだろ。産めば良しさ！」

「そんな投げやりな言い方嫌いです。」

「別に投げやりなつもりで言って無いよ。それは誤解だよ」

「でも、簡単に言うんですもの。」車は橋を渡り、河沿いの道路を右に曲がり、盛岡駅前を左手に見ながら、秋田方面に向かって走って行く。

「簡単に言うしかないだろ、それとも、死にそうなほど苦しく、悩んだ顔してさーのんに言えるかい？」

「それは、そうですね、・・・」

「のんが、そうしたいならそうすれば良しさ、堕胎してくれなんてそんなこと言えないさ。卑怯だろ。」

「でも、そう言って、欲しかった。おろせて、」

「なんで？どう意味？」

「おろせって、言って欲しかった。」

「なんで？ーおろせって、言えば良かったってか、ほんとにそう思ってるの？のんは？」

「はい、そう言って貰えば、きっと、嫌いになったと思うんです。」

「驚いたなー嫌いになりたいのかい？」

「はい、」

「何だよ、それは？」

「でも、森本さんは、そうは言わなかったですもん。産めって言いましたもん、狡い、狡い人。」

「狡いって、おいおい、のん、のんが考えてるようなことは何も考えてないよ、随分だなー。」

「森本さんが、産めと言ってくれたから、とても、嬉しかった。嘘でも嬉しかった。でもかえって悩みが深くなりました。随分長い間、悩みました。色々考えて、苦しかった。」

「のん、ごめんな、苦しませた。済まん。」

「いえ、・・良いんです。」

「盛岡の近場に泊まろうと思ったけど、予定変更して、仙台に行くう、一泊の準備して来ただろう？」

「はい！」

車は南インターを目指して走り始めた。

今まで、口にするのが怖かった事を、今日は、聞いて見よう。

「今日は、妊娠確定記念日だからさ、派手にお祝いしてあげるよ。」

「嫌です、お目出度くありませんよ、」

「何で？」

「森本さん、奥様になんて言います？お子さんだって居られるんでしょう、そんな中に、私は

どうすれば、良いんです？森本さん、お子さんは何人居られるんです？」

「二人だよ、男、二人とも、」

「奥様とは、上手くいってるんですか？」

「うーん、上手くいっている積りなんだけど、そんな事を聞いてどうするつもり？」

「上手くいっている積りなら、どうして、私なんですか？私とどうして付き合うんですか？」

私の身体が目的ですか？」

「おー今日は、厳しいなー、どうしてって、言われてもなー、ねーのん、」

「はい？」

「俺の家庭の話はしてくださんな、家庭はもちろん大事さ、当たり前さ、不平不満は誰にでもあるさ、だからといってさ、家庭に不満が有るから、そのはけ口に、のんを抱いている分けじゃ無いよ。」

「じゃ、何です？私の、身体ですか？」

「そうじゃ、無いよ、俺は、初めて、のんを見たとき、心が震えたんだ。なんていうかなー、

一目惚れってかなー、もう見た瞬間から絶対に離したくない、一緒にいたい、俺の世界の中で

過ごしたい、そんな風に思ったのさ、身体が目的と言われたら、違うと言いたいけどさ、そう思われても否定しようが無い。正直、今の話をされるのが少し怖かったよ。」

森本さんから、初めて聞いた。

「そんな風に言われたら、自分の行動に、整合性が無いのは自分でも分かっているんだ。でも、逢いたいし、逢えば抱きたくなる。のんは、何で、逢う、俺と？」

答えは一つしかない。

・
.....私も、逢いたい、抱かれない、離れたくない。.....

「好きになったんです。森本さんを！」

国道の左端に車は急に停まった。森本さんの唇が重なった。それは、とても素早く、森本さんの素早い舌の進入に応えることが出来なかった。

「見られます！」

「構わない、のん！」

「好きか？」

「はい」私は、前を見たまま動かず、応えた。

・・・好きですよ、ほんとに。・・・

車が静かに走り出した。ほっとする。

東北自動車道路、快調に仙台目指して走っている。高速に乗る前に、南インター手前で、お昼ご飯を食べ、すぐに高速道に乗った。昼食を食べながら、病院の結果を何時の時点で、打ち明けようか迷っていた。森本さんは、妊娠しているものと決めているみたいだし。このまま、少し、黙っていよう。そう、思った。

「のん、トイレないかい？」

「大丈夫ですよ。」

「いや、俺が大丈夫じゃないんだ。次のサービスエリアで止まろう。」

「はい。どうぞ。」盛岡から大分走って来た。もう既に宮城県の県境を越えて、今は、築館あたりらしい。

「のん、松島に泊まるかい、それとも、仙台が良いかい？」

「森本さんに任せます、でも仙台が良いなー、この前の音楽パブ、素敵でしたよ、」

「そうか、じゃ今日は、国分町に在る、オールデイズの店に行こう。」

オールデイズって聞いた事あるでしょう。」

「はい、」

「結構、有名な店だよ、妊娠の記念日には最高かも、・・・」
危うく、言い出しそうになり、言葉を飲み込む。

「・・・まだ早いわ、まだ。・・・結果を知った時の森本さん、怒るかしら・・・それとも、・・・ふふふ。・・・」

「何か変だぞーのん？おかしいぞー」

危ない、危ない、

「大丈夫ですよー、何も可笑しくありませんよー。」

「なんか、浮き浮きしてるなー、妊娠が分かって、嬉しいのかい？」
「違いますよー。」

「・・・フフフ、もう少し、黙っていようと、怒るかしら？怒らして見ようと。森本さん、どんな表情するかしら？・・・」

車は巡航速度120kmで仙台を目指している。

「どうも怪しいなーのん、も、一回尋ねるけど、のんお嬢さんは、なんか、俺に隠し事してませんか？段々仙台が近くなって来たら、浮き浮きして来たように思うんだけど、どうも怪しいんだよねー。」

「フフフ、そんなこと無いですよー、あっ、危ない、森本さん、前を見て運転して下さい。危ないですよ。まだ死にたくないですよー。」

「大丈夫だよ。大丈夫」

「前を見て運転してください。ほんと！」

「はい、はい分かった分かりました、任せなさい。のんお嬢さんに従います。」森本さんはそう言いながら、又、私の方を見る。

「もうー」

「はははっはー、相変わらず綺麗だからさ、見たくなるの。おっぱい触っていい?」

「だめ! 信じられなくい、触ってもいいですかなんて、そんな人、初めて。それも、運転中にですよ。」

「だってさー左手が寂しいんだけど、だめ?」

「だめー、運転中はだめーもう、禁止です。絶対禁止!」

「はっははっはー、禁止は良かった。のん? 好き?」

「運転中触ろうとするような、スケベな変態爺は知りません。」

「おう、おう、言われちゃったよ。」もう、どうしてこうなのかしら、運転中に触ってもいいですかなんて、話題を変えよう。そうだ、

「森本さん! 矢崎さんは確か仙台ですよ?」

「あーそうだけど、矢崎がどうかしたかい?」

「いえ、どうもしないですけど、あの夜以来、お会いしてませんもの、どうしてるのかなーって?」泉インターの標識があつという間に目の前を飛んで行った。

「あいつは元気だよ。元気。ただなー色々何かと、忙しいみたいだよ。」

「そうですかー良かったですねーお仕事、確か大手の建築会社でしたよね。」

・・・あー良かった。このまま、このまま。・・・

「あーそうだよ、覚えていたんだ。ただなーうーん、仕事が忙しいのは、まっ、当たり前だけどさ、彼は優秀だからなく、うーん、・・・家庭がなー問題ありだなー」森本さんは、言いづらそうに口を濁した。ちらりと横顔をみた。私は、そんな運転中の森本さんを見ないようにして、前を向いて、静かな声で、

「森本さん、無理して言わないで下さい。ねっ!」

「ありがとう。今度にしよ。ごめん。」そう応えた森本さんの表情には、どこか寂しく、その横顔に陰りが見えた。急に、私は森本さ

んと間に、瞬間、ちよつとした距離を感じた。不安といったら良いのかは分からないけど。矢崎さん、何かあったみたい。

「宮城インターでおられるよ。初めてだろ？」

「はい。もう仙台に着いたんですか？速かったですねー。」

車は、東北道宮城インターを降りると、直ぐにトンネルが　口を開けて待っていた。

「ねえのん？、」

「はい？」

「このトンネル走るのは初めてかい？」

「ええー初めてですよ。」

「そうかー、このトンネルはね、仙台の街のど真ん中に出るんだよ。駅前みたいなもんだよ。」

「えー？だって高速降りた辺りは山ばかりでしたよ。そうなんですか？」

「そう、そうなんだけどさ、いきなり、山から街のなかへ出るんだ、つまりさ、それだけ仙台は田舎なんだよ。大きな都市に見えるだけさ。」

「そうなんですか？」

「もうじきに、仙台市内に　出るよ。」

二つ目のトンネルは短く、3つ目に入ると直ぐに地上に出た。明るさの中に、私の視界に、最初に飛び込んで来たのは、初めて見る、印象に残る背の高い、周りのビルと一線を画したような外見のビルだった。

「わぁーほんとに、街のなかですね。」

「俺も最初は驚いたなー、のんお嬢さんも驚いたみたいですなーわっはっはっはーうーんよかよかー、これでよかー！真っ直ぐ行けば、仙台駅さ。少し仙台市内を観光してみようか、真っ直ぐ行けば駅、駅前にはいろんな店が有るよ」

車は混んでいる三車線の道路の真ん中の車線を走りだした。そして

直ぐに気づいた。

「あれーこのホテルはこの前、ご一緒したホテルですよね？」

「へい、左様でがんす。愛しあったホテルでやんす。ここが、今日もお泊りする愛のホテルでやんす、」

「知りません！もう、普通に話して下さい。森本さん、！イヤらしいですよー」

「な、なんば言うーとつとですかー、こげん真面目な男は他に、おりもさんですよ。」

「もう、普通に話して下さい。どうして、そんな可笑しい言い方するんです？それでも、森本さんの言い方が移って大変なんですから。この前も出そうになるし、」

「ほうーうつたんだーもっと、染めてやろ！」

「結構です！もうこれ以上染められたくないです、変態になるのはいやー！」

「よくも、おっしゃいましたねー、」

「ははははーえー言いました。言わせてもらいます。スケベーって！」

「のん、」

「は、い？」

「ほんとに、そう思ってるの？」

「はい、車のなかで触ろうとするような人は、普通、痴漢といいますよ。変態ともいいます。イコール、イヤらしい、スケベ、変態、

異常者、えーと、わぁー嫌だ、はははっはー」

「うでがんすか、そう言われた以上は、おらは、変態になりましたねばならね、変態になって、のんお嬢様ば、とことん嫌らしく責めねばなりませんね。」

「うわぁーなんです？その話し方？」

「やっぱあまり巧く言えないなー、山形の方言なんだけどさ、言い直そうか？も一回？」

「いりません、」

・・・やっぱり、この人普通じゃないかも？・・・

「ほら、この広い通りを越えれば、駅前商店街さ、いろんなデパートやお店が在るよ。」

「なんか大きいんですねー、全然比べ物になりませんねー住んでる町と。」

車はゆつくりと走ってくれているから、目の前を過ぎて行く街並みを落ち着いて見る事が出来る。仙台もすっかり春。道行く人達も春を楽しんでいるみたい。

「ほら、これが仙台駅、結構な人間がいるだろ。デパートとかあちこち在るから、人の出入りが多いんだろう。今度、来たとき、ゆつくり歩いてみれば良いさ。」

「はい。」 楽しみだわ。

「都会に憧れるのは分かるけど、都会なんかは、よそ者の集まりさ、仙台だって、札幌だって東京だって同じさ、よく見えるのは外見だけ、生活を営んでいるのは人間だよ。その人間のすることは、何にもこの何千年変わっちゃいないよ。目の前の道具が変わったくらいさ。」

「そうですねー」

「芸能界のスターは、華麗に見えるだろうけど、人間だもの、もっともっと、どろどろした、普通の生活してると思うよ。見た目なんか派手だけど、他人を蹴落とさなくちゃ生きていけない世界なんだと思うよ。まっ、憧れるのは分かるけどさ。」

「そうですねー、でも、憧れますよ。見た目しか分かりませんもの、私には。」

「そうだね、少し郊外へ行けば、都会に見えた仙台の街も、ただの町になるからさ、どこも同じさ。住む場所が変わり、建物が変わり、物が変わっても人間の本质は変わらない、人間のすることは、変わらない。だからこそ、人の繋がりが大事なんだよ。俺とのんの繋が

りはさ、だから大事なんだ、巡り合いなんて少ないんだから、まして赤ちゃんが出来る事だし、」

「なんか強引な論法ですね、！」

「強引さ、なんでも強引にいく事にした。俺にとっても今が正念場さ」

「森本さん、いつだって強引でしたよ。森本さん、、悩んでいたんですか？」

「そりゃそうさ、こんな大事な事は悩むさ。のんが大事だから悩んだ、普通だろ、一番悩んでるのは、のん、！それとも悩んだりしない男と思ってたかい？」

森本さんも悩んだ、悩んでくれていたんだ。ずうと、森本さんは平気な顔をしていたからちっとも分からなかった。車は駅からは急速に離れていく。街並みはもう、視界には入らない。

「どうしたの？急に黙り込んで、つまらない話だったね、ごめんね！」

「いえ、そんなこと無いですよ。あの〰〰森本さん、」

「なに？」

・・・・・・どうしよう、どうしよう・・・・・・

「森本さん、赤ちゃんは出来ていないって、先生言っていました。」
小さな声で言った。

「・・・・・・」

「森本さん、出来ていないって、妊娠していません」

「・・・・・・」無言。

「森本さん、？」

急に黙りだした。怒っている。おこちゃった。車は新緑に溢れた木立の中を走っている。

黙りだした、森本さんは、私を見る事無く運転をしている。

「森本さん、ごめんなさい。森本さん、」

・・・返事してくれない。どうして、どうして黙っているの？森本さん、ごめんなさい。怒らないで、お願い、・・・森本さんは、怒ると、無口になるんだわ、きつと・・・

じつと前を見て、まるで住んでいる人みたいに仙台の街を、雑然と混んでいる道路をすり抜けて行く。でも、もう、仙台の街や行き交う人達は、私の目には入らない。しばらく、気まずい無言が続く、車は、ただ黙って走っていく、目の前の景色が色褪せて過ぎていく、夕方が近づく街並みに、私の心はますます、閉ざされた車の空間で暗くなっていく。

そんな重苦しい空気が少し晴れかかる。やっと、見慣れた、あの時森本さんと初めて泊まったホテルが、視界に入ってきた。少しでもこの気まずさから逃げたかった。ホテルの向かいに在る専用駐車場の建物の前に車が止まると、駐車場係員が誘導し始める。

「のん、チェックインしてきて頂戴。俺は車を駐車場に入れてから行くから、フロントロビーで待っていて。」

「はい。」やっと、口を開いた、話しかけてくれた。良かった。でも、まだ怒っているような気がする。

私は、ホテルのカウンターで、宿泊手続きを終えて、森本さんがやって来るのを待っていた。宿泊名は、もちろん、

「是永」で二人の名前を書いた。森本さんに言われたからではない。そう、気が付いたら書いていた。そんな自分が驚きだった。何度も書いた事が有るみたい。鍵を受け取り待っていると、森本さんが、ロビーに入ってきた。

「手続き終わったかい？」私の側にやって来ると、普通の何時もの表情で聞く。

「はい」私は、思いつきの笑顔をして森本さんに応えた。

「じゃ、部屋に荷物を入れよう。」そう言うと、エレベーターに向

かつて歩き出した。私はその後を、追いかけるように、歩き出す。誰も、他人の事は気にしていないみたい。人が、大勢出入りする。待っている間、何人も、やって来ては、消えて行った。

夕方から夜にかけて、もっと、出入りが激しくなるに違いない。

このホテルのエレベーターは、フロントの裏側に在り、誰が乗り込んでも、ホテルの従業員には分からないように造られている。だって、エレベーターのすぐ側に、ホテルの裏玄関があり、ホテルの従業員はどこにもいないみたい。宿泊客かどうか分からないのに、誰でも、出入り出来るって、危ないな。大丈夫かしら？でも、森本さんと一緒だから大丈夫。

ホテルの部屋は、ダブルベッドを取った、ツインにしたかったけど、「無い」、と言われちゃった。

エレベーターは七階で止まり、森本さんの後ろに従って部屋に入る。このホテル自体はかなり使い古しの感じがする。

でも立地条件は良いと、森本さんから聞いている。部屋は、道に面しているらしいけど、意外に狭く感じられた、それは、ダブルベッドが部屋の真ん中に置かれているせいかもしれない。まるでその為のベッドみたいに主役の顔をし又、その趣であるみたい。そして、この部屋で、このベッドで、今日も抱かれるわ。

「森本さん、このお部屋でよかったですか？」と、森本さんに話しかけた。

「・・・・・・・・」

「森本さん？どうしたんです？」私は、不安になってきた。まだ、怒っているんだわ、きつと。森本さんは、脚を組み、ソファに座り私をじっと、見つめている。その視線は絡みつくように、私を見る。

「のん！」静かなこえで呼ばれた。

「はい?・・・」

「俺の事、ほんとに好きか?」

「はい、好きです、大好きですよ!」ほんとに、好きですよー。直ぐに返した。

「じゃ、今この場で、そう、目の前で裸になって!」

「えっ!???えゝ?そんなー、」

「ストリップだ!脱いで!」

「そんな、・・・」

「・・・いつものように脱がせて下さい。激しく、荒々しく、森本さんの仕方が好き。・・・」

「嫌か?」

「い、え・・・で、も、」

「じゃ、裸になって!さあー、」強く、言われた。何度も裸にされ、抱かれたけれど、森本さんの、目の前で、ストリップをするなんて出来ない。恥ずかしい、ほんとに。どうして?させるの?

「やっぱり、嫌か、俺の事、好きじゃないんだ、」

「そんな事ないです、森本さん好きですよ。」

「じゃ、ストリップ出来るだろう、」

「どうして苛めるんです?」

「・・・」

「どうしてもですか?」

「どうしてもだ!」

「森本さん、どうしてもですか?」

「脱げ、早く!」

「はい、・・・」私は脱ごうとすると、

「こっち、ここで、やって!」と手招きした。私は、森本さんの間近に寄った。目の前に森本さんがいる。

「どうしても、ですかー?」

「さあー脱いで、」

・・・あゝ拒否出来ない、いつもそう。ずっと拒否出来ないで、今日まで来たわ。は、裸に、裸になる。着ている服を脱ぐのよ。裸になるのよ、それも、自ら脱いでいく、衣服を自らの意思で剥ぎ取るのよ、それも男の人の前で。いくら森本さんには全て晒したといっても、

「のん、良いの？」森本さんの見ている前で、ストリップするなんて！な、なんて恥ずかしい、なんてイヤらしいんだろう、自ら脱ぐなんて、脱がされるんじゃないで自分で裸になるなんて、そんな、出来ない、出来ないわ、恥ずかしい・・・垂れた髪に表情を隠くし、首をかしげながら、静かに頭を横に振りながら、覗き見る森本さんの視線とすがるような私の視線が絡む、あゝ許して。。。・

「森本さん？・・・どうしてもしなくちゃダ、メ？」拒否されるのは分かっているけど、

「ダメ！早くだ！」ヤッパリだわ、

「は・い・・・」小さく応えた。強い口調に胸が微かに痛んだ。ホテルの部屋の薄明かりのなかに溶け込むようにソファーに静かに座っている、森本さんを、じっと見つめ続けている。

薄明かりのなかの森本さんの表情は何て冷たいんだろう。

その白く浮かぶような無表情な視線が私に絡み付く。

・・・いつもの優しい表情に戻って～お願い！・・・森本さんの優しい表情が好き、今の表情は、嫌い！早く戻ってもらわなくちゃ。ヤッパリ、言われた通り脱ぐしかないわ。・・・あゝ森本さんには拒否出来ない・・・拒否出来ない私は、なに？ずっと、あの時から今まで森本さんには、拒否出来ないで来た、全てを許して来た私ってなに？・・・

許容は、あの最初の出会いから始まった。

森本さんという未知の世界に踏み込んでしまった、私。一つ一つ否応なしに、引っ張られ、踏み込まされてきた。それも自分の意思で、一つ一つ踏み込んで行った。行かされた。森本さんは必ずと言って良いくらいに、私の了解、確認を取り、逆らえない私は、私はずっと一つ一つ頷き、了解を与えてきた。一つの許容が次の許容を呼び起こす。そして子供の頃から身につけた衣が、アツサリと一つ一つ剥ぎ取られてきた。剥ぎ取られる度にそこには、新しい、今まで知らなかった世界が広がっていた。幼稚な私の世界は今、急速に森本さんの世界に混じり溶け込んでいる。それは、森本さんの

「女」にされて行く過程と重なる。私は、森本さんの

「女」なの。だからね、

「苛めないでー」

「のん！」

その声に、反応するように、髪をかきあげて、ブラウスの上ボタンに両方の手をかけて、急いではずそうとすると、

「ゆっくり！」と言う声が、立ち竦む私の身体を通り抜けるように、狭いホテルの薄明かりの部屋に流れた。・・・ゆっくり！・・・そう、楽しむのね。森本さんはゆっくりと楽しむのね。そう、良いわ、森本さんが喜んでくれるなら、ゆっくりと、脱ぐわ。楽しんで下さい。二人きりのホテルの部屋だもの。

「森本さん、見てください」

「うん！じゃ、ビールを飲みながらにしよう」

「どうぞ、」森本さんがビールを冷蔵庫から取りだし、ソファアームに座るのを待って、私はゆっくりと、ブラウスのボタンをはずし始めた。

「のん。」

「は、いー？」

「出来れば、顔を上げて、美しい顔を見せてくれ、もったいないか

らさ、」

「はい、こうですか？」私は最高の笑顔を森本さんに向かって送った。

相変わらずだわ、東北最大の歓楽街、夜の仙台国分町、相変わらず凄いわ。すれ違う男と女、様々な、男の人と女の人、その組み合わせの多様さ。この場所に存在している私って、不思議だわ。ふふふふー！傍らを過ぎて行く、そして、ネオンの海に溶け込んで行く人々。長めの髪を金髪に染めて無造作に結いあげて、又、派手目の洋服で着飾り、独特な髪形をして歩く若い女性たち。皆、同じようなお化粧をしている。恐ろしい男の人、既に酔ったサラリーマンの人達、なんて、賑やかなだろう、人も建物も、雰囲気も！ふー。私と森本さんも、夜の国分町の光に溶けこみ、この場所に、違和感なく混じり合っている。誰の視線も気にすることもない。この瞬間こそ、この場所、この空間の、その一部にすっかり同化しているんだわ。

ホテルから、そんなに歩いてはいないはずだけど、何処に在るのか分からない、有名なオールデイズのお店。森本さんに黙ってついてきた。腕にしがみついて。連れて来られたお店の店内は思っていたよりかなり広く薄暗い。店内は、ほぼ満席。薄暗い店内を、すばやく見渡すように視線をを走らせれば、見える範囲には、男女、それも女性客が多く見えた。それも私の母と同じ位の年齢の女性が多いように見えた。

予約していたらしい空いているテーブルに座ると直ぐに、どこか懐かしい、これ迄に、何処かで見た事が有るような、少し原色が目立つワンピース、セピア風、昔風の服装をした、現在の女性の雰囲気とは、かなり異なる女性、ポニーテールに長めのリボンが揺れる若い女性が、左右のバンドチームの弾く曲に合わせて歌いだした。ボーカルの女性は、私よりずっと大人びて見えるけど、多分まだ、

25、26歳くらいかなー。魅力的な女性。上手だね、ハスキーな声で、リズムカルに英語の曲を歌っている。結構、曲の音量が大きい。

「さー喉が渴いたろ、最初は、ビールで良いかい？」森本さんが微笑みながら聞いてきた。

「はい、」森本さんと視線が合うのが、恥ずかしかった。

[illegible]

「どうしたの？」

「いえー。」
首を横に振る。

「のん、うん？　どうしたんだい？　こういうお店は嫌いかい？」

「・・・いえ、そんな事ないですよ、凄く混んでいるんですねー。」

「声が聞こえるように、

近くに身体を寄せる。

お客さんが音楽に合わせてあちこちで踊りだしている。それを、見ながら、

「ノンも踊るかい？ ジルバ！」

「いえ、ダメですよ、踊れませんもの！」

「残念、今ちょうどジルバの曲がかかったのに！」

「済みません、ジルバって、踊りは知らないんです。」

「そりゃ、知らないさ、今はあんまり踊らないからなーダンス教室にでも通っていないと、踊れないさ！」

「森本さんは、ジルバって踊れるんですか？」

「踊れるよ、今度、教えるよ。上手いもんだよ、なうんてね、少し

ダンス教室に通ったの、それで基本くらいは踊れるよ、ほら、」と言って小さく指差した方向には、ジルバを踊っている、中年の男女が見えた。

「彼等、上手いもんだよ、若い時、ずいぶん踊ったんだな、踊り方を見ていれば分るよ。」

森本さんも身体を近づけて、私の耳元で言う。

「そうなんですか？」私には、初めてみる踊りだった。ずいぶん激しく動き回る、女性がクルクル回っているようにしか見えないけど。私には、出来ないわ。

「凄く動き回るんですね、」

「ジルバだからね。」

そこに、ビールが運ばれてきた。

「さー飲もう、少し、のどが渴いた、だいぶ頑張ったからね、良かった、」顔を近づけて続けようとするのを、

「森本さん！、知りません！やめて下さい！」

「おーお嬢さんはお忘れになるのが、早い、はやいですなー」

「も、り、本さん、お願いですからやめて下さい。怒りますよー」

「オーケー、オーケー、はい、ご機嫌を直してね！楽しもうね、はい、かんぱーい！」

「止めてくださいね。いーだ。」身体を起こしながら、睨みつける。

「ごめん、ごめん、ノンに嫌われるのは嫌だから、止めます。」

「森本さん、」

「何？」

「怒っていないんですか？」

「何を？」

「今日の事なんですけど？」

「今日の何？」

「妊娠の事です？」

「えっ、妊娠したの？」

「も、森本さん！」

「音楽を楽しもう、それは後でね、」

「森本さん、」

「怒っていないから、もう十二分にも、のんを堪能したからさ、感じたかい？」耳元で、囁くように聞いて来た。音楽が止んだ。踊っていた人達も席に着く。ざわめきが増した。

「知りません、！」

「もっと、感じてみるかい？」覗き込むように聞く。

・・・もう。いやらしい。・・・

「スケベ！、スケベ親父、どうして、そんなにスケベなんでしょ、信じられません！」

再び、音楽が始まった。今度の曲は、スローでゆったりとしている。私は、その曲に合わせるように、ゆっくりとビールを飲み干した。

「今度は、ワインにするかい？」私は、森本さんを見つめて、

「はい、赤いワインにしましょう。今日は、たくさん頂きますよ。」

「ははははー、お嬢さんは、どうしたんですかな？」

「スケベ！、、、スケベ！」

「音がうるさくて、聞こえないよ、」耳を近づけて聞いてきた。

「スケベ！森本さんは、大のスケベです。いやらしい男！」と少し大きめの声を出して、森本さんの耳元で言って、覗き込んだ。

「そのスケベ男にさ、抱かれて感じていたのは、目の前にいる、お嬢さんでは？」

「知りません。もう、やめてください。」そんな言い方をしている森本さんは、いたずらっ子のような表情をしている。周りを気にしない、二人だけの時間。楽しもう。今は、楽しむことが一番。森本さんも、きつと、楽しんでいる。私を、私の身体を、私の心を堪能している。

「のん、？」

「はい？」

「どう？楽しかったかい？」

「はい、初めてでしたから、なんか凄く新鮮でした、ありがとうございます。」

「そう、喜んでくれて良かったよ。」

夜の国分町、少し、寒く感じて、森本さんの腕にしがみつく。誰も気にしてはいないし、見ている人間もない。全く二人だけの時間。

「真っ直ぐホテルに帰ろう。少し疲れたよ。のんは平気かい？」

「平気ですよ、まだ若いんですから、大丈夫ですよ、でも、ほんと、賑やかなんですね。」

「そうだねー、なんせ東北最大の夜の繁華街、欲望の国分町だからね、いっぱい良い女いそうだからなー、」

「ホントに、助平親父なんですなー、森本さんは私の事どう思っているんです？」

ネオンの光が夜の闇を明るく照らしている。人の流れが途絶えない夜の国分町。

「さーその答えは、ホテルに戻ってからにしよう。もう一回、のんを味わいたい。嫌かい？」

「、、、、ずるい。。。」

森本さんは、のんびりと歩いている。二人の時間は、明日までには十分過ぎるほどに有る。

「ねーさっ、のんの会社でさ、のんの会社にさ、加藤って名前の男の社員いるよね。」

森本さんが、運転をしながら聞いて来た。仙台からの、帰りの高速道路。

昨日は、オールデイズのお店を出て、まっすぐホテルに帰り、部屋に入るなり、

「口で愛して！」と言われ、服を着たままの森本さんの前に跪き、ズボンのジッパーを下げ、言われるがままに愛した。行為そのものに溺れた。そして、そのまま裸にされ抱かれ、貫かれ、激しく翻弄された。そして、今朝も身体を開かされ、まだ眠っている「女の子」を前から、そして後ろから貫かれ、責められた。でも、脚は夜の行為より開けない、開かない。朝の行為はそんなには、感じないけど、乳首だけは感じる。そんな事を思い出しながらいたら、急に、言われた。

「えっ、か、加藤さんですか？」

「そう、加藤って確か言ったよ。」

「うちの会社に加藤って名前の人は、一人しかいませんよ、どうかしたんですか？」急に、加藤さんの顔が浮かんた。どうして？どうして知っているのかしら？

「加藤さんがどうかしたんですか？何で森本さん、加藤さんを知っているんです？」

「あれー加藤君を知っていて、おかしいかい？」と怪訝な、曖昧な表情で私を見る。車は、北を目指して快適に走って行く。

「おかしいですよ、だって、森本さんとは、なんにも接点、無いじゃないませんか！」おかしいわ、年齢も違うし、

「そんなことは無いさ、」

「えー？、おかしいですよ、絶対おかしいですよ。会社としても、職種が違いますよ。」

「どうしたんだい？急に勢いこんで？」

「だって森本さんおかしいことを言うんですもの、おかしいです、森本さんが、加藤さんを知っているなんて、」

「なんでさ、知っていたって不思議じゃないさ。のんこそ変だな〜どうしたんだい？」

「あっ、前を見て運転してください。」

「うん、あー、」

「なにも変なところはありません。どうして知ってるんです？」

「そんな不思議なことはないさ、先週にさ、事務用品アムロの社長と一緒に、会社に行って来たんだよ。」

「えー？事務用品アムロの社長さん、ご存じなんですか？」

「うん！知ってるよ、会社に一日とおかず来るよ。彼の会社から事務用品、結構仕入れているからね。それに、悪友だし、飲み友達さ、おかしいかい？」

「そうだったんですか。」

「アムロの社長は、大木さんって言うけど、聞けば、のんの会社にも出入りしているって言うじゃない、聞いた時、やはり、小さな町なんだと思ったよ。知ってるかい。」

「お顔だけは。少し太めの方ですよ。」

「そう、肥っているけど、彼は必殺遊び人だからなーあれで。」

「そうなんですか、納得しました。あーそうなんだー、アムロの社長さんですか。」

「そう、どうやら、納得して頂けたみたいですな、お嬢さんには。」

「納得しましたー、でも、どうしてアムロの社長さん加藤さんをお連れしたんでしょう？」

「随分詮索するなー、その加藤って男の事が気になるみたいだなー？」

「だってそうでしょ、私と森本さんだけの関係だと思っていたのに、突然、会社の加藤さんが森本さんの会社にお邪魔したなんて、普通そんなこと、信じられませんか。」

「まっそうだけどさ、なんかさ、大木の社長、加藤君を昼ごはんに誘ったらいいんだ、のんの会社に納品したついでにさ、なんでも夜の社交界でも二人は遊んでいるみたいだよ。それで、食事した後にお茶飲みに行こうって、うちの会社に来た見たいなんだ。」

「森本さん、変なこと言いませんでしたよね。」

「俺も驚いたよ、聞けば、のんの会社の社員だって言うしさ、狭いよな、ほんと。」

「えー、ほんと、狭いです。嫌だなー、なんか。」

国分町の、あのホテルでの出来事の記憶が消えない。

帰ってから既に三日間が過ぎたけど、繰り返し、繰り返し思い出す。あの森本さんの、あの私を見つめる刺すような視線、そして、あの怪しく食い入るような表情、いつもと違う冷たく見える表情。じっと見つめられる視線の中で、ゆっくりと一枚一枚脱いでいった。私も森本さんを見つめ続けながら。あゝ思い出す度に恥ずかしさで胸が「キュッ」と締め付けられる。

浮かぶわ、鮮やかに目を閉じると浮かんでくる。男の人の目の前で、着ている物を脱いでいくなんて、脱いでいく私って何？じっと見ている森本さんの前で自ら脱いだなんて、なんてはしたない、でもそんな私自身心の何処かで嬉しかったかも。命じられたんだもの、森本さんに、だから否応なしに、素直に従って脱いだけ。何て、イヤらしいんだろう、思い出すわ。全てを脱いだ瞬間、部屋のなかの空気の柔らかい冷たさが、「女の子」をずっと、触れ撫でて行っただ様な気がした。あゝ思い出すと、また奥深くの「女の子」が静かにうごめき疼く。

今度も「しろ！」と言われたら、するかしら？森本さんが喜んでくれるなら、多分たぶん、すると思う。拒否できない。

本当に妊娠していなくて良かったわ。良かった。心が一瞬で晴れ渡り、たまりにたまった、不安が消えた。消えた途端、苦しみは忘れた。

「おはよう、どうしたの、今日は朝から元氣無いよ。ボウーとして！」
「気がつけば加藤さんが目の前にいた。」

「おはようございます。ボウーとしてませんよ。」

「そう、なんかそう見えたよ。」相変わらず良く私を観察している。

「加藤さん、今日は、所長さんと一緒に盛岡ですよね。」

「昨日所長とゴルフ一緒だったから、今日は忙しいよ。」

「遊んだバツですよ。頑張ってください。」私は、最高の笑顔で言った。

「うん、やはり、元気な是永さんが、いいや、その調子、いつもの調子。」

「加藤さん、昨日のゴルフコンペ、どうでした？」

「それが、ゴルフに成らなかったよ。」

「えっ？ゴルフしたんでしょ。」

「いやーしたんだけどさー、大木の社長には参ったよ。」

「……あつ大木さん？森本さんが、アムロの社長さんの事を言っていた。……」

「エッ、？誰です？」

「あれー是永さん知らなかったかい？ほら、たまに会社に来るでしょ、事務用品アムロの社長さん、大木って言うんだけど。」

「あゝあの少し太めの中年の男の人ですよね。」私は、あの小太りの体型を思い出した。

「そう、彼、昨日のコンペ一緒だったんだけどさ、あの人、ゴルフやった事があまりないらしくてさ、飲んでいる席じゃ上手いとか自慢してたけどさ、まるつきりダメ。ゴルフになんないのー、ボール探して一日が終わったって感じ。」

「へーそうなんですか。ゴルフの事、よく分からないですから、なにともしようがないですけど、なんか大変だったみたいですね。お疲れ様です。」私は、頭を下げた。ふうん、加藤さん、大木社長さんと知り合いなんだー。

「疲れました、成績は散々だし、所長には、馬鹿にされたし、大木の社長とはもうゴルフはしないよ。」

「加藤さんと大木社長さんとは、結構お付き合い長いんですか？」

「そうだなー、転勤して来てから、少ししてジェームズで知り合ったんだー、小太りで、冗談が面白くて、若い女の子に結構人気あってさ、なんかマスターと知り合いだとか言ってた。自然と一緒に飲むようになったんだ。人脈あるみたいで、お医者さんとか紹介してもらったよ。」

「そうですか、加藤さんの人徳ですよ、趣味と仕事を兼ねて、仲良くしてください。」やっと、繋がった。森本さんの会社に行った理由が分かった。私と森本さんの関係を知ったら、なんて言ううかしら。秘密にしておこう。

「是永さんも、ゴルフやれば良いのに、教えるよ。」

「はい、でもやったこと無いですよー、」

「教えるから大丈夫だよ。」森本さんはゴルフどうかしら？

「教えて頂くのなら、先生は上手な方が良いな。」

「是永さん、、、」

「はははー、冗談ですよー、加藤さんがお上手な事は、会社では有名ですから。」

「かなわないなー、」

「今度の土曜日、練習しに行こうか？」遠慮しがちに言う。

「ごめんなさい、土曜日は実家に帰らなくちゃだめなんです。帰って来いって煩くて、」昨日、一昨日と母から、電話が来ている。多分、想像がつく、きつと、叔母さんの件だわ。嫌だと言っていているのに。でも母にも会いたいし。仕方が無いかなー。

「そっかー、残念！実家に帰るんじや仕方がないなー。」残念そう。そこに、

「やっぱりここにいたー！加藤さん、是永さんとのお喋りは、その辺にして下さいねー、」

所長さんが呼んでますよー、加藤はどこに行ったら？と叫んでましたよ。時間だぞーって！」

岸浪さんがドアを開けるなり、加藤さんの側に来て、私を見ながら、

ニヤニヤして言う。

「う、うん、行く、じゃあ今度にしよ、是永さん、行ってきまーす。」

「気をつけて下さいね。加藤さん、頑張って下さい。」加藤さんは、そのままドアを開けて行ってしまった。

「行ったわね、はははー嘘よ、嘘、所長は呼んでないの。是永さんの所に誰かいるとしたら、加藤さんしかいないと思ってたら、やっぱりいたから、うそついたの。」

「えー？大丈夫ですか？」嘘？嘘だって。

「大丈夫よ、ねえー是永さん、お願いがあるの？」と、小さな声で私の耳元に顔を寄せて言う。何だろ？香りが少しきつい。いつもの香水じゃない。

「何です？お願いって？」

「廊下に来て、」

「はい！」廊下に出ると、すぐに、

「ね！ノンちゃん、今日の夜空いてる？」

そう聞かれると、すぐに、森本さんが浮かんだ。あの仙台の夜から、今日まで、私の部屋には来ていなかったし、昨日のもらった電話でも、今日、私の部屋に来るとは言わなかった。少し淋しかったけど。たぶん今日は、来ないんだわ。今週は、少しおとなしくしていようと帰り際に車の中で言ったし。

「えー、今日は、空いてます。どうしたんです？」

「良かったー、今日、合コンなのよー、それがね、予定していたメンバーが、急用が出来たって、朝に電話が来たのー、お願い、付き合ってえー、今日のお相手は、公務員と銀行マンなのー、ノンちゃんが出れば喜ぶわよー。一人メンバーが足りない相手方に失礼だし、ねっ、お願いー私監事なのー、お願いー」相変わらず、自己中だし、忙しい人。早口で、いつも畳み掛けるように言葉が出てくる。まったくもー。

「分かりました、出ます。」

「良かったー、助かるー、皆さん、喜ぶわよー、時間とか休憩時間に教えるわ、あーもうー行かなくちゃ、ごめんね！」そう言うところで行ってしまった。ほんと、いつも忙しそう。

今日は、合コンかー、森本さんには、黙っていよう。でも言ったら、怒るかしら？今日、来ると言いかねないわ。

合コンの待ち合わせ場所は、森本さんとお会いしたホテルの近くにある、洒落たレストラン。

仕事が終わりに、急いで部屋に帰り、シャワーを浴びた。もう慣れてしまった習慣で「女の子」の周囲を指でなぞり、指の平に当たるかどうかを確かめる。森本さんは、必ず、確かめる。

「指と舌」で。そして、当たると、必ず言う。

「ちゃんと、剃りなさい！、剃って、あげようか！」私は、必ず応える。

「結構です。自分でします。」

そんな事を思い出しながら、触っている。毎日、剃っているから、大丈夫。

「今晚は、あれー。岩崎さん、今晚はー」

「是永さん、お、そ、いー、でも、今日は無理を言って、ごめんなさいねー。良く来てくれたは、さ、座って。」テンションが少し高い。お酒もう飲んだのかしら？

「ごめんなさい、遅くなって、今晚はー、」少し小太りの、優しいな、見知らぬ男の人が、にこにこしながら、座っていた。

「今晚はー、やっと、きましたよー。待ってましたー」見たことがない、その男性が、私を見ながら、立ち上がり、

「さっ、ここ、ここに座って。」と、岩崎さんの前を進めた。

「はい、」

「ホントに、綺麗な人だよ、噂どおりだ、なっ岩崎！」

「うん、」と岩崎さんが小さく頷く。

あれー、岩崎さんの知り合いかしら？ 岩崎さんが、少し緊張しているみたい。

「さー座って、紹介するね、今日の人数は四人なの。」

「えっ？」じゃ、今いる人で？

「ごめんね、皆さん急用が出来たらしいの、紹介するわね、この男の人は、庄司 明人さん、お務めは市役所、年齢は27歳。独身。」

「初めまして、是永です。」

「岩崎さん、是永さん、もちろん知ってるわよね？」

「はい……………」

…………でも、どうして岩崎さんなのかしら？…………

「じゃ、乾杯しましょう、明人さんビールで良いですよね？」

「じゃ初めはビールで乾杯しよ。是永さんはビールで良いかな？」

「はい。お願いします。」すでにテーブルにはビールが置かれている。

「カンパイ、」

「乾杯、宜しくい願いたします。」

「はい、こちらこそ宜しく、なっ岩崎！」

「うん！カンパイ、是永さん、宜しくね。」

「乾杯ー、」目の前に居る、岩崎さんとグラスをカチンと合わせて、ビールを飲む。

加藤さんとは違った雰囲気の岩崎さん。あの時の岩崎さんを思い出す。私にチャレンジすると言ったきり、何か月も経っている。会社でも課が違うから、会うことも無かった。会っても、すれ違うだけ、話す機会すら無かった、なのに今、目の前に居るのは、確かに岩崎さん。

その岩崎さんがビールをグイッと飲み干すのを見ている。

「どうしたの？ 是永さん、じっと岩崎ちゃんを見て？ 気になるー？」
「いえ、そんなことは、、岩崎さんとは、あれ以来でしたよね？」
「そう、じゃがいもの告白以来さ、我が社のアイドルに告白したじゃがいもの告白は、なかなか評判が良くてさ、」

「あれには騙されました、皆で私を、騙したんですよ、酷いんです。」

「ははっははー、聞いてる、その話は聞いてる、な、岩崎、お前が、告白したって奴だろ、」

「うん、」

「岩崎さんなんか凄い真面目な顔をして、私を騙したんですよー」
あの時の舞台の上で、告白された事が思い出される。あの時の驚き、恥ずかしさ、あー思い出して来た。

「ほんとーあの時の永さんの顔ったら、覚えてるよー、狐に騙されたような顔して、ほんと、可愛いんだから、びっくりしてね、でもあれはしょうがないの、あれはね、皆で相談して、是永さんの誕生会も兼ねて驚かそうって事になったの、それで、告白する相手は誰にするってことになったら、岩崎さんが、手を挙げたの。」

「そうだったんですか。なんか悔しいなー。」

テーブルにはお料理が次々と運びこまれてくる。私達以外にお客さんはいないみたい。静かな店に、聞いた事の有る、ピアノ曲が流れている。

「サァー食べましょ、お腹空いちゃった。」

「そうだ、食べながら話そう、なんだよー何時ものお前らしくないなー、なーに、緊張してんだよ、飲め、ほら、是永さん、是永さんにさ、こいつガラにも無く緊張してんの、」

すると、合わせるように、

「そうよ、らしくないよーせっかくのチャンスよー。」岸浪さんが口を動かしながら言う。

「何です？チャンスって！何です？」

「良いの、是永さんは気にしないの。」

「えゝ？でも、気になりますよ。可笑しいなゝなんか変な感じがしますよ。？なんか怪しいですよ。」

今日の朝から、何か変。

「ははははーこれはいいぞー是永さん、さっ飲んで、」庄司さんが笑いながら、ビールを注いでくれた。

「ごめんなさいね、今日は合コンといって無理に誘ったのはね、理由が有るの、ねっ！岩崎ちゃん。」

「何です？その理由って？でも不思議ですよねーどうして、岸浪さんと岩崎さんが繋がっているのか、どうしてここに、お二人がいるのか、不思議です。同じ会社だからですかー？でも、会ってるところなんか見た事はないし、可笑しいなー？お二人付き合っているのか？」

思いついた事を言ってみた。

「当たり前ー！大当たりー、鋭いなー是永さんは、でも半分当たりで半分外れよ。」

「あつ岩崎さん、おビール、おかわり、あつ、ごめんなさい、さっどうぞ。」

「有り難う、是永さんにビール注いでもらうのは初めてだよ、あの時には、なかなか側に行けなくてさ、今日は感激だなー、頂きまゝす。」

そう言うと、一気に飲み干して、空のグラスを私の目の前に差し出した。私は再びグラス一杯に注ぐ。

「庄司さんも、どうぞ！」

「おっ有り難う、しかし、是永さんて、噂以上に綺麗な人なんだねー、驚いたよ、度々、噂に聞いてたけど、ほんと綺麗でさー、驚いたよ。岩崎の言う通りだ、なっ、岩崎！」

「そんなこと無いですよ、私より綺麗な女の方は沢山いますよ。」

「そうよ、我が社のアイドルなんですから、でも、私も女なんだけどなー少し妬けるなー」と、口を動かしながら言う。

「はははははー、ごめん、ごめん、俺には、お前が一番さ!」

「えっ!?!?!?!?!」

「良いの、是永さんは気にしなくても、こら、変な事を言わないの!」

「……どういふことなんだろう? 今確かに、お前が一番って言ったわ。えっ、どういふこと? まさか、岸浪さんとお付き合いしているのは、もしかして、庄司さん? ……」

「良いだろ、いずれ分かることなんだから、」

「そうだけど、もう少ししてから、驚かそうって思ってたのー!」

「やっぱり、そうなんですか?」

「そう、そうなんだけど、このおしゃべり!」

「相変わらず、気の強いやつ!」

「気の強いのは、知ってるでしょ、そこが好きだって、あら、、、!」

「はははははー是永さん、俺達、秋に結婚するんですよ!」

「エッ!?!?! 岸浪さん? そうなんですか?」

「うん、そうなの、」

「えっ? そうなんですか? それは、おめでとうございます。」

「……そうなんだ、岸浪さん、適齢期を過ぎそうだもんねー、へー岸浪さんの好みのタイプって、ふん。……」

「そうなのよ、この人と付き合ってもう2年になるの。会社の人是谁も知らないは、」

岸浪さんの顔をじっと見ている視線が優しい。

・・・お似合いだわ。きっと、幸せになるわ。羨ましいとは、思わないわ。私は、まだ若い。結婚するには、まだ早いし、そう、私には、私を好きにしている、森本さんがいる。私が、今、お付き合いしている人が、結婚してる男性で、その彼と不倫してると、知ったら、きつと、驚くわ。言えない、絶対、秘密にしくちや。森本さんに逢いたいな。もう4日も、お逢いしてない。4日も・・・

「どうしたの？ 是永さん、急に黙り込んで、驚かせて、ごめんなさいね、今日はねー、私の事と、もう一つ有るの。ねっ岩崎さん！」
「なんです、岩崎さん、なんです？ 岸浪さんの結婚報告以外にも、何があるんです？」

「うん、まあーいやー是永さん、知らなかったんですか？ この二人、付き合っているのを？」

「ごめんなさい、今初めて聞いたんです。全く知りませんでした。」
「そうか、そうだよなー随分長い間、俺にも知らせなかったからなー、」

「岩崎さんと庄司さんって、お友達なんですか？」

「そう、小学校時代からの悪友！」

「やっぱり、お話聞いていると、お知り合いなのかなーって、思っていました。」

「・・・岩崎って呼び捨てにしていたから、親友だったんだー。それにしても、岸浪さんと目の前の庄司さんがこの秋に結婚するって、驚いたわ。・・・」

色々な、二人のエピソードを聞かせてもらったわ。男の人との出会って、色々有るんだわ。私と森本さんの事だって、有りすぎて、・・・お料理は美味しかった。お酒も、少しは飲んで、少しは酔っているみたい。静かなレストラン。岸浪さんの声だけが、大きい。

うれしそうな岸浪さん。お幸せに。

「岩崎さんがね、どうしても、是永さんを誘って飲みたいって、前々から、言われてたの。直接誘えば良いでしょって言ったんだけど、どうしてもセツトしてくれて、」

「えっ？ 岩崎さん……」

……去年の暮に、挑戦するみたいな事を言われて居たけど、本気にはいなかった。会社でも、あまり接する機会が無かったし、

「岩崎がね、是永さんの事を好きなんだって、なっ岩崎！ だから、きっかけを作ってくれて、頼まれたのでさ、俺らにかこつけて、席を設けたんだけど、迷惑だったかな？」

「そんなに、はっきりと言わなくても、恥ずかしいだろ、」

「お前が、そうしてくれて言ったんだし、はっきりしてやったの、じゃ、俺らは、これで帰るから、二人でゆっくり、話して下さい、ね、是永さん！」

「はっ、はい……」

「ごめんね、是永さん、でも、私たちの結婚は、ほんとの事よ！」

「ホントに帰ってしまうんですか？」

「お邪魔だし、岩崎が内緒の話があるみたいだし。」

「そうよ、岩崎ちゃん、頑張っただね、やっと、二人きりになれるのよ、男らしくね。」

そう言って、二人でさっさと帰って行ってしまった。急に、周囲が、寂しく感じられた。

目の前のテーブルの上には、まだ食べていない料理が、たくさん残っている。

「帰ったね、」

「はい。」

「勝手にしてごめんね、」

「いえ。……」

「やっと、二人きりになれた。あれから、ずっと二人きりになりた
いと思ってた。」

「……」

「是永さん、」

「はい、？」

「今度、俺とお見合いして下さい？」

「えっ？お、お見合いですか？」

「そう、正式に、是永さんのおばさんを通じて、申し込んだんだ。」
「えっ？おばさんって？」

「俺の母の友達なんだよ、叔母さん！」

「叔母さんって、れいこ、……お・ば。さ。ん……でも、
どうして……」

「そう、……良く家に来るよ、叔母さん、」

「でも、どうして？どうして？叔母さんが？……」まさか、伯
母さんが、岩崎さんのご自宅に、出入りしてるなんて？

「ははははー、不思議でもなんでもないよ。君の叔母さんは俺の実
家のあるF市に住んでるだろ、母と友達なんだってさ。それでね、
偶然、実家に帰った時にさ、君の叔母さんがいて、お見合い写真だ
って、見せてくれたの、そしたら、俺、びっくりしたー、だって、
お見合い写真に、是永さんが写ってるんだものさー、一瞬心臓が飛
び出しそうになったよ、まさかねー」

「そうなんですか？叔母さんの住んでること、ご実家、一緒だっ
たんですか？お母様と、お友達だったんですか？……それで、分
かりました。どうしても、繋がりが、分からなかったんです。」

「……そうだったのかー。私の知らない処で、お見合い話が進

んでたんだー。……でも、あまりにも、偶然過ぎるわ。……

「あの、いつ頃、伯母さんから、そのー・写真、見せてもらったんです？」

「あーあれはさ、去年のクリスマスの少し前だったよ。でも、年末だったし、忙しかったし、春頃にしようって、叔母さんをお願いしたんだ。内の母も乗り気でさ。それで、あの時、君に、あー言う事を云ったんだ。それで、なんか、言わないと、自分だけ、ずる、しているような気がして、言ったの。でも、その気持ちは、今は、もっと強いよ。」

「さあー、せっかく、二人になったんだから、乾杯してください。」
と言って、赤ワインのボトルを持ち上げ、私のグラスに注ぐのを何も言わずに見ていた。緊張した表情。

「……そう、ですねー……？」

「さあー、何か騙したみたいで、ごめんね。でも、どうしても会いたかったんだ。」と言って、グラスを差し出した。

「乾杯、」

「初めまして、乾杯」グラスがチンと小さく鳴った。

「初めましてか、そうだね、こうして二人でいるのは、初めてだねー、はい、僕、岩崎です。宜しく、お願いします。」その言い方が可笑しく、

「ふふふー初めまして、是永です。ちょっと騙されましたー」

岩崎さんは、私の笑いに、緊張感とれ始めたみたい。

「お見合いのお話、岩崎さんから聞かなかった事にします。叔母さんから聞いた事にします。叔母さん、どうしても私にお見合いさせるつもりなんです。」

「そうだね、叔母さん実家の母にさ、是永さんの事、写真見せなが

ら、色々話してたもんなー」

「嫌だー、叔母さん、・・・あっ！か、加藤さん」

「やー今晚は。」

「どうしたんです？あっ！」加藤さんは、お一人じゃ無かった。私よりも、年上に見える、巻き毛ロングの女の方と一緒にだった。その女性は、そのまま、奥のテーブルに行ってしまい、はつきりとは、顔を確認出来なかった。あの、看護婦さんでは無い事だけは確認出来た。

「加藤さん、綺麗な女性ですねー、デートですか？」

「是永さんこそ、岩崎君と、あれー、合コン？」

「違います、今日は、結婚の報告会だったんです。」

「是永さんの？違いますー、お友達のです！」

「そう？。」気まずそうに、そのまま、奥に行ってしまった。

・・・まさか、ここで会うなんて。それも、加藤さんは女性と、私は、岩崎さんと。・・・

「出ようか？加藤君も気まずそうだし、俺もちよっと、嫌だし。」

「私は、平気ですよ。・・・でも、今日は、お開きにしましょ。」

「えっ？どうして？」

「今日は、岸浪さんの結婚します報告に、岩崎さんの強制お見合いの進めですし、加藤さんまで、女性連れで、お会いするなんて、少し、疲れました。」奥のテーブルに座り、背を向けて見える加藤さんの方に視線を向けると、お連れの女性と視線が重なり、急いで外した。

「そんな、強制だなんて、・・・」

「でも、少し、嬉しかったですよ。でも、今日は、お聞きしなかったことにします。伯母さんから、母にお話しが行ってるでしょうから、連絡があると思いますよ。それまで、待ちます。すみません。」

「そうだね、急にで、是永さんも驚いただろうから、お見合い正式

に申し込んだから、受けて下さい。今ここで返事くれなんて言わない。申込みが行ったらさ、受けて欲しい。」

「はい、聞かなかった事ですから。さっ、出ましょう。」

「そう、そうだね、まさか、加藤君が来るとは思わなかった。どう思ったかなー？」

「気にしないでください。あちらはあちらで、女性と一緒にですから。」

「うん。」

・・・・・・是永さんが、結婚、この秋に結婚する。それにしても、岩崎さんのおかーさんと玲子伯母さんが知り合いなんて、・・・・お見合いかー・・・・加藤さんが、知らない女性と一緒にだった、・・・・・・綺麗な女の方・・・・・・お似合いだった。・・・・・・少し、嫉妬？・・・・・・かな？・・・・・・でも、・・・・・・森本さんが、私には・・・・・・

「ルルルルルル」森本さんだわ。何故か、この電話が嬉しかった。

「はい、是永です。」

「のりこー、紀子なの？毎日、どこへ行ってるのー？」母だった。森本さんではなかった。

「のりこですよー、どうしたの？お母さん？こんな夜遅くに？」

「いつもいないんでしょ、昨日だって、電話したのよ、ほんとに毎日毎日、・・・・」

「はい、分かりました、で、なんかあったの？」

「もうー、困った娘ね、あのね、今週の土曜日帰って来なさい、ちよっと大事なお話があるの、ねっ！」

「何ー？大事なお話って？」心当たりは有る。

「帰ってから、するからね、お父さんも、待ってるからね、必ずよ。」

「うーん、土曜日は、ちょっと、・・・」

「のりこ！」

「はい、分かりました。土曜日帰りますー」

「ホントによ、必ず帰って来なさいね！」

電話は切れた。

・・・あー土曜日かー。森本さんと会えなくなる。お見合いかー、それも、きつと、岩崎さんだわ。岩崎さんの事は何も知らない。一度、お見合いしても良いかなー・・・・・・・・

「ルルルルルルー」

あつ、森本さんだわ。

「もしもし」いかにも眠っていたような小さな声で。

「のん！」

「はい、」

「今から行く。」

「えっ！」

「行く。」

「ちよっ、ちよっ」と・・・ツーン。

・・・切れた。わっ、今から、来るって言った。急に、期待感と嬉しさが湧いて来た。・・・・抱かれる、・・・・

金曜日の夜。森本さんに、実家まで車で送ってもらった。この日まで、続けて、二日間、抱かれ、愛された。

「明後日、土曜日、釣りに行こう、一泊で。」

耳元で、囁きながら、私の乳房を、揉んでいる、強く握り締める。

「い、くうくう」、私は、一番感じる、乳房への愛撫を目を閉じて追っている。感じる。強く揉まれると、深いところで、鈍痛を感じ、それはすぐに快感へと、感覚が鋭敏になる。

森本さんの乳房への、その愛し方、握り方、揉み方、握り方、持ち上げながら、握り締めるその感覚。「ぎゅっう！」と初めは痛かったけど、今では、揉みしだかれ、強く握られると、全身から力が抜け、そこだけが、その感覚だけが、身体を支配し、残り続ける。怖い。

力を抜いて「やわやわ」とも、揉まれる。そして、乳首をかじられる。その度に、声を出すようになった。

「ど、土曜日は、・・・だ・めくく・・・」

「なんかあるの？ 行きたいんだけど、一緒に！」

「また、実家に帰ら、な、け、一れ、ばあくくくっー痛いいくく」
齧られた。

「強く齧ったの」

「や・やめて下さい・・・」

「どうしても、駄目なの？」

「はい、駄目です。父が用事がある見たいで、あくくん」と、声が出してしまう。

乳首を口の中で転がしている。その舌は良く動く。体制を変えて、両の手で乳房を、鷲掴みにした。左右に広がった乳房を、左右の手で寄せ上げ、顔を私の胸に埋めた。

「そっかし、じゃ釣りは今度にしよう、明日は、何時に帰るの？ 去年みたいに送っていくよ」

「良いですよ、母に迎えに来てもらいます・・・」と言うと、

又、強く両の乳房を強く握り締めてきた。そして、私の両脚の間に身体が割り込み、そのまま、するりと、「女の子」を押し開いて、挿入ってきた。

瞬間に、

「うっうっうん・・・くっく」と声が出たみたい。

「そのまま、絞めててごらん。」と、動かずに、耳元で言われた。私は黙って、いつも通りに下腹に力を入れて、神経をそこに集中しながら絞める。

「おっ・良いぞー・・・うっくむ上手だ！」森本さんは、私の、その、感覚を動かずに確かめている。

「遠慮するな、送って行く、いいね」

「はい・・・」小さく応える。

そうやって、そんな風にして、送ってもらった。そして、日曜日の夕方、迎えに来て貰う。

断っても、「迎えに来ると決めた」と言う。私は、任せた。森本さんに。

私は、森本さんに、お見合いの事は黙っている積もりだった。言えない。

実家

「ただいまーあれー叔母さん来てたんですかー」玲子叔母さんが直ぐに目に入った。

「お帰りなさい、紀子ちゃん。」

居間のテーブルの上には、それらしいのが、置いてあった。

「お腹空いたわーおかーさん、ご飯食べましょう」と言うのと、

「はいはい、お行儀が悪いわよ、お父さん呼んで来なさい」と、お父さん呼んできなさいと言って、テーブルの準備を続ける。

「はっはい・・・」

アパートの部屋に居る時とは完全に、気持ちが違う。昔のような、ほんの少し前だった、甘えた気持ちが急速に心を占める。

「のりちゃんねえ〜これ見て・・・さあ〜」と、叔母さんが待ちきれないかのようには手にして見せたのは、写真だった。

「なんですか〜またお見合い写真でしょう〜まだ早いんですから」と、それを目にして応える。

「何言ってるの、このお見合いは最高よ、のりちゃんにはぴったりよ、お家柄だって良いのよーB町で、ほら、知ってるでしょ、日本酒で「葵桜」って名前、そこの、若旦那よ」

・・・ふん、岩崎さんて・・・造り酒屋の若旦那さんなんだ・・・

叔母さんが、写真を開いて、テーブルの上に置いた。やはり、そこには、岩崎さんが、真面目な表情で写っている。結構似合ってる。

・・・ふん・・・どうしょ・・・

「お母さんも、もう見たのー?・・・お父さんは?」母に聞くと、「見たわよ、お兄さんもお姉さんも、見てないのは、のりちゃんだけ、」と、私を見ながら叔母さんが言った。

「そうなんだー」

「良いわよーこのお見合い、絶対推薦するわよ、さっ、のりちゃん、見て!」

催促されるように、私の前に、広げて置いた。

「しょうがないわねーお父さんも・お母さんも、見たんですねー、では、拝見します。」

ちよっと、あらたまった声で言いながら、写真を手に取り、見る。

「どう・ねっ・」叔母さんは、気ぜわしい。

「おいしい、ゆっくり見させてやりなさい、初めてなんだから、」と、父が、なぜか、嬉しそうに言った。

「はいはい、お兄さんは、のりちゃんにほんとに甘いんだから・でもねーのりちゃん、お父さんも乗り気よ良い話だって!」

「そうなの、お父さん? お母さんもそうなの?」と、聞かざるを得なくなってしまった。

「そうよ、今度の今度のお見合いは、皆、賛成よ」と、母がそう応えた。

・・・賛成なんだ・・・そうか・・・賛成ね・・・

「そう、皆で、外堀は埋めちゃったんですかー?」

「そう、う・上手いことを言うなー俺は、良いなーと思うよ・紀子も、ちょうど、年頃だし」と、父はにこにこしながら、確かめるように私を見て言う。

「絶対に早いですよ、まだ22歳になったばかりよ、私」

「何を言ってるの、その年齢は、適齢期よ」と、叔母さん。

「私も、賛成よ、向こうがとても、お前のことを気に言ってくれてるみたいよ」と、母まで言う。

・・・ここは、ひとまず・置かなくちゃ・・・

「じゃ、考えさせて下さい・・・急にで、お返事出来ません、叔母さん」と、言う。

「良いけど、この男の人、どうよ、なかなか、格好良いと思わない? 私なら即オーケーよ」

「お前がオーケーしてどうすんの、紀子は初めてなんだから、考えるさ・・・お見合いしてみるだけして見なさい、これは、良い勉強に

なるさ」と、父が言ったのに対して、

「お兄さんは、またー甘いんだからーこの縁談は最高なの・断る理由はないわよ」と、叔母さんが父に言う。

「まーまー、お前はすぐ熱くなる・いい縁談だって事は認めるよ、紀子には、もったいないかもなー」私を、置いて、話し始めた。

「分かりました。そこまで言うなら、します、お見合います、お会いしてみます」と、言ってしまった。

「えーほんとーあー良かった、先様から、是非に、どうしてもと、言われてたの・あー良かったーじゃー早速、日取りを決めなくちゃ」もう次のステージに進めようとしている。

そんな私に、父が、

「良いのか？ほんとに・・・」と言ったので、

「はい・・・良いですよ・・・」と返事した。

「そうなのか・・・」

「結婚を決めるわけでは、ないんでしょう？お見合いするだけなんですよ。」

「・・・お相手は、分かっていますよ、お父さん・・・心配しなくても大丈夫・・・」

「はい、一度お見合いしないと、叔母さん、これからどんどん持って来そうなんだもの」

「あらーのりちゃん、これはとっても良いお話なよー」と、決まったことで安心したらしく、言葉が軽い。

「はい、はい、お願いが有ります。」

「なにー？」

「お見合いは、来月の末頃をお願いします・・・今日は、色々、忙しくて、」森本さんの顔が、浮かんた。

「はい、はい、来月よね・・・お兄さん聞きましたか、では先様に、連絡しますからね・・・うっふうふふ・・・日取りは決まったら、

直ぐに連絡するわ・・・あー忙しくなるわ、じゃ、私、帰るね」と言って立ち上がった叔母さんだった。

「えっ、もう帰るんですか？叔母さん？」

「そうよ、のりちゃんの気持が変わらないうちに、連絡するの・・・喜ぶわよーじゃーね」

ばたばたと、帰って行っちゃった。

「さーご飯食べましょ・・・お父さんビール飲みます？」

「うん、のりこー、ほんとに良いのか・・・断るなら、今だぞ」少し心配な表情を見せた。

父にビールを注ぐ。美味しそうに、飲む。

「うん、大丈夫よ・・・まかせなさいって、ははっははははー」笑いが、森本さんに似てきたみたい。

「どうしたの・・・？・・・のりこ？」母が、不思議なものを見るような表情を見せて言った。

「うーうん、なんでもないわ、さー食べましょ・・・お母ーさん、これで良かったんでしょ」

「そうねー良い縁談だと思うけど、のりこ、付き合っている男の人はいないの？」

「い・な・い・わ・・・残念だけど、いないの・・・この間、ほら、お店に来た会社の加藤さんからは、結婚を前提に付き合って下さいと言われたけど、保留にしてるの？」

「何で？」

「まだ、男の人と、お付き合いしたくないの。あー美味しい、おかーさんの料理は、やっぱり美味しい。」

恋の深まり

モーター

「ご実家は、どうでした、のんお嬢さんは、ゆっくり出来ましたか？」車に、乗り込むと、直ぐに、森本さんは私を見ながら、聞いて来た。

「はい、とても。迎えに来ていただいて、済みません、折角の日曜日、お家の皆さんと、」

「のん、家の話は良いの・ねっ！」

「は、い、・・・」

「さっ、帰るぞー」

車は、夕方の空いている道を走りだした。日曜日ということもあって、意外と道は空いている。町から急速に、離れて行く。ほとんど、私の知らない道を縫うように、進んで行く。

「ほんと、関心します・・・私の知らない道ばかりですよ、ほんと、」と、いつもの言い方をする、と、

「あれー？知らなかったかい？裏街道の鉄五郎って呼ばれてんのを？」と、言ったので、

「違いますーそれは、この前と違いますよ、どうして、そんなに次から次と、適当なんです？・・・きやって・・・うわっ！何い・・・い・今の？」と言っていると、車の前を何かが横切って行ったので、黄色い驚きの声が出た。

何かが、車の前を横切って行った。

「猫っ！・・・だったような気がする、ぶつからないで良かったよー」

「ほんと、そうです、あんな風に出てくるんですねー勉強になりました。」

車は山越えの道を登って行く。そんな途中で、車は止まり、

「のん、抱きたい。」と言って、唇を重ねてきた。断る理由はなかった。

唇が離れるのを待ちながら、

「お部屋ですね」

「いや、今日は趣向を変えて、ホテルにしよう」と、ホテルの名前が初めて出た。

「えっ・・・ホテル・・・ですか？」

「そう、この近くに、モーターが有る・・・嫌かい？」

「いえ、そうではないんですけど・・・」

「初めてかい？」

「はい・・・」

・・・モーター・・・名前は、呼び名は知っている。・・・

山道の上り坂を登る途中に見る闇の中の景色、ライトに浮かび上がるのは、草木しか見えない。車は上り坂を全く苦もなく静かに進んで行く。やっと、登りきって下りに入ると、遠くに、町の灯りが、山肌の切れ間に、切れ間に、霞んで見える。車は加速をつけて一気に下る。

でも、車はそんなに揺れる事は無い。ライトの光が次次、闇を切り裂いていく。森本さんは、言葉を発しない。運転に夢中かな？やっと、降り切った。車は静かになった。

・・・暗い夜道を一人で走るのは、私は嫌だな・・・

辺りは、夜の闇を深めている。明るさが欲しい。

だが町まではまだ遠い山の中。夜道の前方遠くに、道の右側に、暗闇の中にポツンとある怪しい灯り、闇の中にきらめく、赤いネオンがちらちら見え始めた。

．．．．．あそこに、入るんだ．．．．．きつと．．．．．抱かれる．．．

「モーター」、私は今までの人生の中で、モーターに入った事は無い。でも、その名前は知っている。

「SEX」をする処。Hをする場所。そんな印象しかない。そこに、私と森本さんは、今、向かっている。

暗い夜の道路は、流石に空いている。対向車は全くと言って良いほど来ない。

車は、暗闇の山間の道を、進んでいく、どこまでも。下りはずっと続いているみたい。多分、私が住んでいる市が有るところまで続いているんだろう。車のライトに照らし出される、夜の闇の空間、木樹、草木だけが、ライトの中で急速に動いて行く。道は相変わらず狭く、くねくね曲がっている。

車はかなり下り進んでおり、近くに見えていた山肌が近さを失い、距離を感じ始めた頃、道の遠くに、曲がりが切れる度に、ゆらゆら揺れる、小さな灯りが見え始めた。

．．．．．それでも、まだ、だいぶ．．．遠いわ．．．

森本さんは、殆んど無言。私も何も言わない。

暗闇に向かって進む車のスピードはそんなに、早くは無い。道の左側には、川幅が段々大きくなった広い川が流れている。その川の流れに沿って道路が走っている。車は進んでいく。遠くでゆらゆらと見えた、あの灯りが、段々と近さを増してきた。その灯りは、赤いネオン。はつきり見え始めた。すつかり、夜の闇の世界で、存在感を誇っているみたいに赤く灯っている。近くに来て、初めて分かった。

建物は、道路からは全く見えない。塔のようなものが見えるだけ。山肌を切り開いて作ったに違いない。道路沿いに、赤いネオンだけが立っている。右折して、そのネオンの下のモータールに入っていく。為に、造られた道路を、車は進んで行く。

道路から、奥が全く見えない造りの建物が、道を曲がった途端に目の前に、現れた。

「お城・・・」

「そう・・・」

白い塀に囲まれた、建物が目の前に建っている。まるで西洋のおとぎ話のお城のように、白い塔が建っている。その門を潜れば、建物の全貌が見えた。私達の車は、車庫を探したが、結構混んでいる、今日は、日曜日の夜。それは、

・・・恋人達の夜・・・

やっと、空いていた車庫のある部屋は、このモータールで一番高い部屋だったけど、森本さんは、構わずに車庫に車を入れた。

「さー降りて、俺カーテン閉めるから」と言ったので、

「はい・・・」と、応えた。躊躇もない。

私は、言われるがままに、車から降りて、目の前にある車庫の玄関ドアを開けて、森本さんを待つ。実を言うと、胸がどきどきし

ている。初めての、経験。

「なんだー中へ、入れれば良いのに、さっ・・・」と言って、私の肩を抱き、狭い玄関の中に素早く入った。

そのまま靴を脱ぎ、部屋の中に入ると森本さんは、私の肩をしつかり抱いたまま、

「さーここが、お宿スケバーだー」

「いやーイヤらしいー」

「初めてかい？のんお嬢さんは」

「はい、ときどきしてます・・・」

その部屋の中を、肩を抱かれながら、見渡した。部屋の奥には、色鮮やかなベッドがある。

部屋は薄暗く、ぼんやり見える。少しかび臭い匂いがした。

・・・あーこれが、モーター・・・なんだわ・・・

「さー少し座ろう」と言って、ソファーに腰かけた。私も、隣に、ちょこんと座る。

「緊張しなさんな、直ぐに慣れるさ」と、言うので、

「でも、初めてだから、少しときどきしてます」と、囁くように、そう言うのと、森本さんは、私の身体の向きを変えさせて、お互いに見つめあった。

「好き？」

「はい・・・」自然と、その言葉が出た。

「キスして・」

その言葉に、私は、森本さんの唇に唇を近づける。重なるとすぐ

に舌が、滑るように私の舌を絡め取る。舌と舌が私の口の中で、蠢く。

心のどこかになんとなく漠然とした、心もとない、自然に芽生え有った不安感は、その舌の動きと共に消えてゆく。お互いの舌が、幾度となく絡めあい吸いあった。

「さー、お風呂に入ろう、」

「えっえっ一緒にですか？・・」

「そうだよ、嫌かい・・・？」

「はい・・・嫌です」

「そうか、嫌ならしょうがないなーでも、一緒に入るよ、ねっ！」
強く言われた。

「・・・・・・・・・・」

「入るの！」

「はい、」

「じゃ、お風呂入れるよ。」 「あっ、私が入れます。」

「分かるかい？入れ方？」

「いえー、・・・」

「よし、おいで、一緒に入れよう」

お風呂は、直ぐに、溢れだした。風呂場の内壁は、ワインレッドに近い色だった。

私は、脱衣場で、服を脱ぎ始める。白いブラウスを脱ぎ、ブラジャーを取ると、重たげに、押さえつけられていた、両方の乳房が、下に広がる。少し大きめの乳首が、赤い。乳房が、少し垂れ気味なのが、悩み。

・・・・・・大き過ぎるんだわ・・肌の色は白いし・・・・首にも皺が無い・・・・この身体は、この乳房は森本さんのもの・・・・・・

私は鏡の中の自分を見て、平気な顔している自分に驚いている。

「……なんて変わったのかしら……まさか……まさか……男の人と、モーテルに入るなんて考えてもみなかったわ……ほんと、今まさに、私は抱かれる為に、素裸になっているんだわ……」

パンティをすりと下げて、素裸になった。鏡に、陰りが、縦長に映っている。

「……多分、調べられるわ、昨日、実家のお風呂で剃ってきたけど、大丈夫かしら?……」

バスタブに身を沈めてお湯に浸かっている、暖かい。お風呂は大好き。目を閉じていると、森本さんがお風呂場に入ってきた。素裸で、前を隠す事もしない。私は、出来るだけ、見ないようにして、目を閉じている。

「……ザー……お湯が溢れ落ちる。お湯が流れる音がして、目を開けると、森本さんが、湯船に入ってきた。二人が、十分に入れる大きめの湯船。」

「やっと、夢が叶った。一緒にのんと入りたかったんだ、嬉しいか?」

「う・れ・し・くないですー……」と、目を閉じたまま応えた。

「そうかーうわっはっはははーわしは満足じゃー」

「ほんと、悪代官見たいですよー若い女性を、たぶらかして弄んでー……ほんとにスケベで……」

「いや？」

「・・・・・・・・・・」

「嫌かい？」

「・・・・いえー・・・・好きですよ・・・・だーい好き・・・・」

「じゃ、口で愛して頂戴・・・・」

「えっ、今ですか？」

「うん」

と言って、湯船に腰かけて、

「森本さんそのモノを」を、私の前に晒し突き出した。

身体が、急に熱くなってきた。お湯のせいではない。男の人とお風呂に入ったのは初めて。ましてや、お風呂のなかで口で愛してと言われた。

「どうしてもですか？」駄目な事は分かっている。

「・・・・・・・・でも、聞きたいの・・・・」

「どうしても、さっ！」

私は、覚悟した。目の前にあるものを見つめて、前に詰め寄る。

私はお湯の中で、正座の恰好で、腰を少し浮かせて、左手でそれを、軽く握り、摩りながら持ちあげた。髪がお湯で濡れ始める。そっと顔を近づかせて、手と頭を動かし、口の中へ、ゆっくりと、啜え込む。

顔に男毛がまとわりつく。それは、口の中で、少し大きくなったよ

うに感じられた。

「最高だ、嬉しいよ・・・のん！」と森本さんは、私の頬を両手で押えて言った。私は、両手で森本さんの男の付け根を、押えて、口を動かさず、じつと、啜っていた。頭を、な撫でられながら。

「さー、今度は・・・ゆっくり・・・出し入れしてみなさい」

・・・・・・はい・・・・・・

返事は出来ない。命じられた通りにゆっくりと、吐き出す。

「深く！」命令された。又、喉元奥く深く啜え込んでいく。

「もっと、深く！」

・・・・・・えっ、これ以上は・・・・・・

それでも、奥に進める。突然吐き気を覚えて、急いで吐き出そうとすると、

「そのまま、そのまま、

じつとして！」

・・・・・・えっ・・・・・・そ・そんな・・・・・・

押さえられた。上から覗いているのが分かる。私は、懸命に、吐き気を抑えた。

「そう、良いよー上手になって来た。良いよ・・・さー今度はゆっくり、出し入れを、繰り返ししてごらん」と、森本さんは、命じる。

私は、言われるままに、深く入れたり、出したり、している。いつも思う。

・・・なんて、いやらしい行為なんだろうって・・・でも、森本さんが喜んでくれるなら・・・喜んでくれるなら・・・私も嬉しい・・・

「今度はさ、舌で、舐めまわしてごらん・・・そ、そう、・・・うん・・・上手だ・・・その繰り返しだよ」

言われたとおり、舐め回している舌を、硬くしたり、尖らせたり、柔らかくしたり、裏も表も横も、何もかも、舐め回した。熱いわ。

・・・あゝ熱い・・・身体が熱いわ・・・

夢中だった。

「ありがとう、のん、良い表情だ、可愛いよ・・・ふふふっ一生懸命でさ・・・それ以上やったら、いってしまふ・・・」

それが合図のように、お湯の中での口での行為は、終わった。

「さー今度は、俺が愛してあげる、お風呂からから上がって、ここに来て」

勢いよく、立ち上がり、マットを敷いた、森本さん。敷いたのは、初めから備わっていた、大きめのマット。私は、既に言うがまま。

「さーおいで・・・のん・・・」

と、腕を取られ、身体を引きずられるように、マットに座らされた。

目の前に、裸の森本さんが立っている。

その「もの」が顔に近寄って来た。私は、黙って、森本さんの「男」を口に咥えていく。そのまま、少しの間、出し入れして、舐めまわした。

すーとゆっくり、引き抜かれ、そのまま、私は、マットに寝かされ、上から抱きしめられた。

「のん！」

「はい？」

「チェックするよ。」

「はい・・・」

いつも、そうする。私は、その行為に、既に馴れてしまっている。

薄眼を開けると、お風呂場の白く、くすんだ天井が見える。湯気が、森本さんの身体から微かに湯気が立上っている。

私を仰向けに寝かせたまま、両脚を大きく開かせ、上から、私をじっと見つめている。

「うーん、相変わらず、色が白くて、綺麗な身体をしているな・・・
・首筋にも皺が無い。足も長く素敵だよ・・・」私は、目を閉じて、黙って聞いている。

「もっと、開いて！」

「いやー・・・駄目ー・・・」

「開いてっ・・・！」

私は、少しずつ、自分から開いていく。森本さんの手が、私の両足首を掴み、ゆっくりと、左右に動く、その力に私は、更に開いていく。目の前に森本さんがいて、わたしの全てを見ている。馴れたとはいえ、心の中では、やはり、恥ずかしい。

・・・・・・あゝこんなに、男の人の前で、開くなんて。・・・・・・

「あっ！」

私の「女の子」に森本さんが、顔を埋めてきた。

「うゝん・・・・」と言いながら、顔を左右に動かして、確かめ始めた。

「うーん・・・・ふふゝ柔らかくて、良いぞー・・良く剃っている、毎日剃っているの？」舌が、舐め回している。お尻の方まで、舐め回し始めた。

「い、いやーお・お尻は嫌ゝん・・・・」舌は動きを止めた。

「下まで剃っているねー」

「はい・・・・恥ずかしいです・・・・」

「毎日剃ってるんだねー」

「はい・・・・」

「じゃ、今日は全部、剃ってみようか？」

「えっ、えっー嫌っ・・・・です・・・・それは嫌ー」

・・・・・・全部剃るのは嫌・・・・今までだってかなり抵抗があったわ・・・・誰かに・・・・誰かに見られたら怖い・・・・

「あっあっうーんゝ」舌が、柔らかい皮膚を、指と共に、上に押し上げられ剥かれて、舌で舐め上げられた。

「くっ・・・・くっうーんゝあっあーあゝゝん」少し大きめの声が出た。自分でも驚いた眼を開けて、森本さんを見る。森本さんの頭しか見えない。顔を埋めて動かしている。いつもは、気にして、声を

押し殺していたし、声を出すのも慣れていなかった。

「良いぞ～～今日は思いっ切って声を出してもいいよ」と、森本さんは、嬉しそうに言う。

「いや・・・いや・・・」

「じゃ、これはどうおおう？」

「うっやっ～～んくう～～」

「感じるかい？」そう言うのと森本さんは、一番感じる、小さな塊を、強く吸った。

「うっくっうう～～んあっあ～～ん」

・・・あっ・・・又強く吸った・・・あ～～ん・・・

小さな快感が身体を駆け抜ける。

・・・あ～～ん・・・いつもと違う、何、乳首とは少し違う感覚・・・

「あっ、駄目っ・・・そこは、ダメ！」私は足を閉じようとした。でも、森本さんの身体で塞がれた。

「何で？」

「お尻は、嫌！」

「そうか、じゃ今度にしようっ！」っと言って、また、小さな真珠を指で責め始めた。

・・・あ～～んあ～～んよ・良かった・・・お尻は・・・求められても、嫌・・・あ～～んもし・・・でも・・・怖い・・・

「あっあ～～んむむ～～そ・そんなに吸わないでえ～～」

「痛いかい？」

「・・・ううんうん感じ過ぎるの、あつ、又あうどうしよ、あつ、あつ、！」指が、女の子の中へゆっくり押しつぶす感じで、挿入って来た。

「感覚を追って！」と、命令調に言う森本さん。

「うつつ、つ、う、うつつん・・・あう良いわあうあうん」

森本さんの指と舌が追い上げてきた。回したり、つまんだり、なぞるように強く、柔らかく、舌と連動したその感覚、

「・・・なんて上手なんだろう・・・なんて・・・なんて気持ちがいんだろう・・・離れられないわ森本さん・・・」

身体が硬直してきた。お腹が上下に動き、頭が反り出す。足の爪先に力が入る。

言われたように感覚を追っている。どんどん来る。ずんずん来る。なんて気持ちが良いんだろう。なんて上手なの、その指の動き。森本さんの身体を締める両脚に力が入る。分からなくなった。夢中で追う、その感覚を動きを。

「・・・なに、なに、この感じ、あううあう堪らないうあうう良いわう・・・」

「あううううん・・・ひいひいあうあう・・・うつつううんんむう」完全に両脚が伸びきり、身体が「ぶるっぶるっ」と、震え急速に力が抜けて行った。快感が頭の上を通り過ぎて行った。

「・・・はっはっはあああうう・・・あううな・・・なんて・・・気持ち良いのう・・・身体が、震えている、小さく・・・止まらない・・・初めての経験だわ・・・何いう今の・・・」

森本さんが、私の顔を覗き込んでいる。薄目を開けると、目の前に、顔があった。

私の唇に軽く、キスをする、

「あーいったね・・・良かったかい・・・？」と言った。

私は返事する気力も無く、私の身体が死んだように、横たわっている。胸を乳房を揉まれても、何も感じない。

「もう一回、するかい・・・指で？」

「もう、・・・い・・・やゝ少し休ませて」とやっと応えた。

「凄い、感じ方だったね、良かった？」

「知りません・・・」と言って、顔を横にした。言われたくなかった。

「・・・全て全部・・・森本さんに見せたい見られた・・・あゝこんな感じ方は、今までになかったわ・・・」

「さゝ今度は、ベッドに行くよ・・・起きて！」

私は、そう言われても、直ぐには動けそうもない。森本さんが、立ち上がって、私を、起こしかけた。

「森本さん、ベッドで待ってて下さい。お風呂に入って行きますから・・・待って下さい・・・」

「そうか、じゃ、早くおいで・・・」

「俺も、入ろうっと」ザブンとお湯の中に入って、

「さーのんもおいで、」

「良いです・・・先に行行ってまって下さい・・・」

お湯の中で、そうっと、「女の子」を触ってみる。

「・・・ここが、凄く感じ・・・あの指の動き、少し、開きながら、触ってた・・・あんな風を感じるんだ・・・」

お湯から上がって、石鹸をつけて軽く洗い流した。そして、風呂場から出て、森本さんが、寝ている、怪しい光のする薄暗い部屋の奥にある、円形のベッドの傍に行くと、待ちきれなかったように、森本さんが、起き上がり、私の身体を抱きしめ、包んでいた、タオルを、筆り取る様に、脱がせ、身体の向きを反対に立たせて、背後から、乳房を両手で、強く、握り締めた。

「あっあううん」

乳房を強く握られると、急に身体力が抜ける。両方の乳房の乳首を、「くりくり」、「こりこり」と、回しながら動かし始めた。

その感覚は、さっきの、感覚と違う、疼きが、乳首を襲う。さっきまでの痺れは、お風呂に入ったお陰でやっと収まり、力が湧いてきて、新たな感覚が引き出される。後ろから、立ったまま、もみくちゃに揉まれる。そのまま、森本さんが、私を、ベッドに引きずったように後ろから押し倒した。

そのまま、森本さんは、顔の前に跨る様にして、「そのもの」を私の唇に押し付けてきた。

唇は、直ぐに開き受け入れる。初めてだった、こんなされ方は。

そのまま、倒れこむように横になる。私の身体はその動きについていき、口から離さない。

仰向けになった森本さんの「もの」を、起き上がり舐め回し始める。このやり方が、一番好き。森本さんは、私の口と舌と手の動きを、乳房を楽しんでいる。乳房を揉みながら森本さんが、言った。

「そのまま、上に、なって！」

「えっ？」

「上になって挿入れて・・・」私は、身体を起こし、森本さんの腰に跨るようにして半膝立ちになった。

「さく挿入れて・・・」

「は、い・・・」

私は、森本さんのものを右手で添えるように握り、自分の「女の子」に来るように身体を動かし、中心に来た身体を、静かに沈めていった。

ずぶり・・・と挿入った。

身体の奥でそのものを感じる。教えられた通り、下腹に力を入れて、「きゅっ、きゅっ」と締めた。

「おーいつも、それをしなさい、のんを感じるよ」

私は、森本さんの腰の上に座ってしまっていた。けど、深々と、挿入っている。森本さんが、中で、動かしたのを感じた。

「さー思いきり声を出しても・・・良いよ」私は、大きな声を出した事はあまりない。啜り泣くような、小さな声と思ってたけど、夢中の時の声は、分からない。私は、動かず。じっとしている。森本さんの両の手が、乳房を下から上に持ち上げながら、揉み始めた。

・・・あんあゝあううゝりよ・両方の乳首をつまんで引っ張った・・・

「あん・・・森本さん・・・や・さ・し・くー」

「痛いかな？」

「いえ・・・」そう言う、と、また、ぐりつと捻られた。

「あっ、い、いたっゝあんゝゝゝ」

「相変わらず、乳首が感じるんだねー」と言ったので、

「知りません・・・」乳房を、柔柔と、持ち上げるように、揉んでいる。

「さあゝ今度は、動いてごらん！」

「えっ、どうするんです？」と、赤い顔をしながら尋ねた。

「そうか、初めてだったんだねっよし、良いかい、まず、腰を、前後に動かしてごら．．さあそのままで、腰だけを、前後に！」
「えっこ．．．こうで．．す．で．．す．か？」私は、言われるがままに、動かした。でも、ぎこちない。内股が擦るように、森本さんの腰を動かす。

．．．．．なんて、いやらしいんだろう．．．

森本さんが、下から見上げている。下になっている森本さんと視線がぶつかる。

．．．．．恥ずかしいわ．．．．．そんなに、見ないで．．．

「それじゃ、ダメだよ、俺のお腹を押さえるようにして手を置いて、馬に乗るように、前後に動かしてごらん．．」と、言われたので、
「こうですか？」言われたとおり動かす。すると、少し動きだした。
森本さんを、感じる。

「良いぞーその動きそーそー段々．．慣れるよ、おっ良いぞーもつと激しく動かして、そー」

．．．．．痛いあゝゝゝなんか擦れて．．．痛いわ．．．

動きを止めた。私は、そのまま、倒れ込むように、森本さんに縋りつき、倒れこむように横に寝た。女の子を、埋めていたものが、するりと、抜け出していた。

「なんだーもう終わりかい．．お嬢さんは？」

「はい、．．．は．恥ずかしいです．．」森本さんは、私を抱きしめて、そのまま、上になり重なって来た。

「のん」

「はい?・・・」

「俺に抱かれるのは嫌かい?」耳元に囁くように言う。私は、もう一度、下腹に力を入れて森本さんを、きつく絞めた。

「嬉しいですよ・・・どうしたんです」じっと入ったまま動かない森本さんに聞いてみた。

「いやー嬉しくてね、こんな美人を抱けるなんてさ、それに、良く言う聞いてくれてさ、指輪も付けてるし、きちんと剃ってるし、・・・」と、上からじっと見る目が妖しく燃えている。

「森本さんがそうしなさいって、」

「そうだ、可愛い奴、お願いが有るんだけど、」と言って、動き出した。

・・・・・・ あん・・・ あっ あっ あゝん あっ あっ・・・・・・

小刻みに、攻め立てる。その動きに合わせて、声が出る。

「なんです?」

「そうだなー今日は止めところ」

「えー、なんです・・・お願いって」

「今日は良いよ、さー、今度は、俺が、のんを愛してやる。」そう言くと、

私の、身体をひっくり返し私はベッドにうつ伏せになった。

直ぐに腰の辺りに押さえつける手を感じ、腰を持ち上げようとする力を感じる。

腰を持ち上げると、私のお尻を、「ピタ、ピタ、ピタ」と手の平で三度、いつものように少し強めに叩く。痛い、でも、初めは、何で叩くのか分からず、嫌だったけど、二度、三度と叩かれるうちに馴れて、それが合図のように、腰を高く持ち上げる。完全に、お尻だけが、高くもち上がり、顔は布団に伏せたまま。少し苦しい。

・・・いつも、想像するのは、三角形の頂点に私のお尻がある、い

やらしい姿・・・

お尻だけが強調されるその姿。初めは、とても嫌だったけど、初めて、後ろから、お尻を掴まれ、侵された時の、あの、ズンっ、ときた、感覚は今でも忘れない。

・・・あゝ見られているゝゝ後ろから、覗き込んでいるわ・そんなに見ないでえゝゝ恥ずかしいわ・・・

私が、その姿を想像して、腰を動かそうとすると、お尻を、強く掴まれ、押さえつけられた。

「そのまま！」強く言われた。腰が、嫌、嫌をするように横に動く。「恥ずかしいですー」

「なんだ、じっとしていなさい。良く確かめてるのさ、」

・・・女の子に指が入って来た・・・

「あんーいつ、いやゝゝ」お尻を高く上げたまま晒した女の子に指が入ってきて、指が、中で蠢くのを感じる。

「絞めてごらん！」下腹に力を入れる。でも、

・・・分かんないゝゝ・・・

「良いようゝもう一回・・・その調子・・・絞めて・・・よううし、良い締めまりだよ、じゃ挿入れるよ」

ぐっと、強く押しこんできた。お尻を高く掲げたままで、ズン・・・と貫かれた。

・・・あんあゝゝああゝゝ深いゝゝ・・・

森本さんが動き出した。どんどん、打ってくる。突き上げてくる。お尻をつ掴む手に力が入ってくる。

暫くして、私は気がついた。尻をぶつけて動いていたのは私だけだった。

私は、夢中で、何が起こっていたか分からなかった。

「止めないで、そのまま！」そう言われて、はっと、気づいた。森本さんの動きに合わせて、私は、腰を、お尻を、森本さんに、自らぶつけていたらしい。

「そのまま、前後に動かしなさい・・・」

・・・気がつかなかったわ・・・そ・・・そんな・・・自分で・・・動いていたなんて・・・あ～～・・・

それでも、

私は、言われるがまま、前後にお尻を動かした。

・・・な・・・なんて、はしたない、自分から、森本さんに合わせてお尻を振ってたなんて・・・だって、激しいんだもの・・・お尻を掴んで、森本さんに、ぶつかるように・・・するんだもの・・・
・あん、あつ、今も、あ、あ～～ん・・・

「おはようございます。加藤さん、おはようございます。」

「う、うん、おはよ、・・・」

「この前は失礼しました。加藤さんのお連れの方、綺麗な方でしたよ。」

「う、うん、ちょっと、わけありでね。」加藤さんの、表情が曇った。

「そうですか、頑張ってくださいね、」

「そ、そじゃないんだけど、そ、そうだなー、」一人で言葉に詰まっている。

「どうしたんです？いつもの加藤さんらしくないですよー。」

「いや、元気なんだけど、それより、是永さん、何で、岩崎と一緒にだったの？接点あったっけ？」勢いこんで、聞いて来た。聞かれると思っただ。

「あれはですねー内緒です。はははははー内緒ですー！」

「なんだー可笑しいねーテーブルの上には、4ー5人分の料理の跡があったよね、あれは、合コン？」

「はい、合コンでしたーうふふふー」

「笑わないで、教えてよ、でも、無理に言わなくてもいいけどさー、ちょっと、岩崎君がねー気になってた」

朝の会話がスムーズに出来た。少しの負担が有り、心の何処かで、ずっと、気になってた。

「今日、会社終わったら、コーヒーでも、飲まないー？」声が、遠慮していた。

「今日は、ちょっとー、休みに、実家に帰って、お仕事手伝ったから、少し疲れてるんです。」

「そっかーご実家に帰ったんだー商売忙しいんだ、・・・ご実家」

「はい・・・」嘘をつくつもりはなかったけど、疲れは身体に残っている。身体のあちこちが痛かった。

昨夜は激しかった。初めての、モーター。初めての経験。興奮していたわ、私。思い出すと、女の子の辺りに、キューーと、疼きを感じる。

「どうしたの？朝から、ぼうとしてるよ、まだ週が始まったばかりだよ。元気出して・・」

「はい、加藤さんって、いつも優しいですねーありがとうございます」

「何を言ってるのさ、さっ、が・ん・ばろーろー！」

午後に、岸浪さんがやって来て、色々話して言った。自分の事ばかり、楽しくて、嬉しくてたまらないみたい。最後に、

「岩崎さん、本気よ、是永さん、真面目に考えてよ。」

「はい、・・・」

・・・・もう、叔母さんが動いてる、きつと、来月に、お見合いするわ、きつと・・・森本さんには、まだ黙っていようつと・・・

夕方近くなって、岩崎さんから電話があった。お見合いの件、実家に帰って、両親から聞いた話を話し、叔母さんが、日取りを決めるみたいですよ、来月にして下さい、とお願いしました、と言ったら、

「来月、来月ですね、母に直ぐ段取りを取ってもらいます」勢いこんで言う。

「でも、岩崎さんホントに、私とお見合いするんですか？私で良いんですか？」

「是永さんでなくちゃ駄目なんです、絶対！」と言った声に力が入っている。

「でも、お見合いしたから、お付き合いって・・・？」

「待って、それ以上言わないで、お見合いの席で、聞くから！」と言
言って、電話を切ってしまった。

私には、森本さんがいる。毎日と言っているくらい、抱かれてる。

・・・お見合いは、するけど、無理だわー。・・・

暫くすると今度は、加藤さんからだった。今朝の事を、聞いてき
たけど、お見合いの事は黙っていた。ご一緒していた女性の事を、
何回か繰り返して聞いたら、困ってしまったて、電話を切ってしまっ
た。

会社は、定時に終わり、今日は、まっすぐへに帰って、ゆっくり
するつもりだった。

帰りに近くのスーパーに寄って、食材を買って帰る途中で、走って
来た若い男に、すれ違いざまに、乳房を触られた。両手は荷物で塞
がっていて、どうしようもなかった。

その男は、あっと言う間に、走り去って行った。荷物を片方落と
して、声を出した時には、その男は既に走り去った後で、どこにも
いなかった。悲鳴に、驚いて、何人か、傍にやってきたけど、どう
する事もなかった。

・・・触られた・・・く・悔しい・・・

森本さんの顔が浮かんでは消えていた。

逃げるようにその場を離れ、歩いて、部屋まで帰った。悔しかった。
何か、不潔で、自分が嫌だった。そのまま、部屋に入って、戸を閉
めると、我慢していた、涙が出てきた。

どうしようもなく、悔しく、悲しかった。泣いた。急に、寂しさが、
湧いて来た、

・・・・森本さんに逢いたい・・・・

森本さんの携帯電話に電話したかったけど、お家に帰っていれば、奥様がいる・・・

・・・・電話は出来ないわ、特に夜は・・汚れた、身体を洗い流さなくちゃ・・・・

お風呂からあがって、直ぐに、電話が鳴った。

・・・・森本さん、かしら・・・・

「もしもし、」

「こんばんは、お嬢さんは、お元気ですか？」変な高い声で、言うのを聞いて、急に、涙が溢れ、受話器に啜り泣いてしまった。

「なに？何したの？なんで泣いてるの？」と、声が急に低くなった。

「ううん、・・・・い・良いんです・・・・もう・・・・」

「泣くってのは、何かあったからだろ？何が、あったの？」益々声が、低くなった。

「もう・・良いんです」

「良くないっ！言って、どうして泣いてるの？」

「・・・・・・」

「ノン！」受話器が驚く。

「は・い・・・・・・」

「今から行く・・・・」

「えっ、でも今日は、お家で、食事するって？」

「ばか、泣いてる女が目の前にいるんだから、助けに行かなくちゃ、いま、近くにいるから、」

「でも・・・・・・？」

「デモなに？」

「もう、5分で着くよ。」

「はい・・・」

・・・ピンポン・・・来た・・・

私は嬉しくて、たまらず、急いで、玄関に走って行って覗き穴を見ないで鍵を開けた。

・・・あつ、違う・・・

森本さんでは、ない・・・一瞬心臓が止まると思った。
そこにいたのは、別の人間だった。驚いた。森本さんではなかった。

「あ、あなたは、・・・先生？・・・先生ですよ、どうしたんです。??今頃？」

「あー良かったー開けてくれて、出ないんじゃないかと思ってた。」

「こ、困ります、帰って下さい。」

「い、いや、話を聞いて欲しくて、電話にも出てくれないし、」

「困ります、はっきりと、お断りしたはずです。帰って下さい、お願いしますから。」

「5分、5分で良いから、話を聞いて、お願い、・・・頼む、」

「いやです、今から人が訪ねてきます、迷惑です、帰って下さい。」

「人が来るって、彼氏？」

「あなたに、関係ありません、帰って下さい。」ドアを閉めよう
とすると、ドアを押さえられた。

「や、止めて下さい、!!!!!!」

「こらーてめー何してんだー」と、階段下の方から声がした。

・・・森本さんだった。・・・

「何してんだー、」と、森本さんが階段を駆け上がると同時に、先生が下へ駆け下りた。森本さんが階段途中に立って構えたら、その脇をすり抜けてあつと言う間に、姿を消していた。

こんなに大きな声で騒いだのに、誰も覗かない、ドアも開けない。

「どうしたんだ？」

「も、森本さん、・・・」顔を見た瞬間、涙が出てきた。

「どうしたの？さっ、中へ入ろう。」

「はい・・・」

狭い玄関の中に入ると、森本さんは、ゆっくりと静かに後ろから私を、抱き締めた。そして、振り向かせると、壁に私の身体を押し付けて、両頬に手を当て、唇を重ねて来た。

「なんだ、あの男は？」

「学校の先生、自動車学校の先生、しつこくて、」

「あーあいつがそうか、何回か聞いた事があった奴だな。で、何しに、ここへ来たんだ？」

「分かりません、話を聞いてくれって言っていました。」

「なんで、ドアを開けたの？のんらしくないなー？」

「森本さんが悪いんです？」

「な、何で俺が悪いんだー？」

「早く来ないからです！てっきり森本さんだと思って、確かめず、ドアを開けてしまったんです。」

「俺だと思ったんだー」

「そうです、開けたら、あの人が目の前にいたんです。」

「ははっははーそうか、」

「笑いごとじゃないです、びっくりしたんですよ、」

「ごめんごめん、俺だと思ってドアを開けたんだ、何もなく良かった。」

「はい、今日は、痴漢に触られるし、突然先生が現れるし、大変で

した。」

「痴漢？痴漢って何？聞き捨てならないなー？」

森本さんに、さっきの出来事を詳しく、教えた。

「どこを、触られたの？」

「向こうから歩いて来たんです。普通に歩いていたんです。すれ違いざまに、左の胸を、掴まりました。」

「知ってる奴？」

「いえ。」

「声を出したんですけど、アイツは、走って、逃げて行っただけです。悔しくて、びっくりして、あー悔しい、あんな奴に、触られるなんて、」

「怪我はなかったんだ、」

「はい、」

「どうしようもないなーそいつは、前から狙ってたのかなー、のんは、綺麗だからなー、黙っていたって、目立つし、」

「そんな、ことはないですよ、私より綺麗な女の人っていっぱいいますよ。」

「そりゃいるけど、のんは別格だからなー、気をつけなくちゃなーほんとに、」

「えー。」

「でーさっきの野郎はなんだい？今度は、すとかーって奴かい？」

「自動車学校の先生、私を教えてくれた先生なんです。しつこくて、通っている時も、交際してくれて、何回も言われました。お断りしたんですけど、何回も、まさか、部屋まで来るなんて、信じられません。」

「奴がそうか、俺が来たもんで泡食って逃げて言ったなー、初めてかい？来たの。？」

「はい。怖いです。痴漢も怖いんですけど、あの先生、また来そうではないか……」

「うん、分かった、あの先生の勤め先は、確か、〇〇〇〇学校だっ

たよなー、」

「はい、・・・」

「あそこの理事長に話を通してやる。俺は直接知らないけど、あの理事長に話の出来る、社長知ってるからさ。これ以上、ちょっかい出したら、首にしてやる。」

「はい、お願いします。でも、・・・」

「でも？なんだい？」

「かえってエスカレーターしません？」

「任せておきなさい、怖いお兄さん方知ってから、のんは、気にする事はないよ。」

「でも、・・・」

「ノン！」

「はい、」

「痴漢の方は、知らない男なんだろ？」

「えー・・・」

「痴漢の事は、もう、俺にはどうする事も出来ないけど、先生の方は、任せろ！良いね。」

「はい！お願いします。怖い、お兄さんて、なんだか、森本さんも怖いですよー、」

その時の森本さんの表情は、とても、冷たかった。普段、見せない顔！

背広の上着を脱ぎながら、

「のんシャワー入って！」

「はい！！」いつもの一言を言われた。ほっと、安心感が全身に広がる。

抱かれたかった。忘れたかった。怖い思いをした分、抱かれたかった。

・・・消したかった・・・

行為が終わって、森本さんに抱かれながら、引いた感覚を追っている。森本さんは、いつものように、乳房を「やわやわ」と揉みながら、目を閉じている。今日は、早かった。

「森本さん？私の他に、何人と付き合っているんです？」ずっと、心の奥底にあった。聞いてみたかった。

「どうして？そんな事を聞く？」と、乳房を弄んでいた手を止めて、私を覗き込むように聞く。私は、森本さを見ないで、目を閉じた。

「気になるのか？」

「はい、」と小さく頷く。

「そうだなー、なんて言えば満足するかなー？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「付き合ってる女は、ノンだけだよ、」

「ホントですか？」目を開けて、聞く。

「ほんとだよ、付き合ってるわけじゃないけど、いつでも抱ける女は、うーん、12人くらいはいるよ。」

・・・・・・・・そんなんですか、・・・・・・・・12人もいるんだー・・・・・・・・

「私は、その中の一人なんですね？」

「そうじゃないよ、のんは特別な女なの、今一番大事に思ってる女だよ？嫌かい？」

「いえー、12人、12人もいるんですか？」

「だから、付き合っているわけじゃないよ。」むきになっている。

・・・・・・・・そうなんだ、私は、その中の、一人なんだー・・・・・・・・

「ねー森本さん、」

「うん？何？怒ったのか？」

「いえ、そうじゃないですよー、森本さん・・・」

「なに？どうしたの？」

「私に飽きたら、捨てて下さいね。」私は、森本さんの胸に頭を乗せて言った。すると、森本さんは、急に起き上がり、私の身体の上に身を乗り出し、覗きこむように、私を上から、見た。森本さんの強い視線を受け止める。怒った表情。

「もう一回言って！」声が、低く沈んでいる。

「飽きたら、捨てて下さいね。私は、良いですよ。」

「ばっか・・・本当にそう思ってるのか？」

「・・・」

「じゃ、ほんとに、今、捨ててやる！」

「今は嫌です、・・・」

「あー分かったよ、そんなに捨てられたいなら、今捨ててやる、」

「だめー、だめー今はだめー」と言う。

「だって、捨てて欲しいんだろ、道路に、ゴミのように捨ててやる、」

「いや、酷いー」

「他の誰よりも今は、大事な女だよ、のん！」

「はい？」

「つまらない事を言うな。罰として、お尻を高く上げろ、」そう言いながら、私の腰に手を当てて、力強く、持ち上げた。

「い、嫌ー、」頭が、布団にめり込む。お尻だけが高く持ち上がっている。

お尻に、森本さんを感じると、入って来た。

「あん、あー・・・」

「のん？ここは誰のものだ？」腰を私のお尻に強く打ちつけて聞く。

「お、森本さん、さんのー」

・・・そこは、森本さんのものですよー・・・

森本さんが、強く私のお尻を前後に動かし始める。私は、その動きに合わせていく。

会社

「昨日、痴漢にあったんですよ、怖かったですよー。」

「ち、痴漢て？痴漢？ん？どこで？」加藤さんが身構えた。

「駅のジャスコのお店の前です。お買いものして帰る時にです。両腕が荷物でふさがっていたんですよ、走りざまに胸を触られました。びっくりして、泣きました、悔しいです。ほんと。」

会社の部屋には、たまたま加藤さんと二人きりだった。

「誰？見た事のある奴かい？」

「いえ、知らない男でしたよ。」加藤さんが、顔色を変えて聞いて来た。

「あんなところで、痴漢かー、周りにたくさんいたでしょう、人が？」

「私が、声をあげた時には4、5人いました。あつと言う間に走って逃げたんです。」

「あそこは、そんなに暗くないし、許せん奴だなー、怪我はなかったのかい？」

「はい、大丈夫です。」

「今日、お茶でも飲むかい？」遠慮しながら聞いて来た。

「いえ、お酒が飲みたい気分です。」

昨日の夜、森本さんに抱かれている時に、月の使者がやって来た。それでも、構わずに抱かれ、帰り際に、暫く逢えないと言われた。

それでも、……

「おっ、珍しい、俺で、いいの？」

「はい、この間の、綺麗な人には、かないませんが、私、お友達誘いますから、加藤さんも誰か誘ってください。たまには、飲み会しましょう、忘れたいんです。」

「ほんと、珍しいなー、ようし、二人きりじゃダメ？」

「だめ。」

「残念だなー、じゃ誰か誘ってみる。」

「じゃ、今日は、7時に、この間のお店でどうですか？」

「いや駄目だよ、あそこは嫌だよ、じゃいつものホテルのロビーにしよう。7時ね。」

そう言って、出て行った。余程嬉しいみたい。しばらく森本さんは、部屋には来ない。月の使者が去ってゆくまでは。来ない。淋しいけど……でも……来る。

私は、会社の販売部の沙織さんを誘った。私よりも1年先輩。歳は、23歳、身長が私より高く、すらーとしたスタイル。あまり、深いお付き合いはしたことが無かったけど、会社の飲み会で、会った事があった。優しく、いつもニコニコしている優しい、誘えば断らない性格みたい。結構、あちらこちらの飲み会に誘われているって聞いている。会社の電話を使い、沙織さんに、

「今日合コンするの、参加して」って誘ったら、

「参加します。」って即答。

待ち合わせ場所に一緒に行く事にして、夜を待った。加藤さん、誰と一緒にかなー？仕事の時間は、どんどん過ぎてゆく。

「もしもし、ゼニオンですがー、あの一？」

「やー、お嬢さんは、相変わらず可愛い声を出すねー」森本さんだわ。

「もしもし、そのようなお名前の方は、おりません、」

「ははははー相変わらずだなー、好きか？」

「いえ、嫌いです。」声が低くなる。

「好きか？」

「はい。」

・・・・・・会社ですよー・・・・・・

と叫びたかった。頬の辺りが、熱い。

「ストーカーの件、もうしないと思うよ。手を打っておいたからさ、」

「ありがとうございます。」忘れていなかったんだー。

「まだ、終わらないの？」

「あのー何かのお間違いでは、ここはゼニオンと言う会社なんですけどー」

「あっそうだったなーいやごめんごめん！じゃーねー」

「はい失礼いたします。」

・・・・・・もうー、まだ、終わらないんです・・・・・・

でも、自動車学校の先生の事は、これで安心だわ。

・・・・・・ほんとに、シツコイ男の人って嫌いだわ、しつこい先生。
・・・・・・

森本さんの顔が浮かんでは、消えた。

「今晚はー」待ち合せのいつものホテルのロビーに行くと、何処かで、見た事のある人が、ソファーに腰掛け煙草を吸って座っていた。

・・・あつ、矢崎さん・・・

それは、矢崎さんだった。あれ以来随分お会いしていない。

・・・森本さんも来るのかしら？・・・

そんな、思いが一瞬浮かんだ。

矢崎さんは、まだ、私には、気が付いていないみたい。よく見える場所に、ソファーを選ぶふりをしながら、少し移動しながら、矢崎さんを見る。お髭が、似合ってる。難しい表情で、何かの書類を見ている。

・・・お仕事のお打ち合わせかしら、仙台から、来たんだわ。今日来たのかしら？・・・

私は、どこかのソファーに座っているかもしれない、加藤さんを探した。

一緒にいた沙織さんが私に、

「是永さん、加藤さん達まだみたいですわね、ここ、座って待ちましょうか。」周りを見ながら言う。

「そうですね、じゃ、座って待ちましょう。」私と、沙織さんは、ソファーに座って、コーヒーを頼んで、加藤さん達が来るのを待つ事にし、私は、矢崎さんが、見える場所のソファーに腰かけた。

「是永さん、合コンはするの？」

「えーたまにですけど、お付き合い程度には、誘われると、付き合いますよ。」

「私は、久しぶりー、まーでも、合コンっても、ほとんど飲み会よねー、今日は、加藤さんと一緒だし、楽しみましょ。」

「はい、」そう返事をして、矢崎さんの方を見ると、矢崎さんと、目が合ってしまった。

私は、小さく頷くように、頭を下げた。矢崎さんは、そのまま、視線を、書類に落として、それから、こちらを見ることはなかった。私と森本さんの事は、知らないのかも知れない。

その方がいいけど、少し、寂しくも感じられた。でも、知っているかも知れない。

「誰か、知ってる人ー？」

「えー少しね。」

そこに、加藤さんが、私の知らない男の人と一緒に、やってきて、「ごめん、ごめん待たせちゃったね、こちらは、法樹会病院の木田さん、」と、その、少し、今風の感じがする、男の人を紹介した。

「はじめまして、是永です、」

「いやー噂に聞いていたけど、やっぱり綺麗な人だー、今日は、宜しく願います。」

私と沙織さんは、初対面の木田さんに、挨拶をして、ソファーに腰かけて、矢崎さんの方を、ちらりと見ると、笑いながら、こちらを見ている人がいる事に気がついた。

・・・森本さんだった・・・あーみられちゃったー・・・

でも、直ぐに視線を外したけど、顔が、少し、熱くなったような気がした。再び、森本さんの方に視線を向けると、既に、誰もそこには、いなかった。あの日のように、胸が再び、寂しさを感じた。そこだけが、その空間だけが、ぽっかりと空いているような気がした。

「どうしたの、気になるの？知ってる人だった？」

「いえー、じゃ、食へに行きましょう。お腹すいちゃったー」

「じゃ、ここの、地下にある焼肉屋にしよう、さー行こう。」と、加藤さんが、立ち上がり、歩きだした。私と沙織さんは後ろに従っ

て歩く。

「……森本さん達、どこへ、いったかしら、矢崎さんと一緒だから、あそこかなー?」
「……でも、随分、矢崎さん、疲れた様な雰囲気があったわ。忙しいんだーきつと、大変だなー。……」

来週は、いよいよ、お見合いの日だわ。叔母さんがこの一月、一生懸命に実家に出入りしていたみたい。私は、全く乗り気ではなかったし、ずうと、毎日と言うくらい、森本さんが、部屋に来て、私は、身体を開いていた。それが、当たり前になっている。

でも、昨日の夜、行為が終わってから、森本さんが、衣服を着け始めた時に、私は、森本さんに、お願いした。

「森本さん?」

「なに?なんかしたかい?」

「……」

「そっかーもう一回して欲しいのかー?よしじゃ、……」

「違いますー違います、今日は十分愛してもらいました。」

「満足かい?」

「はい、……でも、」

「うん?でもどうしたんだい?」

「あの一、森本さん、もうこの部屋では、お会いしたくはないんです。」

「えっ?どうして?俺の事、嫌いになったのかい?」

「そうじゃなくて、森本さん帰っちゃうでしょ、残された、私、嫌なんです。」

「そうかー、俺は、泊まっていけないからなー、ごめんな。」

「いえ、……でも、もうこの部屋では、嫌なんです。」

「分かった、じゃ、外で、逢おう、それで、良いならそうするよ。」
「はい……済みません。一人、お部屋に取り残されたみたいで、何にもしたく無くなるんです。穴があいたみたいで……寂しい、……」

「よし、分かった、そうする。じゃ、明日、迎えに来る、夕方の6時過ぎに、ドライブしながら、食事をしよう。いいね。」

「はい、……」暫く、部屋の中でばかり逢っていたから、外に出るのは久しぶり。

「のん？好きか、？」

「はい、」近づいてきて、私の左の乳房を、グイっと、強く握った。
「あーん、」顔を顰めても、森本さんを見つめる、視線は外さなかった。

この、思いは、近頃ずっと、森本さんが、帰るたびに、感じていた。それまで、この部屋で、私の身体を自由にしていた、森本さんが、「帰る！」と言って、急に部屋からいなくなる、森本さんの存在が無くなるという、帰った瞬間から始まる、その感覚は、今では、慣れずに、辛い。初めの頃は、それでも、帰れば、なんかほっとして、かえって良かった。

でも、抱かれる回数が、多くなるにつれて、頭ではなく、私の身体が、肌が、乳房が、女の子が、口が、もっと傍にいたい、もっと抱かれたいと、私の身体に、私の心に云う。

帰って良かったその感覚が薄れ、「もっと、もっと、傍にいて欲しい、と言う要求が心を占めるようになっていく自分の心の変化を感じていた。一緒にいたい」と思う気持が、日増しに強くなっていく自分が、嫌だった。

森本さんに向かって、自分の嫌な部分を、嫌味を言いそうになる自分を想像すると、早く言ってしまうおうと思っていた。

……森本さんに、そんな自分を見せて、嫌われたくなかった。・

・・・

どこか別な所で、お逢いして、抱かれる、それでいい、この部屋じゃないや。この部屋では、もう、耐えられなく、なっていた。

「森本さん、怒ってます?」

「いや、何でそんなこと聞く?」

「なんか、嫌な事を言っただけで、ごめんなさい。」

「気にしてないさ、ノンがそうしたいなら、そうすればいい、ノンお嬢さんの仰せの通りにするよ。それでいいならさ。」服をすっかり着終わり、改めて、私を抱きよせ、唇を重ねてきた。

「好きか。」首筋を吸われながら、

「くすぐったいー、い、やー」

「好きか?」

「はい、好きですよー。」

「じゃ、行くよ。」

「いや、帰っちゃダメ、」森本さんの動きが止まって、私を見始めた。

「うそ、」

「こら、驚くだろ、良いよ、じゃ今日は、泊まっていくよ。」

「ごめんなさい、森本さん、嘘です、嘘ですよ、」

「で、今週の金曜日、休みは取れたのかい?」

「おーそれは良かった、じゃいいんだね、京都に行くよ、」

「ダメです。ちょっと、別な用事が出来たんです。」

「またまた、そういう事を云う、もう飛行機の切符は取ってあるからね、」

「どうしてもですか?」

「あれ、さっき布団の中で、行きますって言わなかったかい?」

「あの時は、夢中で、用事を忘れていました。」

「ほーそうかい、そんな事を言うとは、こ、困ったーおっじょう」

さくらんだゝあなー」と、変な抑揚のある言いまわしで、私を引きよせて、パンティーをつけていないスカートの中に手を入れて、女の子を、強く握られた。

「あっ、い、嫌ー、・・・・・・・・」

「何？用事って、？」

「じ、実家に帰らなければならなくなりました。うっ、・・・・」指が、遠慮なく押し入ってきた。

・・・・・・・・あゝだめゝゝ・・・・・・・・くうー・・・・・・・・

「なんかあったのかい？」と、聞きながらも、指がなかで蠢く。

私は、目を閉じて腰を動かす、その指の動きを追いながら、揺れながら、動かしている。すると、私を反対向きにさせて、背中を強く押して、きた。

・・・・・・・・えっ、なにー・・・・・・・・？また、上から押さえつけるように、私の背中を、押す。

私は、押されるままに前かがみになり、そのまま、ソファアの座席に手をおくと、森本さんが、直ぐにスカートをめくって来た。お尻がむき出しになる。私のお尻をつかんで押さえると、ぐいっと、私の女の子に当たるものが有り、そのまま、挟るように、グイと、侵入してきた。

・・・・・・・・うっ、うゝん・・・・・・・・入って来た。また・・・・もう・・・・後ろから、立ったままで、されるのもう何回もあるから、言われたように、入って来たものを、絞めつけていた。

京都

仙台空港に到着したのは、金曜日の朝、8時頃だった。自宅に迎えに来た車の後部座席に乗ると、車はいつものように、裏道小道を、滑るように、縫うように走って行く。森本さんが名づけた不倫ロードを、走って行く。

仙台空港は、宮城県仙台市の隣の市である、名取市の海岸傍にある。

・・・・・・飛行機に乗るのは、これで4度目かなー？・・・・・・

仙台空港に着くと、森本さんは、荷物を降ろしながら、私に言った。森本さんは、いつもの背広姿に、鞆一つを持って、どこかに仕事に行くような雰囲気である。荷物を持たないのは、きっと、旅慣れたるんだわきつと。

私も、仕事に出かけるような服装を選んで、着てきたのは、正解だった。

「さーいよいよ、京都へ行くよ。」

「はい、」後ろについて歩きながら、応える。車が、ひっきりなしに、出入りしている。

「10時出発だから、中で待とう。飛行機は、ANA、降りるのは、伊丹空港だよ、」

「はい、覚悟して、ついていきます。」

「なんだーおかしなことを言うなー、？」

「だって、落ちるかもしれませんよ、森本さん怖くないんですか？」

「ははははー、ノンは飛行機初めてかい？車の中では、なんにも言わないからさ、慣れてるんだろうって思ってたよ。」

「なれません。鉄の塊が、空を、飛ぶなんて、不思議です。」

「まー、朝飯でも食べながらにしょ、さー」

「はい、」

空港の中は、思った以上に小さく感じられた。そのまま、階段を上がり、二階にある小さなレストランに入った。

「大丈夫だよ。飛行機は、落ちないからさ、心配しなくても大丈夫だよ。10…00だったよね。」

「はい、・・・森本さんと一緒に死ぬのは、いやだなー」

「はい、ハイ、お嬢さんには負けますなー、ほんと、京都行ったら、ただじゃおかんからねー、犯して、犯しまくってやる。」はははははははーと、流石に、大きな声では、笑えなかった。私は、舌を出して言ってやった。

「うわーいやらしい、朝から、良くそう言う事が言えますねー、帰ろうかしら、」

「何を言ってる、キツネさん、ノンが火をつけたんですよー」

森本さんは、平気な顔で言う。

「えっ、火なんかつけませんよ、でも、どうして、京都なんです？修学旅行以来ですよ。」

記憶が、一瞬蘇る。あまり、楽しくはなかったけど。

「おっ、そうかー言っただけ、茶室、茶室を見に行きたいんだ、」

「えっ、茶室ですか？茶室って、あの、お茶の茶室ですよねー？」

「そう、軽く、サンドイッチで良いよ俺さ、」傍に、ウェイトレスさんが来たので、

「じゃ、私は、コーヒーで良いですよ、」と、応えて、ウェイトレスさんに、注文して、気になっていた事を、聞くことにした。

「ねー森本さん？」

「矢崎さんと、この前お会いしましたよね、ホテルの待合室で、？」
「あれーそうだった？、あー思い出した、ノンも誰かと、一緒だったよねー、新しい、彼氏かい？」

「森本さん？」

「うん？」

「私たちの関係、矢崎さん御存じなんですか？」

「いや、知らないよ。」

「えっ、知らないんですか？」

「知らないよ、俺は、人に言ったりしなよ。どうしたの？」

「いえ、・・・知ってて知らないふりしてるのかなーって、思ってしまったし、あの夜以来、お会いしてないじゃないですか、随分、久しぶりでしたよ、」

「そうかー、あいつ、色いろあってねー、帰れなかったんだ、電話では、話をしてたけどさ、会いたいなの？」

「いえ、知らなかったら、良いんです。」

「・・・森本さんは、てっきり、矢崎さんに、私たちの関係を、言っているものと思ってた、森本さんって、意外と、慎重なんだー・・・矢崎さんに言っただけで、誰にも、言っただけ・・・良かった。」

「色いろって、何かあったんですか？矢崎さん？」

「うん、まーねー、奥さんと、やっと別れたよ。」

「えっ、別れたんですか？いつです？いつ、別れたんですか？」

「あー、奥さん、ずっと、不倫してたんだ！」森本さんの表情が少し曇った。

「えっ、不・倫・ですか？・・・」私の事を、言われたような気がして、ドキリとした。不倫と言えば、今現在、進行形で進んでいる、今日もこれから、京都に行く。

「うん、矢崎の奥さん、結婚する前から、不倫してたんだ。」

「えっ、誰とです？」

「誰かとかは、分からないけど、結婚する前から、ずうーと、同じ男と付き合っていたらしいんだー、その相手には、奥さんがいて、一緒になれ無かったみたいなんだ。だから、ずっと、不倫してたんだって。なんでも、会社の上司みたいだねー」

「そうなんですか？・・・」まるで私の事を言われてるみたい。

「一度は、別れたらしいよ、結婚するからと言って、でも、子供が2人出来て、会社に再び行き始めてから、また、関係が復活した見たいなんだ。それから、5〜6年ずうと、その関係は続いたんだなー。知ら無かったらしい。矢崎はさー。」

「・・・」気持が落ち込んできた。

「・・・私だったら、どうするかしら？森本さんと別れたら、私は、絶対に戻らない。だから、今は、別れるのは嫌。別れたくない。・・・」

「うん、どうした？」

「いえ、なんか、私たちの関係みたいで、・・・」

「そうだなー俺もそう思った。話を聞いてさ、でも、奥さんも奥さんだよなー、矢崎が、可哀想でさー」

「そうですねー、子供さんは、どうしたんです？」

「あー、誰の子供か分からないから、全部、奥さんの籍にしたって言ってた。」

「そんなー、子供さんが、可哀想、・・・」

「でも、奥さんの実家、資産家らしいから、引き取ったんだろ、詫びる言葉は、なかったらしいよ、だったらさ、初めから結婚しなれば良かったんだ、」

「そうですねー、で、矢崎さんどうしてるんです？」

「あー今、アパートに一人暮らししてるよ。」

「そうなんですか？大変ですねー。」

「あーさっぱりしたとかいってたよ。」

・・・・・・気持が、少し、お、重かった。・・・・・・

「ノン、そんな顔するなよ、今日は、これから、修学旅行だぜー、俺、高校時代に、家が貧乏してて、修学旅行言った事がないんだ。だから、今日は、京都に行けるってさー、なんか、わくわくしてるんだ。」

「えっ、そうなんですか？まるで、それじゃ、ホント小学生が遠足に行く時みたいですよー？」

はい、私も、楽しみです。宜しく、ご案内、お願いします。」と言
って、軽く頭を下げた。

「うわっはははははー、うん、うん、いい子だ、わしに任せなさい、悪いようには、せんから、うわっははははははー」

「うわー嫌だー、まるで、怪しいスケベな、オヤジーって感じですよ、うわー嫌だー、」

「じゃ言い直すよ、先生について来なさい、で、どう？」

「それも、だめー、セクハラ先生みたいですよ。」

「なんだーあれを言ってもダメ、これを言っても駄目じゃ、あ・ち・き・の立つ瀬がな〜い〜でー、ごうあーんす〜」

「またまた、いい加減な言い方をして、知りません。」

「はははははははー」全く、変な人、でも、

・・・・・・飛行機落ちないかしら？・・・・・・

大阪伊丹空港には、あっという間についた感じがした。揺れもしなかったけど、滑走路から、浮いた瞬間、身体が強張るの感じた。一気に上を目指して斜めに上がって行く飛行機って、素直に凄いと

思った。森本さんは、平気な顔をして、じっと、私を見ていた。でも、話すわけでもなかった。ただ、時の過ぎ去るのを待っていた。やはり、慣れないわ。

空を飛ぶなんて、どこかが、おかしい。そんな事を考えながら、時間は過ぎる。

「さー、京都へ行くよ。だいたい50分くらいで着くよ。」

「はい、修学旅行以来です。何だか、わくわくします。」

「そうか、それは、重畳、重畳、はははははー」

「も、森元さん!!」

「うん、さっ行こう」と言うと、まるで知ってるかのように歩きだす。

「こっちで良いんですか？」

「いいの、ほら、出口って書いてるだろ、後は、京都市のバス停留所まで行けば、何とかなるさ。さっ、歩いた歩いた。」

「はい……」

京都。……千年の古都。修学旅行以来の京都。それも、男の人と一緒にの京都。

この事は、誰も知らない私だけの秘密。言えない、言わない。

森本さんは、何回か京都に来た事があるのかしら？奥様とか別な女性とか……そんな思いが浮かんで来たけど、森本さんに聞いてみようとは思えないし、考えない事にした。

……この、瞬間、この時を、楽しもう、そう決めた。……

京都駅で、森本さんは、お任せで、観光タクシーを借り上げた。最初に、連れていかれたのは、清水寺。いつも観光ガイドブック等で、超有名な、清水寺。門前でタクシーを降りて、結構きつめの階段を、森本さんの腕に私の腕を巻きつけて登る。人の視線は気にな

らなかった。

流石に、観光客が多い。外国人も多い。人の多さに少し驚いている、なんか、私って、田舎娘みたい。・・・そう思った。

でも、嬉しかった。ウキウキしてる私、こんな風に、この場所に来れるなんて・・・

絶対にあり得ないと、考えた事もない事が、起きている。でも、現実。

「どう、ここは？清水の舞台から飛び降りるつもりで、なんて、言いましをされる、場所だよ、ここは、」

「はい、でも、森本さんがいうと変？・・・変？」

「なんでよなー、俺が言うとなんてさ、何が変わ？」

「だって、絶対に飛び降りそうもないんですものー、森本さんって！！」

「随分だなー、」

「殺しても、落ちてても死にません、そんな気がしますよ、ホント！」

「じゃ、俺は、人間じゃない見たいだなー」

「いえ、人間ですよ、そして、悪い人、悪党です、・・・」

「な、なんだよ悪党って？」

「ふふふふーだってー、なにも知らない純情な私を、・・・」

・京都まで拉致してきたんですよー。酷い男ですよー」私は、京都の町並みを遠望しながら、森本さんを見ないで言ってみた。

「ヘイヘい、俺は、酷い男です、今夜が楽しみだ、うんと、苛めてやるから、」

「わぁーいや、もう、ここは、清水ですよー」私は、嬉しかった。

「いいのさ、俺とノンシかないんだから、・・・楽しめばいいさ、ほら、京都が、ぼんやり見えるね、・・・」

「はい、」森本さんが、遠くを見ているよう、感じた。

清水寺から、清水坂へ。清水坂の両側には土産物店が軒を連ねてい

て、観光客がたくさん出入りしている。ここで手に入らないものは無いほど、京都の土産物がぎっしりあるって書いていたけど、ほんとたくさんのお土産が置いてある！

その中でも、京銘菓 八つ橋が目につく。坂を下りながら、ところどころのお店を覗くけど、

森本さんは買う事はなかった。

「お土産は、今日は買わないよ。」

「はい。」

「今日は初日だから、さー次へ行こう。」

観光客の多さに驚きながらも、観光タクシーは、次の名跡を目指して進んでる。京都の町並みは、古さと現代が混在している。

「運転手さん次はどこへ行きます？」

「次はですねー、真っ直ぐ金閣寺へ行きますよ。」

「そうですか、任せます。」

「お客さん達は、先生と生徒さんですか？」いきなりそんな事を言われた。

「・・・・・・なんですか？」森本さんが聞き返した。

「いやね、先生と生徒さんのカップルって、結構多いんですよ。高校時代に来れなかった先生と生徒さんが、卒業してから、京都旅行をするらしいんですよ。まーそう見えたんです？違いましたか？」

「うん・・・・・・まあ・・・・・・」森本さんは言葉を濁した。

・・・・・・そうかい、年も離れてるし、そんな風に見えるんだあー・
・タクシーの運転手さんは、こちらの出身ではないみたい。・
・
・

どこか、関東風と言うか、北の感じがした。

金閣寺・・・・・・修学旅行以来。雰囲気だけは、記憶に残

っていた。けれども、こうして目の前にすると、やはり、ここは京都、京都に、私来てるんだー、と、思ってしまった。

「あれー、随分、食い入るように見てるなー、見るのは、初めてかい??」

「いえー、修学旅行の時に見たんですけど、全然、違って見えるんです。凄いですよね、何か、底知れない、歴史があるんだなーって」「はははははー、ノンもいよいよ、文学的になってさ、底知れない歴史家ー」

「そうですよー、私だって、お勉強してきたんです?」

「ほうー、じゃ、この金閣寺を建立したのは、誰だい??」

「はい、徳川家康です。」

「おー、そうきましたか、のんお嬢さんは、はははははー」

「はい、正解です。ふふふふふふー」

「徳川 家康か、面白いなーははははー」大きな声で笑ったから、前を歩いていた、観光客が、驚いて、振りかえって、怪訝な表情をして、こちらを見る。私は、森本さんの左ひじの辺りを、強く引いて、立ち止まった。

「森本さん、ほら、あそこ、綺麗ですねー」

「うん??どこ、・・・」

「ほら、金閣寺の池の中にある小さな島、向こうですよ、」と言って、少し歩みを遅くして、他の観光客との距離を開ける。

「賢いねー、のんお嬢さんは、どう、何か、食べようか?」

「そうですね、金閣寺界限、歩いてみましょう。」

「ほうー金閣寺界限ね、その言葉で思い出したよ、」

「何をです?・・・」

「その界限って言葉さ、昔読んだ、松本 清張の「波の塔」って題名の本でね、深大寺界限って、確か、章があって、思い出したよ。のんは読んだ事がないかい?」

「はい、まだ、読んだ事が・・・」

「いや、気にしなさんな、さ、いこう。」

「どうだった？今日の京都は？疲れたろ、じゃ、乾杯しよー、かーんぱーい！！」

「かんぱいー、・・・」

私は、一気に、ビールを、流し込んだ。何だか、とても喉が渴いていた。

この、小さな料亭は、先斗町の何処かにあるらしい。目の前を、舞妓さん達が、歩いている薄暗い明かりの道の通りから、石畳の続いている狭い路地へと入った瞬間、全くそれまでの現実と異なる空間が広がっていく感覚が心を占めた。別な次元が広がっていくような、そんな思いに心がワクワク、ドキドキした。狭い道幅の薄暗く、古びた石畳の道が、足元を照らす明かりに薄ぼんやりと輝いている光景は、いつか見た事のある一葉の写真そのもの。

・・・森本さん、ありがとうございます・・・その時、本当に、心から、思った。連れて来て頂いて、良かったと。

「どうしたの？」ビールを飲み干した森本さんが、優しく尋ねる。

「ありがとうございます。・・・嬉しいです」

「なにがだい？・・・嬉しいですって、・・・」

「京都に連れて来ていただいたて、とても感謝しています。ありがとうございます。」

「な、何を言う、わ、わしは、て、照れるだろう、うわあっはっははははー、のゝ越後屋ー」

「可笑しいですよー、いつも、おかしな、森本さん。」

「じゃ、ご褒美に、今日は、一杯愛してもらおうかなー」

「ダメです。！！どうして、そう、デリカシーがないんです。あーあ、」

「こらこら、ノンお嬢さん、さー、グツと、さ、グツと、」

「もう、森本さん、・・・」お料理は、適宜に運ばれてくる。時

間は、ここだけは、ゆったりと、流れているようだった。会話は楽しかった。全然違う。私の周りの男の人達とは。いつも、巻きこまれ、知らないうちに、引きこまれている。

「京都はさ、俺達、東北の人間には、異なる世界だよー、今日見て歩いて、つくづく思った。のんはどう？だったー？」料理を口に運びながら、言う。

「そうですねー、・・・・歴史の中心でしたからねー、京都は、でも、東北からここは、遠すぎますもの、」

「そうだ、そうなんだ、遠すぎるんだ、東京が基本だからー東北人の視点はさ、京都と言ってもピンと来ないし、修学旅行でしか、行った事がないからなー。」

「森本さん、何回目ですか？」少し気になっていた事を口にした。
「俺は、4度目かなー、」

「奥様と？ですか？」・・・・言ってしまった。

「おっ、そんな事を聞くのは、初めてだねー。女房とは一回、後は男ばっかしだ、これで、安心した？珍しいなー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」私は、少し、後悔していた。森本さんと、視線が絡む。

「今日の、京都旅行の目的は、茶室、茶室の研究さ。もちろん、ノンと一緒にいる事も重要な要件だけど、」

「はい、茶室？あの茶室ですか？」

「そう、お茶室なんだ。叔母さんが茶室を建てたいんだそうだ。俺に任せるって言うからさ、色々、見てあるいているんだ。最終的に、京都に行って研究したら、って、叔母さんに言われたの。だから、一緒に行けるぞーって。」

「そうなんですか、茶室ですね。はい、頑張って、研究して下さい。じゃ、明日は、お茶室見学ですね。」ビールを注ぎながら、言う。

「いや、明日より、今夜、ノンお嬢さんの性態研究だねー、」

「ダメです。これ以上は、ダメです。お嫁に行けなくなります。」

「はははははーお嫁にいけなくなるかー？よしよし、今日は、新

手の責め方を、・・・」

「も、森本さん、どうして、そんなに、スケベなんです！もうー！帰ろうかなー。」

「ふふふふー、京都の夜は、ドスケベになるんだ。そうう決めてきたのさー、変態、お・と・こーになってやーるさー。」

「いや、いや、嫌だー、その顔、変態そのものですよ、ほんと、」二人で、顔を見ながら、笑ってしまった。

「・・・どうして、こうなんだろ、私まで、スケベになっていくような・・・気がする。でも、森本さんが喜んでくれるなら、良い・・・楽しまなくちゃ・・・」

京都駅前にあるホテル。結構、大きい建物だから、有名かもしれないけど、あまり気にならなかった。知ってる人に会う可能性は限りなくゼロに近いはずだから。森本さんも私も、普通にして、普通どおりに、チェックインして、部屋に入った。夜はまだ始まったかのような時間に感じられたけど、23時は過ぎている。

「のん、シャワーを浴びなさい！！」と、命令され、私は、違和感なく、

「はい、」と返事して、直ぐ、バスルームに入った。

シャワー室のバスルームの鏡に写る私の身体は、白く輝いている。そうっと、乳房を触ってみる。ブラジャーの締め付けの跡が残っている。これから、いつものように、抱かれる。

鏡に写る、その陰りの部分に目をやる。その周辺部分を指でなぞってみる。剃り残しがないか、丹念に指でなぞる。そうする事によって、いつも森本さんを、思い出す。思い出さずにはいられない。だって、ここに、顔を埋め顔で確かめ、舌で舐めまわし、指で挟りまわすのは、触るのは、森本さんだもの。森本さんの為に、綺麗にしくなくちゃ。いつもそう思う。

バスルームから出ると、森本さんが、裸になって、ベッドに寝ている。

「もう、時間がかかるんだねー、待ちくたびれて、寝るところだよ、」

「寝ていて下さい。そのまま眠って下さい・・・。」

「さー、ここへ来なさい。そうだ、そのまま、バスタオルを取って！！」

「えっ?? 嫌・・・」

「じゃ、俺が脱がせてやる。」と言うなり、ベッドから裸のまま起き上がり、近寄って来た。私は、待ちかまえるしか無い。そばに來ると、遠慮無く、バスタオルをはぎ取った。私は、胸を隠そうとしたが、私の身体をくると回し、私の背中を抱きよせ、後ろから、乳房を握り絞め、揉みあげる。私は、目を閉じて、好きなようにさせ、身体を森本さんに預けるようにする。森本さんは、後ろから、自由に乳房を楽しんでいた。ただ弱点の乳首には触れない。

森本さんの手を「女の子」に感じて、初めて目を開けて、

「森本さん、」

「何??」言いながらも、手が押し広げて、転がし始めた。

「うーん、いい、イヤー、ベッドでねー」

「ほら、見てごらん、目の前の鏡に、ノンが写ってるよ、」

「えっ、??」そう言われて、初めて気がついた。鏡の中で、森本さんが私の乳房を揉みながら、片方の手で、「女の子」を押し広げている。

「いやー、も、森本さん、恥ずかしいですー。」

「良いよ、なかなか、魅力的だよ、ほら、今、広げてるから、見てごらん、」

「いや、嫌、・・・いやー」私は、目を閉じて、動いたが、無理に引き離すほど動かなかった。目を閉じて、たった今見た、私の「女の子」を押し広げる手の動きを瞼に感じる。まるで、その手の動

きが、見えるようで堪らない。その動きは、怪しく淫らで、良く動く。なぞるように下から上に動きどこかの指で広げている。

「広げないでー、森本さんベッドで。ね、え、ね！」

私の身体は、鏡の前で、くねくねと動く。目を閉じてても森本さんの視線を感じる。

「あん、くうー！」

・・・くうー感じるわ、なんて上手なの・・・

剥きだした小粒を弾くように、なぞりあげ、横に縦に動き、感じ過ぎる小粒を指の腹で円を描くように回しながら動かす。

「あーくん、も、り、もとさん、ベッドで、ね、ね、してください、」

「ダメ、もう少し、鏡の前で感じなさい、良いね!!」

「うーん、・・・」私は、首を横に振って、責めに堪える。すると、手の力が不意に弱まり、身体が回された。森本さんの視線が合う。森本さんに抱きついた。

私の耳元で、

「さー、娼婦のノンに变身だ。」と言うと、少し、私の身体を押しつけ、唇が重なった。

「どうして、俺を楽しませる？ノン、お嬢さんは？」その言葉は、私の耳元に囁くように、言った。私は森本さんの目を見つめながら、首を横に振った。

「どうしたの？いつものように、楽しませてくれないのかい？」視線が絡む。

私は、そのまま、崩れ落ちるように、膝まづく。目の前に、森本さんが、いつものように、たくましくあった。

「はい・・・」

私は、まだ、慣れない。男の人の「もの」を、口に咥えるという行為そのものに、まだ、心の何処かで、慣れていない。でも、逢え

ば、必ず、求められる、突きたてられるし、心の何処かで、嫌だな
ーと、思いながらも、頬張っている。吸っている。舌で舐めまわし
ている。頬づりまでしている。夢中になっている自分がいる。なん
て、いやらしいんだろう。後で、思い出すと、そう思う。一人でい
る時、ふと思い出す時がある。頭から、暫くは、消えない。

私は、直ぐに口をつけて、キスをした。裏も、表も、先の部分から、
徐々に付け根下まで唇を這わせ、唇だけで、愛撫する。そして、ゆ
っくりと唇を開き、少しずつ、飲みこんでゆく。そして、必ず、喉
の奥まで達する。

・・・・・・・・ぐうつ、・・・・・・・・

堪える。それが、いつもの教えられた、愛し方の始まりだった。私
は、忠実にくり返してきた、何度も。この軽く支え持っている手も、
少しづつ、小刻みに動かしている。もう、無意識にしている。

森本さんも短く、切っている。

「邪魔にならないように、整理してるんだ。」と、行為の最中にい
つか言った事がある。

私には、それでいいのか悪いのかは分からない。私は、膝まづいて、
行為に夢中になりだした。

「のん、横眼で鏡を見てごらん。あっ、口に、入れた、まま！」

私は、口に含んだまま、横眼で鏡を見ると、私が写っていた。顔
がゆがんでいる。咥えている自分がいる。裸の自分が写ってる。森
本さんのものを頬張っている裸の自分が写ってる。

・・・・・・・・あゝなんていやらしいの、見られていたんだ・・・・・・・・

「あっ、そのまま、して！」命令された。私は、目を閉じて再び、
頭をふり、舐めまし始めた。

．．．．あーすっかり、見られている。．．．．うーん、美味しい．．．

初めて、そう思った。

．．．．うつ???.．．．あー森本さんだ、．．．．目が開かない．．．．

「い、いやー．．．」身体に、重さを感じた。思い出した。ホテルの朝は、抱かれるんだー。でも、昨夜のようには、なれない。身体が、重く、．．．．眠い．．．．目が開かない．．．．昨夜の疲れが．．．．動かない。．．．．

森本さんが、浴衣の前を広げて、乳房を揉み始める。

その行為に対して、私は、無反応。意識してそうしているわけではない。朝に、男の人に身体を、愛撫される行為には、やはり、慣れない。

．．．．あんゝゝゝ、広げないでーーー、．．．．

両脚に、ふとももの内側に力が入る。いつもの夜のように、開けない。

それでも、強引に、広げられ、そのまま、身体が、密着してしまった。

「うーん、あっあつ、あーん．．．．」身体が、前後にゆり動かされる。

朝の行為は馴れない。

……でも……森本さんがそうするのなら……

京都

「さー京都の二日目の朝ですよー、のんお嬢さんは、ご満足していただけたかな？」

「はい、ありがとうございます。とても、」

「おーそれは、重畳、重畳、うっわっはっはっはああー、夜も朝も、ご満足かな??」

「も・り・も・とさん、知りません。」

「ははははー、怒らない、怒らない。綺麗な顔が台無しだよー」

「森本さん……もうー……」

「ほら、これ読んでご覧。今日はね、お茶と言う日本文化についての見聞を広げようと思って、色々コピーしてきたんだ。」と言って、テーブルの上に、A4に印字してある、コピー用紙を置いた。

「はい、お茶のお勉強ですね。」

「そう、俺も目から鱗だよ、知らなかった事がいっぱいある。」

「そうですねー、お茶って、なんか特殊な人たちの集まりって感じですけど。」

「まー読んで見ると面白いよ。」私は、朝御飯を食べ終えた、ホテルのテーブルの上に置かれた用紙を取り上げ読み始めた。森本さんは、夜や朝の行為なんか知らないって、表情をして、コーヒーを飲んで、私を見つめている。もう、その視線には、熱さは感じない。昼の顔。

……えーと、……私は読み始めた。

今日庵は、三千家の一つ・茶道の最大の流派 裏千家の代表的な茶室。千宗旦が、表千家 「不審菴」を、江岑宗左に譲り、北裏に、隠居所として建てたもの。裏千家の禅と茶を一体にとらえた、わび草庵の茶室「裏千家」の名は、表千家（不審菴）の北裏にあることから称される。

「あのー三千家って、読み方、どう読むんです？」

「あーさんせんけって、読むんだよ。三千家ってさ、表千家、裏千家、武者小路千家の三家を言うって書いてあるよ。」

「はい」再び、読み始める。

表千家は、茶道流派の一つ、裏千家・武者小路千家との三千家の一つで、千利休を祖（初代）とする、千家の本家にあたる。門弟数は、裏千家の半数程度であるといわれる。裏千家の宗家。今日庵と隣接しており、不審菴が通りからみて、今日庵の表に、あることから、「表千家」と称される。紀州藩主 紀州徳川家（御三家）の茶頭として格式を誇り、紀州徳川家と強いつながりがあった。また三井家からも援助を受けた家元は、4代 江岑宗左の「宗左」を受け継ぎ、家元後嗣（若宗匠）は「宗員」、隠居してからは3代 千宗旦の「宗旦」を名乗る伝統がある

「不審菴」は、表千家の代表的な茶室を称する場合と、表千家の組織を指す場合がある。

三千家は、茶道の流派のうち、表千家・裏千家・武者小路千家を総して称される。

三千家が京都市上京区にあり「上流」と称され、
下京区にある藪内家は、「下流」と称される。

江戸時代初期

千利休の孫 千宗旦が、千利休のわび茶の道を推進しながら千家

を復興させ、勘当した長男 閑翁宗拙を除く、3人の息子それぞれに宗家を興させ、経済的基盤を固めるために、それぞれ大名に出仕させ、三千家を確立させる。

三千家は、互いに養子を出し、また共同で制度の整備にあたるなどしてきた

表千家七代 如心斎が、「千家を名乗るのは表千家・裏千家・武者小路千家のみとし、宗家以外には名乗らせない」と定め、他の二家もこれを了承したため、「千家」は、三家に限定されることとなる。

「わー凄いんですねー。なんか、重い、歴史があるんですね。」

「まー、今は、その程度を、頭に入れておいた方が、見ていて、面白いと思うよ。さー、いよいよ、この旅の目的を実行する時間が来ましたよ。ゆっくり、と、出発しよう。」

「はい、御馳走様でした。」

京都の朝。京都についての思い出は、修学旅行の曖昧な記憶しか思い出さないけど、間違いなく、現在は、ここ京都にいる。それも、男の人と一緒に。初めての経験だわ。信じられない。この京都旅行は多分ずうっと思い出として私の人生の秘密の記憶として、心の何処かに残りそう。

食事をしてのんびりとホテルを出たのは、御前の9時を回っていたから早いわけではなかった。地下鉄に乗ってみようの一言で、駅から、地下に入った。地下鉄は、どこも同じだわ。

「どう、歩いてみてすれ違う、人間の顔を見たかい？」

「えっ??? どういう意味です?・・・」

「じゃ、良く見なさい。顔つきが、造りがどこか、俺達が知ってる、

日本人ではないから。」

「えっ、日本人じゃーないって。・・・」

「のっぺりしていて、小顔で、切れ長の目をしてる。なんでも、注意して見ると、分かるよ。」

「はい、」

・・・そんなー、そんな風に、京都の人達を見てたなんて・・・意識した事はなかったわ・・・変な、森本さん・・・でも・・・

言われて、急に、気になりだした。地下鉄に乗ってから、失礼のないうように、目を凝らして、見始める。ときどきした。私の視線が、見知らぬ誰かと会うと、直ぐに目を逸らすけど、変に思われたかもしれない。横にいる、森本さんは、平気な表情をしている。何も、見ていないような、感じだけど・・・こんな、意識で、人間を観察した事はなかった。

今日は、森本さんの旅の目的だった「お茶」を身近に感じる1日。「お茶」って、なに？何もかも分からない事ばかりだわ。私には、もっとも遠い世界の物語だったはずなのに、目の前に、突然、現れた不思議な現実だわ。

・・・お茶ですかー。・・・

京都の地下鉄に乗って、烏丸　で、下車して、ここ「今日庵」に来た。

「なんか、凄いですねー、歴史の重たさを感じますねー。」

「どうしたんですかな、お嬢さんは、少し圧倒されているようですねーははははー」

「もうー、笑わないで下さい、森本さん。お茶なんて、やった事が

ないんですから。」

「そうですね、わしが、一つ教えて進ぜよう、」

「結構です、森本さんに教えてもらったら、きっと、いい加減に覚ええます。」

「なにに、わしが教えると、さような事があるわけがない、うわっはっはははははー」

「も、森本さん、少し、小さな声で、笑って下さい、変に思われま
すよ、それでなくても、怪しいんですから、森本さんは、私、少し
離れて、歩こうかなー」

「これ、お嬢さん、怪しいとはこれいかに??」

「だって、森本さん、ここは、お茶の宗家のお宅なんでしょう??
少しは、・・」

「へい、へい、分かりました、静かにしておりますよ、いやー、流
石に、ここは、歴史を感じるなー、きた、甲斐が有ると言うものだ。
」

「・・・またまた、いい加減な事を・・・・・・・・」

「

「さー中へ入ってみようか。」

「はい。」

「疲れたろう、ハイ乾杯、」

「頂きます。凄かったですねー、何か、思い歴史が、感じられまし
た。」

「そうだろうなー、いやー一度見ておくと、今後の何かにきつと役
立つさ。のんもこれを機会にさ、お茶、やって見たら、??」今日
庵から少し離れた、お蕎麦屋さんに入って、やっと、落ち着いたと
ころだった。

「はい、どうぞ。」と言って、ビールを注ぐ。

「うん、」といって差し出した、グラスに注いだビールを一気に飲み干して、

「ふうー美味しい、さうのんも飲んだらいいさ、」

「少しだけなら、まだ、お昼ですもん。」

「まー、そうだなー、ところで、お茶ってさ、どうして、武士階級に広まったのか、考えてみた事あるかい？」

「お茶、ですよね・・・武士ですか・・・」

「ほら、豊臣秀吉の金で出来た茶室、知ってるでしょ、」

「えー、」

「武士の茶のたしなみと言うか、あの時代、茶というものを、やらないと、特に大名クラスがさ、田舎者みたいな、教養のない武士みたいなところ、あったんだろうねー」

「そうですねー、でもどうしてそんな事を考えるんです？」

「まー、飲んで、・・・いやさーお茶ってさー日本の歴史に重大な影響を与えたとおもってるの、どうして、武士階級に急速に広まったのかってねー、」

「どうしてです？？」

「せっかく、お茶の本家を見たんだからさ、少し、お茶の話をしてもいいかな？」

「どうぞ、でも、簡単に、お願いしますー！！」

「ははははー、では、講義の時間だ、」

「いや、講義は嫌です。」

「そ、そうか、まー、武士って始りは、貴族階級のずうと下のクラスだったんだねー、それが、何百年も続いたんだ。貴族階級は、ここ京都に貴族的雅な独自の文化を拓いたが、その間武士階級には、これといって貴族に対抗する文化的なものはないと俺は、考えるの。」

「えー、歴史の事はあまり、詳しくないんです。私、馬鹿ですから。」

「そんな事はないよ、武士階級がお茶に価値を見出したのは、貴族

文化に対する対抗心でもあるだろうし、簡素な形式美が武士にあっていたのかもしれない。お茶で、もてなす。露地からにじりぐち、から、中へ入るわけなんだけど?？」

「えっ、に、にじ、に、なんです?」

「あーにじりぐち、あの、ちっちゃな、窓みたいなのが、茶室の壁の下にあって、そこから、人が出入りする場所、今日みたでしょ、」

「あー、あの小窓みたいところね、ハイせんせー」

「こらこら、もう飽きたかい?」

「いえ、どうぞ、」

「うん、そうかそうか、ならば続けよう、茶室ってのは、今も昔も数寄屋造りなんだ、」

「数寄屋造りって、??」

「今日見てきたでしょー、今日庵さ、あれを真似して、皆さん、だいたい同じく真似して作る建物なんだ、まー、茶をする為の建築様式みたいなもんだよ、」

「そう言えば、今度、茶室を造るんですよ、」

「そう、うちの叔母さんが、お茶の先生なの。それで、研究に来ただけど、」

「へー、研究ですか?女連れで、立派な研究ですねー?」私は、森本さんに、ビールを注ぎながら言う。

「あーそうだよ、のんの研究でもあるよ、それに、一度、着物を着たのんを抱いてみたい、・・・」

「も、り、も、とさん、」

「へい、野だてって言葉知ってるかい?」

「野だてって?」

「茶室ではなく、外で茶を、喫すると言うか、頂くと言うか、接待すると言うか、」

「どういう事なんです?」

「それは、俺が思うにさ、茶って言うのは、客人をもてなす一つの

接待方法なんだと思うの、それにあのにじりぐちから武士が入ってくる時刀は邪魔だし、飲みものであるお茶をさ、相手にふるまうと言う行為は、毒薬が入っていませんよぼどなど、相手が信頼できるか否かを、試す絶好の空間だと思うんだ、お茶ってさ。」

「そうなんですか？」

「俺はお茶は分らないけど、あの野だてだって、客人を心からもてなすのは、物でもなければ、建物でもないし、どんなに豪華な料理でも、心がなければ意味がない、だから、もてなすのは、野原でもどこでも構わないと言う趣旨だと思うんだ。」

「はい、センセ。」

「……森本さんって、難しい事を考えてるんだー……そんな事は思ったこと無かったわ今まで、……」

「どうした？もう飽きたかい？」

「いえ、随分森本さんて、色々な事を知ってるんですねー感心してるんです。」

「そ、そうかい、先生って呼んでいいよ。うっわっははははー」

「口から、蕎麦が出ますよ、それに、ただのセンセじゃありません、セクハラスケベ、そうですねードスケベセンセです。」

「あら！言うねー、今晚は、お仕置きだな、一晚じゅう、可愛がつて、」

「あーもう止めて下さい。豊臣秀吉の金で出来た茶室のお話は、どうなんです？」

「うん、ここの蕎麦、美味しいよ、のんも食べながら聞いて。さー」

「……もう、スケベなんだから。……」

お蕎麦を食べてみる。少し飲んだ、ビールが効いているらしく、頬があつい。

「秀吉の、金の茶室。最悪なんだろうねーまー、成りあがりの権力誇示、その達成感、自己満足感、まーいろいろ有るんだろうと思うよ。」

「そうですねー金ですからね、・・」

「趣味が悪いよなーと思ってしまうってのは、俺達は、庶民だからなんだろうなー」

「いえ、違いますよ、秀吉はやっぱり、成りあがり者なんですよ。」

「ははははははー秀吉ってさ、知ってるかい？」

「えっ、何をです??」

「生涯で、女性とセックスした女性は、800人を超えていたって、とにかく、氣にしていると、直ぐ手をつけたみたいだ。あの時代、若い男を女性代わりに、抱く習慣があつて、秀吉にも男を、お小姓って言うらしいけど、部下があてがったらしいけど、一度も手をつけずに、お前の妹か姉はいないかと、女ばかりをねー、」

「森本さんと、同じですね、穢れを知らぬ純情な私を、・・」

「こらこら、ノンお嬢さん、俺は、ノンちゃん一筋さ、」

「信じられません。」

「参ったねー、さー午後は、二条城辺りに行ってみようね。」

「はい。」

「嬉しいか？」

「はい。」

「さー食べて。」

「さー、ここで、服を脱いで、見せて!!」

「いや、・・・」

「早く、!!」

ホテルの部屋に入るなり、抱きしめられた。壁に押し付けられて唇が、激しく吸われる。乳房がぎゅっと、掴まれ、服の上から、揉

みしだかれる。いつもの事。その行為が終わると、手を引かれて、ダブルベッドの前に連れてこられた。部屋は、ルームライトがついてるけど、少し薄暗い。森本さんが、ベッドに腰かけ、仰ぎ見るように、私を見ながら言った。

「ダメ、シャワーを浴びさせて下さい。」

「いや、そのままでも味わいたいんだけど、」

「いや、！！」

「じゃ、一緒に入ろうか??」

「ダメー、」

「どうして、??」

「狭いです。それに、」

「狭いから抱き合ってさ、」

「ダメ!」そう言っ、バスルームに駆け込んだ。

・・・・・・もう、森本さんったら、・・・・・・
・・・・・・綺麗にしくちや・・・・・・

自分で、なぞってみる。柔らかいところが、すべすべしている。

・・・・・・これでいいわ、森本さんは、必ず、顔埋めて、確かめる、
いつもの事・・・・・・

「きゃっ、・・・・・・どうしたんです?何か身につけて下さい。」

バスルームから出て、ベッドルームに出た途端に、目に飛び込んできた。森本さんは、素肌に何もつけていなかった。素裸のままです立っていた。

「いやねー、俺もシャワーを浴びようと思ってさ、」と言うと、そのまま何もつけない、隠さないで、堂々と裸を晒しながら、私の目の前を過ぎて、シャワー室に消えた。

そんな裸を見ても、なんだか、もう慣れてしまった見たい。

「……何も隠さない、森本さん、私も、この部屋着を脱いで、素裸で、迎えてみようかなー、……駄目、ダメ、そんな事をすれば、次にも要求されるわ……駄目！」

「さーノン！ベッドにおいで、」、直ぐに、呼ばれた。森本さんは、もうベッドに素肌を晒したまま、仰向けに寝ている。目をやると、大きくなっている。

私が、ベッドの傍まで近づくと、

「口でして!!」と、言われた。

「はい、」そのまま、ベッドに上がると。森本さんは、

「こっちに来て!」両脚を開いて、私を、両足の間に座らせる。目の前には、森本さんが迫っている。腰を突き出すように上に上げて催促する、もう慣れっこになったけど、でも、口に咥える行為には、まだ、

「……馴れないわ。でも、私は、顔を近づけ、両方の手で、いつものように、教えられたとおりに、さすり始める。……また、大きくなって……硬くなってきた……」

両方の手の中で、ピクピクと、動く。私は、そのまま、舌を出して、そろりと、舐めあげる。

「うーん、いいぞー……上手だ、」森本さんは、いつも、褒める。その気にさせるように、持ち上げる。私は、ゆっくりと、舐めまわし始める。

「……いつも思う、……」

これが、私の中に、入って来る……と。

「のん!!」

「はい??」 頬張っていたモノを口から離して、森本さんを見る。

「のん11」

「はい、」

「そのまま、上になれ!!」 声がかすれている。

「えっ!!」

「さー自分で、上になって、!!」 命令された。

「えっ!!」

「さっ、ほら、」 森本さんが半身をおこして起き上がり、私の顔を両手で押さえ、

「さー、おいで!!」 と、軽く引いた。私は、言われるがままにするしかない。でも、今まで、自分で、自分の中に、上になって、入れた事がない。

「・・・・・・・・恥ずかしいわ・・・・・・・・森本さん、・・・・・・・・してください・・・・・・・・」

「どうしたの、??さー」

私は森本さんの腰に跨った。下から見つめる、森本さんと、視線が絡む。

「・・・・・・・・見られている、・・・・・・・・あー、こんなこと、させないで・・・・・・・・」

「ほら、自分で、入れなさい、そうー、持って、そう、自分のものにあてがって、そのまま、身体を、沈めなさい、そう、」

「あっあーん、・・・・・・・・」 私は、自分の女の子に、森本さんを自ら腰を沈めて、迎え入れた。なんて、恥ずかしいんだろうと思った。

・・・自分で、入れるなんて、なんて、いやらしんだろう。・・・

森本さんを迎え入れ身体を沈めたままで、森本さんを意識する。じつと、していた。でも、私は、入れながら、森本さんのモノを、「きゅっ、きゅっ」と二度ほど絞めていた。それは、森本さんに教えられた、挨拶のようなもの・・・私は、いつもしている。入れられる度に。

「おっ、良いねー、良い締めりだ。良いぞー」眼を閉じて、森本さんを感じる。

下から、両方の乳房が、揉みあげられる。

「あっ、！！」乳首を弾かれた。痛さが、全身に心地よく浸みわたる。私を侵している森本さんを、きゅっと絞める。

「あっ！！くー、あーん、・・・」今度は、乳首を強くつままれた。再び、痛みが走る。

眼を開けて、森本さんを見る。乳房が、下から強く揉まれている。

・・・あゝ感じる・・・

「

さー腰を、動かしてごらん・・・」

「えっ??? どうするんです???」

「まず、そのまま、前後に動いてみて、」私は、言われるままに前後に動かしてみた。なかなか、上手く動けない。

「そうじゃなく、全身が動いちゃダメ、腰だけ前後に動かしてみなさい、」

「はい、・・・こ、こうですか???」

「そう、そう、上手だ、そう・・・もっと、早く・・・」

私は、言われるがままに、腰を動かし始める。森本さんの腰の上で、動く。

・・・あゝなんて、淫らなの、・・・・あゝ目を開けられない。・・・・

髪が揺れる。

「ほら、上手になった、・・・・そうそう、それで良いよ、あゝ上手いなー」

ひとしきり動きを追っていると、

「今度はねー、腰を上下に動かしてみて、」

「えっ?? 上下にですか? どうするんです??」

「上に身体を持ち上げその時に、締め付けながらね、出してしまわないうちに、今度は弛めながら深く沈むのさ、ほら、やってみなさい、」

「えー? 出来ないー」

「出来るよ、ほら腰を持ち上げて、そう、ゆっくりでいいよ、ほらゆっくり締め付けながら、うん、いいぞー上手い上手い、今度はゆっくり沈めて、」

「はい、こうですか?」顔が火照る。髪は森本さんに向かって、垂れ下がり、きつく揉まれている乳房の上で、森本さんの手に手に妖しく絡んでいる。

「うーん上手だ、物覚えがいいんだねーほら、今度は少しずつ、スピードアップしてみなさい。」

「はい、」

・・・・・・私は動く。・・・・・・

目を閉じて動く、上下に。動きながら、自分自身の行為を、想像している。懸命に身体を動かす。私は森本さんを身体の中で直に感じている。少し苦しいけど、沈みこむ時には、奥底に其を感じる。絞めながら持ち上げる時は、前にその感触を感じる。

「森本さん、してください、」動きを止めて、覗き込むように森本さんを見ている。中に入ったままにいる。

「なんだーもう終わりかい？」そういうと、半身を起こして私の背中に腕を回してそのまま押し倒し、入ったままの森本が、深く打ち付けてきた。

「あっハア~~~~ン~~~~」
やはり、この行為が好き。

.....いつもの様に、激しく私を責めてー、.....

「あゝ良いわゝあっあっ、あゝ~~~~」身体が、揺れ動く。

「だんだんと声のだしかたも、色っぽくなってきたねゝほら。もっと感じろー」

森本さんは、そう言いながら、抉る様に深く挿入してきた。

「あ~~~~ん、」

「どう、これがいいかな？それとも、こっち？」

そう言いながら、森本さん自身を、動かすようにして打ってくる。動きが、早くなってきた。その時、不意に、動きが止まった。

「さー、今度は、バックだ！」そう言うのと、私をうつ伏せにして、いつものように、私の後ろのお尻を、「パチン！パチン！」と叩く。少し痛いくらい。でも、それはいつもされている。

私は、お尻を、高く上げ、顔を敷き布団につけるようにする。この姿勢もいつもの事。その姿勢をすると、お尻を強く揉まれる。両方の手で、強く掴まれ、優しく触れる。いつも確かめるようにする森本さん。私は、待っている、そのままの姿勢で。

.....あ~~~~いつも思う。.....

後ろから、全て、見られている。しっかり、見られている。そして、確かめられる。

お尻を手で抑えつけられながら、内股に、舌を感じる、それは、開けの合図。

・
・・・・開かせられる。・・・恥ずかしい。・・・でも・・・

私は、そのままの姿勢で、両脚を少し開くと、

・・・・あつ、舐めれた・・・やはり、・・・いつもそう、
・・・・

「あっうっくん！、い、いやー。」お尻を強く抑えつけられる。

・・・・後ろから、見られる行為は、やはり、とても恥ずかしい。
どんな、・・・

「だ、ダメー・・・」

「あん！！」強く入って来た。

突き上げられるように、押し出されるように、侵入してきた。お尻に、ドスンと圧力を感じる。身体が、前に押し出される。両方の手で、身体を支え、それに耐える。

「あつ、」今度は、後ろに引かれる。

また、前に、後ろに、・・・だんだん速くなり、その動きが規則正しい、前後の動きになり、私は、その動きに感覚を委ね始める。

「あつ、あつ、あん・・・」

・・・・あ感じる。。。わ。。。いいわー。・・・
私は、後ろから、されるのは、好き。

．．．．．だって、深いんだものー．．．．．

そして、その激しい動きに、波乗りのように、身体も、感覚も合わせ始める。

「あっ！あっ！あっ！うーん、あっ．．．」声が出る。

少しして、はっと、気がついた。

．．．．．えー??? どうして? ．．．．．動いていない。動いていないわ、えっ? どうして?? ．．．．

森本さんが、動いていない事に、気がついた。

．．．．．えっ!??? ．．．．．い、いやー．．．．

声にならない声で叫んでいた。

その時、動きを止めた。

「続けて!!、そのまま!!」

．．．．．そ、そんなー．．．．．

私は、夢中で森本さんの動きに合わせているつもりだった。

．．．．．でもー?? ．．．．．

．．．．．森本さんが動いていないって事はー．．．．．えー?? ．．．．

森本さんが、言う。

「さー続けなさい、!!」

．．．．．そ、そんなー、でも、．．．．．えー?? そんなー．．．．

私は、無我夢中で腰を動かしていたみたい。それに気がついた。身体が熱くなった。そのまま、うつ伏せになろうとすると、お尻を、強く掴まれた。

「どうしたの？早くしなさい！！」

「で、で・き・ないー」

「なんだ、今までしてたんだから、さー」

「・・・森本さん、・・・どうしても、するの？・・・」

森本さんは、今度は、意識してやれと言う。

私は、わたしは、

「・・・出来ないわー、恥ずかしいわー・・・」

「さー、さっき見たいに、自分でぶつかって来なさい。」森本さんが、少し大きめな声で、私に命令する。逆らえない、・・・。

「でも・・・」

「しなさい、」

「でもー、・・・」

「早く、！！！！」

そういうと、お尻を強く引き寄せられ、ずん！！と、深く強く打たれた。

「・・・は、ハイ、します。・・・」

その行為には、強い意思が感じられた。

私は、動き始める。

私は、森本さんに、私のお尻を、ぶつけるように、お尻を動かし始

めた。前後に。

・・・・じ、自分で、お尻を振るなんて。はしたないわ。・・・

それも、今度は、その行為を意識して動かさなければならぬ。でも、そう思いながらも、もうしている。少しずつ、すこしづつ。動かしながら、

・・・・私、夢中で、腰を振っていたんだわ。・・・自分で、お尻を、・・・動かしていたなんて、知らなかったわ・・・

森本さんが、強く強くぶつけ打ってきた。

それは、・・・もっと、動け！・・・

そう、理解した。それが、合図。それに、合わせるように、強く、お尻をぶつける。

「うん、そのまま、もっと強く！！いいぞー、なかなか、良い。」
そういうと、森本さんも、私に合わせて、ぶつけてきた。

「女の子」が、悲鳴を上げている。荒らしく突き、かきみだされる。

「あん、あん、あつ、あつ、・・・あつー！！」

私は、動きながらも、その突かれるたびに蠢く感覚を、追う。

森本さんに、教えてもらった、その弱く強く響く感覚を追う。

でも、

・・・・意識して動いているのと、無意識では、感じ方が、違うみたい。・・・

森本さんの、手に力を、感じる。

「あら、まーまさか、男友達ではないでしょうねー。」

「まさかー、女のお友達ですー、御心配かけましたー」

「今週の土曜日よ、お見合い!!」声が、少しきつい。

「はい、心得ておりますわ、金曜日、お休み頂いて、実家に帰りますので、叔母様も、お越しくださいませ・・」少し、雰囲気を変えて電話口に向かって、言ってみる。

「あら!!、お嬢様は、雰囲気が変わりましたよ・・」

「あはははー少し、お嬢様らしくと、思ってー」

「そうよ、そのようにね、この縁談とっても、良いのよ、ノリちゃんのが好きで、どうしてもお見合いさせてくれって、言うんだから、それに、資産家だし、なかなかの名家よ、」

「はいはい、分かっておりましてよ、・・・・・駄目、私、普通にする、・・・・・だって、おかしいんですもん、うふっ」

「そんな事はないわよ、頑張っつてね、じゃ、金曜日に、お邪魔するから、あつ、着て行くものはどうするの? お洋服? それとも?」 「普通のお洋服を着て行くつもりですよ、あまり、大げさにしなくても、」

「お姉ーさん、お着物とか言っつて無かったかしら??」

「・・・・・もう、今週は、きつと、大変だわ、この調子で色々言っつてくるんだわ・・・・・」

「叔母様、お時間が来てしまいましたわ、紀子はこれから、会社です。」 また、少し澄まして言っつてみた。

「そうねーそうー・・・・・」 多分、お見合いの段取りとかいろいろ考えてるんだわ、私の話を聞いていないようだったので、電話を切る。

「・・・・・今週は、森本さんに会うのは、ひかえよう、・・・・・
・・・・・でも、会いたいし・・・・・でも・・・・・やはり、ダメ、今

週は、用事が有りますと言っておいたから、部屋には、来ないわ、それに、森本さんも、今週は、大人しくしていようと、・・・・・・
奥さんの事もあるし・・・・・・でも、会いたいなー。

今日土曜日はお見合いの日、空は青く快晴。

A市に在る、新しく建て替えたばかりの、結構有名なホテル「甲陽」に、玲子叔母さんと母と一緒に父の車で送られて来た。父は、少し緊張した表情だったが、お見合いには顔を出さないと行って、私たちを車から降ろすと、直ぐに走り去って行った。

私達は、正面玄関から、入ると直ぐに、私達を待っていたかのように、同じ制服を着た私と同年代くらいの女性が二人ばかり、素早く側に歩み寄って来た。そして、

「ご案内いたします。どうぞ、こちらへ、」と、ホテルの案内係りの二人の女性が、私達を従えて歩き出す。歩き出すと、ホテルの赤い絨毯が敷き詰められている少し広い通路には、洋風な置物、調度品が置かれ、壁には大小の油絵が、まるで美術館のように掛けてある。

・・・・・・わく素敵ー・・・・・・

私は、それらを見ながら、

・・・・・・凄い事になっているみたい・・・・・・

一瞬、感じた。私達は、長い通路を、どこまでも続いているような通路を、奥に向かって歩いて行く。

素敵洋風の造りだった建物の内部が、目の前の観音開きのドアを開けると、内部の造りが、和風造りに変わった。急に、和風の廊

下に変化した。

そして、和風造りの廊下を先に進むと、障子引き戸が開かれ、少し低めの踏み石が置かれている。そして、廊下を一段下りると、そこはもう外。眩しい。

案内係の女性は、ゆつくりとこのホテルの建物の敷地の奥にある別棟、数寄屋造りの茶室風の建物に案内してくれた。

私は、先週、森本さんと一緒に京都で茶室を見ていたから、この目の前にある建物を見ても、緊張する事もなく、

・・・数寄屋造りだわ、京都でみた茶室と同じだわ・・・

そう、思いながら、和風庭園造りの庭に敷き詰められている大きさの異なる石畳をゆつくりと歩きながら、母と玲子叔母さんの後をついて行く。母と叔母さんは緊張気味。

でも、私は、何故だか、不思議と緊張していない、そんな自分に少し驚いている。

「やーやつと、来ました、さー、どうぞ！中へ！！」

そう言って私達を出迎えてくれたのは、岩崎さん、本人だった。

数寄屋造りの低い屋根の奥にある広い玄関の戸を開けて中へ入ると、玄関の石敷きの前は縁台風になっていて、前面が畳敷きになっている。

・・・同じだわ、・・・

今日の私は、着物を着ている。いくら嫌だと言っても、反対された。だから仕方がなく着てきたつもりだった。

・・・でも、着物は、とても嬉しかったわ。・・・

母が、少し前に用意してくれた振り袖の着物。あまり機会がないから、タンスの花だと思ってた。

でも、・・・でも、・・・着付けは、母がしてくれた。

玲子叔母さんは、ただ見て、あれやこれや言っただけ。母の通いの美容院で、髪を整え、家で着物を着け終わった時には、涙が溢れ出ていた。

・・・何故だか、分からないけど・・・全てが、出来上がった、鏡を見た時に・・・森本さんが見たら、なんて言うかしら、・・・

そんな事を後から思ったりもした。

「初めまして、岩崎 雄一と申します。さーおあがり下さい。」と、丁寧にお辞儀をしながら言う。

・・・とても和服がお似合いだわ・・・・・・・・

岩崎さんが、和服を着ると、若旦那風で良くお似合いだわ。

・・・あつ、そうねー、酒造会社の若旦那様だったわ・・・

「さーどうぞ、どうぞ、皆さんお待ちかねですよ、」と、にこにこしながら、私達が、上がり込むのを待っている。私とは、まだ、目が会っていない。意識して、見ないようにしているみたいで、なんだか、心がこそばゆかった。

襖戸を開けると、畳み敷きの格子戸がある。その格子戸は開かれており、私達は、部屋の中へと、入って行く。内は、畳敷きのかなり広い和室の真ん中にテーブルが置かれてあり、岩崎さん御両親が座っている。

「さー、どうぞ、どうぞ、お座り下さい、お待ちしておりましたぞ、」と、岩崎さんのお父様が、少し大きめの声で、手を差し出し、私達を迎えてくれた。私は、少しづつ、緊張し始めている自分に気がつき始めた。

会話は和やかに、始まった。岩崎さんのご両親は、偉ぶっていず、とても、会話が上手だった。初めから、お見合いという事を意識させない会話をして頂いて、母も玲子叔母さんも、緊張が溶けていくのが分かった。私は、全然緊張しっぱなしだった。「お見合い」という意識が心を縛って行く。

・・・いけなかったわ、やはり、してはいけなかった、・・・
どうしよう・・・でも、・・・いつかは、私も結婚しなくちゃ・・・

「是永さん、外へ、出て、少し話そうか、」

「えーそうですねー」

・・・助かったわー、・・・

「そうよ、雄さん、積極的が大事よ、こんな素敵なお嬢さんを、是非、お嫁さんにね、」

「ははははー、参ったなーはい、はい、さー、後は、任せて、出よう、」

「はい、」

外は、暖かく、眩しい光が、眼に痛い。

「はははーやっと、二人きりになれた。疲れたでしょう。」

「はい、少し、緊張しました。」

「ははははー見ていて緊張してるのが、わかったよ、」

「だって、初めてですよ、するなど言っても、します！」

「良く似合ってるよ、着物姿、とても素敵だよ。」

「ありがとうございます。」

「随分変わるんだねー、着物を着ると、違った是永さんを見た気がする。綺麗だよ。」

和風庭園の少し奥まった場所にある東屋まで、石畳をゆっくり歩きながら、表情を引き締めた岩崎さんが、私を見ながら言う。

「岩崎さんも、お似合いですよ、着物とてもお似合いです。」

「そりゃそうだよ、なんたって、造り酒屋の若旦那だからねー」と、声色を変えながら、冗談ぽく言ったので、

「わぁー岩崎さんって、若旦那様なんですねー、私には、もったいないですー」

「さぁーここに座ろう、」

「はい、」

東屋は、周囲から見えにくいように建てられている。何か、重要な会談とか、今日のお見合いみたいに、好奇の目に触れさないように作られているみたい。

「ねー是永さん、これを機会に僕とお付き合いしてくれませんか？加藤君が是永さんを好きな事は分かっているけど、僕は、是永さんが好きになってしまったんです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、・・・・・・・・」

「私には、私は、岩崎さんには、もったいないですよ、他に誰か、素敵な人いますよ・・わたし、・・」

「付き合っている人がいても良い・・でも、僕は・・待つ・・決めたんです・・俺は、是永さんと、結婚したいんです」いきなり、言われた。

「お見合いしたから、強制的に付き合って下さいなんて考えてはい

ないよ、今日のお見合いはさ、母と父に、俺の大好きな女性を見て欲しかったからなんです。僕が好きな女性は、この人だって自慢したかったんです。」

「……なんて、直接的に言う人なんだろう……それに、なんて、素直な人なんだろう……そのまま、……育ちの良さが良く分かると思うか……僕と言ったり、俺と言ったり、岩崎さんも、緊張してるのかしら?……」

「ありがとうございます。そう言って頂けるだけで、ホントに、ありがとうございます。」

「直ぐに返事下さいなんて言わないよ、少しずつ、付き合ってください。お互いが、少しずつ分かりあえるように、お付き合い下さい。どうですか?」

「ええー……そうですねー、……そうですねー」私が、戸惑いの表情をしていると、

「今度実家に遊びにいらっしゃい、酒造りがどういうものなのか、見て下さい、是永さんは、日本酒飲みます?」話題を、変えてくれた。ほっとする。

「はい、少しでもですけど、日本酒好きですよ、」

「良かったー、」

「父が好きですもの、」

「是永さんのご実家は確か、お蕎麦屋さんでしたよね、」

「はい、」

「これを機会に、一度、食べに行きますよ、」

「……駄目です、とは言えない……」

「そうですね、でも、あまり綺麗なお店ではないですよ、」

「それを言うなら造り酒屋は、もっと、古くて、酒臭いよ、ははは

はー」

加藤さんとは異なるおおらかさが有る。

・・・・・・・・どうしょー・・・・・・・・森本さん・・・・・・・・

「是永さんは、ゴルフやりますか？今度一緒に練習に行きませんか？」

「えー！？やった事が有りませんよ、それに道具も持っていないし、」
「道具は、なんとかするから、やってみませんか？少しづつそうやって、お互いが、・・・・どうです？？」

「そうですねー、でも、ほんとした事がないんですよ、加藤さんは、良くしていらっしゃるみたいですけど、うーん、」

「実は、俺さ、密かに隠れて練習してるんだ。加藤君に負けたくないからさ、彼は、スポーツマンだし、少し俺も頑張ってみようかと思ってるさー」少し照れながら、言う。

「どうして、加藤さんなんです？？」

「・・・・・・・・ライバル・・・・かなー・・・・・・・・」

「そ・・・・・・・・う・・・・・・・・なんですかー・・・・・・・・」

「さっきの、提案、どうです？」

東屋の中は、暑過ぎず、心地良かった。時々、頬を撫でて行く、風が嬉しいかった。

「ゴルフですか？」

「是永さんとのお付き合いの件ですよ、」

「そうですね、・・・・そうですねー、？？私で、良いんですか？ほんとに？？」

「良いにきまつてる。是永さんと、どうしても、結婚したいんだ。」
「分かりました、では、まずは、ゴルフから、始めましょう、教えて下さいね、」

「わあおー、ほんとに、良いの？俺でいいの？」

「はい、お付き合いではなく、少しづつ、岩崎さんを知りたいです。今は、そういう事しか言えません。それでも良かったら、」

「決まりっ・・・交際の始まりにしましょうーやったー」

「でも、でもですねー私が嫌いになるかも知れませんが、私もそうなるかも、」

「それでいいよ、やったー、絶対に、好きにさせてみます。」

・・・これで、良かったかしら、玲子叔母さんや母の事もあるし、
・・・でも、・・・私って、ずるいかなー????

「でも、あまりお約束出来ないかもしれませんよ、」

「電話してもいいかなー、もちろん毎日しないけどさ、たまには、
どうかなー」

「はい、でも、いない場合が多いですよ、いろんな方とデートとか
しますもので、・・・」

「はいはい、どうぞ、どうぞ、やきもちを焼かせんから、ははは
はははー」

・・・なんだかとても好人・・・でも森本さんの
事を知ったら、大変だわ、・・・少しづつ、諦めさせていくし
か無いわ・・・今はこれでね・・・

会社

無事にお見合いも終わって、玲子叔母さんは大喜びで帰って行った。私は、父と母との会話を聞きながら、つまらなそうに聞いている父の表情を見ると、それは、本心ではないのが分かって、嬉

しいような、恥ずかしいような……そんな気持ちになり、
「私は、まだ結婚しませんよー岩崎さんとは、直ぐに結婚とはなりませんよー」

「どうして、とっても良い縁談よ、嫌いなのです？紀子は？？」

「そんな事はないですよーでも、結婚を前提にお付き合いって、なんだか大袈裟すぎるから、二人で決めたの、少しづつ、進めようって、」

「何それって？？」

「だからね、好きだとか嫌いだとか、今はそんな感情はもてていないから、少しづつ進めようって、」

「それで、良いんじゃないかなー、お見合いしたからと言って、直ぐに結婚するわけではないし、紀子が、納得するまで、付き合ってみればいいだろ、」

父の言葉は、嬉しかった。そんな父が好き。

「満月の使者」がやってきた。私は女性だと云う事を認識する週が始まった。これが始まると、森本さんと暫くは逢えない。森本さんは、これが始まると、何故だか、私に触れようもしない。あれほど、スケベな森本さんなのに、ぴたりと止まる。

寂しいような気持もあるけど……でも、それは、なんだか、自分の時間が帰ってくる日々でもあるし、なんだか、自分を見つめる日々でもあるそんな気がする。

……でも、とても、寂しく感じる瞬間がある。……

前に、「俺、血は駄目なんだ。血を見ると、目眩がするんだ。」
と言っていた、森本さんの表情、なんとも言えない仕草を思い出す。

・・・男の人って、分からないだろうなーホントのところは・・・
・・・そう、私は、女・・・・・・・・

「是永さん、どうかした？」振り向くと、加藤さんだた。少し近頃、
太ったような・・・・

「あつ、おはようございます。加藤さん、」

「なんだか、にこにこして、良い事あったー？」

「はい、有りましたー、」

「なに？なにがあったの？」

「それはですねー、加藤さん、少し太ったでしょう、」

「い、否、太ってないよ、そう見える、」

「あれー可笑的ですよー、お顔、まーるく見えますよ、そうです
ねー5キロくらいは、」

「こら、是・永・さ・ん、」

「はははははー、冗談ですよ、でも少し、ほんとのところ、」

「そうなんだー、そうなんだーそうだ、運動しなくちゃ、運動、い
やーここんところ、運動不足でさ、毎日、忙しくて、」

「女性とですねー」

「またまた、そう言う事を言う、仕事です、し・ご・と、ねー是永
さん、何か、スポーツはしてるの？」

「スポーツですか？」

「・・・・岩崎さんがゴルフの事を言っていたから、ゴルフは駄目
だわ、でも、・・・・」

「いえー、何もしてないんですよ、」

「そうかー、ならさ、ゴルフやらないかなー、」

私は、手を横に振りながら、

「駄目ですよー、やったことがないんですもん、」

「大丈夫さ、教えて、あげるから、どう？？、今度？？」

・・・どうしよ、岩崎さんにも誘われているし、でも、これ以上、加藤さんの誘いを、お断りするわけには、いかないわ・・・・・・・・

「はい、では、そうですねー、」

「よし、決まりだね、金曜日の夕方、仕事が終わってからさ、良いよね、??」

「はい、じゃ、お願いします。でも、何もないんですよ、初めてなんですから、」

「任せな、さ、いーやったー、じゃ、気が変わらないうちに、仕事に行くよ、約束したよー。」

「はい、何かあったら、言いますから、」

「ははははー予定を作っただけーめ！！です。」
そう言いながら、部屋を出て行った。

・・・・・・本当に、加藤さんって心の広い人だわ・・・・・・あの時・・・・疎遠にならなくて、ほんとに良かったわ・・・・

私が、そんな事を考えていると、嫌いな人間が部屋に入ってきた。

・・・・・・あーどうして、こんなに嫌な人間と、一緒に仕事しなくちゃいけないんだろう、胸が詰まるわ・・・・・・・・・・ばたばたと、部屋に入ってくるなり、

「是永さん、頼んでおいた、書類出来てます??」と、少し威圧するような甲高い声で聞いてきた。

「えーコピーを取って、机の上に置いてますよ、」私は、机の書類から目を離さないで言う。

「そう、」ありがたいの一言も言わないで、机の書類を見始める。
急により甲高い声で、

「あらっ、この書類足りないわ、全部コピーしておいたんでしょ、会議に間に合わないわよ、」

「えっ、渡された書類をそのまま、コピーしたんですけど、全部で8枚ですよ、」

「あらっ、10枚なはずだったわよ、」

「……そんな事はないわ、私、数えました、確かに、……何か問題があれば困るから、特に、この人の頼まれ仕事は、……」

「そんな事はないですよ、頂いた時に、枚数は、確かに8枚でしたよ、」

「じゃ、私が8枚しか渡さなかったとでも言うの?」怒りだした。

「はい、確かに、8枚でしたよ、ご自分の机とかに入っていないんですか??」

又だわ、この人全然懲りない人だわ。この前も、そうだったから、番号を日誌に書いている。

「どうして??いつも貴方はきちんと確認しないのかしら??」平気な表情で言う。

カチンときたから、少し強い口調で、

「確認しましたよ、この日誌にも、番号ふって書いてます。」と、睨みつけるようにして、言う。すると、

「ホントかしら、」と、私を見もしないで言葉を返すと、いきなり乱暴に自分の机を開けて、がたがたと音を立てながら書類を取り出し、そのまま何も言わずに、部屋から出て行ってしまった。

「……嫌い、大嫌い、……もう……嫌、……どうして、……」

私の天敵。もう一緒にいるのが死ぬほど嫌。自分の失敗は、全部

他人のせいにする、もう、自己チューの女。

・・・どうして、いるのかしら??? 良く結婚出来たものだわ・
・・・

ゴルフ場

「加藤さん、今日は宜しく、お願いしますね。」
「良いよーそんなに気を使わなくてもさ、気楽に行こう、」

今日は、加藤さんとゴルフの練習をする日。お天気も良く晴れ渡っている。ゴルフの練習場は、市の中心街からは離れた、盛岡方面に向かって走る県道沿いにある。日曜日の朝と言っても、午前の10時を過ぎているから、駐車場には、車が、7、8台駐車している。なんだか、ドキドキしている自分に驚いている。初めてのゴルフ。今まではゴルフ自体に、全然興味がなかった。頭の中で、想像してみても、ちっとも、浮かんでは来ないスポーツ。

建物の中は、見た目より、狭く感じられた。加藤さんが、受付で、手続きを済ませて、ドアを開けると、広さが目に飛び込んできた。

「わぁー広いですねー」

「そうだねー、でも、こんなもんだよ、直ぐに慣れるよ、」

「出来るかなー?？」

車の中でも、なんだか言い訳ばかり言っていたような気がする。

・・・だって、やった事がないのよ、
・・・当たらない、
絶対に・・・

練習場には、男性ばかりいるみたい。

「さあーここにしよう、」加藤さんはそう言う、柱にもたれかけるように、ゴルフバックを置いて、

「ここに、座れば良いよ、僕が、お・て・ほくんを、見せるからね、」と、変なトーンの声を出して、笑いながら言う。

「はい、センス、楽しみにしています」

「ここら、是永さん、君も、やるんだよ、ほら、この手袋買って来たからね、はい、」

「ええー！済みませくん、」私は、何も用意してこなかった。加藤さんからは、昨日、何も用意をしてこなくても良いと言われていた。

「・・・・・・・・そうなんだ、手袋が必要なんだ、・・・・・・・・」

森本さんに行った、スキーの時は、色々準備したけど、今日は、何も準備もしてこなかったわ。

「ありがとう、加藤さんって、優しいんですねー」

「・・・・・・・・ほんと、優しいんだから・・・・・・・・」

「もう、今更、遅いけどねー、でも、ありがと、これから、打つから見ててね、」

「はい、」

加藤さんのゴルフの打ち方を見るのは、初めてだった。

「・・・・・・・・あっそうだ、・・・・・・・・」

「身体、ほぐして下さいね、柔軟体操ですよ、」

「もうー、それは、やって来たよ、朝起きるなり、やってきました、」こちらを見ながら、腕を回して、言う。

「そうですか、なんか、随分力が入ってますねーふふふふー」
「ははははーそりゃそうさ、是永さんに格好いいところ見えないとさ、」

「えー!? 今でも格好良いですよ、看護師さん達にもてますからねー加藤さんは、おとといも電話着てましたよ、」

「もうー、看護師さん達の事はいいの、今日は、」苦笑いしながら言ったから、

「はいはい、どうぞ、虐めていませんよー頑張ってください、」と、パチパチと手を叩きながら、促す。加藤さんは、打席に立って、構えた。

・・・・・・・・まっすぐに行って、・・・・・・・・

カアーン、と、甲高い音がした。

「うわぁー、飛びました、真っ直ぐ飛びましたよ、す・ご・いー」
「どう、見てくれた?？」

「はい、見ました、加藤さんって、上手なんですねー」パチパチ拍手しがら、言うと、加藤さんは、得意そうな表情を、私に向け、
「少し打つよ、見ていてね、」

そう言くと加藤さんは、私を見ずに、何球か打ったけれども、殆ど、真っ直ぐに飛んでいた。慣れていないから、初めはどこに飛んでいるのか全然見えなかったけれども、追いかけて見ているうちに、目がついていくようになって、

・・・・・・・・うわぁー、ゴルフのボールって、飛ぶんだー・・・・・・・・

等と、思っ見ていた。

何球か打って、身体がほぐれた、加藤さんが、振り向いて、
「さぁー今度は、是永さんの番だよ、」と言ったので、私は、いや

いやをするように、頭を振って、

「加藤さん、やっぱり私、出来ません、無理です、絶対、無理です！！」加藤さんを見ながら、言葉を返した。

「なうに言ってんの！、さあー、教えるから、さあーほら、ここに来て！！」加藤さんが、女性用の小さなクラブをバッグから出して、打席に入るように促す。

「さあ、ここへ立ってね」

「うわぁ、出来ませんよ」と言いながら、加藤さんから、赤いグリップのクラブを受け取り、言われるがままに打席に立ってみる。後ろで見る練習場の景色が、打席から見る景色とは全然違うことに気がついた。

・ ・ ・ ・ ・ わっ！！重い！クラブって、結構重いわ！ ・ ・ ・ ・ ・

「加藤さん、持ったことが無いんですよ、初めてですよー、」

「はーいはい、分かっておりますよー、はははははー」なんだか楽しそうに、変な言い回しをしながら、にこにこして言った。いきいきしてる、加藤さん。

「良いかい、クラブの握りはね、こう・・そう、しっかり握って見て、あっそれじゃ、力が入りすぎ、そう、そんならい・・・立ち方はね、・・・」

教え始めた加藤さんの言うとおりに、動く私。加藤さんが、私の前に来たり、横に立ったりしながら、色々教えてくれたけど、全く、何が何だか、理解できないでいた。

暫く、加藤さんの言うとおりに、やってみました。やりました。

「……なに、これ!! 難しいーゴルフって、見た目に簡単そ

うだけど、全然、難しいわー……………

「ようし、だいたい、これで、持ち方、立ち方、…………うん、じや、打ってみようね、」

「えっ、えゝそんなー、無理です、」

「大丈夫だよ、誰だって、初めから上手な人っていないから、大丈夫、」教えるのが、ホント、楽しそう、加藤さん。

…………絶対、一むりー無理ですー……………

打席に入って、教えられた通りに、クラブを握って、教えられた通りに、構えてみた。

…………駄目、無理、分かんないわー……………

自分で、言い訳を、言葉に出さずに、何回も心の中で繰り返して反復している。

「さあー、是永さんの、初打席、どうぞ、」と言いながら、ぱちぱちと拍手する加藤さんを、私はすがるように見る。そして、

「笑わないでくださいね、」と。

「大丈夫、誰が笑うもんですかーまずは打って見ないとね、さあー頑張って!!」

「でもー…………」

私は、諦めて、打つことにする。

…………えーと、こう、こうだったわ、えゝ……………

腕に力が入る。重く感じる。持ち上げるように、ゴルフクラブをゆつくりと、振りあげる。振りあげたところから、打席に浮いている白いボールにめがけて、クラブを、下ろした。

・ ・ ・
 ・ ・ ・
 ・ ・ ・ えいっ！ ・ ・ ・
 ・ ・ ・
 ・ ・ ・ えっ？？？？ ・ ・ ・ えっ？？？？
 ・ ・ ・
 ・ ・ ・ 下ろしたわ、確かに打ったわ？ ・ ・ ・

確かに、狙ってぶつけたはずなのに、何の、音も衝撃も手に腕に、身体に伝わってこない、私は、直ぐに加藤さんを見て、

「えっ? ? ? 当たりましたー?」

「か・ら・ぶ・りー、残念でした、さあもう一回、ガンバロ!!!
是永さん、ファイトー」

「出来ませんーもう無理ですーデキマセンー」

私は、とても恥ずかしさを覚えて、周囲の視線が急に気になりました。打席から離れて椅子に座ろうとして、初めて、周囲に目を向けてみると、

「あっ!!」
 ・ ・ ・ ・ ・
 驚きの、全く驚きの、声にならない声を出していた。

ドキンと、胸が鳴る。

続いて、胸の鼓動が、ドキンドキンと、激しくなりだした。急に顔に、全身に、熱い何かしらのほてりが駆け抜け広がる。一気に、熱を發したような気分になった。

・ ・ ・ ・ ・ あ、熱い、 ・ ・ ・ も、森本さん、来てたんですかー ・ あゝ
見られたわ、 ・ ・ ・ ・ ・

練習場の入り口から、右側の奥の打席にいる森本さんと、練習中の人間の隙間に垣間見えた森本さんと、初めて視線が合った。森本さんは、にこっと、笑っている。私は、直ぐに、視線を反らして、加藤さんに、気づかれないように、そのまま、椅子に座って、顔を両手で蔽うようにした。

「……うわぁ、見られたわ、……加藤さんとは、何もないんですよ、……」

「どうしたの??」

「なんでもないです、加藤さん、練習してください、私見ています、」

「どうしたの?練習しないの??」

「どうぞ、誰か、気になる人でもいるのかい??」

そう言うと、加藤さんは、辺りを見渡し始めた。

「あれ、今日は、社長が来てるいるな、珍しいな、いつもは、ゴルフなんだけどな」

加藤さんが、そう言うのを、聞いていたけど、知らないふりをしていた。

すると、

「こっちに、来るよ、森本の社長さんが!!」

「……えっ!!えっ??……来ないで……」

私は、椅子に座って、じっと、前を見ている、前だけを見る事にして、前だけを見ている。周りの人間は、もちろん、全員、知らない人ばかりよ、って、そんな表情を作っている。

「お、加藤君、美人を連れての、練習、祝着至極でござるな」

「……またまた、武士の言葉で……もう……」

「社長いらしてたんですか??」

「うん、加藤君が、美人を連れて、練習に来てると、連絡が入っ

たんだよ、だから、どんな美人かと思ってさ、」そう言う、森本さんは、白いダブダブの長袖シャツを着て、白いスラックスを履いていた。

「……またまた、嘘ーうそばかり……もう……お願いー、……でも、どうして加藤さんと知り合いなのかしら……不思議だわ、……」

「またまた、社長は口が上手なんですから、あつ、ご紹介します、会社の同僚の、是永さん、是永さんです。」

加藤さんが、そう言うので、仕方がないといった風に、椅子から立ち上がって、森本さんに、小さくお辞儀をしながら、

「是永です、」と、聞こえるか聞こえない感じの声を出して、言った。

「初めまして、森本です、いや、噂に違わず、ホントに、お綺麗ですな、おいおい、加藤君、うらやましいな、こんな美人と、交際してるのかい?？」

「ま、まさか社長、交際していませんよ」加藤さんは、困った表情をしながら、私を見る。

「……もう、森本さんたら、……もう……決めたわ、……」

森本さんに、言っでやる事にしたわ。……

いたずらっ子のような顔してる森本さんの表情を見ると、なんだか、言いたくなって、真っ直ぐに森本さんを見ながら、

「はい、お付き合いさせて頂いております。」と、口から出てしまった。

「……もう、言いました、……」

「いえ、私は、お茶にしますから、今、買ってきますから、加藤さん、練習してください。」

・・・・・・どうして、森本さん、いるんです、・・・・・・もう・・・・・・

私は、自動販売機でジュースを買いながら、自然に、森本さんの練習している場所に視線を移している。

・・・・・・随分、端っこにいるわ、・・・・・・お一人かな・・・・・・

視線には、見知らぬ人間が、それぞれに、打席に立って、ゴルフクラブを振っているのが、入っているけれど、全然見てはいない。視線の先には、森本さんがいる。

「森本さんが気になるのかい??」

「え、あんな変な人、おかしいですよ、」

「ははははは、まゝそんな事は言わないの、気にしない気にしない、」

「えー、そうします。でも、変ですよ、」

「参ったな、じゃ、そう言うことで、さあ練習しないの?」

「加藤さん、続けてください、見ていますよ、」

「駄目だよ、それじゃ、コースに行ったら、打てないよ、」

「行きませんよ」

「だめだよ、岩崎君と、事務屋の社長と、来週行くんだよ、」

「え・・・・? 岩崎さんも行くんですか?」

「うん、彼が、どうしても、是永さんを誘えっていうからさ、」

「岩崎さんと、加藤さん、お付き合いしてるんですか?」

「近頃、飲むようになったんだ、彼は、酒造店の跡取りなんだってさ、知らなかったよ、でも、最近飲むようになって、結構面白い

奴だよ。」

「そうなんですか??」

「…………お見合いの事は知ってるのかしら…………岩崎さんに、聞いてみなくちゃ…………」

「さぁ練習しよー、」

「まだ行くとは決めてませんよ、全然やった事が無いんですもん、そうは言ってみたけれども、行くことになるような気がしていた。」

「大丈夫だよ、来てくれるだけでも、俺達、鼻が高いんだ、」

「どうしてです??」

「それは、決まってるよ、是永さんは、とても綺麗だから、」

「行きません!!」

「あれ、怒ったの、ごめん、」

「……………」

「ごめん、…………」

「怒ってませんよ〜どうしようかな〜」

「大丈夫、一週間、ばっちり練習しようね、」

「う〜む、そうですね〜、」

その日の午後は、加藤さんと食事をして部屋に帰ったのは、夕方近かった。加藤さんは、夕食もと、誘われたけれども、お断りして、部屋の前まで、送ってもらい、直ぐにシャワーを浴びて、汗を流した。

「…………ゴルフって、難しいわ…………森本さんに見られたわ〜。まさか、見られるなんて、言っちゃったし、本気にしたかしら??…………」

朝早くから、加藤さんと一緒に車で、東北道を飛ばしてやって来た、岩手山高原にあるゴルフ場。高速から見えた岩手山は、朝靄に隠れて下の部分しか見え無かったけれども、すそ野の広さがその雄大さを物語っていた。加藤さんは、朝から、とても楽しそうだった。私は、走る車の、前方左側に見える、岩手山を見ながら、

・・・冬の岩手山、・・・森本さんと来たわ、・・・あの夜は、
・・・

前を見つめながら、そんな事を、思っていた。

ゴルフ場、何もかも初めて。これまで、一度も訪れたことも、見たこともないので、建物の中に入って、どうすれば良いのか分からない自分に、困っていた。でも、加藤さんに、色々教えてもらいながら、なんとか着替えを済ませて、外に出ると、直ぐに、光と共に、緑が目の前に広がり、何人かがパターをしている、グリーンが目飛び込んできた。

・・・うわぁ、これが、ゴルフ場なんだ・・・

私は、目の前に広がる緑の大きさに、圧倒されて周囲を見渡していると、

「おっ、是永さん、おはよ、」後ろから声をかけてきたのは、社長さんだった。

「あつ、おはようございますー」軽く頭を下げる。

「おはよう、うわおー会社で見るよりも、今日はうんと、素敵だよー、はははーこんな美人とゴルフ出来るなんて、今日は、最高だよ、頑張らなくっちゃ、はははははー」
相変わらず、声が大きい。

「いえ、いえーそんな事はないですよー、今日は、宜しくご指導お願い致します。あっ、岩崎さん、おはようございます。」

「ごめん、ごめん、ちょっと、道路が混んで遅くなっちゃった。おはようございますー皆さん宜しくお願いします、あー来てたんだ、今日は、宜しくね、是永さん、」

とても急いで来たらしく、声がいつもと違う。

「はい、」

「もう、遅いんだからさー、大丈夫なの？練習もしないで、いきなりコースだよ、」と、加藤さんが、岩崎さんに向かって、いうと、直ぐに、

「ははははー大丈夫さ、僕の実力を、見てくれってさ、」と、切り返した。

「はははー、さあー、さあー、若い二人の、火花が散ったよ、ははははー、冗談冗談、パターの練習をしよう、是永さんもね、」と、笑いながら、グリーンに向かって歩き出した。

「良いかい、パターはね、あの小さな穴をめがけてボールを転がすんだよ、さあーやって見なさい、ほら、こんな風にね、」そう言いながら、社長さんが打つと、ボールは勢いよく転がってしまつて、ボールの近くどころか、いきなり遠くに離れてしまった。

「はははははー、強く打ち過ぎたよ、参ったな、」

「社長ー、強すぎですよ、良いかい是永さんこうだよ、」加藤さんが傍に寄ってきて、ボールをグリーンの上に置いて、

「良いかい、落ち着いて、こつんと当てればいいんだ、ほらー!!」

加藤さんの打ったボールは、ゆっくりと転がり、ボールの近くに止まった。

「惜しかったですー、もう少しでしたー、」

「加藤君、いよいよ本領発揮だ、今日は、楽しいよ、二人の戦いが見れて、はははははー」

「さあー、今度は、是永さんの番だよ、」

「笑わないでくださいね、」

「おおー、当たり前だよ、誰が笑うもんか、さあー頑張っ、」

「はい、」と、返事はしてみたけれど、白いボールを目の前にすると、途端に、練習した事が、全て、忘れて、ぼうーとしてしまった。

・・・こう、確か、こう、そう、こう構えて、・・・

心臓が早鐘のように、ドキドキ打ち始めている。なんとか、構えて、打とうとするけど、もう、頭が、真っ白になってしまって、どうしても分からないでいると、

「是永さん、落ち着いて、そのまま、ゆっくりと振りあげて、」
遠くに声を聞いたように感じられた。

「はい、・・・」

・・・打つわ、・・・えい！・・・

「カキーン、」と音がした。確かに、当たった、感触が手に伝わる。確かに、当てた。

・・・当たったわ、・・・確かに当てたわ、・・・

でも、静かだった。シーンとした、雰囲気が一瞬感じられた。

「打ちました。」

「凄いなー、ボールに、当たったよ、おめでとう、」

「おめでとう、」

「ありがとうございます。」

「さあー、前に進もうねー。」

「あのー、ボールって、どこに行きました？」

「うん、前に歩けば、分かるよ、さあ、いこ！」

三人について歩き出すと、

「あっ！、私のボール、私のボールですよ、ね、」

「そうだよ、前に飛んだんだよ、凄いよ、なー、岩崎君」

「そうだよ、例えば、1メートルでも、前進だよ」

「えー、又、ここから打つんですか？」

「そう、それが、ルールだけどね、今日は、最初だから、打たなくても良いよ、ボールを拾って、さあーついて来て、」

「……当たったけど、前に転がっただけなんだわ、……うわぁー恥ずかしい……どうしょー、」

「気にしないの！！誰でも、最初はおんなじだよ、」岩崎さんが、歩きながら、言う。

「はーい、気にしませんよ」

「……大丈夫、ダイジョーブよ、……気にしちゃダメ、……」

「そうそう、いつもの是永さんに戻れば、いいよ、」

「はい、加藤さん、頑張ってくださいね」

加藤さんと、岩崎さんが、真剣な表情で、プレーをしている。社長さんは、いつものマイペースで、冗談を言いながら、一人で楽しんでいる。兎に角、打つのが、早い社長さん。構えた途端に、もう打っている。そして、打った後に必ず、あーとか、おーとか大声を出す、そして、必ず、ははははーと笑っている。

「……おもしろいわー、笑って誤魔化すのねー面白い社長さんだわ。……」

「はい、カンパ〜イ、」冷房のきいた食堂のテーブルの椅子に座ると、急に、全身の力が抜けて、少し安心した。

「さあ〜是永さんも乾杯しよ、」

「そうそう、さあ、乾杯〜」

「はい、カンパ〜イ、」火照った身体に、冷たいビールが染み込んでいく。

「良い〜最高だ〜、いや〜是永さん、御苦労さまでした、疲れたでしよ、大丈夫かな？？まだ後半が有るんだけどね〜」

「大丈夫じゃないですよ〜、ホントに、足手まといで、済みません、」

「いいの、そんな事は気にしないの、」

向かい側の席に座っている、男の人と、視線が合った。直ぐに視線を外す。

「ほら、是永さんが、美人だから、周りの男達が、気になってしよ
うが無いみたいだね〜」

「社長さん、そんな事は無いですよ〜もう、」いつもの事だから、あまり気にしていない。

「いいや、ほんとに綺麗だよ、是永さんは、ね、岩崎君」

「はい、そう思います、な、加藤ちゃん、」

「うん、凄い声で、叫ぶんだ、きゃ〜あ〜、ボール、ボールが、消えました〜、うわあ〜、蛇〜とか、」

「嫌い、そんな事を言う加藤さんって、」

「ははははは〜、冗談だよ〜、でもどう、初めてのゴルフって??」

「すっごく〜く、緊張しました。」

「なんだ〜そんなに緊張しなくても、良いのに!」

「緊張しますよ、初めてなんですからね、」そう言いながら、周囲を見渡すと、見知らぬ中年の男の方と、視線が合った。自然と、目を反らしながら、

「……まさか、ここには来てないわね〜…………森本さん・

・・・

満月の使者は、昨日で、ほぼ終わったから、又、森本さんの日々が始まる。

・・・ほんと、この期間中は、電話もくれないし、傍にも寄ろうとしない・・・

「知ってる人いるの??」目ざとい加藤さんが聞いてきた。

「いえ、誰か、知ってる人がいるのかしらと、思っ、」

「ここは、意外と、遠いから、知ってる人間は、あまりいないはずだよ、ね、社長。」

「うん、あまり、近場だと、人目が、うるさいからねー、森本の社長も行きたいと言っただけ、」

「えっ、誰です??」胸に、熱い何かが、湧きおこる。

「あー、ほら、練習場で会ったでしょ、武士の言葉で言う人、是永さん、変な人って、」と、加藤さん。

「あーあの人ですか?あの人、変ですよ、一緒に来るはずだったんですか??」

「いや、いや、誘っていなかったからねー、そうか、森本の社長と会ったんだー、」

「えーゴルフの練習場で、でも、どうして、ご存じなんです??あの、変な人??」

・・・加藤さんも社長さんも、森本さんを知ってるなんて・・・

「はははははー変な人は良かったな、」

「実は、社長とは、ライオンズクラブの仲間なんだ、」

「そうなんですか??・・・」

・・・・・・やはり、狭い町だわ、・・・・・・気をつけないと、・・・・

お料理が、運ばれてきたので、皆さん、食べ始める。私は、冷たいソーメン。加藤さんが、美味しそうに、ビールを飲み干すと、岩崎さんも、一緒に二杯目を注文する。

「大丈夫ですか？ 帰り車ですよ？？」

「大丈夫だよ、帰るまでに、殆ど汗で、流れるよ、」と、少し赤い表情で私を見ながら言う。

「そう、心配しなくても、大丈夫だよ、十分この暑さで、汗が出るし、水分も取るから、」と、岩崎さん。

「森本の社長は、結構ゴルフ上手いよ、な、加藤君、この前一緒にしたんだろ？？」

・・・・・・えくえく？？加藤さん、森本さんと、ゴルフしてるんだく・・・・・・何時？からかしら？？・・・・・・

「はい、80前後、いつもそのくらいでラウンドしますよ、」

「あの変な人、上手なんですか？」

「うん、かなり上手だよ、」と加藤さん。岩崎さんは、熱いラーメンを食べながら、聞いている。

「じゃ、今度、誘ってみようか？？」

「嫌です。・・・・・・もう、」

「はははははー岩崎君は、会った事がないだろうな。」

「はい、知りませんよ、ところで、今日の19番ホールは、どうします？？」

「えっ？？なんです？19番ホールって？？」

「はははははーそうか？知らないか？はははははー」社長さんが、大きな声で笑いながら言った。

「是永さん、19番ホールって意味はねー、色々な意味が有るんだ、」

「えー？そうなんですか？・・・」

「まあ変な意味で言う場合もあるけど、今の意味は、反省会の事だよ、」

「あー分かりました、反省会ですねー」

「加藤さん、岩崎さんと、真剣でしたねー後半、」
車は、盛岡を目指して、高速を走っている。窓外の景色は次々と飛んでいくように移り変わっていく。

・・・もう、全然、ゴルフにはなりませんでした。・・・

車に乗り込んでから、少し、無言の時間が経っていた。やはり、初めてのゴルフは、疲れている。

「実は、後半戦は勝負しようって、二人で決めていたんだよ、」と、前に意識を集中している加藤さんは、結構、スピード狂。

「勝負って・・・なんです？」

「単純にゲームで良かったんだけどさー、せっかく是永さんがいるんだから、格好良いところを見せようって、二人で話してたんだ、」
「そんなー、でも、格好良かったですよ、お二人とも、でも、全然、無口になってしまっただけ、」

「いやー、ごめんごめん、真面目にやりすぎたよ、」喧嘩でもしたのかしらと思っていた。

「社長さんが、私にこう言っただけですよ、・・・」

「えっ、なんて言ったの？？社長ー？？」

「あの二人は、是永さんを意識してね、今必死で、戦ってるんだよって、」

「い、いや、まあ」

「そうなんですか?」

「そう、そうね」言葉が濁した加藤さんには、岩崎さんとお見合いの事は黙っていたように思った。

「彼も、是永さんが好きなんだ、今に、アプローチが有るはずだよ」

「えーうそ、冗談ですよ、」気まずい空気が流れていく。車は、既に、岩手山を過ぎていく。岩崎さん達は、それぞれ、途中で何か用事が有るらしく、急いで別々に帰っていった。

・・・・・・・・話題を変えなくちゃ、・・・・・・・・

「19番ホール、確か、居酒屋松野でしたよね、」

「うん、そうだけど、無理しなくてもいいよ、初めてのゴルフで、疲れたでしょ、」

「えー少し、でも、・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・やはり帰ります。」

「うん、それが、良いよ、」

疲れた、身体をソファに置くと、直ぐに電話が鳴りだした。

・・・・・・・・森本さんだわ、・・・・・・・・そんな予感が有った。

「はい、是永です、・・・」

「のん、」

「はい!!」それは、やっぱり森本さんだった。

「今から、行きたいんだけど、」

「駄目です、」

「あっ、そう言う事を言うとお仕置きするよ、」

「嫌ですーよー、だ、」

「じゃクイズ出そう、今どこにいますか??」

「今日は、日曜日ですから、ご自宅ですよ、」

「はずれ、残念でした、クイズにも間違ったから、お仕置きだねーのーうわっはははははは、のう越前屋ー、」

「いや、嫌ですよー今日は、逢いません。」

「あれー、じゃ、このまま帰らせるの?? ドアーの前にいるんだけどねー」

「えっ?? いるんですか??」

「もう、帰るよ、」

「駄目ー今開けます、」

・・・もう、いつも突然なんだから・・・

のぞき穴から、見える森本さんは、歪んでいる。ドアーを開けると、直ぐに中へ入って来て、抱きしめられた。そのまま、乳房を、ぎゅっと、握られる。

「あん、うーん、」痛さと同時に快感が、そして安心感が、身体を駆け抜ける。

「待ちくたびれたよ、」と言いながら、唇を奪われていた。

玄関での、愛撫は直ぐに終わり、部屋の中に入ると、当然のように再び抱きしめられた。

「抱きたい、」耳元で囁く。

「駄目、」

「終わったんだろ??」

「いーえ、終わってません、永遠に終わらないんです。」

「ほう、そうなんだ、では、ここで確かめてやるぞー」

「駄目、いや、ね、森本さん、まだ、シャワー入ってないんです。」

「じゃ一緒に入ろうか、」

「いや、」抱きしめられながら嫌嫌を試みる。

「しょ、しょうがく無いな、川津屋く」

「もう、止めて下さい、入って来ますから、ね、」

「うん、裸になって待ってるからね、」

「もう、スケベ!!べ」

「……今から、抱かれる、……終わったかしら、……」

「ね、のん??」

「はい……??」余韻をむさぼっていた私の乳首をつまみながら、森本さんが言う。

「パスポート、あるかい??」

「えっ??パスポートですか??」

「うん、持ってるかい??」

「いえ、持ってませんよ、どうしたんです??」

「じゃ、早急に、造って、」

「どうするんです??」乳房が、左右交互に揉まれている。私は、好きなようにさせている。

「ハワイに行くよ、」

「えっ、は、ハワイですか??」

「そう、ハワイに連れて行ってあげるよ、」

「いつです??」

「秋口か、お正月明けかな」

「ハワイですか??」

「嫌かい??」

「いえ、只、良いのかな〜って、・・・・・・」

「遠慮しないの〜俺と行くのが嫌なのかい??」

「え〜〜そうなんです、ふふふふ〜」

「なんで??」

「ふふふふ、結婚前の若い女性の夢ですよ〜新婚旅行はハワイと・

・あ、あ〜んう〜ん、」乳房を強く握られた。

「新婚旅行ね〜もうこうなったら、行かせないもんな〜無理やり
にでも連れて行ってやる、」

そう言うと、私に被いかぶさって、両足の間に身体を入れて、その
まま、ぐいと、再び入れて来た。

「あん、もうー、森本さん、」

「あ〜何回でもしてやる、此処は、誰のものだ、言って!!」そう
言うと、ぐいと強く入れて来た。

「も、森本さんのもの〜」

・・・・・・部屋で抱かれるのは、今日で終わりにするは、・・・・

「のん、パスポート造っておけよ、」

「はい、・・・・い・・」

・・・・・・ハワイ、・・行くんだ〜・・・・・・

秋が来た。暑い夏は、あっという間に終わって、気がつけば、もう秋。森本さんとは、外で逢って抱かれている。いつもアパートの前まで車で迎えに来てもらい、そして、森本さん命名の「不倫ロード」の裏道を、人目を避けるように、すり抜け走り、暗い郊外へ向かう。そしていつも途中で前の席に移動する、この時が唇が重なる

時間。唇が重なると、乳房が服の上から、強く揉まれる。いつもの時間。森本さんは、逢えば必ず、次の約束をする。その約束が、私を拘束し、どんな誘いや友達より、何より優先する。いつも逢う時は、ドライブをして、どこかの知らない街で食事をして、その後は決まって、郊外のモーテルに行つて、抱かれる。

でも、満月の死者がやって来ると、私の時間が始まる。森本さんから、解放され、友達や、同僚とお付き合いをする日々が始まる。もう、この数カ月、同じサイクルが繰り返され、モーテルへは、何度も回数を重ねているから、初めのような、興奮は無かった。行くと必ず、いつものように、部屋に入り、いつものように服を脱ぎ、脱がされ、一緒にお風呂に入り、そして、ベッドで抱かれる。殆ど、毎日のように感じられる日々が過ぎて来た。

今日も、森本さんの車で、不倫ロードを、郊外に向かって、走っている。

「ねーのん、来月、ハワイに行くよ。」

「はい、分かりました。」

パスポートを準備してと言われて、直ぐに、申し込んだ。だから、もう出来てある。

車はいつものように、暗い夜道を、郊外へ向かって走っていく。森本さんの車に乗ると、乗った瞬間から、身体中に、じわっと嬉しさと安心感が広がっていく。車を運転している森本さんの横顔を見る。いつもの森本さんがいる。

・・・・・・好きですよ・・・・・・森本さん・・・・・・

「うん?? どうかした??」 横向いた森本さんと視線が合った。

「いいえ、危ないですから、前を見て運転してください!」

「あれー今、じっと見てたよねー」

「えゝ見てました、随分太ったわゝゝ森本さん、って、見てたんです!!」

「そ、そう、太ったゝ?? そうなんだよ、少し太ったんだ、」

「初めて、お逢いした時は、随分スリムでしたもの、今じゃ、子豚ちゃんですね、」

「こらこら、のんお嬢さゝん、ほゝゝほっほほほゝ、しょ、しょうが無いなく、子豚ちゃんは無いでしょ、」

「じゃ、おデブの悪代官で、」

「ははははゝゝどうしても、悪い男にしたいんだねゝよし、」そう言うと、暗闇の中に、ライトを消して車が急に止まり、そのまま、森本さんが唇を重ねきた。乳房が、服の上から、強く掴まれた。

「うっ、うゝん、」声にならない声を出して、目を閉じて、応じる。愛撫は、直ぐに終わって、車は、走り出した。

「ここの、お寿司美味しいだろ、」

「はい、とても、美味しいです。森本さん、お酒飲みたいでしょ、」隣町に在る、お寿司店に真っ直ぐに来た。まだ、夕食は食べていなかったから、お寿司は美味しかった。

「うん、まあゝね、でも、車だしね、」

「運転しましょうか??」

「い、いや、良いよ、」

「あれゝ、信じていないんでしょ、私運転上手ですよ、」

「ははははゝゝそう、じゃ、飲むかなゝ」

「やっぱり、駄目、」

「なんだよ、飲むよ、」

「ダメ!!、」

「なんだよゝ」

「ふふふふゝどうぞゝ、」森本さんは、御猪口を持って、お酒を注ぐのを待っていないながら、

「なんだよ、」

「可愛いんですもの、」

「がははははは〜て、照れるではないか、うほ、うほってほほ〜のう、越前屋〜」

森本さんは意外と、シャイ。照れ屋だと、段々分かってきた。

「普通にしてください、もういつもそうなんですか??」

「うん、まあ〜うんそうだね〜ところだ、パスポートあるよね、」

「はい、今度、持ってきてくれないかな〜、手続きとかあるんだよ、良いね、」

「はい、ホントに行くんですか??」

「行くよ、のんは行った事が無いよね、」美味しそうに、お酒を飲みながら、聞く。

「はい、無いですよ、」ハワイの光景が、頭に浮かんた。それは多分絵葉書・・・。

「じゃ、そろそろ、準備しておいた方が良いよ、遺書とかさ、」

「あのですね〜遺書って書くんですか??」

「ははははは〜冗談、冗談、ほら、水着とかさ、」目が細くなつて、口元が、にやつくような表情をしたから、すかさず、

「いやです、水着にはなりません、」と言う。

「どうして、??」

「だって、今の表情、なんだかいやらしいんですもの、スケベなんですから、ほんとに、」

「ははははは〜良いだろ、のんの水着姿なんて、ハワイで見られるなんて、写真取っておこうね、」

「うわ、又、にやにやしてる、うわあ〜、行くの止めようかな〜」

楽しかった。森本さんといると、とても楽しく過ごせる。

「写真は駄目です。証拠が残りますよ、秘密なんですから??」

「うん、まあ〜そうだけど、内緒で行くのかい?? 友達とか、会社とか、両親にさ、」

「両親には、友達と行くって言いますが、会社とか友達には、ハワイの事は言いませんよ、」

「うん、それが良いよ、そうしなさい、」

「はい、」

・・・・・・ハワイから〜二人で行くのかしら??・・・・・・

「はい、どんどん飲んで酔ってください、」

「おっ、ありがとう、でも酔わせてどうするんだい??」少し顔が赤くなっている。

「はい、決まっています、そのまま、帰るんですよ、何もしないで・・」

「ほうーそうなの、黙って何もしないの?? それで、良いの??」

「はい、今日は、帰りましょうね、何もしないで、」
心にもない事を言ってしまう。

「いやだな〜折角逢っているんだからさ〜、今日はね〜、のんをね、ふふふふ〜苛めてやろうと思ってるんだ、縄で縛ってさ、」

「うわ〜、いやらしい、そんなの、絶対嫌です、いきません、・・」

「はははははは〜、うそーうそ、そんな事はしません。ね〜のん、」

「はい、なんです、さあ〜どうぞ〜、・・」お酒を注いで、森本さんを見る。お店には、お客はいないみたいで、静かだった。

「ハワイには、何人かと一緒に行くんだ。良いね、」
「えっ!??・・他にもです・・か??」

「うん、そう、大丈夫、仲間だよ、安心して良いよ、」

「そうですか、じゃ私遠慮します。」

「どうして??」

「だって、・・・・奥様も・・・・」

．．．．二人の関係は、秘密のはずなのに．．．．

「皆、自分の彼女、同伴なんだよ、」

「えっ？．．．彼女って言いましたよね、彼女って、奥様なんじゃないんですか？？」

「いや、女房には内緒だよ、皆、自分の彼女を連れて行くんだ、だから、そんな事は心配しなくてもいいよ、皆、会社の社長達だから、それに、一緒に行くと言っても、ハワイにつけば、全然別行動だから、心配しなくてもいいよ、帰るまで、二人だけだよ、良いね、」
「．．．．．」

「なに？嫌かい？？」心配そうな、表情の森本さんと視線が絡む。
「でも、．．．．．」

「心配しなくてもいいよ、皆口は固いから、後から、詳しく教えるからね、行くよ、」

「はい、．．．．．」

何の躊躇もなく、暗いモータールのドアを開けて入っていく。小さな気持ばかりの玄関に入ると、赤く薄い照明が、部屋を照らしている。その薄い光の暗い部屋の奥にある、すこし大きめな丸みを帯びたベッドが目に入る。森本さんは、部屋に入ると決まって、直ぐに、私を抱きしめ、長い口づけをする。それは、もう当たり前、ごく普通の日常の一コマになっている。

離れると、決まって言う。

「さあ、一緒に風呂入ろー、」

「はい、．．．じゃ、お湯入れますから、」私は、いつものように言葉を返す。

初めての部屋なのに、何回も訪れた事があるかのように、お風呂場に行き、お風呂の準備をしている。お湯は勢いよく出てくる。湯船には、あっという間に、お湯が溢れかえる。

私は、森本さんに、言われる前に、自ら服を脱ぎ始めている。裸になり、お風呂場に入っ、森本さんを迎える。いつもの事。

お湯の中に、身体を沈めると、決まって、森本さんが、お風呂場に入ってくる。

裸の森本さんは、隠そうとしないで、私の前に立つと、

「入って良いかい??」と聞いてきた。

「どうぞ、」私は、沈めた身体を、起こし、森本さんが、入るスペースを作ると、森本さんは、湯船に腰掛けて、

「口で愛して、」と言う。いつも。私は、お湯の中の身体を、半身起こして、身体向きを変えて、森本さんの前に正座する。目の前にある、大きくなってぴくぴく動いているものを、両手で、さするように優しく持つと、

「いいね、その白く細長い指で持たれると、それだけで、興奮してくるよ、」と言いながら、私の、頬を撫でる。私は、自分の手の指先を見ながら、白い指と、赤黒くなっているものとの色の対比が、あまりにあるのにいつも驚く。

・・・どうして、こんなに、色が黒いのかしら、・・・・・・

両の掌に包み込んで、揉みさすりながら、そう思う。そして、ゆっくりと顔を近づけ、唇をつけてキスをし、それから、舌で固くなっている裏表を舐め、這い回る舌先で、チョンチョンと、先っぽに刺激を与えながら、左手で丸い物を優しく、包み揉んで刺激を与える。これらは、全部森本さんに教えてもらった。

そして、口を半開きにして、ゆっくりとめくるように、唇で締め付けながら、飲み込んで行く。喉奥まで、飲み込む。

「あゝ良いぞーのん、そのまま、じっと、していて、」動きが止ま

っている先っぽが、喉の奥に当たる。

「うっ!!」でも、私は、動かずじっと、耐えている。そのままでも、舌を動かす努力はしている。

「……フェラチオ、嫌いではないわ、森本さんが喜んでくれるなら、するわ、……」

「いいよ、動いて、」私は、その言葉で、動き出し。ゆっくりと吐き出しながら、締め付ける。小さく、齧っでもみる。

別れ

ハワイ

「……来週、ハワイに旅立つわ。……初めての経験、何もかも初めてだわ。良いのかしら、何だか怖いわーでも……」

心は既に飛んでいる。ハワイに行くことは会社の同僚や友達の誰にも話してはいない。母には、旅行に行くただけ話している。もちろん、行き先とか、誰と行くとかは話してはいない。

「……絶対、話せないわ、絶対、これは秘密の旅行なの……」

ここ暫く、旅行の準備をするだけで、ワクワク、ときどきで、十分楽しかった。夢のような気持ちは今も続いて、何だかふわふわし

ている。

下調べのつもりで、ハワイについての旅行本を買って、もう何度も繰り返し読んでいた。

・・・まさか、私が、ハワイに行けるなんて、多分、行けるとしたら、新婚旅行かなくくらいにしか思っていなかった、それが、森本さんと行くなんて、・・・

この1週間というものの、森本さんとは、全然、逢ってはいない。

「明日、書類を持って行く」と連絡があったのは、部屋に帰ってきて直ぐだった。森本さんとは、ここ暫く、全然、逢ってはいない。

森本さんは、色々準備で忙しそうだったし、

「何事も、のん、逢いたくても我慢だよ、出発の日まで、問題を起こしては駄目だからね。」

最後の夜、モーター帰りの車の中で、暫く逢わないでおうと言って、今日まで我慢してきた。その森本さんが明日、日曜日の午前中にやって来る。そう言われた時は、素直に嬉しかった。でも、逢えない間は必ず、日に一度は私の部屋に電話がかかってきて、声を聞かせてくれる。毎日かかってくる、その電話が、ハワイ旅行が現実な事を告げていた。

旅行の支度は、随分前から、準備していたので、既に、終わっている。部屋の窓下の壁際に置いてある、新品のグレーのスーツケースには、必要な物は全て入っている。

「旅は身軽にね、それが基本だよ、」その森本さんの言葉が、頭から離れなかったから、一応、身軽にしたつもりだけど。

何度も、確かめるために開けたり閉めたりした、今もそう。

・・・行くんだわ、ハワイに・・・

パスポートと、パスポートのコピーは、別々のバッグに入れたし、旅行保険にも、森本さんは、私を入れてくれたみたい。その日が来るまで、森本さんとは、逢わない事になっていたのは正しかった。

ル
ル
ル
ル
ル
ル
ル
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

電話がなつた。

・ ・ ・ ・ ・ 朝の電話は、殆ど、母だけど、
・ ・ ・ ・ ・

「もしも、是永です。」

「おはよう、のん、下に降りておいで、今着いたから」その声は、森本さんだった。身体中に嬉しさがこみ上げる。それでも、

「えっ、下にですか？」

「うん」声に、どこか元気が無い。

「はい、今行きます。」

・
・
・
・
どうしたのかしら？下につて？
・
・
・

急いで、階下に降りると、いつものパーキングに見慣れた、白いマジエスタが、静かに止まっている。近くまで寄って行くと、運転席のガラス窓が開いて、森本さんと視線が合った。

「どうしたんです？」

車から降りてこない森本さんに、私が近づくと、その時だった、車の中から、病院の匂い、消毒液の鼻をつく匂いが、車の中から、漂ってきた。

「どうしたんです?? 森本さん??」 森本さんは、着物姿で、青白い表情の顔色をしているのに気がついた。

「うん、・・・」

「うわぁどうしたんです? 大丈夫ですか??」

「熱が下がらなくてさー」 力の無い声で言う。

「大丈夫ですか? 本当に、お顔、真っ青ですよ、」

「うん、今朝から熱を出してさ、これから、病院に行って来るよ、部屋に寄りたいけど、少し、辛いからさ、」 森本さんの着物姿を見るのは、初めて。

「良いんですよ、私の事は、今日、日曜日ですよ、病院、大丈夫かしら・・・」

「あゝ知り合いのお医者さん、居てくれたから、大丈夫さ、これ、書類、やっておくよ、ハワイに行くまでに、治さなくちゃ、ごめんな、のん、」

「大事にして下さい、ハワイは行けなくなっても、気にしませんから、」

「なに言ってるの、必ず、一緒に行くよ、良いね、」と、声を大きくして言ったけど、やはり、いつもの森本さんではなかった。

「はい、ありがとうございます。でも、無理しないで下さいね。」

「待ってて、・・・のん、」

「はい・・・」

そう言って、車は、直ぐに走り去っていった。

部屋に入って、再び、スーツケースを目にすると、何故かしら、涙が滲んできて歪んで見える。

・・・夢だったんだわ、・・・でも、・・・森本さん、大丈夫かしら、・・・ハワイには行けなくても、全然平気、でも、楽しい夢だったわ、・・・

・・・・・・・・ルルルルルウ~~~~・・・・・・・・

電話がなった。出たくはなかった。電話は、鳴り続ける。

「はい、是永です、」

「のん、ごめんな、出発まで、絶対、良くなるから、心配しなくて良いよ、」

声は、森本さんだった。

「良いんですよ、私の事は、気にしないでください、それよりも、いつもの、お元気な森本さんになって下さい。」

「心配するなよ、今から、もう一度、戻ろうか??」

「ダメです、何を言うんです、病院に行ってください、」

・・・・・・・・駄目、だめ、森本さんなら、やって来かねない。・・・・・・・・

駄目・・・・・・・・

「はははは、しょ、しょうがないな~~~~、・・・・・・・・」そういう声も、力が無かった。

「私、何もしてあげなくて、・・・・・・・・済みません、」声が、苦しい。涙声になっている。

「戻るよ、今から、」

「ダメ、です、病院に行ってください来ても、ドア、開けません。」

「分かったよ、今向かってるんだ、後から、電話するよ、」

出発は、水曜日。今日は、月曜日。いつもの、いつもの会社の日常が始まった。昨日は、あれから、森本さんから、電話は無かった。心は、最悪を、考えている。

「おはよう、是永さん、どうしたんですか？？今朝は、少し元気が無いですよ、何かあった？？」

週の初めの月曜日、加藤さんは、相変わらず、お元気。ホントに元気。そして、いつものように、私に声をかけてくれる、いつも優しい人。

「交際合って下さい」と告白されてから、もう随分時間が経っている。それでも、今日まで、お付き合いしているのは、加藤さんの心の大きさだと思う。いつも甘えている。あの、どうしようもない、ゴルフから、何回か、満月の使者になると、岩崎さんとか、加藤さんとは、ときどき、飲み会などで、遊んでいる。

「はい、おはようございます、いつも元気ですね、加藤さんは、でも、目が真っ赤ですよ、又いつものところですか？」

「い、いや昨日はねー、夜遅くまで、勉強してたんだ、」

「えっ？何の勉強です？？」加藤さんが勉強している事は初めて知った。

「うん、それは、秘密だよ、そろそろ試験が近いからさ、」

「ふーんそうなんですか、頑張ってくださいね、私は、元気ですよ、ちよっと、眠たいだけですよ、」

「そうか、なら、安心だよ、さあ、今日からまた、一週間が始まる、頑張ろう」

「はい、」

私の休みを知ってか知らずか、そう言いながら、部屋を出て行ってしまった。

会社では、いつもの仕事が始まり、その日は、何事もなく、終わって、部屋に入ると、待っていたかのように、電話が鳴りだした。

・・・・・・森本さん・・だわ、・・・・・・

「はい、もしもし、こ、」

「のん、・・・・」

「はい、」やはり森本さんだった。

「今、病院にいるんだ、今は、・・・・入院したんだ。」

「えっ、入院、・・・・じゃ、やはり、かなり重いんですか??」

・・・・入院って、相当悪いのかしら??・・・・

「いや、今日だけ、明日は、退院するよ、午後から、ずっと、点滴を打っていてさ、今晚休んで行けって、先生がさ、単なる疲れとか言ってたよ、」

「そうなんですか??明日は、退院ですか、安心しました。でも、そんなに疲れてるんでしたら、中止ですね、ハワイ、」

「いや、行くよ、そのつもりで準備しておいてよ、」

「良いんですよ、無理しなくても、」

「ばか、無理してないよ、行くの、良いかい!!」

「はい、・・・・」

「行くからね、」声が、力強さを取り戻していた。

・・・・・・夢、・・・・・・夢だったのね・・・・・・

昨夜は、あれから電話は無かった。

「おはよう、是永さん、」

「おはようございます、加藤さん、どうしたんですか? 疲れたお顔

してますよ、」

「うん、徹夜したんだ、」

「試験勉強でしたね、頑張ってくださいね、応援してますよ、」

「ありがと、今日は、盛岡に所長と行ってくるんで、居眠りも出来ないよ、」

「えゝそうですねゝ頑張ってください、」

「明日から、どっか行くの??」加藤さんは、聞きたい気持ちを抑えて来た表情をしていた。

・・・やはり、聞いてきた。・・・でも大丈夫、その時の、答は、何回も、自分の心で繰り返し、繰り返して来た。・・・大丈夫・・・

「はい、実はゝ、彼氏とゝ、えゝ彼と、彼とですね、そう、ですね、旅行に行くんです。そう、新婚旅行ですね、行き先は、デイズニールランド、・・・」そう言いながら、加藤さんの表情を見ると、笑いだした。

「はははゝそうなんだゝ、新婚旅行ね、楽しんでらっしゃい、」
・・・あらっ、平気だわ、・・・

「あれゝ、新婚旅行ですよ、それも彼氏と、行って良いんですかゝ、」と、思わず、聞いてみる。

「はいはい、で、何時??結婚したんだっけ??ノンちゃんはさ、」

「あっ、もう、そうですねゝ、鋭いんだから加藤さんは、もう、ばれました??・・・ふふふうー」

「でも、彼氏って、ホントに彼氏なの、まさか、・・・彼氏なの???少し、真面目な顔をしたような気がした。

「はい、大学時代の同級生の彼氏ですよゝ、ずうっと、付き合っていました、」

「ふーん、そうなの、同級生って、是永さん、確か、短大だったよね、男の学生もいたんだねーふーん、そうなんだ」

「うわあー、加藤さん、そんな細かいとこまで、ばればれですね、・はい、」

「ははははー気をつけて行ってらっしゃい、」

「ごめんなさい、短大の時代の仲間と、東京でね、・」

「はははははーそうなんだ、」

「・・・・まさか、私が、不倫してるなんて、言えない、男の人とハワイに行くなんて、誰にも言えないわ・・・・・」

「気をつけて行ってらっしゃい、ディズニーは、混んでるよー、」

「はい、ありがとうございます。加藤さんも、頑張ってください、」

その日は、何事も無く一日が終わった。明日は、ハワイに出発をする日。部屋に帰って、最後の点検をしたけど、もう何度もやったから、同じ事の繰り返しだった。それでも、心は、ウキウキしている。

部屋

ルルルルルルルルルー、・・・ルルルルルルルルルー電話が鳴った。

「・・・・森本さんだわ、・・・・」

「はい、是永です、」

電話は切れた。明日は、バスが、部屋の近くまで、迎えに来てくれる手はずになっている。

・ ・ ・ ・ ・ 眠らなくちゃ、 ・ ・ ・ ・ ・ 寝れるかしら、 ・ ・ ・

ハワイ

「おはようございます。」

「おはようございます ・ ・ ・ ・ ・」

バスに乗り込むと、薄暗い中に、見知らぬ、組合せの男の人と女の人と、視線が合った。軽く、頭を下げて、小さな声で、挨拶をする。バスは、時間どおりに、約束の場所に、滑りこむように、約束の場所に、静かに着いた。ドアが開くと、中から、森本さんが、降りてきて、直ぐに私の荷物を持って、乗りこむように促した。

「さあ、出発するよ、良いね、」その表情は、少し青白かったような気がした。

「はい、」

バスは、動き出した。一番後ろの席に座って前を見ると、空席の中に、相席で座っている、男女が3組しかいない事に気がついた。この大きなバスに4組の男女しか乗っていない。バスの中は、不思議と静かだったし、見知らぬ人間達だった。でも、全然不安は無い。

・ ・ ・ ・ ・ だって、隣には、森本さんがいるもの。 ・ ・ ・ ・ ・

その時だった、森本さんの掌が私の右手を握り締めながら、二度握りなおし、力を加えてくれた。大丈夫だよ、と言っているように、そう感じた。

バスは、早朝の道路を、東北道を目指して、走り出す。

・・・高速に乗れば、一気に、成田空港まで行くんだわ、・・・

空港

「どう、疲れたかい??」

「いえ、大丈夫です。」

成田空港近くの、ホテルの部屋に入ると、直ぐに森本さんが、唇を求めて来た。強く抱きしめられて、苦しかったけど、直ぐに、解放された。

「ねっ森本さん??」早速服を脱ぎ始めた、森本さんの背中に向かって、声をかけた。

「うん??なに??早く抱いて欲しいのかい??」

「い、いえ、違います、どうしてそんな事ばかり言うのかしら、ホントにスケベなんですから??」

「あれゝまたまたそんな事を言って良いのかい??」

「良いんです、ね、森本さん、今日のバスのカップルって、ご夫婦じゃないですよ、ね、」

「うん、皆さん愛人を連れて来たんだよ、どうかした??」

「やっぱり、そうなんですか、」

・・・不倫旅行、私を含めて、あの女性の方達、愛人なんだ・・・

「ははははは、何も驚く事は無いよ、今晚、皆とホテルのレストランで食事するから、その時に紹介するよ。さあ、シャワーだ、ノンも準備をしないさい、」

「はい、・・・」

森本さんは、そう言うのと、シャワー室に消えて行った。

高速を走っているときにも、会話は、他の女性達とは、全くしなかったし、席が後ろだったから、顔を見ることもなかった。ホテルのフロントでも、互いに距離を取って離れていたから、話す機会もなかった。不思議な、旅の同行者達。

・・・明日は、空を飛ぶんだわ、森本さんと一緒に・・・

シャワーを浴びて、直ぐに、待ちかねたような森本さんに、抱かれて、愛された。いつものように、私の身体を上から、じっと見つめて、動かず、感覚を追う森本さん。いつものように、私は、森本さんを、「キュッ、キュッ」と、二度締め付ける。いつものように。

余韻が、引いた頃に、部屋を出て、最上階にある、レストランに入ると、皆さん、お互いに女性を隣に座らせ、席について、何か話しながら、ビールを飲んでいる。挨拶をしながら、森本さんと一緒に、開いている席に着くと、直ぐに夜景が、目に飛び込んできた。レストランの広く大きな窓から見る夜景は、光が闇を征服してしまったような感じがして、全く、異国を連想させるほど、普段目にした事が無い光景が遠くまで浮かび広がっている。

・・・・・・・・凄いわ、・・・・・・・・

「さあ、これからの旅の無事を祈って、乾杯しよう、」

「はい、」

「かんぱーい、」

「かんぱーい、」

改めて、目の前の女性をそっと、見る。

・・・・・・・・うわあ、これって、やはり恥ずかしいわ、これって、
・・・・・・・・皆さん、愛人なんだー・・・・・・・・私も、だけど、
・・・・・・・・でも、あまり今まで深く考えた事もなかったわ、・・・・・・・・
愛人って、・・・・・・・・愛人なんだわ、私も・・・・・・・・ここに
いるのが、不思議だわ、・・・・・・・・

「どうしたの??」森本さんが聞いてきた。

「いえ、なんでもないですよ、夜景がとっても綺麗なんですわー見
惚れてました、」

遠くに視線を向けるように見る。

・・・・・・・・やはり、綺麗だわ・・・・・・・・

「そうだなー綺麗だよな、そうだ、ここで紹介しようね、えー
と、こちらは、相沢建設の社長さんの相沢さん、うんとお世話にな
ってる社長さんだよ、お隣の女性は、俺も初めてだから、名前は
知りません、知らないでおきましょう、はははははー、」

「初めまして、・・・・・・・・」私は、軽く、頭を下げる。なんだか、
とっても恥ずかしい気がして、お隣に座っている女性を見ると、に
こにこしながら、全然平気な表情でいる。

・・・・・・・・落ち着いているわ、この女の方、・・・・・・・・

「こちらの男性は、佐藤木材の社長さんで、佐藤さん、お隣は、やはり初めての女性ですから、名前は、知らないでおきましょう、」
「宜しく願います。」お隣の女性と、視線が合った。綺麗な、女性。水っぽい感じがする。

「そして、えへん、僕が、森本です、こちらは、妹の美雪です、」
と、私を、紹介すると、皆さんの視線が、私に集中した。

・・・・・・・・い、妹ですか??・・・またまた、・・・・・・・・

「ははははー嘘ー嘘こけー、はははははーそう言うかー」直ぐに相沢さんが言う。すると、佐藤さんも、直ぐに、

「ははははー社長ー、それでは、俺の隣の女性もさ、女房の妹って、・・」そう言われた彼女は、笑っている。

「そ、それはちと不味いんでないかい??女房の妹ってのはさ、妹までさ、」と、森本さん。

「はははははーそっかーそれは、そうだなーはははははー、」佐藤さんは、大らかに笑っている。何処か、憎めない小太りの男性。

「ははははーまあーこれくらいにして、食べよう、腹が空いたよ、」

・・・・・・・・皆さん、森本さんのお仕事の仲間なんだわ・・・・・・・・

「ところで、森本さん、明日は、何時の出発なんです??」

ハワイ旅行については、森本さんが、全部準備したから、森本さんの言うとおりにして、自分の準備をしてきた。全て任せっきりだったから、詳しい事は分からなくても、どこか安心していた。

「あれー明日は、ディズニールランドに行くんだよ、言って無かったっけ？」

「えっくえっく??・・・ディズニールランドって、ディズニールランドですよ、ハワイには行かないんですか??」

・・・ディズニールランドなんて、聞いていなかったわ・・・
えっく??・・・

「ははははーなんだー社長、言って無かったのか??」と、相沢さん。

「あゝ妹を、驚かそうと思ってさ、ね、ミ・ユ・キチャン!!夜に出発するんだよ、時間があるからさ、ディズニールランドで時間潰しをするんだよ、ディズニールランド初めてだろ、」森本さんが、私を見ながら言う。

「はい、初めてです・・・真っ直ぐにハワイに行くもんだと思ってました、そうなんですか、・・・隠していたんですね・・・??」
「隠していたわけじゃないよ、プレゼントさ、はははははは」

・・・これで、納得だわ、・・・出発時間が、少し、気になっていたけど、・・・

「そうか、優しいお兄さんだこと、妹に、ディズニールランドを見せようとしたわけだ、」と、佐藤さん。

「知らないでいたのは、ミユキさん一人、はははははは」

空の上

ふわりと、浮いた。瞬間、両手に力が入る。飛行機の機首の角度

を上に向けて、どんどん上に進み上って行くのが分かる。浮いた身体に、足元の無い不安感を覚え、緊張が走る。通路側の森本さんを見ると、思った通りに、平気な表情をしている。そして、私を見ながら、

「大丈夫だよ、」と言いながら、私の手を握ってくれた。その掌は温かく感じられた。

「はい、」

「下を見て御覧、もう随分上だよ、」それに応えるように、窓の下を覗きこむと、

「綺麗々とても綺麗です、」小さく声に出した。

そんな合間にも、飛行機は、どんどん上っている。

安定飛行に入った頃に、食事が出た。機内食を食べるのは、初めて。森本さんは、ビール、私は、ワインを飲みながらの食事だった。美味しかったし、嬉しかった。心が浮き浮きしている。そんなふわふわな気持ちでの食事の時間は、あっという間に終わり、片付けが始まる。

「音楽でも聞くと良いよ、」森本さんが言う。

「はい、・・・」

「少し疲れたから、眠るよ、」そう言った森本さんの顔が、どこことなく青ざめて見えた。

「はい、・・・お顔、青いですよ、大丈夫ですか??」

「うん、寝れば治るよ、」目を閉じる森本さん。

・・・そうだ、森本さん、昨日まで、点滴を打ってたんだわ、疲れているんだ・・・

私も、目を閉じて今日の、デイズニーランドの事を思い出す。

・・・・凄い人数のお客さんだったわ、あんなに並んで待つなんて、ホントに、一度で良いわ、・・・眠くなってきた・・・

「ノン、ぐ、具合がわ、悪い、・・・」森本さんの、声に、気がついた。眠っていた。どのくらいの時間が経っていたのか分からなかった。飛行機の中にいるんだと、気がつかないくらいに、静かに飛んでいる。

「も、森本さん、大丈夫、大丈夫ですか??」森本さんを見ると、目を閉じて、苦しそうに背にもたれて、顔をしかめている。顔の色が、白かった。

「も、森本さん、森本さん、・・・」

「だ、大丈夫だ、・・・大丈夫だ、急に、具合が悪くなったからさ、・・・ううん、今に良くなる。・・・大丈夫だ、・・・ううん、も、う一度寝るよ。・・・寝れば、心配するな、・・・ううん、大分、良くなってきた、・・・」

「呼びましょう、いま、」立ちあがろうとすると、手を抑えられて、

「いや、いいよ、・・・」

「でも、・・・」

「大丈夫さ、段々、良くなってきた、・・・寝るよ、」そのまま、気絶でもしたかのように、目を閉じて、何も言わなくなった。

・・・・大丈夫かしら、どうしよう、ホントに大丈夫かしら・・・

死んではいなかった、眠っている。

・・・・このまま、眠らせておいて大丈夫かしら・・・何かあれば・・・どうしょ、・・・

何時間か、私も眠っていたらしい。森本さんは、起きていた。森本さんと視線があった。

「森本さん、起きてたんですか？」急いで身体を起こしながら聞くと、

「うん、たった今、目覚めたよ、」と頬笑みを浮かべる。

「お、お身体、は、大丈夫ですか??」

「あゝもう大丈夫だよ、大丈夫、心配させてすまん、」森本さんの表情は、元気な時と同じだ。

「ホントですか??心配ですよ、」

「もう、大丈夫だよ、寝顔も綺麗なんだな、じっくり、観察したよ、おっぱい触ったんだけど、気がついていた??」

「知りません、いやらしいんだから、心配して損しました、ホントやめて下さいね、」

「あゝあゝ鼾も凄いんだから、ゴウーゴウーとき、」

「嘘です、私、鼾なんか、かきませんもの、もう、酷いんですから、」

「じゃあさゝ、クイズだよ、おじいさんが乗ると、つい、おならが出ちゃう乗り物って、なんだと思う??クイズだよ、」森本さんは、私に、クイズをたまゝに出すけど、殆ど答えられない。

「おならですか??えゝと、・・・乗り物ですよね・・・」

森本さんは、いつもと変わらないように見えた。機内アナウンスがあった。

「いよいよ、降下するんだ、シートベルトをしておこう、さあゝハワイだよ、その前にトイレに行ってくるよ、あゝあゝあこがれのゝハワイゝ」変な曲調で声を出した。

「も、森本さん、静かに、眠っていますから、」
「おっ そうだな」

・・・ハワイに着くわ、やっと、・・・長いようで、あ
つと、言う間だわ・・・

ホノルル

「わあ、素敵、これが、ハワイの香りなんです、」

飛行機は、静かにホノルル空港に、着陸した。緊張したけど、何も起こらなかった。それから、入国手続きを済ませて、建物の外に出ると、光が、空気が、景色が、風が、温度が、色が、匂いが、全く違う事に直ぐに気がついた。朝の光が、眩しく、空は澄んでいる。心は、浮き浮き、弾んでいる。

「そう、これが、ハワイの匂いだよ、韓国に行けばキムチの匂いにするよ、多分、どの国に行ってもそうなんだと思うよ、さあ、ホテルに行こう、」

・・・そうなんだわきつと、・・・

「ホテルに、荷物を預けて、それから、市内観光だ。さあ、皆さん、行きますよ」と、森本さんは初めてのハワイ上陸に、戸惑った表情をしている皆さんに声をかけて、バスに乗り込んだ。飛行機の中でも、皆さんとは、話することもなかった。なんだかドキドキして、バスに乗り込むと、運転手は、白人の体格の良い女性だった。オートマのバスは、初めて見た。

ホテルには、そんな時間が、かからなかったが、着くまでの時間、次々飛び込んでくる、初めて見る街を見ながら、

・・・・・・・・私、ハワイにいるんだー信じられないわ・・・・・・・・

何度も、何度もそう思っ見ていた。

森本さんといえば、平気な表情で、手帳を見ている。多分、これらの予定を確かめているんだわ。バスが走り出すと、目に入る窓の光景は、まるでいつか見た事のある絵葉書の連続写真を重ね見ているように思われ、何もかもが、新鮮に感じられ、ハワイに行く前に、森本さんの言っていた言葉を思い出していた。

「のん、感じたかい??」

「はい、・・・・・・・・ありがとうございます。」森本さんは、私を抱いて帰る際には、私を抱きしめて、いつも、「ありがとう」と言ってくれるから、私もいつしか・・・・・・・・愛していただいて・・・・・・・・「ありがとうございます。」と言うようになっていた。余韻に浸っている時に、森本さんが、私の乳首を、いじりながら、

「良いかい、のん、」

「はい?」

「ハワイに着いたら、最初は、観光はするけどね、観光なんか一日で終わりだよ。あっちこっちに行かなくなっちゃって、どこもかしこも、絵葉書の世界なんだから、行ったら分かるけど、忙しく、駆けづり回るなんて、する必要が無いんだ。」

・・・・・・・・今、森本さんが仰っていた、意味が分かりましたよ、森本さん、・・・・・・・・ホントに、そのままだわ・・・・・・・・

「うん?? どうかしたかい??」私が、森本さんを見ると、その動きに気がついたらしく、聞いてきた。

「いえ、どうもしませんよ、」

耳元に、顔を近づけ、

「どう、嬉しいか?」と聞く。

「はい、・・・」と小さく頷きながら、応える。

「今晚はね、ワイキキのロイヤル・ハワイアン・ホテルで開催されているルアウを見ながらディナーだよ。海に面している、ピンクのホテルなんだよ、沈む夕日が最高に綺麗なんだ。きっと涙がでるよ、」

「ルアウってなんですか?」

「あゝそれは、このハワイの伝統的踊りと言うか、・・・見れば納得するよ、あつそれと、今日だけは、皆と一緒に食事をするよ、

これから、少し時間があるから、観光するんだ、」

「はい、・・・」

バスはあつという間にホテルに到着。

・・・わあゝ素敵なホテル・・・ここに泊るのね・・・

やはり、ここは、ハワイ、私は、今、ハワイに来ているんだと、実感。ホテルのあちらこちらに溢れている、ハイビスカスの鮮やかな赤い色や、名前も知らない白や黄色の花々が、ヤシの木が、急いで、のんびりと行きかう人の流れ、走っている車、何もかもが、新鮮に思えた。そして、なんとも言えない香り。

「車が、来ましたよーさあゝ、これから、車で、観光するから、皆さん、行きますよー」

・・・いよいよ観光するんだわー・・・

ダイヤモンドヘッド・トレイル（オアフ観光局）監修・・・転写

ワイキキの東側にそびえ立つダイヤモンドヘッドは、約30万年前に起こったたった一度の短期間の噴火によって形成されました。現在は死火山で、すり鉢状になっている噴火口は、350エーカー（1.4平方キロ）の広さがあり、その横幅は深さより大きいものとなっています。その理由は、海岸に近かった為にマグマが激しく海水と接触し、水蒸気爆発を起こしたためと言われています。

ダイヤモンドヘッドは、1700年頃に山を訪れた西欧の探検家や商人達が噴火口壁面の岩石の中に光る鉱物（方解石の結晶）をダイヤモンドと見誤った事からその名がついたと言われています。また、ダイヤモンドヘッドは“レアヒ”とも呼ばれ、その名前の由来には様々な説がありますが、一説によると、火の女神ペレの妹、ヒアカが、この山がマグロ（ハワイ語でアヒ）の額（ハワイ語でレア）のような形をしているということから名付けたと言い伝えられています。

現在、ダイヤモンドヘッドは、撮影の名所でもあり、またハイキング・トレイルコースとしても有名です。標高は約232メートル。片道1.1キロの約30分のコースで、地元の人にはランニングコースとしても親しまれています。気軽に家族で楽しめる人気のハイキング・コースです。

登山口からは、平坦で道幅もある舗装されたなだらかなトレイルが続きます。歩道の周辺には、1800年代以後にハワイへ入ってきた豆科のメスキートの仲間であるキアベ（Kiabe）やコアハオレ（Koa Hale）が目に止まります。また、元来、外来種で

ある赤と灰色の二種類のカーディナルやマイナーバード（九官鳥の一種）などの鳥を観察することができます。

次第に舗装された道から自然の山道へと変わっていきます。その山道を進んで行くと、最初の階段である76段の階段がでてきます。それを登るとトンネルに達し、その後、二つ目の階段、心臓破りの99段へと続きます。

ここを過ぎると、2003年に照明が設置された43段の螺旋階段が現れます。各階の細長い窓からは海が望めます。ここには、かつての海と空からの敵襲に備えたオアフ島沿岸防衛のための軍事エリア（ルーガー砦歴史地区の一部）が残り、最上階は砲撃統制所跡となっています。ここまで来ると、頂上まではあと少しです。

ダイヤモンドヘッドの頂上に到着。頂上には小さな展望台があり、目の前には広大な海と水平線、ワイキキの街、東側にはココヘッド、北東にはコウラウ山脈という360度のパノラマビューが広がります。爽快な風に吹かれながら、ハワイを感じる最高のロケーションです。

ワイ、オアフ観光局監修

ハ

私は、これから行く、ダイヤモンドヘッド・トライアルのパンフレットを、森本さんから渡され、読みながら、これから、本当の観光が始まるんだと思った。

森本さんが手配した車は、白いワゴンタイプの車だった。もちろん運転手さんは、若い白人の男性で、日本語が、随分お上手で、何処かピントがずれた日本語のユーモアを言う、結構お喋りな人。なんでも、大学時代に、日本に2〜3年、住んでいたそうです。

あの絵葉書に出てくる、ダイヤモンドヘッド。階段を登るのは命がけのような気がして、もう、緊張して力が入って、少し、疲れたけれども、登りきった途端に目の前に広がる、太平洋、海、空、風、太陽、ハワイの街並み、島が遠望できる、全てが、輝いて見えた。遠い地平線、どこまでも澄み切った碧い空と海、皆さんも、口々に何かを言いながらも、頂上までなんとか辿り着いた途端に、大きな歓声が、挙がった。森本さんは、ずっと、私をを励ましながら、支えてくれた。

「凄いな〜うわぁおー、凄い景色だ、何回もハワイに来ていたけど、何故だか、登った事が無かったんだ〜、やはり、来て良かったよ〜、す、凄いな〜うわ〜」そう言いながら、森本さんは、カメラを取り出し、何かにせかされるように、写真を撮り出した。私は、圧倒されて見ている。

・・・来て、よかった・・・綺麗、なんて綺麗なんだろう、素晴らしいわ・・・

風が強く、吹き付ける。その風すらも、美しいような気がした。涙が、滲んできたけど、悟られないように、森本さんや皆さんと反対の景色を眺めていた。

「ノン、写真撮ったげる、さ〜」
「は〜い、・・・」

ホテル

唇と唇が重なる。ハワイでの初めてのキス。森本さんは、ホテルの部屋に入るなり、私の唇を求めて来た。嬉しさが、身体を、駆け巡る。抱きしめられる。

「今日は、疲れたろ??」

「いえ、大丈夫ですよ、少し、ベランダで休みましょうか??」このホテルでは、光で溢れている中庭で、夜のディナーショーが行われている。音楽が、上まで聞こえてくる。このホテルの宿泊客ばかりではなく、観光客もいるような、賑わい。私達は、十分、ルアウというショーを堪能してきたから、今日は、そのままショーを横目にしながら、部屋に上がってきた。

・・・・・・まだまだ、これからだわ。・・・・・・

そう思いながら、見ていた。

「そうだな、初めての、ハワイの夜は、朝まで、愛してあげるよ、」森本さんが、耳元で囁く。

「嫌です、」と、抱かれながら、言ったので、いつものように、左の乳房を、ぎゅうと強く握られた。

「あゝん、だめゝ」いくら声を出しても聞こえないに違いない。

私、ベランダに置いてある椅子に、腰掛けて、夜のホノルルの夜景を眺めながら、今日の一日を、思い出していた。

・・・・・・全部、違っていたわ、・・・・・・絵葉書とは、全然違って
みえたわ、・・・・・・

「どうしたんだい??何か、したの??」

「いえ、・・・・・・あまりに素敵なので、・・・・・・」

「いえ、違います、違いますったらー、もう、」私は、夜景を見ながら、今日の一日を思い出していた、外国人の男女が、普通に絵の中にいて生活をしている、映画のように歩いていたわ。

「はい、ありがとうございます、」 私は、何故か、涙が滲んでいた。

「さあ、明日もある、抱きたい、」

「えっ、そう言うの、」

「はい、」と、森本さんを見ないで、夜景を見ながら、言うのと、「これこれ、姫、これから、夜の伽が始まるのじゃ、さあ、早よ、」はよくがわははははと、大きな声で言ったので、

「嫌ですよー姫は、嫌です」と返すと、すかさず、

立ちあがった、森本さんが、私の、身体を、椅子の上から、抱えあげて、

「うーん、重い姫じゃ、はははははー」と笑いながら、ベッドに歩
き出す。

「重いですよー、」私は、森本さんの首にしがみついて、言った。

ベッドに投げ出されて、服を剥ぎ取られ、いつの間にか裸になっている森本さんに抱かれると、微かな、甘い香水の匂いがした。胸に顔を埋めて、乳首を、吸っている森本さんの頭を摩りながら、

「いや、森本さん見られますよ、」と言うと、

「いいさ、見られたって、」と、口ごもりながら言う。

「えー、恥ずかしいですよーあんーあー見られますよー」部屋の窓は、開いている。森本さんは、気にする風では無く、乳房に夢中で、痛いくらいに、揉んでいる。

「あっあゝん、もっと、優しくねゝもっとゝ」

森本さんに乳首を齧られた。

「あっ、い、痛いっ、」

・・・あゝでも、良いゝゝわゝゝビンビンに感じるわゝゝゝ

いつも齧られる。馴れたけど、でも段々、なんだか、齧り方が強くなってきた気がする。乳首は、本当に感じる。

優しく、舌で転がされても良いし、強く吸われても、感じる、私の、一番感じる場所。

ベッドの上で、裸の身体全体を愛されていると、森本さんが、不意に立ち上がり、部屋の電気を消して部屋を暗くして、裸の私を、無理やり、ベランダの前まで連れてきて命じた。

「さあ、ここに手について、」と、テーブルに手をつく格好にされ、私のお尻をぐいと持ちち上げるように後ろに強く退いて、森本さんの掴んでいる両手に力が入ると直ぐに、一気に強く、強引に、私を貫いてきた。

「あん・・・くっくっくっくあゝそんな」

・・・嘘・・・えゝここでするのねゝゝでも・・・

両手で身体を支えるように、身体を支え、森本さんのやり易いように、お尻を突き出し、立ったままで、後ろから、挿入された。

「あゝむ・・・、森友さん・・・」 「どうだい、気持が良いだろう、最高だよ、」 と言いながら、森友さんは、私を、ゆっくり攻め始める。

「あん、あん、あゝあゝ、あんゝゝ」 その動きに合わせ、声が出る。

ここは、7階のホテルの部屋。外には声は聞こえない。白い裸身の私は暗闇の中にいる。私は、見られるんじゃないかと、気が気ではなかった。暗闇の裸は、結構白く闇に浮かぶ。

「ほら、目を開けて、外を見なさい、音楽が聞こえるよ、それに、暗くて、誰も見てないよ、」と言いながら、私のお尻を後ろから、突きまくっている。

「ほらっ、ほらっ、どううーう、おっいいぞうーう」と言いながら、強くお尻を打ちつけられる。

「でもー、あん、あーあっあっあーん、」、口から声が絶えず出てくる、それに合わせ、垂れた乳房が、突かれる度に、横に縦に、前後に、ブルブル揺れる。

後ろから、激しく突かれ、出し入れされ、テーブルがぎしぎし鳴り、身体が前後に動く。懸命に手で身体を支えながら、私は、言われるがままに、外に目をやると、中庭を取り囲むように、夜の灯りを灯したホテルが部屋があちこちに見えた。

・・・き、きつと、あ、あっちでも、あん、あーせ、セックスしているんだわー。・・・

目の前に見えるホテルの窓明かりを見ながら思った。

「見られますー、もう、」

・・・誰かに見られているに違いないわ、・・・あーでも、いい・・・

ハワイでの最初の夜が始まった。

別れ

部屋の中で、今日も、手にして見ている、ハワイの写真には、森本さんと一緒に写した写真は、1枚も無い。3度目のハワイでは、その写真すら無い。森本さんと一緒に写っている写真は、1枚も無い。写っているのは、いつも私だけ。二度目からのハワイ旅行は、森本さんと二人だけ。この3年の間、旅行には何回も行ったけど、やはり、写真は一枚無い。それが、暗黙の了解だった。森本さんは、家庭の事は、言わないし、私も、敢えて、触れないようにしていた。

・ ・ ・ ・ ・ 別れようー ・ ・ ・ ・ ・ 私は、森本さんと ・ ・ ・ ・ ・ 別れるわ、
・ ・ ・ ・ ・ もう、駄目、これ以上は無理、もう駄目 ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ もう、3年になるわ、 ・ ・ ・ ・ ・ このままじゃ、駄目になる ・ ・ ・
・

3度目のハワイから帰って来てから、この思いを、何度も、何度も心の中で、繰り返し、繰り返してきては、言いだせないでいる。もう、そう思ってから何度目だろう。別れなければならないのは、随分前から、分かっているのに、今日まで、別れを言いだせない自分がいる。逢えば嬉しくて言いだせない。森本さんから、「行くよ」と言う、いつもの電話が来れば、今日も逢えると、嬉しくて、嬉しくて、森本さんの車を、アパートの部屋の外階段下で待つ日々。そして、さぁーと静かに、夜の暗さの中から現れる車の後部座席のドアを開けて、乗り込む、いつもそう。

森本さん命名の、いつもの、暗闇の「不倫街道」を走って行く、そして、いつものホテルで愛され、抱かれる。抱かれている間は、

何も考えないで行為に没頭する、幸せな時間。そして幸せな時間に過ぎ去り、今日の別れが始まる。森本さんは私を、部屋の前に降ろすと、次の約束をしてそのまま闇の中へ消えて行くく。

そして、次の約束が、再び、私を拘束する、そんな日々がもう3年も経っている。森本さん中心の日々だった3年。

帰った部屋の中には、私、一人。さっきまで、肌を合わせ、温もりを感じていた森本さんの肌は、今は、どこにもいない。

・・・大好き、死ぬほど好き、・・・でも、・・・これ以上は、もう、辛いわ・・・

森本さんとハワイにはもう、3度も行った。少し前に帰って来たばかり。お付き合いしてから、もう3年が過ぎてしまってる。この3年の間、森本さんと一緒に行動を共にしてきた、森本さんが生活の中心で、何よりも優先してきた。

・・・もう・・・無理・・・このままでは、森本さんを奪わずにはいられなくなる・・・森本さんには、奥様と、子供さんがいる・・・私は、只の愛人・・・森本さんには、愛人が・・・13人もいるって・・・分かれるわ、

そうする、・・・今度、逢ったら言うわ・・・

部屋

鳴っている。鳴っている……あつ電話だ！

「もしもし、ノリちゃん、おはよう」

「おはようございます」

「まだ、お休みだった？？」

「いえ、起きてました。」時計を見ると、朝の6時30分過ぎだった。頭が、回転し始める。

昨日、遅くに部屋について、そのまま、眠ってしまったんだわ、

徐々に、思い出してくる。

「どうしたの、??大丈夫なの?」

「はい、大丈夫ですよ、こんな朝早くから、どうしたんです？」

「そうなのよ、昨日、電話したんだけど、いなかったでしょう・土日
って、何回か電話したのよ、」

「すみません、お友達と、小旅行に行ってたんです」

「あら、まーまさか、男友達ではないでしょうねー」

「まさかー、女のお友達ですー、御心配かけましたー」

「今週の土曜日よ、お見合い!!」

「はい、心得ておりますわ、金曜日、お休み頂いて、実家に帰りますので、叔母様も、お越しくださしませ、」少し、雰囲気を変えて電話口に向かって、言う。

「あら!!、お嬢様は、雰囲気が変わりましてようふふふ〜」

「ふふふふふ〜〜少し、お嬢様らしくと、思ってー」

「そうよ、そのようにね、この縁談とっても、良いのよ、ノリちゃんのが好きで、どうしてもお見合いさせてくれって、言うんだから、それに、資産家だし、なかなかの名家よ」

「はいはい、分かっておりましてよ、・・・駄目、私、普通にする、・・・だって、おかしいんですもん・・・」

「そんな事はないわよ、頑張っつてね、じゃ、金曜日に、お邪魔するから、あつ、着て行くものはどうするの? お洋服? それとも?」

「普通の洋服を着て行くつもりですよ、あまり、大げさにしなくても、」

「お義姉ーさん、お着物とか言っつて無かつたかしら?」

「・・・もう、今週は、きつと、大変だわ、この調子で、色々言っつてくるんだわ、・・・」

「叔母様、お時間が来てしまいましたわ、紀子はこれから、会社です」また、少し澄まして言っつてみた。

「そうねー、そうー・・・」多分、お見合いの段取りとか色々考えてるんだわ、私の話を聞いていないようだったので、電話を切る。

「・・・今週は、森本さんに会うのは、控えよう・・・でも、逢いたいし・・・でも・・・やはり、ダメ、今週は、用事が有りますと言っつておいたから、部屋には、来ないわ、それに、森

本さんも、今週は、大人しくしていようと、・・・・・・・・奥さまの事もあるし・・・・・・・・でも逢いたくない・・・・・・・・

今日土曜日はお見合いの日、空は青く快晴。

A市に在る、新しく建て替えたばかりの、結構有名なホテル「甲陽」に、玲子叔母さんと母と一緒に父の車で送られて来た。父は、少し緊張した表情だったけど、お見合いには顔を出さないと言って、私達を車から降ろすと、直ぐに走り去って行った。

私達は、正面玄関から、入ると直ぐに、私達を待っていたかのように、同じ制服を着た私と同年代くらいの女性が二人ばかり、素早く側に歩み寄って来た。そして、

「ご案内いたします。どうぞ、こちらへ、」と、ホテルの案内係りの二人の女性が、私達を従えて歩き出す。歩き出すと、ホテルの赤い絨毯が敷き詰められている少し広い通路には、洋風な置物、調度品が置かれ、壁には大小の油絵が、まるで美術館のように掛けてある。

・・・・・・・・わく素敵・・・・・・・・

私は、それらを見ながら、

・・・・・・・・凄い事になっているみたい・・・・・・・・

一瞬、そう・・・感じた。私達は、長い通路を、どこまでも続いていそうな通路を、奥に向かって歩いて行く。

素敵な洋風の造りだった建物の内部が、目の前の観音開きのドアを開けると、内部の造りが、和風造りに変わった。急に、和風の廊下に変化した。

そして、和風造りの廊下を先に進むと、障子引き戸が開かれ、少

し低めの踏み石が置かれている。そして、廊下を一段下りると、そこはもう外。眩しい。

案内係の女性は、ゆっくりとこのホテルの建物の敷地の奥にある別棟、数寄屋造りの茶室風の建物に案内してくれた。

私は、先週、森本さんと一緒に京都で茶室を見ていたから、この目の前にある建物を見ても、緊張する事もなく、

・・・数寄屋造りだわ、京都でみた茶室と同じだわ・・・

そう、思いながら、和風庭園造りの庭に敷き詰められている大きさの異なる石畳をゆっくりと歩きながら、母と玲子叔母さんの後をついて行く。母と叔母さんは緊張気味。

でも、私は、何故だか、不思議と緊張していない、そんな自分に少し驚いている

「やーやっと、来ました、さー、どうぞ！中へ！！」

そう言って私達を出迎えてくれたのは、岩崎さん、本人だった。数寄屋造りの低い屋根の奥にある広い玄関の戸を開けて中へ入ると、玄関の石敷きの前は縁台風になっていて、前面が畳敷きになっている。

・・・同じだわ、・・・

今日の私は、着物を着ている。いくら嫌だと言っても、反対された。だから仕方がなく着てきたつもりだった。

・・・でも、着物は、とても嬉しかったわ・・・

母が、少し前に用意してくれていた振り袖の着物。あまり機会がな

いから、タンスの花だと思ってた。

・・・でも、・・・でも、・・・

着付けは、母がしてくれた。

玲子叔母さんは、ただ見て、あれやこれや言っただけ。母の通いの美容院で、髪を整え、家で着物を着け終わった時には、涙が溢れ出ていた。

・・・何故だか、分からないけど・・・全てが、出来上がった、鏡を見た時・・・森本さんが見たら、なんて言うかしら、・・・

そんな事を後から思ったりもした。

「初めまして、岩崎 雄一と申します。さーお上がり下さい。」と、丁寧にお辞儀をしながら言う。

・・・とても・・・和服がお似合いだわ、・・・岩崎さんは・・・岩崎さんが、和服を着ると、若旦那風で良くお似合いだわ・・・あつ、そうねー、酒造会社の若旦那様だったわ・・・

「さーどうぞ、どうぞ、皆さんお待ちかねですよ、」と、にこにこしながら、私達が、上がり込むのを待っている。私とは、まだ、目が会っていない。意識して、見ないようにしているみたいで、なんだか、心がこそばゆかった。

襖戸を開けると、畳み敷きの格子戸がある。その格子戸は開かれており、私達は、部屋の中へと、入って行く。内は、畳敷きのかなり広い和室の真ん中にテーブルが置かれてあり、岩崎さん御両親が

座っている。

「さー、どうぞ、どうぞ、お座り下さい、お待ちしておりましたぞ、」と、岩崎さんのお父様が、少し大きめの声で、手を差し出し、私達を迎えてくれた。私は、少しづつ、緊張し始めている自分に気がつき始めた。

会話は和やかに、始まった。岩崎さんのご両親は、偉ぶっていず、とても、会話が上手だった。初めから、お見合いという事を意識させない会話をして頂いて、母も玲子叔母さんも、緊張が溶けていくのが分かった。私は、全然緊張しっぱなしだった。「お見合い」という意識が心を縛って行く。

・・・いけなかったわ、やはり、してはいけなかった、・・・どうしよう・・・でも、・・・いつかは、私も結婚しなくちゃ・・・

「是永さん、外へ、出て、少し話そうか、」

「えーそうですねー」

・・・助かったわー・・・

「そうよ、雄さん、積極的が大事よ、こんな素敵なお嬢さんを、是非、お嫁さんにね、」と、岩崎さんの母が言うと、

「ははははー、参ったなーはい、はい、さー、後は、任せて、出よう、」

「はい、」

外は、暖かく、眩しい光が、眼に痛い。

「ははははーやっと、二人きりになれた。疲れたでしょう。」と、

和服姿がお似合いの岩崎さんが笑いながら言ったので、

「はい、少し、緊張しました。」と、応えて、二人で笑いあった。

「ははははー見ていて緊張してるのが、わかったよ、」

「だって、初めてですよ、するなと言っっても、します！」

「良く似合ってるよ、着物姿、とても素敵だよ。」と、褒められた。
「ありがとうございます。」

「随分変わるんだねー、着物を着ると、違った是永さんを見た気がする。綺麗だよ。」

和風庭園の少し奥まった場所にある東屋まで、石畳をゆっくり歩きながら、表情を引き締めた岩崎さんが、私を見ながら言う。

「岩崎さんも、お似合いですよ、着物とてもお似合いです。」

「そりゃそうだよ、なんたって、造り酒屋の若旦那だからねー」と、声色を変えながら、冗談ぽく言ったので、

「わぁー、岩崎さんって、若旦那様なんですねー、私には、もったいないですー」

「さあー、ここに座ろう、」

「はい、」

東屋は、周囲から見えにくいように建てられている。何か、重要な会談とか、今日のお見合いみたいに、好奇の目に触れさないように作られているみたい。

「ねー是永さん、これを機会に僕とお付き合いしてくれませんか？加藤君が是永さんを好きな事は分かっているけど、僕は、是永さんが好きになってしまったんです。」

「・・・・・・・・・・」

「私には、私は、岩崎さんには、もったいないですよ、他に誰か、素敵な人いますよ、・・・わたし・・・」

「付き合っている人がいても良い。でも、僕は、待つ。決めたんで

す。俺は、是永さんと、結婚したいんです。」いきなり、言われた。「お見合いしたから、強制的に付き合って下さいなんて考えてはいないよ、今日のお見合いはさ、母と父に、俺の大好きな女性を見て欲しかったからなんです。僕が好きな女性は、この人だって自慢したかったんです。」

「……なんて、直接的に言う人なんだろう。……そのまま、……育ちの良さが良く分かると言うか……僕と言ったり、俺と言ったり、岩崎さんも、緊張してるのかしら?……」

「ありがとうございます。そう言って頂けるだけで、ホントに、ありがとうございます。」

「直ぐに返事下さいなんて言わないよ、少しずつ、付き合ってください。お互いが、少しずつ分かりあえるように、お付き合い下さい。どうですか?」言い方が、優しかった。

「……駄目……私には……森本さんがいるの……」

「ええー……そうですねー、……そうですねー」私が、戸惑いの表情をしていると、

「今度実家に遊びにいらっしやい、酒造りがどういうものなのか、見て下さい、是永さんは、日本酒飲みます?」話題を、変えてくれた。ほっとする。

「はい、少しだけですけど、日本酒好きですよ、」

「良かったー、」

「父が好きですもの、」

「是永さんのご実家は確か、お蕎麦屋さんでしたよね、」

「はい、」

「これを機会に、一度、食べに行きますよ、」

・・・・・・駄目です、とは言えない・・・・・・

「そうですね、でも、あまり綺麗なお店ではないですよ、」

「それを言うなら造り酒屋は、もっと、古くて、酒臭いよ、ははははー」

加藤さんとは異なるおおらかさが有る。

・・・・・・どうしょー、・・・・・・森本さん・・・・・・

「是永さんは、ゴルフやりますか？今度一緒に練習に行きませんか？」

「えー！？やった事が有りませんよ、それに道具も持ってないし、」

「道具は、なんとかするから、やってみませんか？少しづつそうやって、お互いが、・・・・・・どうです??」

「そうですねー、でも、ほんとした事がないんですよ、加藤さんは、良くしていらっしゃるみたいですけど、うーん、」

「実は、俺さ、密かに隠れて練習してるんだ。加藤君に負けたくないからさ、彼は、スポーツマンだし、少し俺も頑張ってみようかと思ってるさー」少し照れながら、言う。

「どうして、加藤さんなんです?？」

「・・・・・・ライバル・・・・・・かなー・・・・・・? ? ? ? ?」

「そ・・・・・・う・・・・・・なんですかー・・・・・・」

「さっきの、提案、どうです?？」

東屋の中は、暑過ぎず、心地良かった。時々、頬を撫でて行く、風が嬉しいかった。

「ゴルフですか?？」

「是永さんのお付き合いの件ですよ、」

「そうですね、……そうですねー、?? 私で、良いんですか? ほんとに??」

「良いにきまつてる。是永さんと、どうしても、結婚したいんだ。」
「分かりました、では、まずは、ゴルフから、始めましょう、教えて下さいね、」

「わぁおー、ほんとに、良いの? 俺でいいの?」

「はい、お付き合いではなく、少しづつ、岩崎さんを知りたいです。今は、そういう事しか言えません。それでも良かったら、」

「決まり、!!! 交際の始まりにしましょうーやったー」

「でも、でもですねー私が嫌いになるかも知れませんか、私もそうなるかも、」

「それでいいよ、やったー、絶対に、好きにさせてみます。」

……これで、良かったかしら、玲子叔母さんや母の事もあるし、
……でも、……私って、ずるいかなー???

「でも、あまりお約束出来ないかもしれませんよ、」

「電話してもいいかなー、もちろん毎日しないけどさ、たまには、
どうかなー」

「はい、でも、いない場合が多いですよ、いろんな方とデートとか
しますもので、……」

「はいはい、どうぞ、どうぞ、やきもちを焼きませんから、ははは
はははー」

……なんだからってもいい人……でも森本さんの
事を知ったら、大変だわ、……少しづつ、諦めさせていくし
か無いわ……今はこれでね……

無事にお見合いも終わって、玲子叔母さんは大喜びで帰って行った。私は、父と母との会話を聞きながら、つまらなそうに聞いている父の表情を見てみると、それは、本心ではないのが分かって、嬉しいような、恥ずかしいような……そんな気持ちになり、

「私は、まだ結婚しませんよー、岩崎さんとは、直ぐに結婚とはなりませんよー」と言うと、

「どうして、とっても良い縁談よ、嫌いなのです？紀子は？」と、質問された。

「そんな事はないですよーでも、結婚を前提にお付き合いって、なんだか大袈裟すぎるから、二人で決めたの、少しづつ、進めようって、」

「何それって？？」

「だからね、好きだとか嫌いだとか、今はそんな感情はもてていないから、少しづつ進めようって、」

「それで、良いんじゃないかなー、お見合いしたからと言って、直ぐに結婚するわけではないし、紀子が、納得するまで、付き合ってみればいいだろ、」

父の言葉は、嬉しかった。そんな父が好き。

「満月の使者」がやってきた。私は女性だと云う事を認識する週が始まった。これが始まると、森本さんとは暫くは逢えない。森本さんは、これが始ると、何故だか、私に触れようもしない。あれほど、スケベな森本さんなのに、ぴたりと止まる。

寂しいような気持ちもあるけど……でも、それは、なんだか、自分の時間が帰ってくる日々でもあるし、なんだか、自分を見つめる日々でもあるそんな気がする。

……でも、とても、寂しく感じる瞬間がある。……

前に、「俺、血は駄目なんだ。血を見ると、目眩がするんだ。」
と言っていた、森本さんの表情、なんとも言えない仕草を思い出す。

・・・男の人って、分からないだろうなーホントのところは・・・
そう、私は、女・・・・・・・・

「是永さん、どうかした？」振り向くと、加藤さんだた。少し近頃、
太ったような・・・・

「あつ、おはようございます。加藤さん、」

「なんだか、にこにこして、良い事あったー？」

「はい、有りましたー、」

「なに？なにがあったの？」

「それはですねー、加藤さん、少し太ったでしょう、」

「い、否、太ってないよ、そう見える、」

「あれー可笑しいですよー、お顔、まーるく見えますよ、そうですねー5キロくらいは、」

「こら、是・永・さ・ん、」

「はははははー、冗談ですよ、でも少し、ほんとのところ、」

「そうなんだー、そうなんだーそうだ、運動しなくちゃ、運動、いやーここんところ、運動不足でさ、毎日、忙しくて、」

「女性とですねー」

「またまた、そう言う事を言う、仕事です、し・ご・と、ねー是永さん、何か、スポーツはしてるの？」

「スポーツですか？」

「・・・岩崎さんがゴルフの事を言っていたから、ゴルフは駄目だわ、でも、・・・・」

「いえー、何もしてないんですよ、」

「そうかー、ならさ、ゴルフやらないかなー、」

私は、手を横に振りながら、

「駄目ですよー、やったことがないんですもん、」

「大丈夫さ、教えて、あげるから、どう??、今度??」

・・・・どうしよ、岩崎さんにも誘われているし、でも、これ以上、加藤さんの誘いを、お断りするわけには、いかないわ・・・

「はい、では、そうですねー、」

「よし、決まりだね、金曜日の夕方、仕事が終わってからさ、良いよね、??」

「はい、じゃ、お願いします。でも、何もないですよ、初めてなんですから、」

「任せな、さ、いーやったー、じゃ、気が変わらないうちに、仕事に行くよ、約束したよー。」

「はい、何かあったら、言いますから、」

「ははははー予定を作っただけめ!!です。」
そう言いながら、部屋を出て行った。

・・・・本当に、加藤さんって心の広い人だわ。あの時・・・疎遠にならなくて、ほんとに良かったわ・・・

私が、そんな事を考えていると、嫌いな人間が部屋に入ってきた。

・・・・あーどうして、こんなに嫌な人間と、一緒に仕事しなくちゃいけないんだろう、胸が詰まるわ・・・ばたばたと、部屋に入ってくるなり、

「是永さん、頼んでおいた、書類出来てます??」と、少し威圧す

るような甲高い声で聞いてきた。

「えー、コピーを取って、机の上に置いてますよ、」私は、机の書類から目を離さないで言う。

「そう、」ありがたいの一言も言わないで、机の書類を見始める。急により甲高い声で、

「あらっ、この書類足りないわ、全部コピーしておいたんでしょ、会議に間に合わないわよ、」

「えっ、渡された書類をそのまま、コピーしたんですけど、全部で8枚ですよ、ね、」

「あらっ、10枚なはずだったわよ、」

「……そんな事はないわ、私、数えました、確かに、……何か問題があれば困るから、特に、この人の頼まれ仕事は、……」

「そんな事はないですよ、頂いた時に、枚数は、確かに8枚でしたよ、」

「じゃ、私が8枚しか渡さなかったとでも言うの??」怒りだした。

「はい、確かに、8枚でしたよ、ご自分の机とかに入っていないんですか??」

又だわ、この人全然懲りない人だわ。この前も、そうだったから、番号を日誌に書いている。

「どうして?? いつも貴方はきちんと確認しないのかしら??」平気な表情で言う。

カチンときたから、少し強い口調で、

「確認しましたよ、この日誌にも、番号ふって書いてます。」と、睨みつけるようにして、言う。すると、

「ホントかしら、」と、私を見もしないで言葉を返すと、いきなり乱暴に自分の机を開けて、がたがたと音を立てながら書類を取り出し、そのまま何も言わずに、部屋から出て行ってしまった。

・・・嫌い、大嫌い、・・・もう・・・嫌、
どうして、・・・

私の天敵。もう一緒にいるのが死ぬほど嫌。自分の失敗は、全部
他人のせいにする、もう、自己チューの女。

・・・どうして、いるのかしら??? 良く結婚出来たものだわ・
・・・

ゴルフ場

「加藤さん、今日は宜しく、お願いしますね。」

「良いよーそんなに気を使わなくてもさ、気楽に行こう、」

今日は、加藤さんとゴルフの練習をする日。お天気も良く晴れ渡っている。ゴルフの練習場は、市の中心街からは離れた、盛岡方面に向かって走る県道沿いにある。日曜日の朝と言っても、午前の10時を過ぎているから、駐車場には、車が、7〜8台駐車している。なんだか、ドキドキしている自分に驚いている。初めてのゴルフ。今まではゴルフ自体に、全然興味がなかった。頭の中で、想像してみても、ちっとも、浮かんでは来ないスポーツ。

建物の中は、見た目より、狭く感じられた。加藤さんが、受付で、手続きを済ませて、ドアを開けると、広さが目に飛び込んできた。
「わぁー広いですねー」

「そうだねー、でも、こんなもんだよ、直ぐに慣れるよ、」
「出来るかなー??」

車の中でも、なんだか言い訳ばかり言っていたような気がする。

・・・・・・・・だって、やった事がないのよ、・・・・・・・・当たらない、絶対に・・・・・・・・

練習場には、男性ばかりいるみたい。

「さあーここにしよう、」加藤さんはそう言うと、柱にもたれかけるように、ゴルフバックを置いて、

「ここに、座れば良いよ、僕が、お・て・ほくんを、見せるからね、」と、変なトーンの声を出して、笑いながら言う。

「はい、センス、楽しみにしています」

「こらこら、是永さん、君も、やるんだよ、ほら、この手袋買って来たからね、はい、」

「ええー！済みませーん、」私は、何も用意してこなかった。加藤さんからは、昨日、何も用意をしてこなくても良いと言われていた。

・・・・・・・・そうなんだ、手袋が必要なんだ、・・・・・・・・

森本さんに行った、スキーの時は、色々準備したけど、今日は、何も準備もしてこなかったわ。

「ありがとう、加藤さんって、優しいんですねー」

・・・・・・・・ほんと、優しいんだから・・・・・・・・

「もう、今更、遅いけどねー、でも、ありがと、これから、打つから見ててね、」

「はい、」

加藤さんのゴルフの打ち方を見るのは、初めてだった。

・・・・・・・・あっそうだ、・・・・・・・・

「身体、ほぐして下さいね、柔軟体操ですよ、」

「もう、それは、やって来たよ、朝起きるなり、やってきました、」
「こちらを見ながら、腕を回して、言う。」

「そうですか、なんか、随分力が入ってますねーふふふふー」

「ははははーそりゃそうさ、是永さんに格好いいところ見えないとさ、」

「えー??今でも格好良いですよ、看護師さん達にもてますからねー加藤さんは、おとといも電話着てましたよ、」

「もうー、看護師さん達の事はいいの、今日は、」苦笑いしながら言ったから、

「はいはい、どうぞ、虐めていませんよー頑張ってください、」と、パチパチと手を叩きながら、促す。加藤さんは、打席に立って、構えた。

・・・・・・・・まっすぐに行って、・・・・・・・・

カーン、と、甲高い音がした。

「うわぁー、飛びました、真っ直ぐ飛びましたよ、す・ご・いー」

「どう、見てくれた??」

「はい、見ました、加藤さんって、上手なんですねー」パチパチ拍手しがら、言うと、加藤さんは、得意そうな表情を、私に向け、

「少し打つよ、見ていてね、」

そう言うとか藤さんは、私を見ずに、何球か打ったけれども、殆ど、真っ直ぐに飛んでいた。慣れていないから、初めはどこに飛んでいるのか全然見えなかったけれども、追いかけて見ているうちに、目がついていくようになって、

・・・・・・・・うわぁー、ゴルフのボールって、飛ぶんだー・・・・・・・・

等と、思っ見ていた。

何球か打って、身体がほぐれた、加藤さんが、振り向いて、
「さあー今度は、是永さんの番だよ、」と言ったので、私は、いや
いやをするように、頭を振って、

「加藤さん、やっぱり私、出来ません、無理です、絶対、無理です
！！」加藤さんを見ながら、言葉を返した。

「な〜に言ってるの！！、さあー、教えるから、さあーほら、ここ
に来て！！」加藤さんが、女性用の小さなクラブをバッグから出し
て、打席に入るように促す。

「さあー、ここへ立ってね」

「うわあ〜出来ませんよ〜」と言いながら、加藤さんから、赤い
グリップのクラブを受け取り、言われるがままに打席に立ってみる。
後ろで見る練習場の景色が、打席から見る景色とは全然違うことに
気がついた。

・・・わっ！！重い、クラブって、結構重いわ・・・

「加藤さん、持ったことが無いんですよ、初めてですよー、」
「は〜いいはい、分かっ〜ておりますよー、はははははー」なんだ
か楽しそうに、変な言い回しをしながら、にこにこして言った。い
きいきしてる、加藤さん。

「良いかい、クラブの握りはね、こう・・・そう、しっかり握って見
て、あっそれじゃ、力が入りすぎ、そう、そんなくらい・・・立ち
方はね、・・・」

教え始めた加藤さんの言うとおりに、動く私。加藤さんが、私の
前に来たり、横に立ったりしながら、色々教えてくれたけど、全く、
何が何だか、理解できないでいた。

暫く、加藤さんの言うとおりに、やってみました。やりました。

・・・なに、これ！！難しいーゴルフって、見た目に簡単そうだけど、全然、難しいわー・・・・・・・・・・

「ようし、だいたい、これで、持ち方、立ち方、・・・・うん、じゃ、打ってみようね、」

「えっ、えゝそんなー、無理です、」

「大丈夫だよ、誰だって、初めから上手な人っていないから、大丈夫、」教えるのが、ホント、楽しそう、加藤さん。

・・・・・・・・絶対、一むりー無理ですー・・・・・・・・・・

打席に入って、教えられた通りに、クラブを握って、教えられた通りに、構えてみた。

・・・・・・・・駄目、無理、分かんないわー・・・・・・・・

自分で、言い訳を、言葉に出さずに、何回も心の中で繰り返して反復している。

「さあー、是永さんの、初打席、どうぞ、」と言いながら、ぱちぱちと拍手する加藤さんを、私はさすがのように見る。そして、

「笑わないでくださいね、」と。

「大丈夫、誰が笑うもんですかーまずは打って見ないとね、さあー頑張っ！」

「でもー・・・・・・・・」

私は、諦めて、打つことにする。

・・・・・・・・えーと、こう、こうだったわ、えゝ・・・・・・・・

腕に力が入る。重く感じる。持ち上げるように、ゴルフクラブをゆっくりと、振りあげる。振りあげたところから、打席に浮いている白いボールにめがけて、クラブを、下ろした。

・・・えいっ!!・・・
・・・えっ???・・・
・・・下ろしたわ、確かに打ったわ?・・・

確かに、狙ってぶつけたはずだったのに、何の、音も衝撃も手に、腕に、身体に伝わってこない、私は、直ぐに加藤さんを見て、

「えっ??? 当たりましたー?」

「か・ら・ぶ・りー、残念でした、さあーもう一回、ガンバロ!!
是永さん、ファイトー」

「出来ませんーもう無理ですーデキマセンー」

私は、とても恥ずかしさを覚えて、周囲の視線が急に気になりだした。打席から離れて椅子に座ろうとして、初めて、周囲に目を向けてみると、

「あっ!!」・・・驚きの、全く驚きの、声にならない声を出していた。

ドキんと、胸が鳴る。

続いて、胸の鼓動が、ドキンドキンと、激しくなりだした。急に顔に、全身に、熱い何かしらの火照りが駆け抜け広がる。一気に、熱を発したような気分になった。

・・・あ、熱い、・・・も、森本さん、来てたんですかーあゝ
見られたわ、・・・

練習場の入り口から、右側の奥の打席にいる森本さんと、練習中の人間の隙間に垣間見えた森本さんと、初めて視線が合った。森本

さんは、にこっと、笑っている。私は、直ぐに、視線を反らして、加藤さんに、気づかれないうちに、そのまま、椅子に座って、顔を両手で蔽うようにした。

・・・うわぁ、見られたわ、・・・加藤さんとは、何もないんですよ、・・・

「どうしたの??」

「なんでもないです、加藤さん、練習してください、私見ています、」

「どうしたの?練習しないの??」

「どうぞ、誰か、気になる人でもいるのかい??」

そう言うと、加藤さんは、辺りを見渡し始めた。

「あれ、今日は、社長が来てるいるなく、珍しいなく、いつもは、ゴルフなんだけどなく」

加藤さんが、そう言うのを、聞いていたけど、知らないふりをしていた。

すると、

「こっちに、来るよ、森本の社長さんが!!」

・・・えっ!!えーっ??・・・来ないで・・・

私は、椅子に座って、じっと、前を見ている、前だけを見る事にして、前だけを見ている。周りの人間は、もちろん、全員、知らない人ばかりよ、って、そんな表情を作っている。

「おう、加藤君、美人を連れての、練習、祝着至極でござるなく」

・・・・・・またまた、武士の言葉で・・・・・・もう・・・・・・

「社長いらしてたんですか??」

「うん、加藤君が、美人を連れて、練習に来てると、連絡が入ったんだよ、だから、どんな美人かと思ってさ、」そう言う、森本さんは、白いダブダブの長袖シャツを着て、白いスラックスを履いていた。

・・・・・・またまた、嘘ーうそばかり・・・・・・もう・・・・・・お願いー、・・・・・・でも、どうして加藤さんと知り合いなのかしら・・・・・・不思議だわ、・・・・・・

「またまた、社長は口が上手なんですからーあつ、ご紹介します、会社の同僚の、是永さん、是永さんです。」

加藤さんが、そう言うので、仕方がないといった風に、椅子から立ち上がって、森本さんに、小さくお辞儀をしながら、

「是永です、」と、聞こえるか聞こえない感じの声を出して、言った。

「初めまして、森本です、いやー、噂に違わず、ホントに、お綺麗ですなー、おいおい、加藤君、うらやましいなーこんな美人と、交際してるのかい??」と、聞くのを聞いて、

・・・・・・もう・・・・・・からかって・・・・・・

「ま、まさかー社長、交際していませんよー」加藤さんは、困った表情をしながら、私を見る。

・・・・・・もう、森本さんたつら、・・・・・・もうー・・・・・・決めたわ、・・・・・・

森本さんに、言ってやる事にしたわ。・・・・・・

いたずらっ子のような顔してる森本さんの表情を見ると、なんだか、言いたくなつて、真っ直ぐに森本さんを見ながら、

「はい、お付き合いさせて頂いております。」と、口から出てしまった。

・・・もう、言いました、・・・

心臓が、驚いてドキンドキン、もう、多分、自分の顔が、真っ赤になつてゐるはず。

私が言うと、笑いながら、

「ほくら、彼女の方が、はっきり言つたぞくく、これは、これは、目出度い、まずは、重畳、重畳、のうく越後屋く言われたぞくくわつはははははく良きに計らえくくくく」

そう言うと、さつと、離れて自分の席に向かつて行つてしまった。

「ごめん、いつもあの調子なんだ、あの人、」

「もう、いつもあくなんですかく、なんだか、とっても、変ですよく、あの方。」

「そうなんだよねく、突然武士言葉なんかで、言いだすしさ、でも、とっても面倒見がいい人なんだよ、」困つた、顔をしている。

・・・もう、・・・今度は、私が、目で追う番だわ・・・

「加藤さん、ジュース飲みます?？」

「うん、飲むよ、是永さん、何飲みます?？」

・・・なんだか、ウキウキしているわ、加藤さん。・・・私が交際していると言つたからからなく・・・嘘をついて・・・ごめんなさいく・・・私は、森本さんに、ずうと、抱かれ

ているんですよー彼の女なんですよ、森本さんが好きなんですよ・・・

「どうしたの?? なんか変だよ、」

「だって、あんな変な方がいらっしやるんですもの」

「はははははーそんなに變じやないよ、彼はさ、ただ、ちよつと、照れ屋なんだよ、きつと、コーラでいいかな?」

「いえ、私は、お茶にしますから、今、買ってきますから、加藤さん、練習してください。」

・ ・ ・ ・ ・ どうして、森本さん、いるんです、 ・ ・ ・ ・ ・ もう、 ・ ・ ・ ・ ・

私は、自動販売機でジュースを買いながら、自然に、森本さんの練習している場所に視線を移している。

随分、端っこにいるわ、お一人かな。

視線には、見知らぬ人間が、それぞれに、打席に立って、ゴルフクラブを振っているのが、入っているけれど、全然見てはいない。視線の先には、森本さんがいる。

「森本さんが気になるのかい??」

「えー、あんな変な人、おかしいですよ、」

「はははははー、まゝそんな事は言わないの、気にしない気にしない、」

「えー、そうします。でも、変ですよ、」

「参ったなー、じゃ、そう言うことで、さあ練習しないの？」

「加藤さん、続けてください、見ていますよ、」

「駄目だよ、それじゃ、コースに行ったら、打てないよ、」

「行きませんよ」

「だめだよ、岩崎君と、事務屋の社長と、来週行くんだよ、」

「ええええ？？岩崎さんも行くんですか？？」

「うん、彼が、どうしても、是永さんを誘えっていうからさ、」

「岩崎さんと、加藤さん、お付き合いしてるんですか？」

「近頃、飲むようになったんだ、彼は、酒造店の跡取りなんだってさ、知らなかったよ、でも、最近飲むようになって、結構面白い奴だよ。」

「そうなんですか？？」

「…………お見合いの事は知ってるのかしら…………岩崎さんに、聞いてみなくちゃ…………」

「さあ練習しよー、」

「まだ行くとは決めてませんよ、全然やった事が無いんですもん、」
そうは言ってみたけれども、行くことになるような気がしていた。

「大丈夫だよ、来てくれるだけでも、俺達、鼻が高いんだ、」

「どうしてです？？」

「それは、決まってるよ、是永さんは、とても綺麗だから、」

「行きません！！」

「あれ、怒ったの、ごめん、」

「……………」

「ごめん、…」

「怒ってませんよどうしようかな…」

「大丈夫、一週間、ばっちり練習しようね、」

「うむ、そうですね、」

その日の午後は、加藤さんと食事をして部屋に帰ったのは、夕方近かった。加藤さんは、夕食もと、誘われたけれども、お断りして、

部屋の前まで、送ってもらい、直ぐにシャワーを浴びて、汗を流した。

・・・・・・・・ゴルフって、難しいわ・・・・・・・・森本さんに見られたわ。まさか、見られるなんて、言っちゃったしー、本気にしたかしら???.

朝早くから、加藤さんと一緒に車で、東北道を飛ばしてやって来た、岩手山高原にあるゴルフ場。高速から見えた岩手山は、朝靄に隠れて下の部分しか見え無かったけれども、すそ野の広さがその雄大さを物語っていた。加藤さんは、朝から、とても楽しそうだった。私は、走る車の、前方左側に見える、岩手山を見ながら、

・・・・・・・・冬の岩手山、・・・・森本さんと来たわ、・・・・あの夜は、
・・・・・・・・

前を見つめながら、そんな事を、思っていた。

ゴルフ場、何もかも初めて。これまで、一度も訪れたことも、見たこともないので、建物の中に入って、どうすれば良いのか分からない自分に、困っていた。でも、加藤さんに、色々教えてもらいながら、なんとか着替えを済ませて、外に出ると、直ぐに、光と共に緑が目の前に広がり、何人かがパターをしている、グリーンが目飛び込んできた。

・・・・・・・・うわぁー、これが、ゴルフ場なんだ・・・・・・・・

私は、目の前に広がる緑の大きさに、圧倒されて周囲を見渡していると、

「おっ、是永さん、おはよ、」後ろから声をかけてきたのは、社長さんだった。

「あっ、おはようございますー」軽く頭を下げる。

「おはよう、うわおー会社で見るよりも、今日はうんと、素敵だよー、はははーこんな美人とゴルフ出来るなんて、今日は、最高だよ、頑張らなくっちゃ、はははははー」

相変わらず、声が大きい。

「いえ、いえーそんな事はないですよー、今日は、宜しくご指導お願い致します。あっ、岩崎さん、おはようございます。」

「ごめん、ごめん、ちよっと、道路が混んでて遅くなっちゃった。

おはようございますー皆さん宜しく願います、あー来てたんだ、今日は、宜しくね、是永さん、」

とても急いで来たらしく、声がいつもと違う。

「はい、」

「もう、遅いんだからさー、大丈夫なの？練習もしないで、いきなりコースだよ、」と、加藤さんが、岩崎さんに向かって、いうと、直ぐに、

「はははははー大丈夫さ、僕の実力を、見てくれってさ、」と、切り返した。

「はははー、さあー、さあー、若い二人の、火花が散ったよ、はははははー、冗談冗談、パターの練習をしよう、是永さんもね、」と、笑いながら、グリーンに向かって歩き出した。

「良いかい、パターはね、あの小さな穴をめがけてボールを転がすんだよ、さあーやって見なさい、ほら、こんな風にね、」そう言いながら、社長さんが打つと、ボールは勢いよく転がってしまつて、ボールの近くどころか、いきなり遠くに離れてしまった。

「はははははー、強く打ち過ぎたよ、参ったな、」

「社長ー、強すぎですよ、良いかい是永さんこうだよ、」加藤さん

が傍に寄ってきて、ボールをグリーンの上に置いて、

「良いかい、落ち着いて、こつんと当てればいいんだ、ほら!!」

加藤さんの打ったボールは、ゆっくりと転がり、ボールの近くに止まった。

「惜しかったですー、もう少しでしたー、」

「加藤君、いよいよ本領発揮だ、今日は、楽しいよ、二人の戦いが見れて、はははははー」

「さあー、今度は、是永さんの番だよ、」

「笑わないでくださいね、」

「おおー、当たり前だよ、誰が笑うもんか、さあー頑張って、」

「はい、」と、返事はしてみたけれど、白いボールを目の前にと、途端に、練習した事が、全て、忘れて、ぼうーとしてしまった。

「・・・こう、確か、こう、そう、こう構えて、・・・」

心臓が早鐘のように、ドキドキ打ち始めている。なんとか、構えて、打とうとするけど、もう、頭が、真っ白になってしまって、どうしても良いか分からないでいると、

「是永さん、落ち着いて、そのまま、ゆっくりと振りあげて、」
遠くに声を聞いたように感じられた。

「はい、・・・」

「・・・打つわ、・・・えい!・・・」

「カキン、」と音がした。確かに、当たった、感触が手に伝わる。確かに、当てた。

「・・・当たったわ、・・・確かに当てたわ、・・・」

でも、静かだった。シーンとした、雰囲気が一瞬感じられた。

「打ちました。」

「凄いなー、ボールに、当たったよ、おめでとう、」

「おめでとう、」

「ありがとうございます。」

「さあー、前に進もうねー。」

「あの一、ボールって、どこに行きました？」

「うん、前に歩けば、分かるよ、さあ、いこ！」

三人について歩き出すと、

「あっ！、私のボール、私のボールですよ、」

「そうだよ、前に飛んだんだよ、凄いよ、なー、岩崎君」

「そうだよ、例え、1メートルでも、前進だよ」

「えー、又、ここから打つんですか？」

「そう、それが、ルールだけどね、今日は、最初だから、打たなくても良いよ、ボールを拾って、さあーついて来て、」

「・・・当たったけど、前に転がっただけなんだわ、・・・うわあー恥ずかしい・・・どうしょー、」

「気にしないの！！誰でも、最初はおんなじだよ、」岩崎さんが、歩きながら、言う。

「はーい、気にしませんよ」

「・・・大丈夫、ダイジョーブよ、・・・気にしちゃダメ、・・・」

「そうそう、いつもの是永さんに戻れば、いいよ、」

「はい、加藤さん、頑張ってくださいね」

加藤さんと、岩崎さんが、真剣な表情で、プレーをしている。社長

さんは、いつものマイペースで、冗談を言いながら、一人で楽しんでいる。兎に角、打つのが、早い社長さん。構えた途端に、もう打っている。そして、打った後に必ず、あゝとか、おゝとか大声を出す、そして、必ず、はははははーと笑っている。

・・・・おもしろいわー、笑って誤魔化すのねー面白い社長さんだわ。・・・・

「どこ、行きました？ボール見えませんよ、」私が、遠くを見つめながら言うと、

「ほら、あそこに見えるのが、僕のボールだよ、」

「えっ、どこです？？見えませんよ？？」

「是永さん、さあゝ打つ番だよ、」岩崎さん。

「えゝ、もうゝゝ、？？」

・・・・景色を楽しむなんて無理。打ちましょー・・・・

「はははははー是永さん、空振りー、今のはなしね！！」

「はゝい、」

「はははははゝゝ」

・・・・もう、知りません、遅れないように、手で、運ぶわ、
・・・・もう・・・・

「うわあゝ、目に前に池がありますよ、池に入りますよ、絶対！！」

「うわあゝ入っちゃったー、」

「えゝえっー！！今度は、谷越えですか？無理ですゝ」

「きやあゝ、蛇が出ませんか？」

「OBーって、もう一回、打つんですかゝ？？」

「当たらないゝ、もうーいやー、」

なんだか、一人で、叫んでいた見たい。

自分でも、何が何だか、分からない内に、どんどんコースを前に前に、歩いて行くだけで、やっと、前半が終了。クラブハウスに、無我夢中で帰って来ました。

「はい、カンパ〜イ、」冷房のきいた食堂のテーブルの椅子に座ると、急に、全身の力が抜けて、少し安心した。

「さあ〜是永さんも乾杯しよ、」

「そうそう、さあ、乾杯〜」

「はい、カンパ〜イ、」火照った身体に、冷たいビールが染み込んでいく。

「良い〜最高だー、いやー是永さん、御苦労さまでした、疲れたでしょ、大丈夫かな?? まだ後半が有るんだけどね〜」

「大丈夫じゃないですよー、ホントに、足手まといで、済みません、」

「いいの、そんな事は気にしないの、」

向かい側の席に座っている、男の人と、視線が合った。直ぐに視線を外す。

「ほら、是永さんが、美人だから、周りの男達が、気になってしょうが無いみたいだね〜」

「社長さん、そんな事は無いですよーもう、」いつもの事だから、あまり気にしていない。

「いいや、ほんとに綺麗だよ、是永さんは、ね、岩崎君」

「はい、そう思います、な、加藤ちゃん、」

「うん、凄い声で、叫ぶんだ、きゃーあー、ボール、ボールが、消えました〜、うわあ〜、蛇〜とか、」

「嫌い、そんな事を言う加藤さんって、」

「はははははー、冗談だよ〜、でもどう、初めてのゴルフって??」

「すつごゝゝく、緊張しました。」

「なんだゝそんなに緊張しなくても、良いのに！」

「緊張しますよ、初めてなんですからね、」そう言いながら、周囲を見渡すと、見知らぬ中年の男の方と、視線が合った。自然と、目を反らしながら、

・・・・まさか、ここには来てないわね・・・森本さん・

満月の使者は、昨日で、ほぼ終わったから、又、森本さんとの日々が始まる。

・・・・ほんと、この期間中は、電話もくれないし、傍にも寄ろうとしない・・・

「知ってる人いるの??」目ざとい加藤さんが聞いてきた。

「いえ、誰か、知ってる人がいるのかしらと、思って、」

「ここは、意外と、遠いから、知ってる人間は、あまりいないはずだよ、ね、社長。」

「うん、あまり、近場だと、人目が、うるさいからねー、森本の社長も行きたいと言ってたけど、」

「えっ、誰です??」胸に、熱い何かが、湧きおこる。

「あゝ、ほら、練習場で会ったでしょ、武士の言葉で言う人、是永さん、変な人って、」と、加藤さん。

「あゝあの人ですか?あの人、変ですよ、一緒に来るはずだったんですか??」

「いや、いや、誘っていなかったからねー、そうか、森本の社長と会ったんだー、」

「えーゴルフの練習場で、でも、どうして、ご存じなんです??あの、変な人??」

・・・加藤さんも社長さんも、森本さんを知ってるなんて・・・

「はははははー変な人は良かったな、」

「実は、社長とは、ライオンズクラブの仲間なんだ、」
「そうなんですか??・・・」

・・・やはり、狭い町だわ、・・・気をつけないと、・・・

お料理が、運ばれてきたので、皆さん、食べ始める。私は、冷たいソーメン。加藤さんが、美味しそうに、ビールを飲み干すと、岩崎さんも、一緒に二杯目を注文する。

「大丈夫ですか? 帰り車ですよ??」

「大丈夫だよ、帰るまでに、殆ど汗で、流れるよ、」と、少し赤い表情で私を見ながら言う。

「そう、心配しなくても、大丈夫だよ、十分この暑さで、汗が出るし、水分も取るから、」と、岩崎さん。

「森本の社長は、結構ゴルフ上手いよ、な、加藤君、この前一緒にしたんだろ??」

・・・ええ?? 加藤さん、森本さんと、ゴルフしてるんだ・・・何時? からかしら??・・・

「はい、80前後、いつもそのくらいでラウンドしますよ、」

「あの変な人、上手なんですか?」

「うん、かなり上手だよ、」と加藤さん。岩崎さんは、熱いラーメンを食べながら、聞いている。

「じゃ、今度、誘ってみようか??」

「嫌です。・・・もう、」

「ははははー岩崎君は、会った事がないだろうな。」

「はい、知りませんよ、ところで、今日の19番ホールは、どうします?？」

「えっ?? なんです? 19番ホールって??」

「ははははーそうか? 知らないか? ははははー」社長さんが、大きな声で笑いながら言った。

「是永さん、19番ホールって意味はねー、色々な意味が有るんだ、」

「え? そうなんですか? ? ? ・・・」

「まあ、変な意味で言う場合もあるけど、今の意味は、反省会の事だよ、」

「あゝ分かりました、反省会ですね」

「加藤さん、岩崎さんと、真剣でしたねー後半、」

車は、盛岡を目指して、高速を走っている。窓外の景色は次々と飛んでいくように移り変わっていく。

・・・もう、全然、ゴルフにはなりませんでした。・・・

車に乗り込んでから、少し、無言の時間が経っていた。やはり、初めてのゴルフは、疲れている。

「実は、後半戦は勝負しようって、二人で決めていたんだよ、」と、前に意識を集中している加藤さんは、結構、スピード狂。

「勝負って・・・なんです?」

「単純にゲームで良かったんだけどさ、せっかく是永さんがいるんだから、格好良いところを見せようって、二人で話してたんだ、」
「そんな、でも、格好良かったですよ、お二人とも、でも、全然、

無口になってしまつて、」

「いや、ごめんごめん、真面目にやりすぎたよ、」喧嘩でもしたのかしらと思つていた。

「社長さんが、私にこう言つたんですよ、・・・・・・・・・・」

「えっ、なんて言つたの??社長??」

「あの二人は、是永さんを意識してね、今必死で、戦つてるんだよつて、」

「い、いや、まあ」

「そうなんですか??」

「そう、そうね・・・・」言葉を濁した加藤さんには、岩崎さんとお見合いの事は黙つていふと思つた。

「彼も、是永さんが好きなんだ、今に、アプローチが有るはずだよ、」

「え、うそ、冗談ですよ、」気まずい空気が流れていく。車は、既に、岩手山を過ぎてゐる。岩崎さん達は、それぞれ、途中で何か用事が有るらしく、急いで別々に歸つていった。

・・・・・・・・話題を変えなくちゃ、・・・・・・・・

「19番ホール、確か、居酒屋松野でしたよね、」

「うん、そうだけど、無理しなくてもいいよ、初めてのゴルフで、疲れたでしょ、」

「え、少し、でも、・・・・・・・・そうですね・・・・やはり帰ります。」

「うん、それが、良いよ、」

疲れた、身体をソファに置くと、直ぐに電話が鳴りだした。

・・・・・・森本さんだわ、・・・・・・そんな予感が有った。

「はい、是永です、・・・」

「のん、」

「はい!!」それは、やっぱり森本さんだった。

「今から、行きたいんだけど、」

「駄目です、」

「あつ、そう言う事を言うとお、お仕置きするよ、」

「嫌ですーよー、だ、」

「じゃクイズ出そう、今どこにいると思う???」

「今日は、日曜日ですから、ご自宅ですよね、」

「はずれ、残念でした、クイズにも間違ったから、お仕置きだね」

のうわっはははは、のう越前屋、」

「いや、嫌ですよー今日は、逢いません。」

「あれ、じゃ、このまま帰らせるの??? ドアの前にいるんだけどね」

どね」

「えっ??? いるんですか???」

「もう、帰るよ、」

「駄目ー今開けます、」

・・・・・・もう、いつも突然なんだから・・・・・・

のぞき穴から、見える森本さんは、歪んでいる。ドアを開けると、直ぐに中へ入って来て、抱きしめられた。そのまま、乳房を、ぎゅっと、握られる。

「あん、うーん、」痛さと同時に快感が、そして安心感が、身体を駆け抜ける。

「待ちくたびれたよ、」と言いながら、唇を奪われていた。

玄関での、愛撫は直ぐに終わり、部屋の中に入ると、当然のように再び抱きしめられた。

「抱きたい、」耳元で囁く。

「駄目、」

「終わったんだろ??」

「いえ、終わってません、永遠に終わらないんです。」

「ほう、そうなんだ、では、ここで確かめてやるぞ」

「駄目、いや、ね、森本さん、まだ、シャワー入ってないんです。」

「

「じゃ一緒に入ろうか、」

「いや、」抱きしめられながら嫌嫌を試みる。

「しょ、しょうがく無いなく川津屋く」

「もう、止めて下さい、入って来ますから、ね、」

「うん、裸になって待ってるからね、」

「もうく、スケベ!!べく」

・・・今から、抱かれる、・・・終わったかしら、・・・

「ねく、のん??」

「はい・・・??」余韻をむさぼっていた私の乳首をつまみながら、森本さんが言う。

「パスポート、あるかい??」

「えっ??パスポートですか??」

「うん、持ってるかい??」

「いえ、持ってませんよ、どうしたんです??」

「じゃ、早急に、造って、」

「どうするんです??」乳房が、左右交互に揉まれている。私は、好きなようにさせている。

「ハワイに行くよ、」

「えっ、は、ハワイですか??」

「そう、ハワイに連れて行ってあげるよ、」

「いつです??」

「秋口か、お正月明けかな」

「ハワイですか??」

「嫌かい??」

「いえ、只、良いのかなって、・・・・・・」

「遠慮しないの、俺と行くのが嫌なのかい??」

「えっ、そうなんです、ふふふふ」

「なんで??」

「ふふふふ、結婚前の若い女性の夢ですよ、新婚旅行はハワイと・

・あ、あーん、ん、」乳房を強く握られた。

「新婚旅行ね、もうこうなったら、行かせないもん、無理やり
にでも連れて行ってやる、」

「そう言う、私に被いかぶさって、両足の間に身体を入れて、その
まま、ぐいと、再び入れて来た。

「あん、もう、森本さん、」

「あ、何回でもしてやる、此処は、誰のものだ、言って!!」そう
言う、ぐいと強く入れて来た。

「も、森本さんのもの」

・・・・・・部屋で抱かれるのは、今日で終わりにするは、
・・・・・・

「のん、パスポート造っておけよ、」

「はい、・・・・い・・」

・・・・・・ハワイ、・・行くんだ・・・・・・

秋が来た。暑い夏は、あっという間に終わって、気がつけば、もう秋。森本さんとは、外で逢って抱かれている。いつもアパートの前まで車で迎えに来てもらい、そして、森本さん命名の「不倫ロード」の裏道を、人目を避けるように、すり抜け走り、暗い郊外へ向かう。そしていつも途中で前の席に移動する、この時が唇が重なる時間。唇が重なると、乳房が服の上から、強く揉まれる。いつもの時間。森本さんは、逢えば必ず、次の約束をする。その約束が、私を拘束し、どんな誘いや友達より、何より優先する。いつも逢う時は、ドライブをして、どこかの知らない街で食事をして、その後は決まって、郊外のモーテルに行って、抱かれる。

でも、満月の死者がやって来ると、私の時間が始まる。森本さんから、解放され、友達や、同僚とお付き合いをする日々が始まる。もう、この数カ月、同じサイクルが繰り返され、モーテルへは、何度も回数を重ねているから、初めのような、興奮は無かった。行くと必ず、いつものように、部屋に入り、いつものように服を脱ぎ、脱がされ、一緒にお風呂に入り、そして、ベッドで抱かれる。殆ど、毎日のように感じられる日々が過ぎて来た。

今日も、森本さんの車で、不倫ロードを、郊外に向かって、走っている。

「ねーのん、来月、ハワイに行くよ。」

「はい、分かりました。」

パスポートを準備してと言われて、直ぐに、申し込んだ。だから、もう出来てある。

車はいつものように、暗い夜道を、郊外へ向かって走っていく。森本さんの車に乗ると、乗った瞬間から、身体中に、じわっと嬉しさと安心感が広がっていく。車を運転している森本さんの横顔を見る。

いつもの森本さんがいる。

・・・・・・好きですよ・・・・・・森本さん・・・・・・

「うん?? どうかした??」 横向いた森本さんと視線が合った。

「いいえ、危ないですから、前を見て運転してください!」

「あれゝ今、じっと見てたよねゝ」

「えゝ見てました、随分太ったわゝゝ森本さん、って、見てたんです!!」

「そ、そう、太ったゝ?? そうなんだよ、少し太ったんだ、」

「初めて、お逢いした時は、随分スリムでしたもの、今じゃ、子豚ちゃんですね、」

「こらこら、のんお嬢さゝん、ほゝゝほっほほほゝ、しょ、しょゝが無いなゝ、子豚ちゃんは無いでしょ、」

「じゃ、おデブの悪代官で、」

「ははははゝどうしても、悪い男にしたいんだねゝよし、」 そう言うと、暗闇の中に、ライトを消して車が急に止まり、そのまま、森本さんが唇を重ねきた。乳房が、服の上から、強く掴まれた。

「うっ、うゝん、」 声にならない声を出して、目を閉じて、応じる。愛撫は、直ぐに終わって、車は、走り出した。

「ここの、お寿司美味しいだろ、」

「はい、とても、美味しいです。森本さん、お酒飲みたいでしょ、」 隣町に在る、お寿司店に真っ直ぐに来た。まだ、夕食は食べていなかったから、お寿司は美味しかった。

「うん、まあゝね、でも、車だしね、」

「運転しましょうか??」

「い、いや、良いよ、」

「あれゝ、信じていないんでしょ、私運転上手ですよ、」

「ははははは〜そう、じゃ、飲むかな〜」

「やっぱり、駄目、」

「なんだよ、飲むよ、」

「ダメ!、」

「なんだよ〜」

「ふふふふ〜どうぞ、」 森本さんは、御猪口を持って、お酒を注ぐのを待っているながら、

「なんだよ、」

「可愛いんですもの、」

「がはははは〜て、照れるではないか、うほ、うほってほほ〜のう、越前屋〜」

森本さんは意外と、シャイ。照れ屋だと、段々分かってきた。

「普通にしてください、もういつもそうなんですか?」

「うん、まあ〜んそうだね〜〜ところでさ、パスポートあるよね、」

「はい、今度、持ってきてくれないかな〜、手続きとかあるんだよ、良いね、」

「はい、ホントに行くんですか?」

「行くよ、のんは行った事が無いよね、」 美味しそうに、お酒を飲みながら、聞く。

「はい、無いですよ、」 ハワイの光景が、頭に浮かんだ。それは多分絵葉書……。

「じゃ、そろそろ、準備しておいた方が良いよ、遺書とかさ、」

「あのですね〜遺書って書くんですか?」

「ははははは〜冗談、冗談、ほら、水着とかさ、」 目が細くなつて、口元が、にやつくような表情をしたから、すかさず、

「いやです、水着にはなりません、」 と言う。

「どうして、??」

「だって、今の表情、なんだかいやらしいんですもの、スケベなんですから、ほんとに、」

「ははははは、良いだろ、のんの水着姿なんて、ハワイで見られるなんて、写真取っておこうね、」

「うわ、又、にやにやしてる、うわぁ、行くの止めようかな」

楽しかった。森本さんといると、とても楽しく過ごせる。

「写真は駄目です。証拠が残りますよ、秘密なんですから??」

「うん、まぁ、そうだけど、内緒で行くのかい?? 友達とか、会社とか、両親にさ、」

「両親には、友達と行くって言いますが、会社とか友達には、ハワイの事は言いませんよ、」

「うん、それが良いよ、そうしなさい、」

「はい、」

・・・・・・ハワイか、二人で行くのかしら??

「はい、どんどん飲んで酔ってください、」

「おっ、ありがとう、でも酔わせてどうするんだい??」少し顔が赤くなっている。

「はい、決まっています、そのまま、帰るんですよ、何もしないで・・」

「ほうーそうなの、黙って何もしないの??それで、良いの??」

「はい、今日は、帰りましょうね、何もしないで、」
心にもない事を言ってしまう。

「いやだなく折角逢っているんだからさ、今日はね、のんをね、ふふふふふ、苛めてやろうと思ってるんだ、縄で縛ってさ、」

「うわ、いやらしい、そんなの、絶対嫌です、いきません、・・」

「ははははは、うそーうそ、そんな事はしません。ね、のん、」
「はい、なんです、さあ、どうぞ、・・」お酒を注いで、森本

さんを見る。お店には、お客はいないみたいで、静かだった。

「ハワイには、何人かと一緒に行くんだ。良いね、」

「えっ!？　．．．．他にもです．．．．か?？」

「うん、そう、大丈夫、仲間だよ、安心して良いよ、」

「そうですか、じゃ私遠慮します。」

「どうして?」

「だって、
・ ・ ・ 奥様も
・ ・ ・ 」

二人の關係は、秘密のはずなのに……

「皆、自分の彼女、同伴なんだよ、」

「えっ？・・・彼女って言いしましたよね、彼女って、奥様なんじゃないんですか？？」

「いや、女房には内緒だよ、皆、自分の彼女を連れて行くんだ、だから、そんな事は心配しなくてもいいよ、皆、会社の社長達だから、それに、一緒に行くと言っても、ハワイにつけば、全然別行動だから、心配しなくてもいいよ、帰るまで、二人だけだよ、良いね、」

「なに？嫌かい？？」心配そうな、表情の森本さんと視線が絡む。

「でも、
・
・
・
・
・
」

「心配しなくてもいいよ、皆口は固いから、後から、詳しく教えるからね、行くよ、」

「はい、
・
・
・
・
・
・」

何の躊躇もなく、暗いモーターのドアを開けて入っていく。小さな気持ばかりの玄関に入ると、赤く薄い照明が、部屋を照らしている。その薄い光の暗い部屋の奥にある、すこし大きめな丸みを帯びたベッドが目に入る。森本さんは、部屋に入ると決まって、直ぐに、私を抱きしめ、長い口づけをする。それは、もう当たり前、ご

く普通の日常の一コマになっている。
離れると、決まって言う。

「さあ〜一緒に風呂入ろー、」

「はい、・・・じゃ、お湯入れますから、」私は、いつものように言葉を返す。

初めての部屋なのに、何回も訪れた事があるかのように、お風呂場に行き、お風呂の準備をしている。お湯は勢いよく出てくる。湯船には、あっという間に、お湯が溢れかえる。

私は、森本さんに、言われる前に、自ら服を脱ぎ始めている。裸になり、お風呂場に先に入って、森本さんを迎える。いつもの事。お湯の中に、身体を沈めると、決まって、森本さんが、お風呂場に入ってくる。

裸の森本さんは、隠そうとしないで、私の前に立つと、

「入って良いかい??」と聞いてきた。

「どうぞ、」私は、沈めた身体を、起こし、森本さんが、入るスペースを作ると、森本さんは、湯船に腰掛けて、

「口で愛して、」と言う。いつも。私は、お湯の中の身体を、半身起こして、身体の向きを変えて、森本さんの前に正座する。目の前にある、大きくなってびくびく動いているものを、両手で、さするように優しく持つと、

「いいね〜その白く細長い指で持たれると、それだけで、興奮してくるよ、」と言いながら、私の、頬を撫でる。私は、自分の手の指先を見ながら、白い指と、赤黒くなっているものとの色の対比が、あまりにあるのにいつも驚く。

・・・どうして、こんなに、色が黒いのかしら、・・・

両の掌に包み込んで、揉みさすりながら、そう思う。そして、ゆ

つくりと顔を近づけ、唇をつけてキスをし、それから、舌で固くなっている裏表を舐め、這い回る舌尖で、チョンチョンと、先っぽに刺激を与えながら、左手で丸い物を優しく、包み揉んで刺激を与える。これらは、全部森本さんに教えてもらった。

そして、口を半開きにして、ゆっくりとめくるように、唇で締め付けながら、飲み込んで行く。喉奥まで、飲み込む。

「あゝ良いぞーのん、そのまま、じっと、していて、」動きが止まっている先っぽが、喉の奥に当たる。

「うっ！・・・」でも、私は、動かずじっと、耐えている。そのままでも、舌を動かす努力はしている。

「・・・・・・・・フェラチオ、嫌いではないわ、森本さんが喜んでくれるなら、するわ、・・・・・・・・」

「いいよ、動いて、」私は、その言葉で、動き出し。ゆっくりと吐き出しながら、締め付ける。小さく、齧ってもみる。

ハワイ

ハワイ

・・・ 来週、ハワイに旅立つわ。・・・初めての経験、何もかも初めてだわ。良いのかしら、何だか怖いわーでも・・・

心は既に飛んでいる。ハワイに行くことは会社の同僚や友達の誰にも話してはいない。母には、旅行に行くときだけ話している。もちろん、行き先とか、誰と行くとかは話してはいない。

・・・絶対、話せないわ、絶対、これは秘密の旅行なの・・・

ここ暫く、旅行の準備をするだけで、ワクワク、どきどきで、十分楽しかった。夢のような気持ちは今も続いて、何だかふわふわしている。

下調べのつもりで、ハワイについての旅行本を買って、もう何度も繰り返し読んでいた。

・・・まさか、私が、ハワイに行けるなんて、多分、行けるとしたら、新婚旅行かなくくらいにしか思っていなかった、それが、森本さんと行くなんて、・・・

この1週間というものの、森本さんとは、全然、逢ってはいない。「明日、書類を持って行く」と連絡があったのは、部屋に帰ってきて直ぐだった。森本さんとは、ここ暫く、全然、逢ってはいない。

森本さんは、色々準備で忙しそうだったし、

「何事も、のん、逢いたくても我慢だよ、出発の日まで、問題を起こしては駄目だからね。」

最後の夜、モーター帰りの車の中で、暫く逢わないでおこうと言
って、今日まで我慢してきた。その森本さんが明日、日曜日の午前
中にやって来る。そう言われた時は、素直に嬉しかった。でも、逢
えない間は必ず、日に一度は私の部屋に電話がかかってきて、声を
聞かせてくれる。毎日かかってくる、その電話が、ハワイ旅行が現
実な事を告げていた。

旅行の支度は、随分前から、準備していたので、既に、終わって
いる。部屋の窓下の壁際に置いてある、新品のグレーのスーツケー
スには、必要な物は全て入っている。

「旅は身軽にね、それが基本だよ、」その森本さんの言葉が、頭か
ら離れなかったから、一応、身軽にしたつもりだけど。

何度も、確かめるために開けたり閉めたりした、今もそう。

・・・行くんだわ、ハワイに・・・

パスポートと、パスポートのコピーは、別々のバッグに入れたし、
旅行保険にも、森本さんは、私を入れてくれたみたい。その日が来
るまで、森本さんとは、逢わない事になっていたのは正しかった。

ルルルルルルル~~~~~

電話がなった。

・・・・朝の電話は、殆ど、母だけど、・・・・

「もしもし、是永です。」

「おはよう、のん、下に降りておいで、今着いたから」その声は、森本さんだった。身体中に嬉しさがこみ上げる。それでも、

「えっ、下にですか？」

「うん」声に、どこか元気が無い。

「はい、今行きます、」

・・・・どうしたのかしら？下につて？・・・・

急いで、階下に降りると、いつものパーキングに見慣れた、白いマジエスタが、静かに止まっている。近くまで寄って行くと、運転席のガラス窓が開いて、森本さんと視線が合った。

「どうしたんです？」

車から降りてこない森本さんに、私が近づくと、その時だった、車の中から、病院の匂い、消毒液の鼻をつく匂いが、車の中から、漂ってきた。

「どうしたんです？？森本さん？？」森本さんは、着物姿で、青白い表情の顔色をしているのに気がついた。

「うん、・・・・」

「うわぁーどうしたんです？大丈夫ですか？？」

「熱が下がらなくてさー」力の無い声で言う。

「大丈夫ですか？本当に、お顔、真っ青ですよ、」

「うん、今朝から熱を出してさ、これから、病院に行って来るよ、部屋に寄りたいけど、少し、辛いからさ、」森本さんの着物姿を見るのは、初めて。

「良いんですよ、私の事は、今日、日曜日ですよ、病院、大丈夫かしら・・・・」

「あゝ知り合いのお医者さん、居てくれたから、大丈夫さ、これ、書類、やっておくよ、ハワイに行くまでに、治さなくちゃ、ごめんな、のん、」

「大事にして下さい、ハワイは行けなくなっても、気にしませんから、」

「なに言ってるの、必ず、一緒に行くよ、良いね、」と、声を大きくして言ったけど、やはり、いつもの森本さんではなかった。

「はい、ありがとうございます。でも、無理しないで下さいね。」

「待ってて、・・・のん、」

「はい・・・」

そう言って、車は、直ぐに走り去っていった。

部屋に入って、再び、スーツケースを目にすると、何故かしら、涙が滲んできて歪んで見える。

・・・夢だったんだわ、・・・でも、・・・森本さん、大丈夫かしら、・・・ハワイには行けなくても、全然平気、でも、楽しい夢だったわ、・・・

・・・ルルルルウ~~~~~

電話がなった。出たくはなかった。電話は、鳴り続ける。

「はい、是永です、」

「のん、ごめんな、出発まで、絶対、良くなるから、心配しなくて良いよ、」

声は、森本さんだった。

「良いんですよ、私の事は、気にしないでください、それよりも、いつもの、お元気な森本さんになって下さい。」

「心配するなよ、今から、もう一度、戻ろうか?」

「ダメです、何を言うんです、病院に行ってください、」

・・・駄目、だめ、森本さんなら、やって来かねない。・・・
駄目・・・

「はははは、しょ、しょうがないなく、・・・」そういう声も、
力が無かった。

「私、何もしてあげなくて、・・・済みません、」声が、苦し
い。涙声になっている。

「戻るよ、今から、」

「ダメ、です、病院に行ってください来ても、ドア、開けません。
」

「分かったよ、今向かってるんだ、後から、電話するよ、」

出発は、水曜日。今日は、月曜日。いつもの、いつもの会社の日
常が始まった。昨日は、あれから、森本さんから、電話は無かった。
心は、最悪を、考えている。

「おはよう、是永さん、どうしたんですか？？今朝は、少し元氣
が無いですよ、何かあった？？」

週の初めの月曜日、加藤さんは、相変わらず、お元氣。ホントに
元氣。そして、いつものように、私に声をかけてくれる、いつも優
しい人。

「交際合って下さい」と告白されてから、もう随分時間が経ってい
る。それでも、今日まで、お付き合いしているのは、加藤さんの心
の大きさだと思う。いつも甘えている。あの、どうしようもない、
ゴルフから、何回か、満月の使者になると、岩崎さんとか、加藤さ

んとは、ときどき、飲み会などで、遊んでいる。

「はい、おはようございます、いつも元気ですねー加藤さんは、でも、目が真っ赤ですよ、又いつものところですか？」

「い、いや昨日はねー、夜遅くまで、勉強してたんだ、」

「えっ？何の勉強です？？」加藤さんが勉強している事は初めて知った。

「うん、それは、秘密だよ、そろそろ試験が近いからさ、」

「ふーんそうなんですか、頑張ってくださいね、私は、元気ですよ、ちよっと、眠たいですよ、」

「そうか、なら、安心だよ、さあー今日からまた、一週間が始まる、頑張ろう」

「はい、」

私の休みを知ってか知らずか、そう言いながら、部屋を出て行ってしまった。

会社では、いつもの仕事が始まり、その日は、何事もなく、終わって、部屋に入ると、待っていたかのように、電話が鳴りだした。

・・・・森本さん・・だわ、・・・・・・

「はい、もしもし、こ、」

「のん、・・・」

「はい、」やはり森本さんだった。

「今、病院にいるんだ、今は、・・・入院したんだ。」

「えっ、入院、・・・じゃ、やはり、かなり重いんですか？？」

・・・・入院って、相当悪いのかしら？？・・・・

「いや、今日だけ、明日は、退院するよ、午後から、ずっと、点滴

を打っていてさ、今晚休んで行けって、先生がさ、単なる疲れとか言ってたよ、」

「そうなんですか？明日は、退院ですか、安心しました。でも、そんなに疲れてるんでしたら、中止ですね、ハワイ、」

「いや、行くよ、そのつもりで準備しておいてよ、」

「良いんですよ、無理しなくても、」

「ばか、無理してないよ、行くの、良いかい！！」

「はい、・・・」

「行くからね、」声が、力強さを取り戻していた。

・・・夢、・・・夢だったのね・・・

昨夜は、あれから電話は無かった。

「おはよう、是永さん、」

「おはようございます、加藤さん、どうしたんですか？疲れたお顔してますよ、」

「うん、徹夜したんだ、」

「試験勉強でしたね、頑張ってくださいね、応援してますよ、」

「ありがと、今日は、盛岡に所長と行ってくるんで、居眠りも出来ないよ、」

「えーそうですねー頑張ってください、」

「明日から、どっか行くの？？」加藤さんは、聞きたい気持ちを抑えて来た表情をしていた。

・・・やはり、聞いてきた。・・・でも大丈夫、その時の、答は、何回も、自分の心で繰り返し、繰り返しして来た。・・・

・・・大丈夫・・・

「はい、実は、彼氏と、え、彼と、彼とですね、そう、ですね、旅行に行くんです。そう、新婚旅行ですね、行き先は、デイズニールランド、・・・」そう言いながら、加藤さんの表情を見ると、笑いだした。

「はははは、そうなんだ、新婚旅行ね、楽しんでらっしゃい、」

・・・あらっ、平気だわ、・・・

「あれ、新婚旅行ですよ、それも彼氏と、行って良いんですか、」と、思わず、聞いてみる。

「はいはい、で、何時？？結婚したんだっけ？？ノンちゃんはさ、」

「あつ、もう、そうですねー、鋭いんだから加藤さんは、もう、ばれました？？・・・ふふふうー」

「でも、彼氏って、ホントに彼氏なの、まさか、・・・彼氏なの？？」少し、真面目な顔をしたような気がした。

「はい、大学時代の同級生の彼氏ですよー、ずうっと、付き合っていました、」

「ふうん、そうなの、同級生って、是永さん、確か、短大だったよね、男の学生もいたんだね、ふうん、そうなんだ」

「うわあ、加藤さん、そんな細かいとこまで、ばれちゃですね、・・・はい、」

「はははは、気をつけて行ってらっしゃい、」

「ごめんなさい、短大の時代の仲間と、東京でね、・・・」

「はははは、そうなんだ、」

・・・まさか、私が、不倫してるなんて、言えない、男の人とハワイに行くなんて、誰にも言えないわ・・・

「気をつけて行ってらっしゃい、デイズニーは、混んでるよー、」
「はい、ありがとうございます。加藤さんも、頑張ってください、」

その日は、何事も無く一日が終わった。明日は、ハワイに出発をする日。部屋に帰って、最後の点検をしたけど、もう何度もやったから、同じ事の繰り返しだった。それでも、心は、ウキウキしている。

部屋

ルルルルルルルルル、・・・・ルルルルルルル―電話が鳴った。

森本さんだわ、

「はい、是永です、」

「ハロー、エクスキューズミー、ソリー、ジョン、メアリーさんのお宅ですか?」やはり、惚けた声の森本さんでした。

「もしもし、只今、留守に致しております、ピーと鳴ったら、5秒で、御用件を、」

「こらこら、お譲さん、居留守を使っちゃいけないよ」森本さんの表情が浮かぶ。

[illegible]

「いやね、明日からハワイに行くだろ、名前をさ、メアリーってどう？？俺が、トラボルタとかって、どう？？」

「結構です！」

・・・・・・もう、・・・・・・

「あれゝお嬢さんは、嫌なのかい?? 明日から、食事もパンで行くんだよフォークとナイフに、ハンバーグ、」

「うわぁゝいやだなゝそれって、田舎者のすることですよ、ご一緒するの止めようかなゝゝ」

「なんだよー、郷に入れば郷に従えってさ、」

「けっ・こうーですー。森本さん、お身体、大丈夫なんですか??」

「うん、無理やり点滴で、熱を下げたんだ、今から行くかい?? 抱きたいんだけど、」

「もう、そんなことばかり、駄目ですよ、今日はご自宅にいて下さい、」

「はははははゝゝそうだね、じゃ、明日は、予定通りに待ち合わせ場所に、バスが来るからね、遅れないようにね。」

「はい、分かりました、」

「嬉しいか??」

「はい、」

電話は切れた。明日は、バスが、部屋の近くまで、迎えに来てくれる手はずになっている。

・・・・・・眠らなくちゃ、・・・・・・寝れるかしら、・・・

ハワイ

「おはようございます。」

「おはようございます……」

バスに乗り込むと、薄暗い中に、見知らぬ、組合せの男の人と女の人と、視線が合った。軽く、頭を下げて、小さな声で、挨拶をする。バスは、時間どおりに、約束の場所に、滑りこむように、約束の場所に、静かに着いた。ドアが開くと、中から、森本さんが、降りてきて、直ぐに私の荷物を持って、乗りこむように促した。

「さあ、出発するよ、良いね、」その表情は、少し青白かったような気がした。

「はい、」

バスは、動き出した。一番後ろの席に座って前を見ると、空席の中に、相席で座っている、男女が3組しかいない事に気がついた。この大きなバスに4組の男女しか乗っていない。バスの中は、不思議と静かだったし、見知らぬ人間達だった。でも、全然不安は無い。

……だって、隣には、森本さんがいるもの。……

その時だった、森本さんの掌が私の右手を握り締めながら、二度握りなおし、力を加えてくれた。大丈夫だよ、と言っているように、そう感じた。

バスは、早朝の道路を、東北道を目指して、走り出す。

……高速に乗れば、一気に、成田空港まで行くんだわ、……

空港

「どう、疲れたかい??」

「いえ、大丈夫です。」

成田空港近くの、ホテルの部屋に入ると、直ぐに森本さんが、唇を求めて来た。強く抱きしめられて、苦しかったけど、直ぐに、解放された。

「ねっ森本さん??」早速服を脱ぎ始めた、森本さんの背中に向かって、声をかけた。

「うん??なに??早く抱いて欲しいのかい??」

「い、いえ、違います、どうしてそんな事ばかり言うのかしら、ホントにスケベなんですから??」

「あれゝまたまたそんな事を言って良いのかい??」

「良いんです、ね、森本さん、今日のバスのカップルって、ご夫婦じゃないですね、」

「うん、皆さん愛人を連れて来たんだよ、どうかした??」
「やっぱり、そうなんですか、」

・・・・不倫旅行、私を含めて、あの女性の方達、愛人なんだ・
・・・・

「はははははゝ何も驚く事は無いよ、今晚、皆とホテルのレストランで食事するから、その時に紹介するよ。さあゝシャワーだ、ノンも準備をしなさい、」

「はい、・・・・」

森本さんは、そう言うのと、シャワー室に消えて行った。

高速を走っているときにも、会話は、他の女性達とは、全くしな

かったし、席が後ろだったから、顔を見ることもなかった。ホテルのフロントでも、互いに距離を取って離れていたから、話す機会もなかった。不思議な、旅の同行者達。

・ ・ ・ ・ ・ 明日は、空を飛ぶんだわ、森本さんと一緒に ・ ・ ・ ・ ・

シャワーを浴びて、直ぐに、待ちかねたような森本さんに、抱かれて、愛された。いつものように、私の身体を上から、じっと見つめて、動かず、感覚を追う森本さん。いつものように、私は、森本さんを、「キュッ、キュッ」と、二度締め付ける。いつものように。

余韻が、引いた頃に、部屋を出て、最上階にある、レストランに入ると、皆さん、お互いに女性を隣に座らせ、席について、何か話しながら、ビールを飲んでいる。挨拶をしながら、森本さんと一緒に、開いている席に着くと、直ぐに夜景が、目に飛び込んできた。レストランの広く大きな窓から見る夜景は、光が闇を征服してしまったような感じがして、全く、異国を連想させるほど、普段目にした事が無い光景が遠くまで浮かび広がっている。

・ ・ ・ ・ ・ 凄いわ、 ・ ・ ・ ・ ・

「さあ、これからの旅の無事を祈って、乾杯しよう、」

「はい、」

「かんぱーい、」

「かんぱーい、」

改めて、目の前の女性をそっと、見る。

・ ・ ・ ・ ・ うわぁ、これって、やはり恥ずかしいわ、これって、
・ ・ ・ ・ ・ 皆さん、愛人なんだー ・ ・ ・ ・ ・ 私も、だけど、

・でも、あまり今まで深く考えた事もなかったわ、
・愛人って、
・愛人なんだわ、私も
・ここにいるのが、不思議だわ、

「どうしたの??」森本さんが聞いてきた。

「いえ、なんでもありませんよ、夜景がとっても綺麗なんですわ、見惚れてました、」

遠くに視線を向けるように見る。

・やはり、綺麗だわ、

「そうだな、綺麗だよ、そうだ、ここで紹介しようね、え、と、こちらは、相沢建設の社長さんの相沢さん、うんとお世話になってる社長さんだよ、お隣の女性は、俺も初めてだから、名前は知りません、知らないでおきましょう、ははははは、」

「初めまして、」私は、軽く、頭を下げる。なんだから、とっても恥ずかしい気がして、お隣に座っている女性を見ると、ここにこしながら、全然平気な表情でいる。

・落ち着いているわ、この女の方、

「こちらの男性は、佐藤木材の社長さんで、佐藤さん、お隣は、やはり初めての女性ですから、名前は、知らないでおきましょう、」
「宜しく願います。」お隣の女性と、視線が合った。綺麗な、女性。水っぽい感じがする。

「そして、えへん、僕が、森本です、こちらは、妹の美雪です、と、私を、紹介すると、皆さんの視線が、私に集中した。

・い、妹ですか??
・またまた、

「ははははは、嘘ー嘘こけー、ははははははは、そう言うか」直ぐに相沢さんが言う。すると、佐藤さんも、直ぐに、

「ははははは、社長！、それでは、俺の隣の女性もさ、女房の妹って、
・・」そう言われた彼女は、笑っている。

「そ、それはちと不味いんでないかい?? 女房の妹ってのはさ、妹までさ、」と、森本さん。

「ははははは、そっかーそれは、そうだなーははははは、」佐藤さんは、大らかに笑っている。何処か、憎めない小太りの男性。

「ははははは、まあ、これくらいにして、食べよう、腹が空いたよ、」

皆さん、森本さんのお仕事仲間なんだわ。

「ところで、森本さん、明日は、何時の出発なんです?？」

ハワイ旅行については、森本さんが、全部準備したから、森本さんの言うとおりにして、自分の準備をしてきた。全て任せっきりだったから、詳しい事は分からなくても、どこか安心していた。

「あれー明日は、デイズニールランドに行くんだよ、言って無かったっけ？」

「えっくえっく???・・・デイズニールランドって、デイズニールランドですよ、ハワイには行かないんですか??」

・・・・デイズニールランドなんて、聞いていなかったわ・・・
 ・・・・えっ？？・・・

「ははははは、なんだ、社長、言っ
て無かったのか？？」と、相沢
さん。

「あゝ妹を、驚かそうと思ってき、ね、ミ・ユ・キちゃん!! 夜に

出発するんだよ、時間があるからさ、ディズニールランドで時間潰しをするんだよ、ディズニールランド初めてだろ、」森本さんが、私を見ながら言う。

「はい、初めてです……真っ直ぐにハワイに行くもんだと思っ
てました、そうなんですか、……隠していたんですね……??」
「隠していたわけじゃないよ、プレゼントさ、ははははは」

……これで、納得だわ、………出発時間が、少し、気
になっていたけど、………

「そうか、優しいお兄さんだこと、妹に、ディズニールランドを見
せようとしたわけだ、」と、佐藤さん。

「知らないでいたのは、ミュキさん一人、はははは」

空の上

ふわりと、浮いた。瞬間、両手に力が入る。飛行機の機首の角度
を上に向けて、どんどん上に進み上って行くのが分かる。浮いた身
体に、足元の無い不安感を覚え、緊張が走る。通路側の森本さんを、
見ると、思った通りに、平気な表情をしている。そして、私を見な
がら、

「大丈夫だよ、」と言いながら、私の手を握ってくれた。その掌は
温かく感じられた。

「はい、」

「下を見て御覧、もう随分上だよ、」それに応えるように、窓の下
を覗きこむと、

「綺麗とても綺麗です、」小さく声に出した。
そんな合間にも、飛行機は、どんどん上っている。

安定飛行に入った頃に、食事が出た。機内食を食べるのは、初めて。森本さんは、ビール、私は、ワインを飲みながらの食事だった。美味しかったし、嬉しかった。心が浮き浮きしている。そんなふわふわな気持ちでの食事の時間は、あつという間に終わり、片付けが始まる。

「音楽でも聞くと良いよ、」森本さんが言う。

「はい、・・・」

「少し疲れたから、眠るよ、」そう言った森本さんの顔が、どこことなく青ざめて見えた。

「はい、・・・お顔、青いですよ、大丈夫ですか??」

「うん、寝れば治るよ、」目を閉じる森本さん。

・・・そうだ、森本さん、昨日まで、点滴を打ってたんだわ、
疲れているんだー・・・

私も、目を閉じて今日の、ディズニールランドの事を思い出す。

・・・凄い人数のお客さんだったわ、あんなに並んで待つなんて、ホントに、一度で良いわ、・・・眠くなってきた・・・

「ノン、ぐ、具合がわ、悪い、・・・」森本さんの、声に、気がついた。眠っていた。どのくらいの時間が経っていたのか分からなかった。飛行機の中にいるんだと、気がつかないくらいに、静かに飛んでいる。

「も、森本さん、大丈夫、大丈夫ですか??」森本さんを見ると、目を閉じて、苦しそうに背にもたれて、顔をしかめている。顔の色

が、白かった。

「も、森本さん、森本さん、。」

「だ、大丈夫だ、．．．．大丈夫だ、急に、具合が悪くなったからさ、．．．．ううん、今に良くなる。．．．．大丈夫だ、．．．．ううん、も、う一度寝るよ。．．．．寝れば、心配するな、．．．．ううん、大分、良くなってきた、．．．．」

「呼びましょう、いま、」立ちあがろうとすると、手を抑えられて、
「いや、いいよ、．．」

「でも、．．」

「大丈夫さ、段々、良くなってきた、．．．．寝るよ、」そのまま、
気絶でもしたかのように、目を閉じて、何も言わなくなった。

．．．．大丈夫かしら、どうしよう、ホントに大丈夫かしら．．
．．

死んではいなかった、眠っている。

．．．．このまま、眠らせておいて大丈夫かしら．．．．何か
あれば．．．．どうしょ、．．

何時間か、私も眠っていたらしい。森本さんは、起きていた。森
本さんと視線があった。

「森本さん、起きてたんですか？」急いで身体を起こしながら聞くと、

「うん、たった今、目覚めたよ、」と頬笑みを浮かべる。

「お、お身体、は、大丈夫ですか??」

「あゝもう大丈夫だよ、大丈夫、心配させてすまん、」森本さんの
表情は、元気な時と同じだ。

「ホントですか??心配ですよ、」

飛行機は、静かにホノルル空港に、着陸した。緊張したけど、何も起こらなかった。それから、入国手続きを済ませて、建物の外に出ると、光が、空気が、景色が、風が、温度が、色が、匂いが、全く違う事に直ぐに気がついた。朝の光が、眩しく、空は澄んでいる。心は、浮き浮き、弾んでいる。

「そう、これが、ハワイの匂いだよ、韓国に行けばキムチの匂いにするよ、多分、どの国に行ってもそうなんだと思うよ、さあ〜ホテルに行こう、」

・・・・・・そうなんだわきつと、・・・・・・

「ホテルに、荷物を預けて、それから、市内観光だ。さあ〜皆さん、行きますよ〜」と、森本さんは初めてのハワイ上陸に、戸惑った表情をしている皆さんに声をかけて、バスに乗り込んだ。飛行機の中でも、皆さんとは、話をする事もなかった。なんだかドキドキして、バスに乗り込むと、運転手は、白人の体格の良い女性だった。オートマのバスは、初めて見た。

ホテルには、そんな時間が、かからなかったが、着くまでの時間、次々飛び込んでくる、初めて見る街を見ながら、

・・・・・・私、ハワイにいるんだー信じられないわ〜・・・・

何度も、何度もそう思って見ていた。

森本さんといえば、平気な表情で、手帳を見ている。多分、これらの予定を確かめているんだわ。バスが走り出すと、目に入る窓の光景は、まるでいつか見た事のある絵葉書の連続写真を重ね見ているように思われ、何もかもが、新鮮に感じられ、ハワイに行く前に、

森本さんの言っていた言葉を思い出していた。

「のん、感じたかい??」

「はい、……ありがとうございます。」森本さんは、私を抱いて帰る際には、私を抱きしめて、いつも、「ありがとう」と言ってくれるから、私もいつしか……愛していただいて……「ありがとうございます。」と言うようになっていた。余韻に浸っている時に、森本さんが、私の乳首を、いじりながら、

「良いかい、のん、」

「はい?」

「ハワイに着いたら、最初は、観光はするけどね、観光なんか一日で終わりだよ。あっちこっちに行かなくなつて、どこもかしこも、絵葉書の世界なんだから、行ったら分かるけど、忙しく、駆け回り回るなんて、する必要が無いんだ。」

……今、森本さんが仰っていた、意味が分かりましたよ、森本さん、……ホントに、そのままだわ……

「うん?? どうかしたかい??」私が、森本さんを見ると、その動きに気がついたらしく、聞いてきた。

「いえ、どうもいませんよ、」

耳元に、顔を近づけ、

「どう、嬉しいか?」と聞く。

「はい、……」と小さく頷きながら、応える。

「今晚はね、ワイキキのロイヤル・ハワイアン・ホテルで開催されているルアウを見ながらディナーだよ。海に面している、ピンクのホテルなんだよ、沈む夕日が最高に綺麗なんだ。きっと涙がでるよ、」

「ルアウってなんですか？」

「あゝそれは、このハワイの伝統的踊りと言うか、……見れば納得するよ、あつそれと、今日だけは、皆と一緒に食事をするよ、これから、少し時間があるから、観光するんだ、」

「はい、……」

バスはあつという間にホテルに到着。

……わあゝ素敵なホテル……ここに泊るのね……

やはり、ここは、ハワイ、私は、今、ハワイに来ているんだと、実感。ホテルのあちらこちらに溢れている、ハイビスカスの鮮やかな赤い色や、名前も知らない白や黄色の花々が、ヤシの木が、急いで、のんびりと行きかう人の流れ、走っている車、何もかもが、新鮮に思えた。そして、なんとも言えない香り。

「車が、来ましたよーさあゝ、これから、車で、観光するから、皆さん、行きますよー」

……いよいよ観光するんだわー……

ダイヤモンドヘッド・トレイル（オアフ観光局）監修……転写

ワイキキの東側にそびえ立つダイヤモンドヘッドは、約30万年前に起こったたった一度の短期間の噴火によって形成されました。現在は死火山で、すり鉢状になっている噴火口は、350エーカー（1.4平方キロ）の広さがあり、その横幅は深さより大きいものとなっています。その理由は、海岸に近かった為にマグマが激しく海水と接触し、水蒸気爆発を起こしたためと言われています。

ダイヤモンドヘッドは、1700年頃に山を訪れた西欧の探究家や商人達が噴火口壁面の岩石の中に光る鉱物（方解石の結晶）をダイヤモンドと見誤った事からその名がついたと言われています。また、ダイヤモンドヘッドは“レアヒ”とも呼ばれ、その名前の由来には様々な説がありますが、一説によると、火の女神ペレの妹、ヒイアカが、この山がマグロ（ハワイ語でアヒ）の額（ハワイ語でレア）のような形をしているということから名付けたと言い伝えられています。

現在、ダイヤモンドヘッドは、撮影の名所でもあり、またハイキング・トレイルコースとしても有名です。標高は約232メートル。片道1.1キロの約30分のコースで、地元の人にはランニングコースとしても親しまれています。気軽に家族で楽しめる人気のハイキング・コースです。

登山口からは、平坦で道幅もある舗装されたなだらかなトレイルが続きます。歩道の周辺には、1800年代以後にハワイへ入ってきた豆科のメスキートの仲間であるキアベ（Kiabe）やコアハオレ（Kohaole）が目に止まります。また、元来、外来種である赤と灰色の二種類のカーディナルやマイナーバード（九官鳥の一種）などの鳥を観察することができます。

次第に舗装された道から自然の山道へと変わっていきます。その山道を進んで行くと、最初の階段である76段の階段がでてきます。それを登るとトンネルに達し、その後、二つ目の階段、心臓破りの99段へと続きます。

ここを過ぎると、2003年に照明が設置された43段の螺旋階段が現れます。各階の細長い窓からは海が望めます。ここには、かつての海と空からの敵襲に備えたオアフ島沿岸防衛のための軍事エリア（ルーガー砦歴史地区の一部）が残り、最上階は砲撃統制所跡と

なっています。ここまで来ると、頂上まではあと少しです。

ダイヤモンドヘッドの頂上に到着。頂上には小さな展望台があり、目の前には広大な海と水平線、ワイキキの街、東側にはココヘッド、北東にはコウラウ山脈という360度のパノラマビューが広がります。爽快な風に吹かれながら、ハワイを感じる最高のロケーションです。

ハ

ワイ、オアフ観光局監修

私は、これから行く、ダイヤモンドヘッド・トライアルのパンフレットを、森本さんから渡され、読みながら、これから、本当の観光が始まるんだと思った。

森本さんが手配した車は、白いワゴンタイプの車だった。もちろん運転手さんは、若い白人の男性で、日本語が、随分お上手で、何処かピントがずれた日本語のユーモアを言う、結構お喋りな人。なんでも、大学時代に、日本に2〜3年、住んでいたそうです。

あの絵葉書に出てくる、ダイヤモンドヘッド。階段を登るのは命がけのような気がして、もう、緊張して力が入って、少し、疲れたけれども、登りきった途端に目の前に広がる、太平洋、海、空、風、太陽、ハワイの街並み、島が遠望できる、全てが、輝いて見えた。遠い地平線、どこまでも澄み切った碧い空と海、皆さんも、口々に何かを言いながらも、頂上までなんとか辿り着いた途端に、大きな歓声が、挙がった。森本さんは、ずっと、私をを励ましながら、支えてくれた。

「凄いな〜うわぁおー、凄い景色だ、何回もハワイに来ているけど、何故だか、登った事が無かったんだ〜、やはり、来て良かったよー、す、凄いな〜うわ〜」そう言いながら、森本さんは、カメラを取り出し、何かにせかされるように、写真を撮り出した。私は、圧倒されて見ている。

・・・来て、よかった〜・・・綺麗、なんて綺麗なんだろう、素晴らしいわ〜・・・

風が強く、吹き付ける。その風すらも、美しいような気がした。涙が、滲んできたけど、悟られないように、森本さんや皆さんと反対の景色を眺めていた。

「ノン、写真撮ったげる、さ〜」

「は〜い、・・・」

ホテル

唇と唇が重なる。ハワイでの初めてのキス。森本さんは、ホテルの部屋に入るなり、私の唇を求めて来た。嬉しさが、身体を、駆け巡る。抱きしめられる。

「今日は、疲れたろ??」

「いえ、大丈夫ですよ、少し、ベランダで休みましょうか??」このホテルでは、光で溢れている中庭で、夜のディナーショーが行われている。音楽が、上まで聞こえてくる。このホテルの宿泊客ばかりではなく、観光客もいるような、賑わい。私達は、十分、ルアウというショーを堪能してきたから、今日は、そのままショーを横目にしながら、部屋に上がってきた。

……まだまだ、これからだわ。……

そう思いながら、見ていた。

「そうだな、初めての、ハワイの夜は、朝まで、愛してあげるよ、」
森本さんが、耳元で囁く。

「嫌です、」と、抱かれながら、言ったので、いつものように、左の乳房を、ぎゅうと強く握られた。

「あゝん、だめゝ」いくら声を出しても聞こえないに違いない。

私、ベランダに置いてある椅子に、腰掛けて、夜のホノルルの夜景を眺めながら、今日の一日を、思い出していた。

……全部、違っていたわ、……絵葉書とは、全然違って
みえたわ、……

「どうしたんだい??何か、したの??」

「いえ、……あまりに素敵なので、……」

「えっ、俺がかい?」

「いゝえ、違います、違いますったらー、もう、」私は、夜景を見ながら、今日の一日を思い出していた、外国人の男女が、普通に絵の中にいて生活をしている、映画のように歩いていたわ。

「はははゝ良かったろ、来て、」と、言いながら、私を見つめる視線を感じた。

「はい、ありがとうございます、」私は、何故か、涙が滲んでいた。

「さあゝ明日もある、抱きたい、」

「ダメです、」

「えっ、そう言うの、」

「はい、」と、森本さんを見ないで、夜景を見ながら、言うど、

「これこれ、姫、これから、夜の伽が始まるのじゃ、さあ〜早よ〜
ーはよ〜がわはははは〜」と、大きな声で言ったので、

「嫌ですよー姫は、嫌ですよ〜」と返すと、すかさず、

立ちあがった、森本さんが、私の、身体を、椅子の上から、抱えあげて、

「う〜ん、重い姫じゃ、はははははー」と笑いながら、ベッドに歩き出す。

「重いですよー、」私は、森本さんの首にしがみついて、言った。

ベッドに投げ出されて、服を剥ぎ取られ、いつの間にか裸になっている森本さんに抱かれると、微かな、甘い香水の匂いがした。胸に顔を埋めて、乳首を、吸っている森本さんの頭を摩りながら、

「いや〜、森本さん見られますよ、」と言うと、

「いいさ、見られたって、」と、口ごもりながら言う。

「え〜、恥ずかしいですよ〜あん〜あ〜見られますよ〜」部屋の窓は、開いている。森本さんは、気にする風では無く、乳房に夢中で、痛いくらいに、揉んでいる。

「あっあ〜ん、もっと、優しくね〜もっど〜」

森本さんに乳首を齧られた。

「あっ、い、痛い〜、」

・・・あ〜でも、良い〜わ〜ビンビンに感じるわ〜〜〜。

いつも齧られる。馴れたけど、でも、段々、なんだか、齧り方が強くなってきた気がする。乳首は、本当に感じる。優しく、舌で転がされても良いし、強く吸われても、感じる、私の、一番感じる場所。

ベッドで、身体中を愛されていると、森本さんが不意に立ち上がり、

部屋の電気を消し暗くして、裸の私を、無理やり、ベランダの前まで連れてきて、

えゝこゝでするのねゝゝでもゝ

「あゝむ・・・、森友さん・・・」

「あん、あん、あゝあゝ、あんゝゝ」その動きに合わせ、声が出る。

「ほら、目を開けて、外を見なさい、音楽が聞こえるよ、それに暗くて、誰も見てないよ、」と言いながら、私のお尻を後ろから、突きまくっている。

「でも、あん、あゝあつあゝゝん、」、口から声が絶えず出てくる、それに合わせ、垂れた乳房が、突かれる度に、横に縦に、前後に、ブルブル揺れる。

後ろから、激しく突かれ、出し入れされ、テーブルがぎしぎし鳴り
身体が前後に動く。懸命に手で身体を支えながら、私は、言われる
がままに、外に目をやると、中庭を取り囲むように、夜の灯りを燈

したホテルが部屋があちこちに見えた。

・・・き、きつと、あ、あっちでも、あん、あゝせ、セックスしているんだわゝゝ。・・・・・・・・

目の前に見えるホテルの窓明かりを見ながら思った。

「見られますー、もう、」

・・・誰かに見られているに違いないわ、・・・・・・・・あゝでも、いい・・・・・・・・

ハワイでの最初の夜が始まった。

別れ

部屋の中で、今日も、手にして見ている、ハワイの写真には、森本さんと一緒に写した写真は、1枚も無い。3度目のハワイでは、その写真すら無い。森本さんと一緒に写っている写真は、1枚も無い。写っているのは、いつも私だけ。二度目からのハワイ旅行は、森本さんと二人だけ。この3年の間、旅行には何回も行ったけど、やはり、写真は一枚無い。それが、暗黙の了解だった。森本さんは、家庭の事は、言わないし、私も、敢えて、触れないようにしていた。

・・・別れようー・・・・・・・・私は、森本さんと・・・・・・・・別れるわ、

・・・・もう、駄目、これ以上は無理、もう駄目・・・・・・
もう、3年になるわ、・・・・・・このままじゃ、駄目になる・・・・

3度目のハワイから帰って来てから、この思いを、何度も、何度も心の中で、繰り返し、繰り返してきては、言いだせないでいる。もう、そう思ってから何度目だろう。別れなければならないのは、随分前から、分かっているのに、今日まで、別れを言いだせない自分がいる。逢えば嬉しくて言いだせない。森本さんから、「行くよ」と言う、いつもの電話が来れば、今日も逢えると、嬉しくて、嬉しくて、森本さんの車を、アパートの部屋の外階段下で待つ日々。そして、さぁと、静かに、夜の暗さの中から現れる車の後部座席のドアを開けて、乗り込む、いつもそう。森本さん命名の、いつもの、暗闇の「不倫街道」を走って行く、そして、いつものホテルで、愛され、抱かれる。抱かれている間は、何も考えないで行為に没頭する、幸せな時間。そして、今日の別れが始まる。森本さんは、私を、部屋の前に降ろすのと、次の約束をして、そのまま闇の中へ消えていく。そして次の約束が、再び、私を拘束する、そんな日々がもう3年も立っている。森本さん中心の日々だった3年。

帰った部屋の中には、私、一人。さっきまで、肌を合わせ、温もりを感じていた森本さんの肌は、今は、どこにもいない。

・・・・・・大好き、死ぬほど好き、・・・・・・でも、・・・・・・これ以上は、もう、辛いわ・・・・・・

森本さんとハワイにはもう、3度も行った。少し前に帰って来たばかり。お付き合いしてから、もう3年が過ぎてしまってる。この3年の間、森本さんと一緒に行動を共にしてきた、森本さんが生活の中心で、何よりも優先してきた。

……このままでは、森本さんを奪わずにはいられなくなる、
……森本さんには、奥様と、子供さんがいる……私は、只の
愛人……森本さんには、愛人が……13人も
いるって……分かれるわ、そうする、……今度、逢
ったら言うわ……

会社

「ねっ、加藤さん、今日一緒にお食事しません??」

「えっ、誘ってくれるの??」突然の言い出しに、戸惑った表情を
して言ったので、

「はい、たまには、お付き合いくださいね、少しストレス解消しな
くちゃ、岩崎さんも誘いますから、」

「そりゃ嬉しいね、良いけどさ、どうしたの??なんか有ったのか
い??」

「はい、沢山ありすぎて、……へへへ嘘です、久しぶりに
楽しみましょう、」

この三年間、男性では、木戸さん、岩崎さん、加藤さん、女性の
有紀さんと、圭子さんと、自然と出来たグループで、飲んだり、歌
ったり、ドライブに行ったり、結構遊んでいた。もちろん、森本さ
んと逢えない、満月の週だけだったけど。でも、この三年の間、私
の周りでは、色々な出来事があった。

岩崎さんとは、お見合いをしたから、と言ってはなんだけど、結
構二人で、誰にも内緒で、一緒に食事をしたりドライブに行ったり

していた。もちろん森本さんも、その事は知らない。岩崎さんは、森本さんがいなかったら、きっと、お付き合いしていたと思う、きっと、結婚していたかもと、思う。加藤さんとは、違った、優しさがあるし、どこか、おぼっちゃま的なところがある。普通に、お付き合いしてくれる岩崎さんの御実家にも何度か、招かれて、お邪魔した事もある。お見合いの事は、誰も知らないし、そんなお付き合いをしているなんて誰にも話してない。

ドライブの最中、キスを、求められたけれども、「もう少し待って下さい、未だ結婚は早すぎます。」と言って、求めを、なんとかかわしてもいた。岩崎さんには、じっくりとした、お付き合いをお願いしていたから、岩崎さんは、何度かの求めに、応じない私に、「好きな、男でもいるのかい?」とか、「俺では駄目なの?」とか、辛そうな声で、何度か聞かれたけど、現在まで、辛抱強く、待っていてくれる。

・・・・もう、拒否出来ない、・・・しない、・・・これからは、自分を大事にしよう・・・私の将来を考えよう・・・森本さんとは、別れて、・・・私・・・私の・・・・・・

お逢いしている時、森本さんは、いつも突然に、ご機嫌を悪くする。

・・・・どうして??私が怒らせたの??・・・

突然無口になってしまい、車の中でも、私と一言も口もきかないで、私に触りもしないで、ドライブを切り上げ、何も言わないで、アパートまで送って、私を降ろすと、一言も言わないで、そのまま帰ってしまう。私には、どうして怒っているのか分からない。何度も有った。一人捨てられたみたいに部屋に帰って、考えても分から

ず、そのまま、泣いた時が何度もあった。その夜は、辛くて眠れないで、困っていると、次の日には、「ごめん」と、必ず、謝って来る。

「昨日は、ごめんな、のん、済まなかった、」と言って、私に謝る、一方的に。意味が分からなくても、私は、森本さんのご機嫌が治った事に、何度も、ほっとし、私に謝る、森本さんを、憎めないでいる。決まって激しく、その夜に、抱かれると、私は、いっそう燃えた、そんな繰り返し三年間だった気がする。楽しい思い出だけの三年間だった。

・・・でも、・・・もう、限界だわ、これ以上は、無理・・・
・・・もう、無理・・・

「どうしたんだい?? 近頃、疲れてるんだろ??」

いつも、どこかで必ず、私を見ている、加藤さんが、聞いてきた。

「ごめんなさい、少し、・・・」と、言う、不意に目元に涙が、滲んできた。

「ど、どうしたんだい、な、泣きそうなんだもの、」と、慌てた様子で言うから、

「済みません、フラレちゃって、」と、心にもない事を言う。

「や、やっぱりか?」と、・・・どうもおかしいと思ったんだ、・・・

「そうか、ふ、振られたんだ、・・・誰、?。」声が、小さい。

「はい、加藤さんです、」と、またまた、心にもない事を言った。

「えっ、うっそ? そんな事はないよ、どうしたの??」

「私、見ました、」と言いなから、加藤さんから視線を外す。その時には、もう、涙は、消えていた。

「な、何を、・・・見たの?? えっ???・・・えー。」加藤さんは、隠しだての出来ない人。

「偶然、ホテルに入るのを見たんです夜遅くに、それも、一緒に腕

を組んでました、．．それから、何度か、見ました．．同じホテルで．．．．．」

「み、見たの、．．うわあゝそれって、ご、誤解だよ、．．．見たんだー、．．．．．」

「はい、綺麗な女性でした、あの方、あの喫茶店の．．．．．」
と言いながら、加藤さんに連れて行かれた、あの喫茶店を思い出していた。

「うわあゝ．．．参ったなゝ．．．．．」

「加藤さん、もてますもんね、．．えゝもう良いです、私は、諦めました、．．．．．」

「そ、それは、．．．そうだなゝ．．．三年は、随分長かったよ、．．．．．長いよ、．．．．．」その声は、訴えるように、低い声で言った。

「．．．．．分かってたの、ずうと、分かってたの、．．．．．ごめんなさい、．．．．．加藤さん、．．．ごめんなさい．．．．．」

「済みません、今日、おのろけ、うんと聞かせて下さい、」

「何か有ったのかい？？．．．．．彼と別れたとか？近頃、毎晩だよ、身体、壊すよ、」

「何も無いんですよ、只、ちょっと疲れただけなんです。．．．．．じゃ、今晚、いつものところで、待ってまゝす。」そう言って、傍を離れた。

「．．．．．加藤さん、幸せになってください、．．．．．ごめんなさい．．．．．」

天窓

「るるるるるるるるるるるるるるるる」

・ ・ ・ ・ ・ 森本さんだわ ・ ・ ・ ・ ・ どうしょ? ・ ・ ・ ・ ・

毎日部屋にいなかった。毎晩遊びに行っていた。だから、ここ何日か、森本さんとは逢っていないかった。毎日のように来る電話が、今日も来た。

・ ・ ・ ・ ・ 又、 ・ ・ ・ ・ ・ 今日逢わないように口実を造って、 ・ ・ ・ ・ ・ 出来るだけ、用事を造って、逢わないようにしなくちゃ ・ ・ ・ ・ ・

「はい、是永です、」声が、いつもと違って、冷たく感じる。

「のん?? どうしたんだい?? 今日逢えないのかい??」森本さんの声が、受話器に響く。

「 ・ ・ ・ ・ ・ 駄目です、今日は、会社の飲み会が有って、 ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ 考えていた、返事をする。」

「ふくん近頃、度々、だね ・ ・ ・ ・ ・ どうしたの?? もう、逢いたくないのか?? 俺と、」

「 ・ ・ ・ ・ ・ い、いえ、そんな事はないですよ、 ・ ・ ・ ・ ・ でも、
 ・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ 逢いたいです、 ・ ・ ・ ・ ・ 堪らなく逢いたいです、
 ・ ・ ・ ・ ・ でも、 ・ ・ ・ ・ ・

「分かった、今から、部屋に行くよ、ノンの話を聞きたい、嫌でも、

行くよ、はつきりさせよ、」と言って、電話が、切れた。

．．．．．多分、直ぐに来るわ、言えるかしら．．．．．言わなくちゃ、もう、耐えられない．．．．．ずうと、考えてた、．．．．．このままじゃ、お互いが、不幸になってしまう．．．．．でも、逢ったら、抱かれたら、．．．．．駄目、ダメ．．．．．今日はしない、．．．．．

もう、駄目、．．．．．駄目よ、．．．．．

ピンポーンと、部屋のチャイムが鳴った。

森本さんは、やはり直ぐにやって来た。覗き穴から、確かめると、森本さんが、歪んだ形で、目に飛び込んできた。ドアを開けると、滑り込むように、中へ入って来た。私は、森本さんに、抱かれないように、直ぐに、部屋に戻って歩き出していた。

ソファに座った、森本さんは、コートを脱がないで座っている。

私は、暫くぶりに部屋にやって来た森本さんを見て、

．．．．．この部屋で、森本さんに、初めての夜に、処女を奪われたんだわ、．．．．．もう、あれから、3年も経つわ、．．．．．そうだわ、．．．．．私は、この部屋で、愛された、何度も．．．．．何度も、．．．．．

「さあゝのん、何が有ったのか、俺に言ってくれ、このままじゃ、お互いに、面白くないだろう、」と言って、私を睨みつけるように見つめた。でも、その目は、何かを悟ったような、諦めが滲んでいた。

．．．．．今、言わなくちゃ、．．．．．言うの、言いなさい、．．．．．

「森本さん、・・・」

「なんだい???」

「森本さんと、別れます、そうして下さい、・・・・・・・・・・お願いします、」

・・・・・・・・・・言った、言ってしまった、・・・・・・・・・・

随分、考えた事は、何一つ言えなかったけど、言った。

「どうして??? 何で???」森本さんは、哀しそうな顔をして言った。

「森本さんには、奥様がいらっしゃいます、それに、お子さんも・・・・」

「それは、分かっていたんじゃないのか??」こちらに向ける視線が、弱かった。

「えゝそうです、でも、・・・・・・・・でも、もう、嫌なんです・・・・いつも・・・・いつも、ホテルで抱かれて、私は、部屋に一人で、残されて・・・・・・・・居たくないんです、この部屋に・・・・だから・・・・夜遊びして、・・・・・・・・」

「そ、それは、ノンが、そうしてくれって、言ったから・・・・」
という声が、低く掠れている。

「えゝでも、私には、辛いんです、森本さんと別れて、帰る部屋は冷たくて、一人・・・・部屋で、・・・・・・・・」言いたい事がどんどん出てくる。私の心は、悲しみで、埋もれそうだった。

「・・・・・・・・すまん、・・・・」と、哀しそうな表情をしている。初めての表情だった。

「いえ、良いんです、もう、・・・・」

「済まなかった、・・・・のん」、覗き込むように見ながら、言う。

「もう、良いんです、・・・・・・・・別れます。別れて下さい、・・・・」
毅然と言った。

「やはり、そうなんだ、そうじゃないかと、前から、思ってた。いつ別れて下さいと言われるのか、ひやひやしていたよ、それが、今日か、……そうなんだ、……それが、今日か……」と、諦めきれないと言った表情で言った。

「……ごめんなさい……」森本さんは、ホントに辛そうな表情をしている。

「そうか、そうと決めたんだ、……そうか、……帰る、……」そう言って立ち上がり、部屋をゆっくりと見渡ししながら、「この部屋が、好きだった。この部屋で、ノンを愛したんだ、忘れないよ、……色んな思い出がある、……ううっ……」

……えっ、！！嘘……泣いている、えっ？森本さんが、……泣いてる……

「お、俺は、の、……ノンが、好きだった、だい、大好きだった、……俺の全てをかけて、愛したつもりだった……ううう……すまん……」そう言いながら、目には涙が、溢れ出していた。

……そんな森本さんが、泣くだなんて……

「済まなかった、……俺は、のんが、好きで、のんの事ばかりを考えて、生きて来た。……辛い思いをさせた、悪かったね……今でも、大好きだよ、のん」涙で濡れた顔が、痛々しい。「わ、わ、私も好きです、大好きです、森本さん、……」、そう言ってしまった。

……好き、今でも大好き、死ぬほど好き……泣か

ないでください・・・」

森本さんが泣くなんて、想像もしなかった。でも、森本さんと別れる決心は、変わらない。森本さんは、私の好きだと言った、言葉も、別れを切り出した後の言葉としか、取っていなかった。涙を、拭きながら、

「すまん、泣いたりして、のん、好きな気持ちは変わらないよ、・・・」

「・・・は・・・い・・・」

「もう決めたんだろ、そう決めたなら、諦めるよ、男らしく、付きまったりしないし、いつかまた逢える日を楽しみにしてるよ、」と、力なく言った。

「ごめんなさい、森本さんも、お元気で・・・」

「うん、のん、もな、・・・ねーのん、・・・もう一度言って、やりなせないか??」

「・・・駄目です、・・・」小さく言って、首を横に振った。

「好きな人でも、出来たのかい??・・・あつ、余計な、お世話だった、・・・さあゝ振られた、男は、撤退だゝ、いつまで未練がましく居ては、・・・のん、幸せになれよ、・・・俺は・・・大好きだった、・・・帰るよ、・・・幸せにな・・・さよなら、のん、」と言って、不意に抱きしめて来た。私は、そのまま、抱かれた。きつく抱き締められた。甘い香水の匂いがした。私の腕は、森本さんを抱きしめ無かった、下にだらりと垂らしたままで、抱かれていた。

・・・これが、最後・・・最後よ、のん・・・

私を、抱きしめると、森本さんは、それ以上は、何もなかった。

私を確かめるように、しっかりと、抱きしめると、

「諦めた、」と呟いて、私を離し、そのまま、玄関に向かって歩き出した。私は、後ろ姿を見ながら、追いかけなかった。

森本さんは、そのままドアを開けて、帰って行ってしまった。

私は、部屋の入口に立って、森本さんの残像を追いかけていた。

急に、堪え切れなくなった。私は、部屋のソファアールに座ると、止めていた、涙が、次々溢れ出て止まらない。

．．．．．ごめんなさい、森本さん．．．．．ごめんなさい．．．．．
．．．．．たった今までここに座っていた、森本さん、好きよ、大
好き．．．．．思いだす．．．．．ああ．．．．．今日
から、思い出を、消す日々が始まるわ．．．．．

電話

別れた、あの日から、もう、3月が経っている。あの夜の日から、暫くの間、毎日と言って良いくらいに、森本さんから、電話がきた。夜に、朝に。

「のん、逢いたい、もう一回逢えないか、」と、何度も、何回も言われたけれども、私は、悲痛なその叫び声には、応じなかった。森本さんの声を聞く度に、電話の声が途切れた後には、逢いたくて、抱かれたくて、どうしようもない気持ちになって、毎日、涙が零れた。泣き明かした夜もあった。

森本さんからの電話は、ある日を境に、ピタリと止んだ。それ以来、部屋の電話が鳴る事は無かった。森本さんからの電話が途切れ

てから、毎日、部屋の電話が鳴るたびに、

……森本さんだわ、きつと、……………

そう思いながら、受話器を取る日々が始まった。でも、それは、全て違っていた。

……のん、……これで良かったの？……ホントに……………

今朝も、部屋を出る時に、森本さんが外にいるかもと、思ったりした。そんな、森本さんとの思い出に心は完全に支配されている。

……忘れるの、のん、……忘れなくちゃ……………

と、何度も、何度も、自分に問いかける、言い聞かせる、日々に、時は過ぎて、もう3月が経っている。

森本さんを、忘れようと、努力すれば、するほど、忘れる事は、出来ない自分に苛立ったりもした。だから、森本さんを忘れる為に、毎晩とっていいほど、会社が終わると、夜の町に、出かけた。

でも、自暴自棄になっていたわけではない。ただただ、思い出の部屋に居たくは無かっただけ。何人かの男性と知り合い、何人かの男性に、告白されたり、口説かれたりもしたけど、全てお断りし、応じる事は無かった。全然、そんな気持ちにはなれなかったし、それに、いつも、加藤さんや、お友達と一緒に。

そんな日々の生活のサイクルの中で、夜遅く、部屋に帰ると、一瞬真っ先に寝室を見てしまう自分がいた。ちらっと見る度に、瞬間的に、沢山の残像が甦り、鮮やかに思い出してしまう。そんな思い

出の詰まった、詰まり過ぎた部屋に、今日も帰ってきた。それでも、引越しようとは思わなかった。

……どんなに消えなくても、時の流れが、彼方に押しやってくれるわ……

るるるるるるるるるるるるるるるる、電話が鳴った。

「はい、もしもし、……」

「もしもし、……帰って来たの?? こんな時間まで何してるの?」受話器の声は、母だった。

「はーい、ただいま帰って来ましたよ、少し酔ってます」

「もう、何度も電話したのよ、あまり遊んでばかりじゃ駄目よ、分かってるの??」

「分かってまーす、もう分かってます」で、なに??」

母の用件は分かっていた。あのお見合いから、既に3年くらいは経っている。時の流れは、早すぎる。この3年の間、岩崎さんとは、定期的に会ってきたけど、彼には、

「25歳くらいまで、結婚は考えたく無いんです。それまで待って下さいね。」と、伝えていた。待てなくても良かったから、意外と、軽い気持ちで言った言葉だった。だから、お会いしても、殆ど二人きりで会うと言う事は無かったし、時には二人きりになってドライブに出かけて遊んだ事は、何回かあるけど、ドライブと食事で終わって、それ以上の事は無かった。もちろん何回か、求められたけど、その都度、色々な理由で、上手に断って来た。

岩崎さんは、じっと待っている我慢強い人、きつと、不満が溢れていたかもしれないけど、私には、森本さんがいた。毎日と言って

良いほど、抱かれていた。満月の使者の間しか、加藤さんや岩崎さんと会う事は無かった。殆どグループ交際。

森本さんとの、秘密の交際は、秘密のままで、終わった。秘密を知っているのは、ハワイに一緒に行った、社長さん達。森本さんは、「彼等は、口が堅いから、誰かに言うような人間じゃないよ、」と言っていた。私は、その言葉を信用し続けている。

「そろそろ、真剣に考えてよ、3年も待たせているのよ、岩崎さんには、25歳になったらと言ってたんでしょ、もう、どうするつもりなの？玲子叔母さん、今日も来てたのよ、」と、困ったように言う母の表情が浮かぶ。

「はい、分かっていますよ、今度の土曜日に、お家に帰るわ、」

「あっそうなの、じゃ待ってるからね、ねっ！あまり遅くまで遊ぶの止めなさい、結婚前なのよ、誰が、見ているか、何を言われるかわからないのよー、気をつけなくちゃ、聞いているの？？」

「はいーきいーてまーす、もう寝ますよ、」

電話はやはり母だった。森本さんからの電話は、あの時以来、ぱたりと止んでいた。

．．．．逢いたい、．．．．でも、．．．．

自分の乳房をそうつと、触ってみる。

．．．．あーん．．．．森本さんは、いつも強く、握ったわ．．．．あー駄目、思い出しちゃ、駄目．．．．あー抱かれない．．．．

実家

「ねーノリちゃん、どうなの？？もう、あのお見合いから、3年経ってるのよ、」と言う、叔母さんは呆れた表情している。

「そうですねー早いですねー、でも、岩崎さんとは、お会いしますよ、ちよくちよく、」

「それは、お義姉さんから、聞いているけど、岩崎さん、随分長い間、待ってるのよ、なかなかいないわよ、こんなお家の人って、」と言う、玲子叔母さんの表情が、きつい。

「……それは、そうだろうと、思うわ。随分、我儘を通したものだ。でも……」

岩崎さんのあの、柔らかい表情が浮かぶ。育ちのせいかな、どこかのんびりしている。森本さんとは、ぜんぜん違う。

「……あつゝ又、比較しているわ、私、もう、終わったのよ、……でも、……駄目……別れたのよ……諦めなさい……」

自分で、持て余しぎみになっている思いがある。それは、森本さんの事。近頃、どうしてか、諦めきれない思いが強くなってきている。もう三カ月以上、お会いしていないし、話してもいないのに、森本さんの事が、頭から離れないでいる。その思いが日増しに、少しずつ少しずつ、募っている。いくら打ち消そうとしても、別れを告げた時には、持たなかった、思いが、いつしか心に湧きあがってきてしまう。

「……だめ、今は、岩崎さんとの事を、大事にしなくちゃ……」

・・・

「どうしたの??何かあったの、ノリチャン??」

「い、いえ、何もないですよ」

「どう、もう、十分待たせだし、そろそろ、お話し進めたら、」と、母が言ったので、

「分かりました、うんそうね、あつという間に25歳になっちゃったわ、早いわ、進めてください、私は私で、岩崎さんに、話します。決めました。」

・
・・・決めたわ、・・・ホントに、良いの?・・・

「のりちゃん、ホントに良いのね、ホントね、・・・あ、良かったわ」と、安堵の表情を浮かべた、玲子伯母さんは、

「あ、良かった、良かったわ、ノリちゃん、ホントに良いのね、」

「はい、お願いします。」私は、玲子叔母さんに、頭を下げた。

「ホントにね、こんな良い縁談は無いわよ、待っていてくださったのよ、あ、良かったわ、お義姉さん、これから色々忙しくなるわよ、気が変わらないうちに、岩崎家に、連絡しなくちゃ、」

玲子叔母さんは、そう言いながら、急いで、帰って行ってしまった。

「忙しい人だわ、叔母さん」と、母と二人きりになって、言うど、

「嬉しいのよー岩崎さんとこに何度も足を運んで、岩崎家の気持ち確かめていたのよーノリちゃん、いいのね、ホントに」

「はい、」

・・・決めるは、・・・これで・・・いいのよ、紀子、
・・・これで、・・・

加藤さんの顔が、浮かんだ。加藤さんとは、あの告白された日から、答えを返さないうちに、色々あったけれどもでも、あの時点では、森本さんが、私の心も身体も、独占していた。私も、幸せだった。

・ 加藤さんには、きちんと、言わなくちゃ、.

加藤さんは、東京本社に、栄転が決まって、来月にも、この町を離れることになるらしい。

・ 言わなくちゃ 随分待たせてしまって 報告しなくちゃ 森本さんに
・ 逢いたい

結婚すると決めた途端に、急に、森本さんに、逢いたい気持ちが、湧き上がってきた。

・ お逢いして、報告しなくちゃ なんて言うかしら
・ あゝ駄目

「どうしたの??後悔してるの??」

「ううゝゝん、いつかは結婚しなくちゃと、思ってたんだけど、.
・ とうとう、来たわ」

・ でも、. 逢わない方がいいかも ど
うしよ

ぞくつと、騒めいた。忘れようとしていた、森本さんが染み込ん

だ身体が、目覚めたように、一瞬ざわめいた。

・・・・・・・・逢いたいわ・・・・・・・・

母は、知っていたのかも知れない。好きな男の人がいる、付き合っている人がいると、薄々は、感じていたかもしれない。でも、直接、言われた事は、今まで無い。

「そうよ・・・・・・・・良い時期よ、・・・・・・・・」

「はい、・・・・・・・・」

部屋

部屋の、電話が鳴っていた。薄眼を開けると、もう、朝だった。

・・・・・・・・誰かしら、・・・・森本さん・・・・・・・・

「もしもし、是永です。」

「おはよう、岩崎です。今、電話良いですか？」

・・・・・・・・岩崎さん・・・・・・・・

電話は、岩崎さんからだった。期待は、又、外れた。

「どうしたんです?? こんな朝早くに、」時計の針は、午前の6時を少し過ぎた辺りを指している。

「ごめん、昨日、母から、電話があつたんだ、決めてくれたんだね、・・・・」嬉しそうな声。

「・・・・・・・・はい、・・・・でも・・・・・・・・」

「きよ、今日会えないかなー??」嬉しくて、嬉しくて堪らないというような、声だった。

「はい、私も、お会いして、お話したかったんです。」

「うん、じゃ、仕事が終わったら、俺の車に、来て、ね、俺、車で、待ってるから、ね!」

「はい、・・・・・・」

・・・・・・これが、これから、始まるんだわ・・・・・・森本さんは、
・・・・・・もう、いないの・・・・・・のん、のんが、・・・・・・自分で・・・・・・離れた
んでしょ・・・・・・のんが自分で、決めたんでしょ・・・・・・別れたいと
言ったのは・・・・・・のん、自分でしょ、・・・・・・だから、
忘れなさい・・・・・・ノン・・・・・・今は・・・・・・岩崎さんよ、・・・・・・
忘れるの・・・・・・忘れるの、忘れなきゃ、駄目・・・・・・

でも、なんども打ち消そうとしても、打ち消しても、ふと、思っている自分がいる。そう、岩崎さんに、森本さんが、重なって見える

・・・・・・岩崎さんが、いつの間にか、森本さんに変わっている・・

布団の中で、そうっと、乳房を、直に、握る。近頃、そうする事が、普通になっている。そして、女の子にも、自然に、触れてる。そうする度に、森本さんが、強く、前に出て来るようになってる。触れる度に、思いだす。あの、強く握る、手の感覚、柔らかく揉んでいる、手のひらの感覚、思い出してしまう。別れて、3月が過ぎた辺りから、身体が、疼いて来る、その感覚に戸惑っていた。
今も、触っている。

・・・・・・さあ・・・・・・これは、私の、諦めきれない、夢なの・・・・・・
もう・・・・・・諦めなさい・・・・・・
でも、・・・・・・この、苦しさは、・・・・・・あ・・・・・・

・・・

キス

「少し、ドライブしよう、いいかい？」

「はい、・・・」

仕事が終わって、岩崎さんの車を探したら、パッシングして、教えてくれた。会社の人間に見られても、構わないと、覚悟を決めて、今日一日を過ごした。車のドアを開けて乗り込んだのは、助手席だった。

・・・森本さんと一緒の時には、・・・あゝ思い出すわ、・・・そう、最初は、後部席だった、・・・途中で車を降り、助手席に、・・・もう、後部座席には、座ることも無いわ。・・・

車は、郊外に向かって走り出している。岩崎さんは、町の明るい通りを、進んでいく。

・・・森本さんは、いつもの、不倫道路・・・止めなさい、・・・でも、・・・

「どうかした??」心配そうに、聞いてきた。

「はい、・・・」

「なに??何が心配なの??・結婚のこと??」と、岩崎さんは、直ぐに、結婚という言葉を口にした。

「えゝ随分待たせましたもの、ごめんなさいね・・・」

「いいさ、結果が、良ければ、オーケーさ、」と、前を見て静かな

声で言った。

「お食事しましょう、」

「うん、何が、良いかな〜?？」

「お任せですよ、」

・・・・・・これから、そうなるんだわ・・・・・・

お店は、国道沿いに在る、小さなレストランだった。まだ一度も入った事の無いお店だった。森本さんとは、殆ど、この町で食事をした事が無い。近いけれど、この町を出て、隣町まで、必ず、行つて人目につかないようなお店で、食事をして来た。そのお忍び行為には、全然違和感が無かったけど、こうして、結婚すると、決めて、岩崎さんと二人きりで、お店に入る事には、少しの戸惑いがあった。岩崎さんとは、この三年、お見合いをしてから、何度も、一緒にお食事はしたけど、それは、森本さんがいつもいたから、安心して、お付き合いしていた。いつも、森本さんの事を考えていた。岩崎さんには、悪い事をしていいると思ひながら、そう、今も、森本さんとの思い出が、蘇る。

「是永さん、紀子さん、ノリちゃんと呼んで良いかな〜、」

「はい、良いですよ、じゃ、私も・・・・雄さん、ゆうさんって呼んで良いですか?？」

不思議な事に、岩崎さんは、私を、苗字で呼んできた、これまで。

「お〜そう呼んでくれるの、嬉しいな〜、」

「はい、」

・・・・・・これから、そうする、・・・・段々・・慣れていく・・・・・・でも、・・・・

「どうしたの??今日は、少し、沈んでるようだけど、」

「え〜、そうなんです、緊張してますよ、いよいよ、結婚するんですね〜」と、窓の外の夜の町の走り去る光を、ぼんやり見ながら言う、

「ありがとう、その言葉を、ずうと、待っていたんだ、諦めないでさ、」と、嬉しそうに直ぐに言った。

「ごめんなさい、・・・」

「・・・なんだか、心が、晴れないわ・・・」

運転をしているのが、森本さんのような気がして、仕方が無かった。これまでは、岩崎さんと何度も、一緒にドライブして来たけど、こんな気持ちになった事は、一度も無かった。

「・・・どうしてかしら?・・・」

お別れしてから、もう、3月以上過ぎている。なのに、近頃、頻繁に、森本さんを、感じる、思いだす、身体が、疼く。

「さあ〜食べよう、お腹が空いたよ、」

「え〜雄さん、・・・おビール、飲みたいでしょ、」

「勇さんて呼んでくれたね、ありがと、・・・嬉しいな〜」

「はい、どうします?おビール??」

「うん、でも、今日は、ノリちゃんがいるから、飲まないよ、」にこにこしながら言う、岩崎さん。

「じゃあ、私が、飲みましょうか??」

「えっ?飲む?」

「嘘で〜す、飲みません、」

「はははは〜なんだ〜」

運ばれてきた料理は、ハンバーグステーキ。岩崎さんと同じにし

た。

「わあ、とっても、美味しいです、」

「だろ、ここのハンバーグは、お勧めだよ、美味しいだろ、良かった」

「ありがとうございます、雄くさん、美味しいですよ」と、雄さんと、甘えるように言ってみた。

「うっ、うん、うれしいよ、」

「……ここには、森本さんとは、来た事が無かった……あつ、駄目よ、……今は、岩崎さんと一緒……」

食事は、随分と楽しかったし、沢山、色々、話した。やはり、結婚を決めた、心の覚悟が、徐々に、自分を結婚に、向かわせているからかも知れない。そう思いながら、岩崎さんと、話しながらも、やはり、必ず、森本さんが心の、隅にいた。消そうとしても、消えないし、消そうとも思わないでいる。消そうとすればするほど、浮かんでくる。

「……どうしよ、……加藤さんに結婚の報告をしないと……森本さんにも……」

「ね、雄さん、加藤さんに、結婚するって、……わ、」

「いや、言わない方が良いよ、彼、東京本社に栄転だから、知らないで、送った方が良いよ、」

「……岩崎さんは、加藤さんの告白を知らないんだわ、……」

「そうですね……」

「彼は、元々、東京に戻る人間だったからね、向こうで幸せにな

るさ、」と言う言葉に、私を会わせたくない気持ちがあるように感じられた。

食事が終わって、少しドライブしてやって来たのは、小高い丘にある公園だった。

．．．．．思い出すわ．．．あの夜．．．そう．．．ここにも来た．．．．．

あの夜に、森本さんとやってきた駐車場に車を停めて、車から降りて、階段を上ると、夜景が飛び込んできた。夜景が見える場所にやって来ると、直ぐに、

「是永 紀子さん、僕、岩崎 雄一と、結婚してください。お願いします。」と、突然、大きな声で、はっきりと言った。

「．．．．．」一瞬とまどった。

．．．．．結婚して下さいと、言ったわ．．．．．えっ．．．どうしよう．．．．．

予期していなかった、結婚の申し込みだった。

．．．．．えっえっ？？．．．．．私．．．．．

「結婚して下さい．．．」再び、強い視線を向けて、私の目を見ながら言った。

．．．．．申し込まれたわ、．．．．．はっきりと．．．男らしく．．．申し込まれちゃった．．．．．応えなくちゃ．．．．．

「はい、お受けします．．．」岩崎さんの勢いに乗せられるよう

に、そう応えてしまっていた。

「良いんだね、幸せにする、誓うよ、」満足そうに、自信に溢れている。

・・・・・・受けてしまったわ・・・・・・受けてしまった・・・・・・

「はい、・・・・・・」そう、応えていた。

直接的に、言われた。はつきりと、結婚を申し込まれたのは、初めてだった。

自然に、涙が、滲んでくる。

・・・・・・はい、お受けします・・・・・・結婚するわ・・・・・・これで良いのよ・・・・・・のん、・・・・・・

近づいて来ると直ぐに、力強く抱きしめられて、いた。

それは、これまでの長いお付き合いの中でもなかった、初めての行為だった。岩崎さんの胸に私の、乳房が、重なる。私は、抱きしめれる。涙が、零れる。涙が止まらない。

・・・・・・結婚するの・・・・・・のん・・・・・・忘れるの・・・・・・

脣が、重なった。

初めてのキスだった。

でも、それは、私の、心に、新たなる、火をつけてしまったキス。身体が、打ち震え、心の奥底に、火が灯り、小さく騒めいた。

自然と唇が開く。岩崎さんの舌が、滑り込んでくる。私の舌と、岩崎さんの舌が絡む。岩崎さんは、少し息が荒くなってきた。唇を離すと、再び、重なる。

騒めきが、増し始めた。

天恋

・・・岩崎さんとは、キスだけで・・・終わっただけ・・・
・終わっただけ、・・・岩崎さんと、・・・初めて唇を合わせた瞬間・・・、身体の奥底が、急激に騒めいたわ・・・その騒めきは、どんどん増していったわ・・・どうしょ、・・・忘れよう、忘れなくちゃと思ってた、忘れられない、・・・あの感覚が、蘇ってしまった・・・帰りの車の中で、運転しているのが岩崎さんでは無く、森本さんのような気がして、何度も、何度も、運転している、岩崎さんの横顔を見た・・・あゝ・・・逢いたい・・・逢いたい・・・お逢いしたい・・・

そう、思った。そう、思い始めると、その思い、そう、逢いたいという感情が、思いが、急速に心に湧きあがって、心を締めつけ始めた。部屋の電気もつけずに、ソファアに座ってる。

・・・逢いたいわ・・・森本さんに・・・逢いたい・・・この部屋で、何度も、何度も愛されたわ・・・

思い出す。思い出すと、堰が切れたように、閉じていた思い出が、溢れ出てきた。

・・・・・・・・どうしょ、・・・・・・・・もう駄目・・・・・・・・逢いたい・・・・・・・・

知らないうちに、電話の前に立っていた。受話器を、持つ。受話器を置く。受話器を持つ、又、元に戻す。

・・・・・・・・駄目、・・・・・・・・だめ・・・・・・・・だめよ・・・・・・・・我慢なさい・・・・・・・・だめ、駄目、駄目・・・・・・・・

加藤さん

「おはよう、是永さん、目が真っ赤だよ、何か有ったの??」加藤さんが、心配そうに聞いて来る。

「いえ、何も無いですよ、」

「そうお??近頃、少し、沈んでいるような気がしていたんだけどね??」

「大丈夫ですよ、ありがとうございます。・・・」

「ふっふん、??」と、加藤さんが、怪訝な表情で言うので、

「昨夜は、ちよつと、夜更かしして、本を読んでいたものですから、目が疲れてしまつて、」

「本をねっくねっく是永さん、今日の夕方、時間取れないかなっ」加藤さんが言うのを聞いて、

・・・・・・・・あっくやっぱり、来たわ・・・・・・・・

そう思った。

「え〜私もお話があったんですよ、じゃ、アップルでどうですか？」と、微笑みながら言う。

「オーケー、じゃ、夕方、待ってるよ、行ってきます〜」

加藤さんとは、随分、たくさんの思い出が有る。これまで、随分お世話になったし、交際を申し込まれてもいたけれど、でも、いつの間にか、その加藤さんの申し込みは、立ち消えて、今日の日まで来てしまっていた。あの告白から、随分、時が流れ、月日が経ち過ぎてしまっている。それでも、何事も無かったように、私と向き合ってくれた加藤さん。

・・・私には、森本さんが、いたの・・・ずっと、抱かれていたわ、・・・ごめんなさい・・・加藤さん・・・

結局、森本さんには、今日まで、電話は、しなかった、そう、出来なかった。心の葛藤は、今日まで、連続して続いている。自分でも、困っている。あの夜の、岩崎さんとの初めてのキスで、無理やり閉じ込めていた感情が、堰を切ったように、コップから水が溢れ出るように、噴き出してしまった。あのキスで、止めどない思い出に、心が騒めいてしまった。あの夜から、急に、森本さんに逢いたくて、逢いたくて、どうしようもなくなって、毎日、毎晩、受話器を取っては置き、置いては取り上げる、そんな眠れぬ日々が、もう4日も続いている。その間、岩崎さんとは、電話でお茶を濁していた。こんな気持ちで、会いたくなかったし、会えば、又、キスを求められるし、きっと、それ以上に関係は、深まる事になるに違いない。結婚するんだから、そうなって、当然なのよ、自分に言い聞かせても、言い聞かせても、言い聞かせる傍から、打ち消してしま

う自分がいる。

目を閉じれば、森本さんとの、思い出の一コマが、次から次へとビデオのように連続して、浮かんできく。そして、布団の中で、自分の乳房を、そっと、触ると、森本さんの掌の感触が、直ぐに、蘇る。

仕事は、何事も無く、終わった。仕事は、変わりの無い、毎日の繰り返しだから、時間は単調に、過ぎていく。あの天敵だった、あの女は、もうこの会社にはいない。個人的な事情で辞めたと言われているけど、盛岡の支社長が、転勤した時点で、彼女の味方は、誰もいなくなってしまうていた。結局一身上の都合で、辞めて、本当に、気持が落ち着いたけれど、その思いも、いつしか、どこかに消えていた。それほど、3年の時の流れは、人も職場も、世の中も、変化させてくれる。でも、私は、その3年間、夢中で、森本さんだけを、見て、森本さん中心の世界に安住していた。その間、とても幸せだった。幸せを意識する度、深まる度に、その思いとは逆の、いつかはやって来る別れを意識し始め、その、思いが、いつしか大きくなっていく自分に苛立っていた。それでも、いつかはやって来る別れを、心のどこかで覚悟して、いたつもりだった。いつ頃からは、意識していなかったけど、もう随分前から、森本さんを、求め始めていた。そう、奥様から、奪ってしまいたい気持ちだが、少しずつ、大きくなり始めていた。それが、突然森本さんに、別れを言いだした、本当の理由だった。その思いが、きっかけだと思う。

「やゝ来たね、待ってました」と、私が、お店の中に入って席近くまで近づくと、立ちあがって、加藤さんが言った。

「ごめんなさい、少し、仕事が残っちゃって、ごめんなさい、」

「良いよ、気にしないの、さあー座って、コーヒーで、良いかな」

「いえ、今日は、お食事に行きましょ、どこか、レストランかなんかで、どうです??」

「えっ、俺で良いの??」

「えっ、もちろんですよー、今日は、加藤さんと、お食事します、決めて来たんですよ」

「うっ、嬉しいねっ、よし、じゃ、ここを出て、直ぐ、出っ発」

加藤さんは、嬉しそうに、嬉々として、歩き出した。

「……ごめんなさい、加藤さん……」

「車は、会社に置いてきたから、タクシーで、行くよ、」嬉しそうな加藤さん。

「はい、……」

タクシーは、直ぐに拾えた。あの待ち合わせに良くつかわれるホテルの近くに在る、レストラン「La porte」という名前のお店に入った。外見は、レストラン的なイメージでは、無かったけれど、お店の中に入ると、天井も壁も椅子もテーブルも、白、白の世界だった。白の世界の中の、色とりどりの、可愛い花々が、邪魔にならないように、あちこちに置かれて、雰囲気を作っている、お店の造りは小さくても、綺麗な清潔感を感じた。

「うわぁっ、素敵なお店ですねっ素敵だわっ」

「そう言ってくれると、嬉しいよ、……そう、開店したのは、最近だよ、たまっに来てたんだ、」

「あの、綺麗な、女性とですね、」と、直ぐに、その言葉が、口から出てしまった。

「ち、違う、よー、さぁ座ってっ座って、……コースで良いよね、」と言いながら、席に座った加藤さんだった。

「ふふふふ、ばればれですよ、加藤さん……あの看護婦さん、……」

「こ、れ、な、が、さん、……」と、睨まれた。

「うふふふふ……さあ……おビール頼みますね、」と、私は、にこにこしながら、言う。

「参ったな……ず……と、是永さんには、負けてるよね……俺って、」

「えっ、何の事ですか……?」

「まあ……気にしないでね、」

「はい、加藤さん、」と言って、ビールを、グラスに注ぐ。

「ありがとう、」

「では、加藤さんの東京本社栄転、おめでとうございます。かんぱ……い」と、私は、グラスを加藤さんの前に差し出すと、

「うん、ありがとう、ホントは、行きたくなかったんだけど、」と言いながら、ぐいと、ビールを飲んだ、加藤さんの表情は、辛そうな、表情だった。

「なに言ってるんですか?これからの、人生の問題ですよ、おめでとうございます。行くのは、明後日でしたよね、もう、会えないんですね……寂しくなりますね、加藤さん、色々、ホントに、お世話になりました、ありがとうございます……」

「……うん……」

「……本当に、お世話になったわ、加藤さんには。ありがとうございます、うございます、加藤さん……」

胸が熱くなった。

頼んだ、コースのお料理を、食べながら、会話は、弾んだ。それ

「あ、ありがとうございます。加．．．くっ、うつ、うう．．．」

急に、涙が、溢れ出た。急に悲しくなった。表現の出来ない何か、心の中に溢れ出た。

「．．．．．」

「うう、うつ．．．．．」

「あつ、ごめん、ごめん、泣かないで、泣かないで、ね、」涙で、加藤さんが見えない。

「ご、ごめんなさい、．．．．わ、私、．．．．ごめんな．．．
．．．さい．．．」

「ずっと、好きだった、今でも好きだよ、．．．でも、分かって
いたんだ、無理な事は．．．．それでも、それでも淡い期待は、ず
うと、有ったんだ、．．．．いつかは．．．．この三年間ずっと、
好きだった．．．．さ、最後に、．．．．どうしても、言いたか
ったんだ。分かっていたんだけど．．．」

「．．．．．うっううう．．．．．」

止めどない涙が、溢れ、零れ落ちていく、次々と。

「．．．．．加藤さん、ごめんなさい．．．．．ごめんなさい．．
．．．」

「な、泣かないで、俺まで、か、哀しくて、な、涙が．．．．
うっ．．．．」

「．．．．．ごめんなさい．．．．．」

繋がる

暗い部屋で、泣いて、泣いていた。加藤さんが泣くなんて、思いもしなかった。あのお店の中で人目も気にせず、私と加藤さんは、泣いた。どうしても、涙を止める事は出来なかった。周りの事は、全然気にならなかった。加藤さんと別れて、タクシーに乗って真っ直ぐに帰った部屋で、ソファーに座ったままで泣いていた。何か、心に大きな穴があいたようで、大事な何かを失ったようで、電気もつけないで、加藤さんに詫びていた。

・・・・・・・・ごめんなさい、加藤さん・・・・・・・・

何度、つぶやいたか分からない。暗い部屋で、淋しさが募っていた。

・・・・・・・・森本さんに、逢いたい・・・・・・・・逢いたい・・・・・・・・
・・・・・どうしているかしら・・・・・・・・別な女の人出来たかしら・・・・・・き
つと、いるわ女の人・・・・・・・・だって、13人もいるって、・・・・・・・・

部屋の電話が鳴った。

「はい、是永です。」

「今晚は、」

「あっ、岩崎さん・・・・・・・・あっ勇さん、今晚は」電話、は、雄
さん、だった・・・・・・・・。

「何回か電話したけど、留守だったね」

「はい、さっき帰って来ました、加藤さんと、お別れ会してたんです。」

「な〜んだ、そうなんだ、僕も参加したかったな〜」

「残念でした・・・・・・・・」

「うん??? なんかあったの??? 声が、いつもと、違うような???」

「はい、加藤さんと、もう会えなくなるんだと、思ったら、なんだか、悲しくなって・・・ごめんなさい、」

「・・・どうして謝るのか、分からないけど、なんだか、今日は謝ってばかりだわ。・・・」

「うん、そうだな～彼とは、色々あったからなく、でも、出世したんだ、彼、新しい人生が待ってるんだからさ、祝ってやるしか出来ないよ、俺達、ね、!!」

「はい、・・・そうですね～」

「明日、会えるかな～」

「明日は、ちょっと、・・・」会いたくはなかった。

「あつ、無理しなくても良いから、じゃ、もう遅いから、お休みー」と言っ、電話が切れた。

「・・・ごめんなさい、雄さん・・・今・逢いたいの、森本さん・・・なの・・・」

雄さんには、今は、会いたくなかった。あのキス以来、どうしようもなく、どうしようもなく、森本さんに逢いたくて、逢いたくて、気持ちを抑える事は出来なくなってしまう。無理に、忘れようとするほど、その思いが募ってしまう。

「・・・お逢いたい・・・逢って、あの胸に・・・抱か
れたい・・・どうしよう・・・」

ルルルルルルルー・・・電話が鳴った。

「・・・誰かしら??・・・」

「もしもし、是永です。」

「加藤です・・・無事に、帰ったね、・・・」受話器の向こうに加藤さんがいた。

「はい、・・・加藤さん、ごめんなさいね・・・私、泣いたりして、・・・」

そう受話器に向かって言いながら、又、悲しみが心に滲み出てきた。

「いや、謝るのは、俺の方だよ、・・・色々、・・・楽しかったね、ありがとう、・・・元気でね、これが最後の電話だから、・・・」と、聞こえる力の無い声が、心に沁みる。

「いえ、こちらこそ、たくさんお世話になって、・・・何もお返し出来なくて、・・・ごめんなさい・・・加藤さんも、お元気で・・・ありがとうございます・・・」涙が、又、出てきた。

「うん、この町で、是永さんと過ごせた事は、忘れないよ、・・・うん、・・・楽しかった、・・・ホントに、楽しかったよ、ありがとうね・・・是永さんも、元気でね・・・」

「は、・・・はい、・・・加藤さんも・・・お元気で・・・」

「うん、・・・頑張るよ・・・じゃ、明日、早いから、切るね、・・・是永さん・・・」

「はい？」

「これが、・・・これが、・・・最後だから、最後に、・・・言うよ、・・・今でも・・・好きだよ。好きだ。・・・うつ、うつ・・・げ、元気でね・・・」

電話は、途切れた。

最後の言葉を聞いて、大粒の涙が、溢れ出、頬を伝い、床に、ぽとぽと、零れ落ちていた。

・・・加藤さん、・・・加藤さん・・・ごめ

んなさい・
・
・
・
・
・
・

受話器を置いた手は、再び、受話器を取り上げていた。そして、何度も、何回も、森本さんの携帯電話番号を押しては、直ぐに受話器を置き、又、持ち上げ、番号を押しては置く事を繰り返して来た、日々。そして、今、森本さんの携帯番号を、確かに、押していた。受話器は持ち上げたままで、今度は、受話器を、置かなかった。

[illegible]

か
け
た、
か
け
た
わ

ドクン、ドキドキ、・・・・・・心臓の鼓動が、痛い。胸が、苦しい。胸が、熱い。

[illegible]

・ ・ ・ ・ ・ 出ないわ、 ・ ・ ・ ・ ・ 出ない ・ ・ ・

暫く鳴らしても、ただ、電話の鳴る音しか聞こえてこない。受話器を置く。ソファアに座る。

・ ・ ・ ・ ・ 出てくれない ・ ・ ・ ・ ・ 奥様と、一緒かも ・ ・ ・ ・ ・
 それとも、 ・ ・ ・ ・ ・ もう、 ・ ・ ・ ・ ・ 眠ってしまったかも ・ ・ ・ ・ ・
 もう一回 ・ ・ ・ ・ ・ かけて、みよう ・ ・ ・ ・ ・ でも、 ・ ・ ・ ・ ・

時間が少し経った。

……もう一度、もう一回、もう一回だけ……これが、

最後
・
・
・
・
よ、
・
・
・
・
・

[illegible]

お願い……あ……出ないわ、……出て下さい……

昨日は、もう止めようと、何度も何度も思っては、いつしか、電話機を持ち、森本さんの携帯電話の番号を押して、数えていなかったけど、十回以上、受話器を置いては持ち、置く事を繰り返して、森本さんの携帯電話を鳴らし続けた。

でも、出てくれなかった。諦めよう。
きつと、もう、嫌われてしまったんだわ。

「おはよう、是永さん、今日から、加藤さん、来ないんですね～～、淋しくなりますね～～」

新しく入った、新人の小山 啓子さんが私に、朝の挨拶をしたついでに、言ってきた。

「おはようございます、そうですね、もう、来ないんですね」

私は、昨夜の出来事が、過っていた。

「泣いている女の人、沢山いるみたいですよ、隣の課の女の人達が、噂話をしてました。」屈託が無い。

「えゝゝそうなんですか？　もてますもんね、加藤さん……」

「是永さんも淋しくなりますね」と言つて、自分の席について、仕事を始めた。私も、今では、中堅の事務員になっている。

午後になるまで、何事も無く、仕事は、こなしただけ、心は、沈んでいた。どこまでも、沈んでいくようで、苦しかった。

ような声が聞こえた。

「はい、・・・」

「あゝゝノン、・・・げ、元気だったかい？」と、森本さんの声は、変に高い。

「・・・・・・」

「どうした??のん??」、「その声が、懐かしかった。

・・・森本さん・・・森本さん・・・

「・・・・・・」

「なに??どうしたの??」

「うっうっうゝゝうっ、くっうゝゝうゝ」

突然、感極まったのか、ぽとりと一滴零れ落ちた。頬を伝う涙が、次々溢れ落ちる。

「ど、・・・どうした??」

「うっううゝゝ・・・うっ、うっ」涙は、止まらない。

「わ、分かった、泣くな・・・分かったから、ノン、泣くな・・・

・」と言う森本さんの声が聞こえた。

「うっ、ご、ごめん・ん・なさい・・・わ、私・・・うっ、な、泣く、なくなんて・・・」

「うん、うん、分かった、分かったから、泣くな・・・今日、逢えるか??」と、聞いてくれた。

「はい、・・・あ・逢ってください?・・・」嬉しさが、体中に広がって行く。

「逢いたかったよ、・・・うん、じゃ、いつもの時間に、部屋まで、迎えに行くから、良いね、」と言う、受話器から聞こえる声は、力強く響く。

「はい、・・・お待ちしてます・・・」

・・・逢えるわ・・・森本さんに、逢える・・・電話

のん．．．もう、．．．駄目．．．逢いたい．．．

再会

私は、シャワーを浴びて、森本さんの電話を、待っている。午後
の時間は、あっという間に過ぎていった。

[illegible]

「もしもし、
・
・
・」

「ノンか、？」

「はい、
・
・」

「下にお出で、今着くから、」

「はい、」

・ ・ ・ ・ ・ もう、迷わない ・ ・ ・ ・ ・ 直ぐに逢えるわ ・ ・ ・ ・ ・

車は、直ぐにやって来て、私は、いつものように、後部座席に滑り込むように、座った。

「じゃ、少し、ドライブするよ、」

「はい、
・
・
・
・」

森本さんの横顔が見えた。別れてから、三か月以上見ていなかった、その横顔が、身体が、何故か、小さく見えた。

ええ~~~~え~? ? 痩せたわ..... どうして.....

車は、いつものように、小さな小路や、信号の無い道路を走って行く。森本さんが、名付けた「不倫ロード」。又、この道を走っている。暫く、走って、暗い道路の少し広い場所に車は、滑り込むように、静かに停まった。

「前に、お出で、」と、静かに言った。

「はい、」

夜の不倫ロードには、他の車は、あまり通らない。私が、助手席に乗り込むと、森本さん何も言わずに、私の頬を両手で、包みこむようにして、唇を、重ねた。

．．．．．あゝ嬉しいいゝゝこれだわ．．．．．待っていた．．．．．わあゝ．．．．．

舌が、直ぐに、滑り込んできた、舌が絡む。

．．．．．あゝゝ嬉しいゝゝ．．．．．

「あつ、あんううゝゝ」左の乳房を、ぎゅうと、掴むように、下から上に揉みあげられた。唇が離れると、森本さんが、言った。

「逢いたかった、ノン、」、と。

「はい、私も、逢いたかったです、．．．」と、応えた。

「嬉しいか、ノン、？」

「はい、．．．」涙が、溢れて来た。

「な、泣くな、」

「はい、．．．」

車は、夜の闇の中に、走り出した。

．．．．．もう、迷わないわ．．．．．だって、物凄く居心地が、良いんですもの．．．．．

「森本さん、お痩せになりました？」 気になっていた。

「うん、13Kgくらい、痩せたよ、・・・」

「えっ、そ、そんなに、・・・どうして?? どこか、悪いところあるんですか??」と聞くと、

「はははははゝゝいたって、健康だけど、・・・辛かったんだ・・・あの別れが・・・」 森本さんの言葉が胸に突き刺さった。

「っ、辛かった・・・ですか・・・」

「うん、ノンからの別れの宣言、辛くてさ、何をしても張りが無くなつてさ、食欲も無いしさ、立ち直るのに、3か月もかかったんだ、」と、じっと前を見て言った言葉は、胸を締めつけた。

「ごめんなさい・・・私・・・」

「気にしない、もう大丈夫さ、こうして再び、逢えたからね」
「・・・」

「気にしないの、こうして、再び、ノンと、逢えたことだし、嬉しいか、」

「はい、」

車は、暗い夜の道を、いつも通りに、闇の中にライトを射し込みながら、進んでいく。いつもの慣れた郊外の道路。車は、暫く走って、道路から外れて、停まって、ライトを消すと闇に包まれた。

森本さんが、

「ノン、逢いたかった、」と、言いながら、直ぐに、唇を、重ねてきた。私は、黙って、受け入れる。

・・・あゝあの、騒めきが、・・・消えたわ・・・今は、身体が、喜んでいる・・・あゝ・・・森本さん・・・

乳房が、掴まれた。そして、ブラウスのボタンが器用に外され、森本さんの手が、肌に直に触れながら、ブラジャーの中に侵入してき

た。そのまま、乳房を、ぎゅうっと、握られる。

「あううくうくあうん」と、声が、漏れる。

・ ・ ・ ・ ・ 嬉しい ・ ・ ・ ・ ・ あっあうん ・ ・ ・ ・ ・ 強く握らないで ・ ・ ・ ・ ・

唇が、離れても、手は、乳房を、揉んでいる。

「ノン、抱くよ、良いかい?？」

「だめ、駄目です、 ・ ・ ・ ・ ・ 私には、夫が ・ ・ ・ ・ ・ 」と、言っ
てしまった。

「ほううううノンお嬢さんは、結婚してたんですか?？」と言いな
がらも、手は、乳房を柔やわと、揉んでいる。まるで、離す意思が
無いように。

「はい、したんです、 ・ ・ ・ ・ ・ 嘘 ・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ どうしよ ・ ・ ・ ・ ・ 岩崎さんの事 ・ ・ ・ ・ ・

「抱くよ、良いね、」

「はい ・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ 今は、考えるのは、 ・ ・ ・ ・ ・ 止めよう ・ ・ ・ ・ ・

辺り一面闇の中で樹蔭の上に見る暗い夜の空には、天の川が見え
る。無数の星星がキラキラと輝き、瞬いている。車は、夜の闇の中
に、動き出す。ライトが、行き先を、告げている。いつもの通い慣
れた、白いモーター。

「どうして? そんなにお瘦せになったんです?？」と、横顔が小さ
く見える、森本さんを見ながら聞くと、

「うん、．．．．別れて、大事な何かを失った、ような、．．気がして．．．それほど、ノンが、俺の心を支配していた事に、気がついたんだけど、でも、気がつくのが、．．．遅すぎた．．．．いや、気がついていただけ．．．．辛かった．．．ほんと．．．」

「．．．．ごめんなさい．．．．わ、．私も、．．．．苦しかったです．．．．．」

「ほんとかい?？」

「はい、．．．．．」

「．．．．苦しかったですよ．．．．ホントですよ．．．．でも、森本さんも、苦しかったなんて．．．

「いや、こんなに、虚しい日々を送った事は、無かったよ、．．．何をしてても、力が入らないんだ、食欲も無いし、酒ばかり飲んだよ、」と、前を見ながら、言う、森本さんを、私は、その忘れようとした森本さんを、じっと見つめている。

「．．．．．」

「嬉しいよ、逢えて、」

「はい、．．．」

「嬉しいか?ノン?」

「はい、嬉しいです、．．．」

車は、どんどん、暗闇に向かって進んで行く。暫くすると、見慣れた、白い建物が、暗闇の中に、ぼんやり浮かんできた。それは、いつもの森本さんと私の、秘密の愛宿だった。

「．．．．これで、良いのよ、ノン、．．．．抱かれるわ．．．．今日．．．．」

何度も、通い慣れた、愛宿の慣れた薄暗い部屋に入ると、直ぐに、抱き締められる。強い力で、抱き締められる。私も、森本さんの背中に腕を、回して、抱きしめた、思い切り。

「ノン、逢いたかった、逢いたかったー」私の身体を思い切り抱きしめる、森本さんの声は、声が掠れている。

「私も、・・・私も、逢いたかった・・・です、・・・」私の声も、低く掠れている。

「ホントにかい??」

「はい、逢いたくて、逢いたくて、何度も、何度も、電話しました・・・でも、・・・出てくれなかった・・・うつ・・・うつ・・・」

「携帯電話、会社に置いていたんだ。ごめん、」

昨日までの、いても立ってもいられない、いつまでも消えない焦燥感が、思いだされる。私の胸を苦しめた思いは、今は、全く跡形もなく、消えてしまっている。森本さんのいつもと違う感覚の胸に、顔を埋めて、言った言葉は、涙を誘った。涙が、自然に零れる。

「うつ、うつうつ・・・」

「泣くな、・・・ノン・・・」と言った、森本さんは、私を強く抱きしめる。

「はい、・・・」嬉しかった。嬉しくて、又、涙が出る。

・・・あ～～・・・好きですよ～～、大好き・・・森本さん・・・

「うつ、・・・」

唇が重なった。涙でぬれた頬を、森本さんの両の掌で抑えられ、

唇が重なる。直ぐに、森本さんの舌が侵入してきて、私の舌をを絡め取る。躊躇が無い。忙しく口の中で、互いの舌が、動き、吸い、絡み合う。私も、積極的に、応じていた。

・・・・・・・・あゝこれよ、胸が、・・・・・・・・熱くなって・・・・・・・・来たわ・・・・・・・・

安心感が、心を満たしていく。そう思った矢先に、左の乳房が、グイっと、服の上から、掴まれた。

「あっ・あゝん、い、痛ゝゝい、」唇が離れ、森本さんと視線が合う。

「脱がせるよ、・・・・・・・・」視線が合うと、直ぐに、そう、言われた。

「はい、・・」と、素直に応じると、私のブラウスのボタンを外し始めた。

「自分で、脱ぎます・・・・・・・・」言ってみた。すると、

「良いから、立ったままで、素っ裸に剥いてやるんだ、・・・・・・・・今まで、苛められたから、今度は、苛めてやるんだ・・・・・・・・ふふふふ・・」と、私を見ながら、どこかいたずらっ子の表情で、言った。森本さんの指は、器用にボタンを外していく。ブラウスのボタンは、あっという間に、外されて、遠慮なく、左右に開かれ、直ぐに、ブラジャーが、たくし上げられた。両の乳房が、重たげにプルンと下に零れ、剥き出しになる。その剥き出しの乳房を、森本さんの両手が、下からすくうように上に、感触を確かめるように、ぐいっと、掴み、そして、強く、柔らかく交互に、揉み上げる。

「あゝゝん、いやゝゝもう・・・・・・・・あゝゝん、や、優しく・・・・・・・・」瞼を閉じて、感覚を追う。

「苛めてやる・・・・・・・・」と、再び言ったので、

「いやっ、・・嫌です・・」と、言ってみた。

乳房は、ぐいぐいと、力強く馴れた手つきで揉まれている。

「いんや、お嬢さん・ふふふふ・今日は、苛めてやるの・のん、覚悟おし・・・」と、私の目を見つめながら、にこにこしながら、言うから、

「い、嫌です、・・・苛められるは、絶対嫌です・・・もう、帰ろうかな・・・」と、言ってみる。

「もう、お、そ、い・・・遅・・・い・・・、お嬢・・・さ・・・ん・・・ははははは・・・」

「うわあ・・・変態ですよ・・ちっとも変って無いんですね・・・スケベで、いやらしい・・・やっぱり、止めようかな・・・」

「そう、俺は、今日は、変態にでも何にでもなってやるんだ・・・覚悟しな・・・さ・・・い・・・」と、変な口調で言った森本さんの表情は、とても、嬉しそうだった。

「うわあ・・・い、いやらしいですよ・・・」段々いつもの森本さんになって来た。

「うはははは・・・はっはっは・・・、ノン、逢いたかったか・・・」と、乳房から手を離さない。

「いいえ、嘘です、今までののは、全部嘘です・・・」そう言ってみただけれど、

「好きか、??のん、」と、再び、言われると、

「いいえ、嫌いです・・・」と言いたくなって、言ってみた。

「がはははは・・・好きか、ノン?」

「はい・・・」

「ホントにかい?」

「好きですよ」乳房は、揉まれ続けている。そのまま、森本さんの身体が沈むと、ミニスカートが、遠慮なく剥ぎ取られる。

「あっ、いや・・・森本さん、自分で、脱ぎます、・・・」と、森本さんに言ってみるけど、拒否される事は、分かっていた。

「良いよ、俺が、脱がせて上げるよ、脱がせたいの、嬉しいか?」
「知りません、」

お尻のパンティーに手をかけると一気に下に下げられてしまった。下半身が、すっかり、森本さんの前に曝け出される。そして、そのまま、私の柔らかい処に、顔を、埋めた。お尻が後ろに退く。

「だめ〜森本さん、シャワー・・・」

「良いよ、・・・ノンを・・・味わってるんだ・・・」と言う声は嬉しそうだ。埋めた顔を、左右に動かす。

「あ〜、く、くすぐりたい〜です〜」

・・・あ〜こっやって、・・・愛されてきたんだわ・・・あ〜熱い・・・

舌が、侵入してきた。

「あつ、駄目、森本さん、・・・だめ〜、ベッドで・・・」

そう言っただけで、私の両脚は、いつの間にか、愛撫を受けやすくするために、左右に開いている。お尻を、抑えられて、私の柔らかい処に顔を埋めて、下が、上下に動きだした。

「く〜あ〜も、森本さん、・・・」

「何だい、ノン、」

「ベッドに、」

「オーケー、良いよ、」と言って立ちあがった森本さんは、本当に嬉しそうな表情をしている。

「ノン、」

「はい、・・・？」私は、左腕で、乳房を隠し、右手で、前を隠しながら、返事を返すと、

「上も、脱いで、」と、言われ、私は、素直に応じる。ブラウスを脱ぐのを見ながら、森本さんは、後ろに、少し下がって、言った。

「見せてくれ、くると回って、両腕を頭に載せて、見せてくれ、前を隠さないで、全てを見せてくれ」

「えっ、・・・？」

「見たいんだ、ノンを、」森本さんの視線が、熱く感じられる。

「いや、です、・・・」

「ノンっ！」

「はい、・・・」そう言うと、私は、両腕を頭に載せていた。嫌では無かった。私は、森本さんを挑発するように、身体をくねらせ、瞼を、半開きにしながら、森本さんに熱い視線を向ける。

「綺麗だ、・・・お尻も、見せて、」言われるがままに、徐に、ストリップ嬢のように意識して身体をくねらせて、お尻を晒す。

「ノン、」

「はい、？」

「尻をもっと、くねらせて、」

私は、馴れない動きをして見る。そうしながら、前を、向くと、森本さんは、素裸になっていた。

「うわあゝ随分、お痩せになったんですねゝゝ全然、違って見えますよ、」私は、両腕を頭の上に載せたままで、森本さんを見ながら言う、

「うん、高校時代の体重に戻ったよ、見て、お腹なんか、すっかり引っ込んでさ、随分、苛められたからねゝゝお姫様に・・・」

「ごめんなさい、・・・でも、」

「さあゝここにお出で、」と、手招きをした。別れる前には、いつもしていた事だ。

「はい、」私は、裸の身体を隠そうともしない森本さんの前に来て、膝立ちをして前を見ると、目の前には、森本さんが、力強く、そこに在った。私は、命じられたわけでも無いのに、手を添えていた。

「してくれるのかい？ノン、嬉しいよ、」

「・・・はい、・・・」

・・・・だって、いつもしていたんです・・・でも、・・・良いの、これで、・・・時間を取り戻さなくちゃ・・・これが、欲しくて堪らないと、思われても良いわ・・・だって、・・・

・・・なにもかも、好きなの・・・森本さんが・・・失いたくない・・・でも・・・

そんな事を一瞬思ったけれども、直ぐに、その思いは消えて、目の前に在る、力強い森本さんに唇をなすりつけていた。

・・・あ～～～好き・・・森本さんが好き・・・

「逢いたかった、・・・ほんとに・・・」

「はい、私も、苦しかったです・・・」

ベッドに投げるように、倒され、そのまま、上に重なった、森本さんが、私を、上から、じっと見て、

「俺も、苦しかった、何をしてても、やる気が起こらなかった、・・・酷い奴だ、」絞り出すような声で言った。

「ごめんなさい、・・・でも、・・・森本さんを・・・奥様から、奪い取る・・・」

「うん、もう言ううな、ノン、」と、森本さんは言いながら、私の唇を塞ぐように、唇を重ねた。

「うっ・・・は・・・い、・・・」

私も、遠慮なく、舌を絡める。唇が、離れると、

「今までのお預けを、今ここに、一気に、晴らしてしんぜよう、」と、徐に、堅苦しく言いだした。

・・・あ～～森本さんだわ・・・

「駄目、い、嫌です、・・・晴らさないで下さい・・・ふふふふふう～～～」

「うわっはははは～～それは、姫、無理で御座る、」

「姫は、嫌ですー」

「ならぬ、ならぬぞ、がははははは～～さあ～～一気に貫いてしん

ぜよう〜」

「あ〜なりませぬ、ご無体な、」

「な、なに、ご無体とな．．．ならぬ、」

「森本さん、」

「なに？好きかい？」

「はい、大好きです．．．」と言う私の、両脚を広げて、

「挿入れて欲しいか？ノン？」と、私を見ながら、聞く。

「はい、」

「口で言って、」と、そう言われた。

「挿入れて、ください、」私は、別れる前にいつも言われ馴れたその言葉を、直ぐに、森本さんを見つめながら、口にして、目を閉じる。森本さんが、両脚を持ちあげて、ぐいと広げ、いつものように、私に、両脚を持たせる。赤ちゃんポーズだと、森本さんは、よく口にしていた。大きく広げて全てを晒した私の柔らかい処に、森本さんが、擦りなぞる。目を閉じて、その動きを追う。森本さんを感じる。

．．．．．あ〜〜来るわ．．．．．

一気に、ぐいっと、貫いてきた。ズンと、衝撃が、身体に、走った。声が出る。

「あっ、あ〜〜んう〜〜あ〜〜」待ちに待った、森本さんを身体の中に感じる。身体に喜びが、走った。森本さんは、最初は、いつも深く挿入れたままで動かない。

．．．．．あ〜〜これだわ．．．．．あ〜〜この時を、ずうと、待っていたわ．．．．．

結婚式

「ノンちゃん、結婚おめでとう、」

「これで、ノンちゃんも、年貢の納め時ね、おめでどう、ノンちゃん！」

「ありがとう、
・
・
・
・
・
ありがとう、
・
・
・
・
」

「おい、岩崎、こんな綺麗な奥さん嫁にしたんだぞ、羨ましいぞ」

「ははははは、羨ましいだろ、
ははははは」

次々と、私と勇さんの結婚式にやって来る、岩崎さんの家族関係や親戚の方々、勇さんの友人達、私の家族関係や、親戚達、そして、昔からの友人や、元の会社の同僚達が、会場の出口で迎えた私達の目の前にやって来ては、それぞれの思いを告げて、挨拶をして、会場の中に入って行く。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ どうとう、この日がやって来たわ ・ ・ ・ ・ ・ 森本さん ・ ・

森本さんと暫く別れて過ごした、日々を一気に取り戻すように、あの夜の再会は、私も森本さんも、燃えに燃えた。

私の柔らかい処の中は、まだ痺れている。そして、けだるさが残って、全身が痺れているように感じられ、達してしまった余韻が、気持ちよく身体に残っている。

森本さんは、初めて、私の中で、「いった」わ。

森本さんは、初めて、私の中で「いった」。その行為が、妊娠を

司る行為でも、私は、拒否しなかったし、当り前のように、いつもそうしていたかのように、私は、激しく突き上げられて、森本さんが、激しい動きの後に、最後に、奥まで深く強く打ちこんだ時に、私も、その動きに合わせるように、限界点を過ぎて、達しかけていた。

「ノ、ノンー!!」

「は、はい、」

「いくつ、いくぞー」

「はい、わ、私も、・・・」

「い、いくー」と言う言葉を発して、覆いかぶさるように私を抑えつけ、そのまま強く抱きしめてきた。

「・・・うーむーあー」

「あーむーんあーあー」

「・・・」

「・・・」

動きが止まっても、私の中が、森本さんを強く感じる。そのまま、森本さんの腰の動きが、すっかり止んで、奥まで深く、強く押しつけている。

「おうーきつくなって来たー締めつけるよ、・・・良いぞう・・・」

「ううーん・・・」

私は、森本さんの背中を両腕で思い切り抱きしめて、感覚を追っていた。

「・・・あー動いてる、中で、びくんっ、ビクンツと・・・」

中で動きを感じた。全てを受け止めた。

三年以上も抱かれていたのに、森本さんは、決して、私の中で、「いった」、事は、無かった。求められた事も無かった。

「森本さん、ホントに痩せてしまいましたよ、こんなに、・・・」私は、森本さんの胸に顔を乗せて、覗き見るように、言うど、

「うん、・・・少し、調子が、悪くてね・・・でも、大丈夫だから・・・」

「えっ、やはりどこか、具合が悪いんですね・・・」心に、言い知れない不安が広がる。

「ノン、！！」

「はい、・・・」

「心配しなさんな、・・・ノン、大丈夫だから・・・」と、力強く言った。

「はい、でも、心配です・・・大丈夫・・・なんです・・・か？・・・」

「うん、辛かったからね・・・ノンに振られてさ、」と言うと、私を仰向けにして、乳房に顔を埋めて、乳首を転がし吸い始めた。

「あっ・・・あゝん、感じるわ・・・」いつも以上に、乳首が、感じている。乳房が、遠慮なく、上に下に、横に、回すように、揉みしだかれ、強く弱く、何度も揉まれる。乳首はいつものように、甘く、強く齧られる。何度も何度も、吸われ、揉まれる。

・・・胸が、熱い・・・

少しして、

「ノン、」と、小さな声で森本さんは、言った。

「はい、??」

「ありがとう、ノン・・・逢ってくれて、好きだよ、・・・」

「はい、私も大好きですよ・・・森本さん・・・」

「なに?・・・」乳房を離して、顔を上げて、私を見ながら言う、その顔が、歪んでいた。

「・・・・・・・・・・」

「な、泣くな・・・ノン・・・」

「えゝゝでも・・・・・・・・嬉しくて・・・・・・・・」

「うん、・・・・・・・・俺も、嬉しくて、嬉しくて、・・・・・・・・さあゝ・・・」

ノン、・・・・・・・・お風呂、一緒に入ろう・・・」

「はい、・・・・・・・・」

この夜は、いつまでも、抱かれ続けたような気がする。お風呂に一緒に入って、しっかりと抱きあい、シャワーを頭から、互いにかけ合い、石鹸まみれの身体を、互いに擦りあい、汗を流すと、互いに裸身を目の前に晒し合い、森本さんのなめるような視線を受け止めて、私も熱い視線で森本さんを見る。

森本さんは、私を膝まづかせ、目の前に森本さん自身を突きだす。私は、何も考えずに、両手で捧げ持つように掌で持ち撫で、撫で、口を大きく開けて、頬張る。舌で、舐めまわす。吸う。甘く齧ってみる。何もかも、これまで教えられたテクニクを使っている。その時、森本さんは、私を下に見ながら、言ったのを、思いだす。

「ノン、!」

「うっはばい・・・・・・・・はい?」

「俺だけに、しておけよ、ノン、あまり教えた、テクニクを使うなよ、」そう言った森本さんを仰ぎ見て、

「ど、・・・・・・・・どういう、意味です?」言いながらも、指で、森本さんを動かしている。

「すっかり、俺の好みの女になってしまったから、そのテクニクは、結婚する旦那には、最初から使っちゃ駄目だよ、・・・・・・・・ノンは、男がいなかったんだからさ、無意識に使う馴れた、腰の使い方

とか、注意するんだぞ、最初は、あまり経験が無い女を演じるんだ、それが、幸せになる基本だぞ、・・・良いかい。」と、いった。その言葉を聞いて、岩崎さんが直ぐに浮かんた。

・・・岩崎さん・・・ご、ごめんなさい・・・お断りするわ・・・私には、森本さんがいる・・・もう、駄目、・・・離れたく無い・・・奥さんがいても良い・・・一生独身でも、良いわ・・・

「私、結婚しませんよ、・・・」と、決意を、静かに言った。

「どうして、・・・しなくちゃ駄目だよ、・・・幸せにならなくちゃ・・・」と、森本さんは、私を見るように、にこにこしながら言ったので、

「しても、良いんですか、折角、森本さんの元に、戻ってしまったのに、・・・そうですか・・・そうなんですネ・・・分かりました・・・もう、・・・します、そんな風に言ううなら、絶対します、良いんですね・・・」と、言いながら、森本さんをギュウと、つねってやった。

「い、いたゝい、こ、こら、姫、オイタは、いけませんぞ〜」と、身体を引きながら言った、森本さんの身体は、やはり、細かった。

「別れたいんですか?・・・森本さんは、私と、・・・嘘だったんですか?」と、強い視線を送る。

「嬉しいよ、嬉しいさ、これ以上の喜びは無いよ、・・・嘘ではないよ、・・・離さないからな、もう、別れたいなんて言うな・・・今度、言ったら、山に捨てて来るぞ、」と、言ったので、

「え〜え〜え〜?イヤダ〜捨て猫見たいで、嫌です〜。ふふふふふ〜」森本さんを、上に見ながら言った。

「じゃ、さあ、どうしてくれよう、ホトトギス、う〜む、そうだ、乳首を齧って食べてやる・・・」

「い、嫌、危ないですよ〜私、こんな危険な変態と、お付き合い

しません、あゝ今日逢ってしまったのは、きっと、私の一生の間
違いだわ・・・えゝゝそう、大間違い・・・」

「これ、これ、お姫様、・・・もう、おゝゝそゝゝいゝゝゝ
んだゝゝ」と、変な声で言っ、私を立たせて、

「ベッドに行こう、」

「はい、」

「嬉しいか？ノン？」

「はい、とても、・・・」

・・・思い出すわゝゝ、ふふふふーあの夜の事、・・・
だって、あの夜、抱かれて、・・・

「何、考えてるの？？ほら、お客様が次々来るよ、これからだよ、
頑張っ、」と、袴姿の雄さんが、私を見ながら、励ますように、
言ったので、

「はい、これからですねゝゝ雄さんありがとう、・・・」と言うと、
「何言ってるの、これからの人生の共同作業がこれだよ、初めての
お務めだよ、ガンバろうね、」

「はいゝゝ大丈夫です、あつ、来てくれたのゝありがとうございま
す、今日は、楽しんでくださいね、」

「ノンちゃん、結婚おめでとう、ほんとに綺麗よ、羨ましいわゝゝ
ねっ！！」

「ほんと、羨ましいわゝゝ」私は、友人達が、口々に、言う言葉に、
ただ、微笑んでいる。

高校時代の友人達だった。

森本さんとは、あの夜の次の日も、その次の日も、抱かれ愛され
た。それは、新たな恋の始まりのように、私には思えて、ひたすら

森本さんを、求めた。雄さんの事は、忘れていたわけではないけど、森本さんに抱かれる喜びの方が、強くなって、電話が来ても、用事があるとか言って、嘘をついて、会う事はしなかった。それが、雄さんを怒らせ、あの夜の出来事になってしまった。

会社で、雄さんが、怒ったような表情で、夕方、話があると、言われた。分かっていた。

・・・いずれ、言わなくちゃと思ってた、それが今日かもしれないわ・・・

雄さんから、「今日、どうしても会いたい」と言われた時にそう思った。

待ち合わせの場所に、雄さんが車で待っていた。私は、助手席に乗り込む。車は、夜に向かって走り出した。町の外れまで、無言な時間が過ぎていった。車は、闇に向かって、どんどん進んで行く。気まずい、空気が、車の中を支配している。車は、県道から、反れて、小さな間道に入って、暫く進むと、

「もう、我慢が出来ない、俺が、嫌なのか？」と、車を、暗い空気に止めて、岩崎さんは、私の方に身体を向けて、言った。

「・・・そ、そんな・・・」私が、言おうとした瞬間、強引に唇を奪われた。雄さんとのキスは、この前したけど、今日のキスは、強引だった。乳房を、衣服の上から、遠慮なく、掴まれた。

「あっ、雄さん、だ、駄目・・・」

唇を離して言ったけど、私の乳房を更に強く握って、揉んできた。雄さんの手を抑えるようにしても、雄さんの手は、私の乳房をぐいぐいと、揉んでいる。

「だめーくゆうーさん、結婚するまで・・・待って、」そう言う間に、スカートから、ブラウスが、引き抜かれた。

「・・・い、いや、・・・」本格的に抵抗しようとした時に、そのまま、雄さんの手が、ブラウスの中に滑り込んで、ブラジャーを一気にたくし上げ、ぐいっと、乳房を直に掴まれた。

「い、痛い、だめ、あゝゝ」、森本さんにされているような気がした。

・・・森本さゝゝん・・・あゝゝ・・・

何故か、抵抗出来なかった。

「今日は、抱く、もう、我慢が出来ない、嫌いになっても構わない、今日は、する、絶対する、」と、宣言するように私に言った。そして、私のシートを倒して、仰向けにさせると直ぐに、スカートの中に手が滑り込んで、パンティに手をかけると、一気に引き下げた。

「い、いやゝゝ・・・お、お願いー」声が、掠れて、涙が滲んできた。

・・・そこは、森本さんのものなのゝゝ・・・

「・・・だめだ、今日は、決める、俺のものにする、・・・」と、強い声で言われた。

「そ、そんなゝ・・・」

スカートを、上に捲くられて、暗闇の中に、私の下半身が、露わに剥かれた。

「いや、恥ずかしい、・・・止めて、・・・」

・・・見られた、・・・森本さん、・・・

「き、綺麗だ、・・・今日から、ここは、俺のものだ、」、そう言っ
て、私の上に覆いかぶさるように、のしかかってきた。

雄さんが、怒るのも無理は無い。男の人の、強引さに、野獸的な力強さに、雄さんの激しい呼吸音と、力に、パンティをちぎるように脱がされ、強引に身体を開かせられ、一気に貫かれた。車の中で犯された。前戯もなにも無い、愛を感じられない雄さんとの初めてのセックスだった。

「い、痛く、いい、・・・」私の中に、雄さんが、前戯も何もなく、強引に侵入してきた。私は、いつかこうなるとは思っていたけど、こんな風になるとは思ってもいなかった。

だから、いつもと違う感じに、身体が拒否している。

「い、いたく、いい、だめく、止めてく」乳房が、上から、掴まれ、揉まれ、握られる。雄さんが、荒くなってきた。

「あく、だめく・・・」それでも、動き出した雄さんは、止める事はしない。

・・・ちがうー、これは、セックじゃない・・・違う・・・

激しく、出し入れ、突かれた。そんな中で、雄さんと森本さんとを、冷めた心で、比較していた。

・・・あく、これが、雄さんのやり方なのね・・・

ただ、痛かった。あんな手荒なセックスは、嫌。雄さんは、あつけなく、果ててしまった。それも、私の中に、射精してしまった。いた。

「おうく、いったく・・・」と言って、直ぐに、引き抜き身体を離すと、私のスカートを下げて、見えないように隠してくれた。私は、胸を隠すようにして、

「赤ちゃん出来てしまします」と、目を閉じて、雄さんを見ながら、言うと、満足したような表情で、
「産めばいいよ、結婚するんだから、」と、運転席から、私を覗き込むようにして言った。

「でも、・・・・・・」

私のお腹の中には、赤ちゃんがいる。妊娠している。誰の子供なのかは、私だけが知っている。

あの車の中で、雄さんに犯されたその翌日から、私は、雄さんにも森本さんにも、少し会わないでいようと思っていた。その間、雄さんからは、何度も電話があった。

「ごめん、昨日は、少し、強引だった、・・・・怒ってる？」と、恐る恐るそう言った雄さんに、私は、

「はい、少し、怒ってます、」と返すと、あわてたように、直ぐに、謝ってきた。

「ごめん、ごめん、少し、強引だった・・・・でも、どうしても、・・・・会ってくれないか？・・」

「少し、お時間を下さい、・・・・まだ・・」

「・・・・うん、・・・・」

そんなやり取りが、毎晩続いた。一人の部屋で、何度も、考えていた。

・・・・・・どうして？させたの？・・・・抵抗しなかったの？・・・・だって、・・・・いつかは、私も、結婚しなくちゃ、・・・・・・そうなの？・・・・結婚しないって決めたんでしょ、・・・・森本さんと、別れるの？？・・・・嫌・・・・別れたくない・・・・じゃ、

どうして、させたの……

こんな自問自答を、何度も、何度も繰り返したけど、雄さんと「してしまった」事實は、消えなかった。

森本さんと、何日か、逢わないでいると、辛くて、結局、電話した。考えれば考えるほど、森本さんを裏切ったように思えて、心が、苦しかった。私は、森本さんに逢いたくて、逢って身体の汚れを消してもらいたかった。そんな事を何日か思って過ごし、会社から部屋に帰って直ぐに、森本さんに電話して、直ぐに逢いたいと言うと、森本さんは、「直ぐ行く」と言って、少しして、「着いたよ」と、電話が来た。

いつものように、静かにアパートの駐車場に車は停まり、私は、いつものように、後部座席に滑り込んだ。

「やあ〜お嬢さんは、お元気でしたかな?」いつもの甲高い変な声で言う。

「……………」

「どうした??ノン?なんだか、今日は元気が無いよ、」と、運転をしながら、私に視線を向けて、いった。

「もっと、愛して下さい、もっと、」、その言葉が口について出た。あの夜の残滓を森本さんに消してもらいたかった。

「うん、なんかあったのかい?」と聞いて来る。車は、夜の通い慣れた道をどんどん進んで行く。

「ごめんなさい・・・森本さん、ごめんなさい、わ、私…………犯されました、うっううう…………」と言うと、自然に、涙が溢れでた。

「うん?何?・・・今、犯されたって言ったよね。」驚いたように、聞いてきた。

「はい、婚約者に、無理やり、犯されてしまいました、…………うっううう…………」と又、涙が出て来た。

「こ、婚約者？・・・婚約者って、ノンいるの??」驚いている声だった。

「は、・・・はい・・・います、・・・でも、・・・森本さんの元に戻ってしまいましたもん、結婚しないつもりでした、・・・ご、ごめんさない・・・」と、言いながら、運転席の森本さんの横顔をじっと見つめる。

「い、いるのかー、そうか、・・・あゝなるほど、あゝそうかゝ結婚するつもりで、別れたんだなこの前の出来事は・・・?」と、見ていた私の方に、顔を向けて言った。

「違います・・・違います・・・苦しかったです・・・別れたく無かったんです、ホントに、・・・でも、・・・でも、」と、又、涙が滲んできた。

「結婚するつもりで、別れたんだろ?」

「違います、・・・でも、本当に別れていれば、そのまま、結婚するつもりでした・・・でも、森本さんの元に戻りました・・・森本さんを、私だけのものにしたかったんです、ホントは・・・でも、でも、・・・森本さんには、奥様やお子さんが・・・辛くて、ずっと、泣いてました。・・・」と、あの苦しかった時の思いが、蘇る。

・・・森本さんの元に、戻って、・・・良いの、ホントに・・・

「すまん、・・・のん、・・・すまん・・・」と、森本さんは苦しうに、声を落として言った。

「いえ、良いんです・・・」

「そうかゝゝ、お見合いかい??」声が、沈んでいた。

「えゝゝお見合いは、かなり前に、・・・してました。森本さんとお付き合っている間でした、そうですねーもう、三年位前です・・・でも、あのお見合いから、ずっと、森本さん一筋に生きてきた

んです。」と、言いながら、森本さんを見ると、

「嬉しいよ、ノン、」と、私を見て言う、その表情は、やはり陰っていた。

「はい、・・・。」

「じゃ、その婚約者とは、何も無かったんだね、その・・・犯されるまで、・・・？」

車は、いつもの夜の道を、私と森本さんの秘密の「愛宿」に向かって進んで行く。

・・・抱かれない、・・・早く、抱かれない・・・消してしまいたい・・・

そんな思いが、暗い夜道の先にある愛宿に向かわせる。

「はい、・・・何も無かったですよー・・・全然、そういう間柄では無かったんです、ホントに、・・・私の叔母さんの勧めでお見合いしましたから、・・・それに、いつかは、結婚しなくちゃ、と思ってました・・・もちろん、お食事とか、ドライブはしましたけど、森本さんと逢えない一週間の間だけすよ、会っていたのは、・・・何も無かったです・・・彼に、求められましたけど、・・・私には、いつも森本さんが、いましたから、・・・ずっと、拒否してたんです。」と、思っていた事を言って、心が少し楽になった気がした。

「うん、・・・そうか・・・」

「私、森本さんの元に戻ってしまいましたから、・・・戻ってから、婚約を、止めなくちゃと、思って、あれこれ理由を言って、会わないようにしてたんです、・・・怒ってしまったんです、彼・・・それで、車の中で、無理やり、・・・されたんです・・・」

「・・・分かった、・・・辛かった・・・んだね・・・」

「私、・・・汚れました、・・・怒ってます？・・・」と、あれ以来持っていた、不安を口にした。

「怒ってなんかいないさ、辛い思いをさせて、ごめんな・・・ノン！」
「ごめんなさい・・・」又、涙が、頬を伝う。

「泣くな、ノン、」
「・・・うっうううう・・・」

「泣くな、」

そう言うと、森本さんは、ライトを消して、車を夜の道に静かに停めた。森本さんの両手が、私の頬にそうっと、抑えるようにして、涙で歪んで見える森本さんの視線と絡み、森本さんは、ゆっくりと私の唇に唇を重ねる。喜びが、身体に走る。

「・・・ごめんなさい・・・森本さん・・・もう、させません・・・」

愛宿

「さあ、ノン、一緒にお風呂に入ろう、嫌かい？」薄暗い部屋に入ると、直ぐに言った。

「いえ、・・・準備します、」

「いいよ、その前に、まず、・・・」と言いながら、私を、抱きしめ、再び、舌が、絡めとられながら、スカートの中に手を感じた。

「・・・あ~~~~嬉しいわ・・・好きにしてください・・・」

そう思った瞬間、パンティーが、するっと、下げられた。そして、次には、スカートが、ストンと、床に落ちる。その間も、互いに、舌を吸い、絡めている。私の柔らかい処に、森本さんの手が動いて

きて、器用に、左右に押し広げる。

「うつ・・・だばぁ・・・ダメ・・・森本さん、汚れてます。」と、唇を離すと、直ぐに言う。

「シャワー入ってきたんだろ、」

「・・・・・・・・・・はい」と、頷く。

「そのテーブルに両手をついて、・・・・・・・・そう、後ろから、犯してやる、」

私が、テーブルに両手をついて、頭を下げて、お尻を向けると、直ぐに森本さんは、お尻を高く持ち上げて、私の裸の尻を撫でながら、ぐいと、抑えて、柔らかい部分に押し当てて、挟るように、ぐいと、押しつけて来た。

「うん、あ～～う～～ん」

・・・・・・・・あん～～あ～～挿入ったわ～～・・・・・・・・あ～～・・・・・嬉しい・・・・・・・・締めつけなくちゃ・・・・・・・・

そう、いつもするように、私は、「キュッキュツ」と、身体の奥深くの森本さんを、2度締めつける。それを待っていたかのように、ゆっくりと動き出した。私は、その動きを、追う、感覚を意識的に追いかける、そう、教えられた通りに、その感覚だけを追いかける。「あっあっあ～～うん、う～～ん、あ～～あっ、あ～～ん」と、直ぐに声が出る。

・・・・・・・・・・あ～～思い出すわ～～ふふふー・・・・・・・・・・あん・・・・・あ～～～うれしい・・・・・・・・・・

いつの頃からかは、忘れたけど、森本さんの動きに合わせて、声が出るようになっていた。ある時、行為の最中に、森本さんは、私に、

「良いね〜ノンは、・・・」と言った。

「な、なんですか？？何が、良いんです？？」と、聞き返す私に、

「その泣き声だよ、甘く、すすり泣くような声、時には、掠れ、時には、甲高い声でさ、動きに会わせて、まるで音楽のようにリズム感がある声でさ、・・・その声を聞くと、もっと、愛してやりたくなるんだ、良いね〜もっと、泣いて、声を聞かせて、」

「知りません、・・・」と森本さんが言った、事を思い出す。

森本さんが、じっと、深い処で、私の締め付けを待ち、2度の締めつけが終わると、ゆっくりと、動き始める。その動きに合わせて、自然に、甘く囁くような喘ぎ声が出る。

「あ〜〜良いね〜のん、感じるかい？嬉しいよ、今日も、抱けたよ、ノン、ありがとう・・・」と言いながら、背中に森本さんを感じると、ユラユラと、垂れ下がっている、右の乳房をぐいと、握られた。

「はっ、はい、・・・私も嬉しいですよー・・・森本さんに愛されて・・・あ〜〜気持ち良いです、・・・もっと、してください、・・・もっと、・・・汚れを、消して下さい・・・」と、何度も思っていた、言葉が口に出た。

「そうか、ノン、汚れを消すか・・・良いよ、今日は、沢山してあげる、嬉しいか？ホントに、」

「はい、・・・嬉しいですよ、とても嬉しいです、・・・森本さんだけです、」

私の気持ちを素直に言うと、深く入ったままで、森本さんが、不意に動きを止めて、

「ノン、」と、呼んだ。

「はい？？」後ろの森本さんを見るように振り向くと、

「ここは、誰のものだい？？」と言って、ぐいっと、強く押しつけ、

ゆっくりと、引き抜き、再び分からせるように、奥深くに、ずん
つ、と突いてきた。

「あん、そ、そこは、も、森本さんの・・・森本さんの・・・も
のです・・・」と、森本さんを見ながら、そう言っ、言葉を返し
た。言わされたわけでは無く、今までずうっと、そう思ってきた言
葉を言った。

その時だった。緊張が、全身に走った。

「あつ、そ、そこは、い、嫌です、・・・駄目・・・森本さん、そこ
は駄目・・・」と、悲鳴に近い声で叫んだ。何故なら、お尻の中心に、
森本さんの指を感じたから、拒否反応を起こして直ぐに、口に出た。
「おねがい・・・駄目・・・」と、振り向いて、森本さんを見ると、

「ノン、ここは、まだ処女だね、・・・？」と、動きを止めて、お
尻の中心を撫ぜながら、森本さんは、意外な、事を、口にした。

「えっ、そ、そんな・・・あん、そこは、止めてください・・・おね
が・・・い・・・あつ・・・あくん・・・はい、・・・」そう言う
と、又、打ちつけるように動き出す。

「ここは、まだ誰にも、犯されていないよね、・・・ノン、ほ
つらあ・・・どう、感じるかい？」と、お尻に森本さんが強く打ち
つけて来た。

「は、はい、・・・だ、誰にも許していませんよ・・・あ
・・・か、感じます・・・あ・・・あん・あん・あ・・・そこが、
良いです・・・」

「・・・あ・・・強く、感じます・・・そこでね・・・そこ
で愛して下さい・・・」

森本さんは、宣言するように、私のお尻を強く掴んで、森本さんの
身体にぶつけるように引き寄せ、奥深くに森本さんを感じた時に、

又、お尻の中心に指を感じて、

「ここを、俺だけのものにするよ、今日!」と言って、又、深く打ち、強く引き、又、ぐいと、打ちこまれる。

「あゝそこは、許してゝゝ」

「……あゝゝゝ身体の深部に、森本さんを感じるー……でも、……」

「い、嫌ゝゝ駄目です、そ、そこは、……」と、再び、言いながら、お尻を横にして逃げ出そうと、すると、その動きを封じるように、お尻をぐいと抑えつけられた。

「そ、そこは、駄目ですゝゝ」

「……駄目、も、森本さん、そこは、駄目……」

私の拒否反応にも、森本さんは、腰を動かしながら、

「いや、する、ここが欲しい、俺のものにするよ、嫌でもする、さあゝゝお風呂場に行くよ、」と言った。身体を離すと、私の身体を抱き起こす。私は、不安な気持ちで一杯だった。

「ねっ、森本さん、しないで……しないで下さい、ね、お願いします……」と、森本さんに哀願する。

「駄目だ、今日は、完全に、俺の女にする。」と、抱かれるようにお風呂場に歩き出しながら、森本さんは力強く言ったので、
「ずうと、森本さんの女でしたよ、」と、小さな声で言う。

「犯された、……それを、消すんだ……」

「そ、そんなゝ」

「消してあげる、俺の女なんだから、ノン!」

「えー、そうですよ、森本さんのものですよ、これからも、」と、お風呂場の中に入った時に言った。

お湯は、直ぐに一杯になり、二人が入ると、溢れ出る。汗ばんだ身体には、心地よかった。

「さあ、ノン、愛して」と森本さんは、いつものように言っ、お風呂のへりに腰かけて、目の前に突きだした。

「はい、・・・」

あの夜が、森本さんに、第三の処女の奪われた夜だった。

お湯の中に、正座して、目の前に突きだされた、森本さんを、唇で擦るように、愛し始めると、森本さんが、私に言った。

「ノン、黙って聞きなさい、良いね、あつ、そう、しながら、聞いて、」

こくりと頷いた、私は、そのまま、口の中に咥え、大きくなった森本さんを、舌で、愛し始める。

「ノン、嫌でも、第三の処女を、これから、奪うよ、」

そう言った森本さんを仰ぎ見ると、強い視線が私に注いでいた。私は、その視線を、受け止めて、舌で、なぞっている動きを止めない。見られる事は、今では、ちっとも恥ずかしくは無かった。

「上手になったね、でも、そのテクニクは、最初から、使っては駄目だよ、何にも知らない女で通すんだ。」と、意外な事を言う。

「・・・結婚しませんよ・・・どうしたんです・・・」

「はい、・・・そうします、でも、誰とも結婚しませんから、心配しなくても、大丈夫ですよ、」と、口を離して、言う。そして、ちゅっと、唇をつけてキス音を出して、再び舐め始める。

「今している、その口が、第二の処女だった。そして、今度は第三

の処女を、奪って完全に俺の女にする。良いね、」

「駄目です、」と、即座に応える。

「駄目でもする、犯された、汚れされた、身体にを清めるには、新しい処女が必要なんだ。」

「どうしてです?? どうしても、・・・ですか? なんだか、勝手な理屈のようですよ、」口を離して聞くと、

「嫌ならしないけど、・・・でも、女性には、三つの性器が在るんだ、お口と性器、そしてアナル、ノンに残っているのは、・・・残っているのは、三番目の処女さ、それで、ノンは、全て俺に捧げた事になる、だから、勝手な理屈だけど、嫌かい??」と、言われた。

「・・・ヘンタイですよ・・・森本さん、・・・どうしてもですか?・・・」

私は、愛撫していた、口を完全に離して、森本さんの前に膝立ちして、正対して、じっと、森本さんの顔を見る。

「嫌かい、ノン、欲しい」真っ直ぐ見つめる視線は、何故か細くて、きつかった。

「嫌です、でも、・・・」

「でも、なに?」

「でも、・・・森本さんが、それで、私を、許してくれるなら、・・・」

「・・・いつも、許してきたわ・・・森本さんが、それで、・・・許してくれるなら・・・」

「俺は、最初から、犯された事は、気にしてはいないよ、」

「ホントですか?」

「ほんとにさ、」

「ありがとうございます。汚れましたから・・・きつと、気にす

あの夜の出来事は、決して忘れない。忘れられない、刻印が心にしつかりと刻み込まれている。

わ・・・・・・・・あんな風になるなんて、・・・・・・・・信じられない

「さあ、のん、お色直しに行こう、」と、勇さんが、嬉しそうに、私に言った。

「はい、・・・」

・・・・・・・・これから、式が始まるわ、森本さん・・・・・・・・

あの夜の出来事があった次の日も、その次の日も、私は、森本さんを、受け入れた。前も、後ろも、何もかも、受け入れていた。「調教」だと言って、森本さんは、冗談ぽく言っていたけど、やはり、最初に中心にぐいと、押し入って、入る時の痛さは馴れない。身体が、緊張してしまう。あの夜は、クリームで、滑るようにして受け入れた。二度目には、何か特殊な液体を持ってきて、使っていたけど、やはり、最初の時には、悲鳴的な声が出た。

「い、いたあ、痛いーあゝゝい、た、いゝゝ」入口を押し広げるように挿入ってきた時の、それが、最初に出た言葉だった。

「挿入ったよ、ノン、痛くても、少し我慢しなさい、・・・直ぐに、痛みは無くなるから、・・・」そう言うと、そのままゆっくりと、深部まで、押し行ってきた。

「ぐっ、うっうゝゝんむゝゝむゝゝ・・・・・・・・あゝゝ信じられなゝゝい・・・・・・・・」頭が混乱していた。

押し入って来る感覚は、全然違う、前とは、その広がる感覚には、

心が乱れた。

・・・・・・信じられない・・・・・・うそ、嘘よ・・・・・・あ・・・・・・

森本さんに力を抜いてと、言われながら力を抜いて、やっと、何とか奥まで、ゆっくりと、全部受け入れると、森本さん自体を強烈に、身体に意識する事が出来た。

あの夜に初めて、受け入れた時、

「うそ、うそ、うそ」と、頭を横に振りながら、M字に広げさせられ、自分の両脚を両手で、広げるように持ち、閉じていた目を開けて、森本さんを見た。森本さんの視線が、妖しく、じっと、私を覗きこんでいる。視線が、絡み合う。お尻が熱い。身体が熱い。

「も、森本さん、わ、私、やっぱり変ですか??」顔が火照って熱い。聞きたかった。すると、私の頬に手を寄こし、

「否、変じゃないよ、ありがとう、ノン、」と、中心をすっかり貫いている状態に目をやりながら、動かずに言った。

「あゝゝ恥ずかしいです、見ないでゝゝ・・」やはり、この異常な状態を見られるのは恥ずかしかった。そして、動かそうとする気配を感じて、

「あゝゝまだ、動かないで下さい、中が、変に熱いんです、」と、言っただけ、それも、無視され、

「うん、力を抜いて、・・・・・・そう、変に力まないの、良いかい、
・抜いて、そう、・・・・・・ほら、良くなってきたよ」と言いながら、私に、覆いかぶさるようにして、唇を吸う。舌が絡めとられると、私は、懸命に舌を吸っていた。

「あゝゝへん、変な気持です、笑わないで下さい、」動かないでい

る森本さんを、絶えず意識する状態は、普通のセックスとは異なっていた。

「変じゃないよ、それが、普通なんだよ、じゃさ、ゆっくりと引き抜くよ、」と言うと、直ぐに動き出した。

「あっあゝゆっくり、・・・あゝあゝ変よ、・・・そこ・・・」

森本さんはゆっくりと、すっかり全てを引き抜き、又、最初から中心にあてがい、ぐいと押しつけると、今度は、するーと、挿入った。

「あゝゝん、うっうゝむ、むあゝゝむん・・・」やはり声が出た。そして、奥まで、ぐいと押しこむ。そんな事を、何度か繰り返し、拡張してしまったのか、スムーズになってきたのが分かった。痛みは、すっかり無くなり、森本さんが、徐々に動き出すと、その動きに合わせて、自然に声が出ていたのを思い出す。自分でも信じられなかった、まさか、あそこに、男の人のものを受け入れるなんて、そして、それを許した自分に、その行為に。

そして、森本さんが、乳房を揉みながら、私に、声をかけて来た。

「ノン、第三の処女、繋がったよ、すっかり中に挿入ったよ、俺が最初に、奪ったよ、痛いかな」

「は、・・・い、いえ・・・」

「ノン!!」

「はい？」

「ここは、誰のものだい？」いつもの森本さんがいる。

「森本さんの、・・・」

「そう、他の誰にも、許すなよ、分かったかい、ノン、ここは俺だけが、愛するんだ、良いね、」

「はい、・・・絶対、森本さん以外には、許しませんよ、・・・誓います。」それは、もう、この段階では、当り前の事だった。

……だって、森本さんに、征服されたんですもの……

森本さんが、動き出した。声が出る。ゆったりと突いて来る。身体の奥底に、言い知れない衝撃が、湧き起こって来る。引き抜かれるときの、言い知れない、感じが、変な気持ちにさせる。

「あっ、い、いたあゝゝあん、だ、・・や、さし、くゝ、あゝゝむゝん、むっむっ、むゝゝん、」

と、声に出して叫び、声を押し殺して、心の中では、無言で、大きな声で叫んでいた。そして、動きが始まると、後は、前後に徐々に、動きが早くなってきた。力強く打ちつける、森本さん自体に意識を集中して、追いかける。

「ここは、誰のものだ？ノン、」打ちつけながら、再び、聞いてきた。

「も、も・りもと、うゝむむむあっあん、・・・さん・の・もの・
・」激しい。

「結婚しても、使わせるなよ、旦那にも、良いか、ノン、」と、変な事を言うから、

「は、はい、・・・許しません、絶対に、・・・森本さんのもの・
・・・」

言わされた言葉では無かった。これは、私と森本さんだけの秘密。

・・・でも、・・・あんなに変な気持ちになってしまうなんて・
・私って・・・

それは、四回目の「調教」の時だった、大分、痛さに馴れて、スムーズに入るようになると、森本さんに教えてもらった言葉のA感覚は、研ぎ澄まされていったように、思えた。何故なら、それは、森本さんに教えてもらった、

「ホウ〜ノンは、ここでも感じれるんだ、凄いな〜」と、言っ
た、言葉が、心に、今でも残っている。

「うっ嘘、・・・そんな〜やはり、私って変です・・・お尻で
感じるなんて・・・あ〜」

・・・変だわ、・・・私って、あそこが、気持ち良くて・・・
・・・全然違うの・・・前とは・・・あ〜どうしよ、このままでは、
離れられない、・・・私を、こんなにして・・・あ〜好
きです、もう駄目〜・・・

何日か過ぎて、今月の生理が遅れているのに気がついた。でも、
全然、気にしなかった。勇さんには、暫く会っていなかったけど、
ただ、電話が毎日来ていたのは事実だった。まさか、森本さんに何
もかも、身体全てを、愛されているなんて、言えないし、もう、勇
さんには、この時点で会いたくは無かった。けれど、叔母さんが、
両家の間に立って、色々、結婚の準備を進めていたのは、毎日電話
が来る母から、聞いていた。

・・・私は、森本さんの愛人でも、良い、結婚しなくても、一
生独身でいても良いわ・・・森本さんがいる限り、・・・奥様
から、奪うつもりも無い、このまま、お傍にいただけで、・・・

手紙

やっと、やっと、絶望の深いどうしようもない悲しみから、あの
手紙で、何も考えられず、何も見えなかった心の暗いどこまでも深
い闇に、小さな、小さな光が射した。絶対的な絶望から小さな小さ
な希望へ、やっと、やっと、生きていく決心がついた。

「死」は、目の前に在った。なんども、何度も死のう、死んでしまいたい、と、気が狂いそうな日々を、救ったのは、手紙とお腹の中に出た、森本さんの子供だった。確信が在った。血液型は、同じB型だし、雄さんに、本当の事は言えないし、言わない積りだ、真実が知れた時には、別れる積りでいる。罵られても、何と言われても良い、今は、この赤ちゃんが、生きていく私のたった一つの生きるよすが。

・・・なんと、非難されても良いわ・・・

「ノリちゃん、さあ〜始まるよ、行こう、」

「はい、雄さん、・・・」

披露宴の会場には、沢山の男女が集っている。

結婚式披露宴には、大勢の人々が、集って、楽しそうに歓談している。

・・・欲しい、森本さんが、欲しい、柔らかい処も、調教された人に言えない処も、口も、乳房も、何もかも、森本さんを待っているわ・・・身体が、心底、欲しがっている・・・欲しいと、白いウエディングドレスに包まれた裸の肉体が、私に、そう言っている。

私は今は、幸せな花嫁を演じている不幸な女だわ・・・

森本さんが、あの日いつもの愛宿で、私の身体を充分翻弄させ、何度も登りつめ感じさせられ、最後に、A感覚の調教で泣かされた私は、裸を晒したまま動けずに、余韻に浸っていた。森本さんが私に、

「明日は、ノンの部屋で愛したい、」と、私の乳房を柔やわと弄ぶ

ように揉みながら、乳首に齒を当て甘かじりしては舌で転がし、又かじり、強く、優しく、慈しむように、吸いながら、そう言われた。「あゝん、感じますゝあゝえっ！お、お部屋でですか？」と意外な事を言った森本さんを見て聞き返すと、

「そう、どうしても明日の土曜日は、ノンの部屋で愛したい、良いだろ」視線が強さを増した気がした。

「良いですけど、・・・」

・・・良いのよ、ノン、全てを捧げたんですもの・・・たったさっきまでお尻の調教も受けてたし・・・もう、普通になったみたい・・・そう決めたんだもの、もう、森本さんの胸に戻ってしまったんだもの、・・・

「良いですよ、これからは、

お部屋で良いですよ、もう隠さなくても、良いんです、お待ちしますね、」と、覚悟して応えた。

「ありがとう、ノン、嬉しいよ」

「今まで我が儘言ってたのは、私ですから、ごめんなさい」

「好きか？のん」

「はい、大好きです。」自然に唇が重なった。

あの土曜日の夜が森本さんとの最後の夜になるなんて、その時まで、知るよしもなかった。

勇さんとは、会社では、会っていたけど誘われても、身体の調子が良くないと、夜は会わないようにしていた。無理やり犯された事に、まだ怒っていると思わせてもいた。それでも結婚に向かっての両家の準備は、確実に進んでいたけど、私は、寧ろ、森本さんだ

けに全てを捧げ森本さんを一筋に追い求めていた。

・・・・・・身体も心も・・・・・・

・・・・あの土曜日の夜が、・・・・泣いた、あんなに悲しかった事はなかった・・・・突然の悲しみに私は、森本さんの胸で、声を出して、大声で泣いた、嫌々をする子供のよう泣きじゃくった・・・・全てを、終わらせたあの夜が憎い・・・・

「やあー久しぶりだなーこの部屋、懐かしいなあーこの部屋で、ノンのバーจินを奪って、随分、愛したな〜」と、何かを確かめるように見渡している。

「どうしたんです、これからは、いつ来てもいいですよ、森本さん」と、胸元の乱れを取り繕いながら、言う

「うん、嬉しいよ、さあーお風呂貰うよ、」と、嬉しそうに笑って言った。

「はい、お湯入ってますよ、どうぞ」準備は前もってしていた、これからいつもそうする積もりだった。

「なんだあー一緒に入らないのかい？」

「狭いですよ、さっどうぞ」アパートのユニットバスは独身用。

部屋に入ると直ぐに抱き締められ、乳房を強く握りしめられ、部屋着の下からブラジャーを外され、直に、揉まれたのはたった、少し前。

和室に敷かれた布団に自然に目がいく。あの最初の夜以来、いつも和室で愛されてきた。私が、この部屋で逢いたくないと言って、森本さんが来なくなってから、随分時間がたっている。でも、今日か

らは、また、和室で愛される日々が始まる。

・・・・・・部屋に来てもらって、良かったわ・・・・・・

「あーさっぱりしたよ、ノン、ビールで乾杯しよ、再会を果たした部屋で」

「はい、座ってください」例によって、森本さんは、バスタオルを巻き付けただけの裸だった。

「乾杯、ノン、ありがとう、部屋に入れてくれて」

「乾杯、森本さん、どうしたんです、これからはいつでも、来て下さい、合鍵作りますから、」今朝思いついた事をすぐ口に出した。

「嬉しいな、好きか？のん！」

「はい、死ぬほど好きですよ、森本さんは？」じっと見つめて聞いた、

「俺は、ノンを愛した、愛してるよ、」と、強い眼差しを向けて言ったのを聞いて、

「あ、愛してくれているんですか、ホントに、ホントにですか、う、嬉しいーうっうっ」涙が込み上げてきた。

・・・・・・愛していると初めて言ってくれたわ・・・・・・

私は、あのもみくちやにされた土曜日、悲しみに泣いた土曜日、あの土曜日が森本さんとの最後の夜、二度と逢うことが出来ない最後の夜になるとは、その時は思いもしなかった。

月曜日に、何度電話しても、森本さんの携帯電話は鳴らなかった。次の日も次の日も、鳴ることはなかった。心は、不安と哀しさで、何をする気も湧かず、暗い部屋で、ただただ、森本さんからの電話の鳴る音を待った日々。

でも、鳴ることは、二度となかった。

それから間も無くして、結婚しますと言って私は、会社を退職していた。

あの身体を開いた最初の夜、初めて受け入れ、捧げたあの夜の強烈な思い出、それから、毎日愛された、有りすぎる思い出の部屋にすることが辛くて、アパートを引き払い、実家に帰った。あの部屋で、いつまでも待とうと思ったけど、あまりに辛く苦しかった。耐えられなかった。

実家に帰った私の事を、玲子叔母さんも、勇さんも、両親も、結婚に向けての準備だと、喜んでいたけど、心は、死ぬ事ばかり考えていた毎日だった。

私を救った、森本さんからの手紙、今も大切に、隠して持っている。

私と森本さんの恋は、天恋、・・・暗い闇の中で何処にも光が見えない、見いだせない、重苦しい日々を、お店の仕事で耐えていた、私を救った手紙。

あの土曜日の夜に、森本さんは、確かに私に、愛してると、言ってくれた。

ビールを美味しそうに飲んでいる森本さんを、嬉し涙で、霞んで見える森本さんを見つめて

・・・愛していると言ってくれた・・・本当に言ってくれた、嬉しいわ・・・森本さんありがとう・・・ありがとう・・・

そう心の中で何度も繰り返していた。

そんな私に、

「ノン、泣くな、泣くな、ノン」と森本さんは優しく言う。

「は、はい、嬉しくて、」

「ノン、今まで、辛い思いをさせたね、ごめん、」と、森本さんは、声を落として、私を優しく見つめて言ったので、

「どうして？変ですよ、今日の森本さん、そんな事ないですよ、私が、我が儘ばかり言って、すみません、」

・・・おかしいわ、・・・変だわ・・・

「さあーノン、抱くよ」

「はい、」

「綺麗にしたかい？全て、」

「はい、」と、応えた、私だった。

「じゃ、おいで」

あの土曜日の夜は、森本さんも私も、何故かしら、お互いをいつまでも満足しないで、互いを求め、何度も感じさせられ、どうしようもなく、燃えに燃えた、素晴らしい夜だった。

・・・今も、思い出すと、身体の奥底が熱くなる・・・あゝ森本さん・・・欲しい・・・

高い席に座って、祝福を受けながら、森本さんへの想いが、私の心にしみのようにじわりと滲んでくる。

「ノンちゃん、おめでとう、とっても綺麗よく、本当に、ス・テ・キよー良かったねーノンちゃん、こんな素敵な旦那様凄くー羨まし

いわあー」そう言って涙ぐんだ、高校の同級生の朱美ちゃんに、
「ありがとう、朱美ちゃん来てくれて、本当にありがとう」と言いながら、微笑み、・・・幸せを演じる。

・・・今は、幸せな花嫁を演じるわ・・・

あの土曜日の夜、やっとあの部屋で新しい生活が始まるはずだった。

・・・あゝ悔しい、思い出す度、胸が苦しくなる・・・あゝ
悔やんでも、悔やみきれない、あの夜が、今でも憎い・・・

和室に敷かれた布団の上にパジャマのまま膝をおり、森本さんと
向かい合って座っていた。裸の森本さんは、少し体重が増えたよう
に感じられた。

私は、森本さんの目を見ながら、心の中で、

・・・好き・・・大好き大好きですよ・・・

と、繰り返しながら、

「森本さん、これから、ずっとこの部屋で良いですよ、もう迷いま
せん、今までごめんなさいね、明日、合鍵造ってきます。決めまし
た、」と、森本さんを見つめながらいうと、直ぐに聞いてきた。

「何を決めたんだい？」

「ずっと森本さんの胸にすることにしました。もう、迷いません、
森本さんを愛していきます。」

私の決心を口にした。

・・・決めました、もう、迷いませんよ、森本さん・・・愛人
でも、日陰者でもなんて言われても良い、もう、離れるのは嫌・・・

私の決心を聞くと、森本さんの表情が、少し哀しそうになった。

「そうか、随分、悩んだんだね、可哀想に、さあ、お出で、」

森本さんは、あの夜は、いつも以上に優しくかった。そして、いつも以上に、激しかった。

・・・うふ、ふーお願いされちゃった、初めてだったわ・・・

「是永さんおめでとう、とっても綺麗だわー素敵な旦那様だわー羨ましいいー」会場が宴もたけなわで騒めきだしている。

「のんちゃん、良かったねー」

「岩崎ーお前、こんな綺麗な嫁さんもらいやがってえーこの野郎ーハハハ」

私の、雄さんの、お友達が次々やって来てはほとんど同じ事を言っていく。何も知らない雄さんは、今が幸せの絶頂にいると思う。申し訳ない気持ちは、心の隅には確かにある。

・・・雄さん、ごめんなさいね・・・

と、もう何度も繰り返していた。

雄さんにはもう、何回か、抱かれていたけど、私の心も身体も、あの夜からすっかり、閉じてしまっていた。

ただ、若く激しい勢いだけのセックスに、仕方がないことだけど、これからは、馴れるしかないに違いない事は分かっている、でも、心の中では、抱かれる度に、森本さんを裏切っているような気がして、抱かれている。

雄さんに、妊娠を告げると、喜び、今は身体が大事だよと、私の身体を求められなくなった。

明後日、新婚旅行で、森本さんとの思い出が、有りすぎるハワイに出発する。私が新婚旅行はハワイに行きたいと言ったのは、ただ、森本さんの思い出に浸りたかったから。

森本さんから、色々教えてもらったり、必ずするように命じられた事や、教えられたセックスのテクニクは、あの夜を境に封印して、あまりセックス経験の少ない女を演じている。逢えば、必ず、森本さんに確かめられたお手入れも、今はもうしてはいない。

……確かめる森本さんは、もういない……し……だって、森本さんが、そうしなさいと、言ってたし……

あの夜、森本さんが私に、初めて言った言葉がある。それは、一度もお願いされた事は、それまで一度も無かったから、お願いされたあの時は、とても驚いたけど、全てを許すと決めた私には、拒む理由は無かった。

森本さんには長い間随分愛されてきたけど、私の身体の中で、一度も射精した事が無かった。数日前、逢いたくてやっと逢えて抱かれた、あの夜に、初めて私の中で感じて射精してくれた。

森本さんが私の中に、やっと射精して、感じてくれたと、私なりに、森本さんが満足してくれたと思い、とても新鮮で、嬉しかった。あの時、初めて、私はすっかり、全てを受け入れた、あの愛宿の夜。

……あの時は、嬉しかった……ホントに……

私はむき卵のように裸に剥かれて、全てを晒して、じっと見つめる森本さんの、視線に動かずに耐えている。馴れた行為だけど、や

はり恥ずかしい。森本さんは、まるで記憶するかのように、じっと見つめている。

「どうしたんです？ そんなに見ないで下さい、恥ずかしいですよ、森本さん？」と言うと、

「のん、」

「はい？」

「あの最初の夜、のんの処女を奪ったあの夜とき、身体は全然変わってないよ、綺麗だよ、益々綺麗になってさ、ここも、乳房も、ちっとも変わらないよ、」と言って、私の横に身体を寄せて、唇を重ねてきた。舌が、侵入してきて私もゆったりと感じるように絡ませる。乳房が、ぎりっと強く、赤く痕がつくくらい強く握られた。

「うっ、あっ、い、いっ、たぁ」

舌を吸いとられていて、声にならない声をだす。森本さんは、ぐいぐいと揉んでいる。そして、私の一番の性感帯、乳房に顔全体を埋めて、回すようにに顔をぐりぐり動かし乳房をたのさんでいる。唇が乳房に吸い付いてきた。

「あゝん森本さん、優しくあっあっ、あゝか、齧らないでくくくっ」

と、いつものように、カリッ、くにゅっと、歯をたてる。

乳房を強く吸い、舌を転がす。

「あゝか、感じます」乳房はとても感じる。

「のん、」

「は、い、あゝ」

「キスマークつけて良い？」と乳房を吸いながら言うから、

「どうぞ、・お好きにしてください」と返すと、

「全身を愛したい、キスマークで真っ黒にしてやる、」と、

変調気味な声上げて、乳房を強く吸い始めたから、

「いや、嫌です、キスマークは駄目です、いや、」と、無視されるのは分かっていたけど言ってみる。

「もう、お、そ、い」と、場所をづらしながら吸っている。

全身を吸われたような気がした。

お風呂場の鏡に写った身体には、あちこちに赤黒いキスマークの花が咲いていた。鏡に写る、身体に残されたキスマークの痕を見ながら、愛撫の激しさを思い出しては、一人、鏡の中で涙を流しながら声を出して泣いたあの夜。

・・・・・・悔しい・・・・・・

「あゝゝん、駄目ゝゝそんなに吸わないでゝゝ」

身体を、うつ伏せにされて、後ろから柔らかい処に侵入してきた、森本さんの指を感じながら、お尻や、太股を、強く吸われている。

そんな、森本さんが、

「のん、今日は、お願いが有るんだ!!」と、言ったので、

「何です?? 聞きませんよ、」と、直ぐに返した。

「ほう、聞かないと言うんだね、のんお嬢さんは、」

「はい、聞きません、又、何か変な事をしようと、企んでいるでしょう」

ぐりっと、太さを増した、森本さんの指が、抉るように、侵入してきました。

「あん、そ、そんなゝゝ優しくゝゝ」

「言う事聞かない、お嬢さんには、罰を与えないと、いけませんなゝゝ」そう言いながら、指を、ぐりぐり出したり、入れたりしている。

「も、森本さん、下さい・・・・、」

「何をだい??」

「意地悪、・・・嫌い・・・」

そう言うと、森本さんは、急に、俯せの身体を、力強く仰向けにして、そのままぐいと、上半身を起こされ、私の頭を、森本さんの中心に強引に持っていく、

「しゃぶれ、」と言って、森本さんの大きくなったモノを、口に咥えさせられた。そのまま、喉奥まで、飲み込ませると、

「動くな、そのまま、」

「うっぐっ、・・・ぐっ・・・うふっ」決して、嫌な行為ではない。

・・・森本さん、今日は、たっぷり愛して、あげます・・・

私は、喉奥まで、飲み込み、じっと吐き気に耐えていたけど、もう随分馴れた行為だから、吐き気も直ぐに治まる。ふと、思う事が有る。

・・・このまま、喉を過ぎるまで、飲み込めないかしら・・・
・・・と。

ゆっくりと、舌で押し出すようにして、口から出すと、唾液で濡れ光る、森本さんのモノを、左手で持ちながら、舌と唇と、手と、顔と、乳房を使って、森本さんに私の愛が伝わるように愛し始める。

舌の表側、裏側をねつとりと絡みつけるように舐め、吸い、上唇と下唇を厚くして、その唇で、森本さんの裏表をなぞり吸い、掌に包み込み、ゆっくりと擦るようにピストン運動を繰り返す。私の顔自体も、森本さんを喜ばせる、性の道具になる。顔全体を使って刺激を与える。順番に両眼に押し当て、頬ずりしながら舐め、又、喉奥まで、飲み込み、また、押し出す。最近、この行為をすると、唾液が、粘り気を増して普通以上に出るようになった。普通の唾液では無く、口の中で、出し入れし易く、滑りやすいようになおしゃぶ

り仕様の唾液になった気がする。

「のん、そのまま、飲んでくれ、」と、耳を疑うような事を言った。
「えっ? えっ、何を、です?」一瞬、意味が分からなかった。

「俺の、精液をさ、・・・嫌かい?」

・・・え~~~~~え~~~~~精液、精液って?? 飲む、って・・・
・・・どうしょ、・・・
飲めって、・・・言われても、・・・

「今まで一度も、飲めとお願いしたことは無かったけど、俺の精液を、飲んで欲しい。」

「の、飲むんですか??」と、動揺している。

「そう、そのまま、おしゃぶり続けて、ノンのおしゃぶりは最高だからさ、そのまま、ノンの口でいきたいんだ、どうしても、」と、森本さんは、動揺している私の髪の毛を、どかしながら言った。

「も、森本さん、え、え~~~~~今まで、そんなこと・・・言われなかった・・・飲む、んで、すか?」

・・・森本さんに、そう言って聞くのが、精一杯だったわ、あの時・・・

「あ~~~~皆さん男と女は、普通にしているよ、顔にかけたり、乳房にかけて見たり、皆、飲んでるよ、」

「え~~~~、ホントですか??信じられないー・・・」信じられなかった。

「飲め、のん、」

「はい、・・・」

・・・飲みます、・・・でも・・・

「そのまま、おしゃぶりを続けて、いきそうになったら、教えるから。」と、森本さん言った。

「はい、……森本さんが、そうして欲しいなら、……飲みます、喜んでくれるなら、飲みます、……」

「嬉しいよ、のん、ありがとう、」

「いえ……」

私は、行為を再び続けた。さっきまで、していた、愛撫を、もっと、濃厚にした。喉奥まで飲みこんで、ゆっくりと絞りながら、吐きだし、又、口の中を小さく狭くして、ぐぐっと、絞りながら口奥まで入れる行為は、私の柔らかい処に出し入れを繰り返す、森本さんのモノを意識した行為だ。そして、たぷりと、舐めまわした。頬づりをしながら、唾液まみれにして、右手で、上下に優しく強くしごく。

「あゝ気持ちいが、良いぞうのん、もう少しだ、もっと、舐めもっと、しごけ、」森本さんの命じる行為を、私は、続ける。何度も、何度も、舐めまわし、舌を絡ませ舐め、吸いつき、口の中に入れて、入口から喉奥まで、頭を上下に振りながら、出し入れを繰り返す。舐めまわしては、再び咥え、頭を上下に振る。頭を上下に振る行為は、森本さんが好きな行為だ。私の柔らかい処の部分に、口全体がなり代わる。

その時が、来た。

「い、いく、いくぞーのん!!」

森本さんは、そう言いながら、不意に身体を硬直させ、腰を浮かせて、私の喉奥まで差し込んで、私を、慌てさせ、そのまま、軽く

私の頭を抑えて、私が、口を放さないようにしながら、

「い、いくくくうっ、うくくむ、あくく良いくき、気持ち、良いのん、飲めっ、そのまま飲めっ、」と言って、最大の大きさに極大化したモノを、突き上げるようにしながら、どびゅ、びゅう、と何回か、私の喉奥に放った。

私は、抑えていた右手をしっかり握りしめ、口を締めて更に奥まで咥えて、初めてのその衝撃に耐え、出されたものを次々飲み込んでいく。初めてだった。

「うふっ、ぐっ、ぐふ、ぐっ、ぐうく」と、声にならない声を出しながら、こぼさないように、さらにきつく咥えて、吸いながら、覚悟して飲み込んでいく。咥えて飲み込んでいく口の中で、森本さんのモノは、元気にビクンビクンしながら、出し続ける。私の喉奥に、苦く独特の味が広がる。

「ごくっ、ごくっ、ぐっ、ぐう、むっ、むふうーごくっ」液体が、何度も喉奥を過ぎて行くの分かった。

やっと、飲み込み、私が、口から吐き出そうとして、頭を動かそうとすると、

「うっ、動くな、そのまま、そのままじっとして、しっかり咥えて、」と、命じられた。

「うっ、うくく」目を閉じて、感覚を追っている森本さんを見るのは、初めてだった。いつもは、私が見られているのに、今日は私が、見ている。

喉奥から、焼けるような、不思議な青くささの苦さが口一杯に広がっていくのを感じながら、そのまま、咥えてじっと森本さんを上目使いで見っていた。

「うくく、あくく初めてだくくのんの口の中でいったのは、あり

がと、気持ち良かったよ、あゝ良かった、さあ、綺麗に舐めとって」と、啜えている私を、少し起き上って見ながら、言った森本さんと視線が絡む。まだ、終わらなかった、行為は。私は、口から抜き出して、森本さんを見る。手にしたモノはまだ力強く、濡れて光っているだけで、全て飲み込んだから、残滓は、何一つ、残っていないかった。

・・・飲んだ、初めて、飲んだ・・・あれが、最初で、最後だった・・・悔しい・・・もつと、もつと、飲みたかった・・・

その夜は、それからが、激しく身体を、翻弄されて、滅茶苦茶に愛された。森本さんは、私の中で、あの夜も、果ててくれた。そんな行為の連続に、妊娠するなんて、全く考えていなかったし、もう、その行為は、これから、当たり前のように続くものだど、思っていた。

そして、近頃、始まった、森本さんが言う、馴れないA感覚の調教。あの夜も、

「A感覚の調教だよ。」と、言われて、森本さんが冗談まぎれに言った、調教が始まった。

この数日は、必ず、最後には、森本さんを受け入れていたし、森本さんが、そうしたいなら、喜んでくれるなら、全てを受け入れるつもりでいたから、そう言われても、心の準備は出来ていた。でも、やはり、まだ、お尻の中心に受け入れる行為には、違和感が在るし、まだ、その責めには、痛さも伴い、辛く、恥ずかしく、馴れない。じっくり、森本さんの指で、揉み解され、徐々に柔らかく拡張され、受け入れる準備が整うまでの間、私は、さっき口の中でいった森本さんのモノを、再び、口に啜えて、森本さんを愛し続けている。命令されたわけでは無い、自然にそうしている。そして、最後に、濡

れて、極大化した、森本さんのモノが、私のお尻の中心に、ぐいと、痛さと共に侵入してくる。

「力を、抜いて、いくよ、そう、緊張しないで、もっと、息を吐いて、」

森本さんを、入口に感じると同時に怖さが一瞬、心に過る。でも、ぐいっ、ぬるっと、柔らかくなった入口に入った瞬間に、

「い、いたあっ、あっ・ひいーうっ、むくん、」と、声が出る。

そのまま、どこまでも深く深く押し込まれる。

「くうー、ああーあーそのまま、そのまま、うっ、動かないでえー森本さん」と、痛さに涙が零れ、哀願する。

この、最初が、一番辛い。

「ほら、すっかり、奥まで入ったよ、のん、痛いかな?・・・さあいつものように、御挨拶だ。」

「は、はい、・・・」

私は、命令された、後ろでもしなさいと言われた、ご挨拶を、いつものように、きゅっ、きゅっと、締めつけてした。

「良く出来たよ、のん、・・・自分のスタイルを、さあ目を開けて、見なさい」と、言った森本さんに目を閉じて応えた。

「嫌、嫌です、恥ずかしいです、あっ、あー駄目、」すると、ずんっと、強く、腰を押し付けられた。

「あっうーむ」

「さあ見て、自分の目に焼き付けておくんだ。」と、変な事を言ったので、

目を開けて見上げる。視界に入った森本さんは、私の両脚を抑えつけながら上に折り曲げ、M字に大きく左右に広げて、中心を見ている。

で、一枚だけ、挿入したままの全身を撮った。確かに撮られた。私は、自分の両脚を、両腕で持っていた。

「………凄いい、写真だったわ、………何もかも写っていた・
・あの、写真・………今はもう、この世には、無い・………私は、
森本さんを信じている、今でも、・強く・………」

「ありがとう、のん、誰にも見せないで、満足したら、消すよ、」
と、撮り終わると、再び動き出しながら、そう言った。

「あゝゝ、あゝゝ、スケベ、森本さんは、ホントにスケベですよ。
お願いですから、消して下さいね、私、死んでしまいますよ、ね、
森本さん、」と、言うのと、

「のん、消すから、心配するな、近いうちに消すから??最後の思
い出にさ・………」と、又、変な事を言ったが、森本さんが動き始
めると、直ぐに、声を出しながら、感覚を追い始めていた。

「あつ、あつあつ、あつ、くっ、くっ・………あゝゝうゝゝむ、あ
つ、変になるゝゝあつ」又、涙目になる。

「痛いか、のん??」

「す、少し、あつあつ、あゝゝ」

「直ぐに馴れるよ、のん、ありがとう、のん、」、確かにそう聞こ
えたが、何も考え無かった。行為に夢中だった。

「あゝゝゝあゝゝふゝゝあん、あつ・………あゝゝ」

強く、強く、打ちつけ、侵入、後退を繰り返すと、私はその感覚
だけに意識が集中して、その感覚を全身で追いかける。火照り出す。
熱い。柔らかい処も、責められている中心も熱く、A感覚は、何も
かも私を狂わせ、感覚だけの世界に没入させる。そんな、私の、狂
いを、見ながら、森本さんは言った。

「のんの、ここは、凄いな、宝物かもしれないよ、俺以外の誰にも
許すなよ、のん、」

「は、はい、……もちろんです……あゝ、変になってしま
いますゝゝ、あん、どうしょ、あゝ堪らない、あんあんあつあ
ゝ変に、変に……」

そして、私は、何度も、何度も狂わされた、森本さんに。何度も、
いかされた。随分、激しい、愛し方だった。激しい行為の最中に、
森本さんは、何度も、同じ言葉を繰り返した。

「それ、もっと、感じろ、狂え、何もかも忘れて、感覚だけを、追
いかけるんだ。」

「のん、忘れるな、この感覚は、俺だけのものだ。」

「のん、……愛している。……」

激しい行為は、不意に終わりを告げて、静かに、悲しみの時間が
始まった。

手紙

静寂が、部屋を覆っている。目を閉じて、火照った身体を、森本
さんに抱かれながら、火照りを冷ます時間が過ぎていった。静寂を
破ったのは、森本さんだった。私は、森本さんの腕枕で、添い寝を
している間、森本さんの胸に右手を置いて少し眠ったかもしれない。

「のん、……」

「はい、……なんです？」

「良く聞いてくれないか？」

「はい、……何です？」

「明日から、東京に行く事になった。」

「はい、お気をつけて行って下さい、お仕事ですか？」

そう、応えた私は、この時まで、森本さんが東京に行くと言ったのは、仕事か何かだと、思っていた。
でも、

「いや、仕事じゃないんだ、東京の大学病院だ、検査入院だ・・・」
と、森本さんは、静かに言った。

「えっ、森本さん、・・・いま、病院って言いました？」私は、その意味が分からず、起き上って、森本さんを下に見ながらに聞くと、
「うん、病院だ、大学病院だよ、友達が、医者をしているんだ、そこで、検査をする・・・」と、目を閉じてはつきりと、そう言った、森本さんを見て、

「そ、そんなー森本さん、どこが、・・・どこが、悪いんです？？いや、嫌ですうーうっうっうっうっうっ」悲しみが、一気に心に溢れ、涙が、溢れだした。

そんな私の右手を握りしめ、

「のん、泣くな、のん、・・・頭に、何か、あるみたいなんだ、・・・」涙で歪んで見える森本さんを見ながら、
「いや、嫌です、・・・いやー・・・うっうううー」と、いやいやをするように、森本さんの右手を、両手で握りしめて、顔を横に振りながら、掠れた泣き声で、言った。
言い知れない不安が、次々、湧き起こってくる。

「な、のん、ひょっとしたら、手術になるかもしれない・・・」

「そ、そんな、しゅ、・・・しゅ、手術するんですか？？・・・だ、大丈夫なんですよね、森本さん、大丈夫ですよ、森本さん、」

手術という言葉聞いて、あの時の私の心は、完全に、凍ってしまった。これまで生きてきたし、これからも生きて行く人生の中に、いつかはやって来る手術とか、病院とか、人の死とか、そんな事は、身の回りに起こるはずが無いと思っていた。でも、起きてしまった。あの土曜日の夜に。

森本さんは、目を閉じて、私の手を握り続けている。

「なあ、のん、これまで、色々、のんには、迷惑をかけたし、俺の我儘で、のんを抱き続けた。どうしても、抱きたくて、抱きたくて、のんを失いたくなかったんだ、あの別れは、辛かったよ、でも、」そう言った森本さんに、

「でも、なんですか？聞きませんよ・・・抱いて下さい、これからも、・・・うつ、ぐすつぐうううう・・・そんな、事、言わないで、どうぞ、抱いて下さい、いやです、うううううううう」森本さんの言葉は、悲しみを深くして、涙が止まらない。

「泣かないで、聞いてくれ、のん、」

「嫌です、聞きたくありません、・・・いや、いや、・・・」

「良いかい、のん、のんは、これからの人生は、長いんだ、だから、今の婚約者と結婚するんだ、結婚して、子供を産んで、幸せに暮らすんだ、」そう言った、森本さんの閉じた瞼から、涙が、零れた。

「も、森本さん・・・うっううううう・・・し、ぐす、うううううー・・・しません、・・・どうして、そんな事を言うんです？・・・森本さん、そんなに、そんなに・・・悪いんですか？？」

「帰れないかも・・・しれないんだ・・・くっ・・・うつ・・・」

「森本さん、いや、嫌です・・・いや、いや、・・・私も・・・死ぬ・・・」

私の森本さんは、あの夜から、二度と、私の前に現れる事は、なかった。

「のん、す、済まん、もう、俺の人生は、幕を閉じる事になるかも知れないんだ、だけど、のんの人生は、まだまだ、続く、生きろ、自殺なんかするな、俺は、のんに生きて欲しいんだ、なっ、のん、」
「嫌です、森本さんのいない人生なんて、嫌です、．．私も行きま
す、東京へ．．．」そう言った瞬間、直ぐに、森本さんの奥様の事
が、頭に浮かんだ。

．．．．私は、．．．看病も出来ない．．．日蔭者．．．．

「来なくて良いよ、今日で、忘れるんだ、直ぐには、忘れられない
だろうけど、忘れるんだ、」

「い、い．．．や．．．です．．．忘れません．．．私の、
私だけの森本さんなんです、忘れません、この乳房も、ここも、こ
こも、私の身体、全部森本さんのものなんです．．．」私は、森本
さんの手を、胸に、柔らかい場所に、お尻に、口に、身体のいたる
ところにあてがって言った。

「そうだ、俺の、俺だけの女だ、．．．もう、．．．無理かも
しれないんだ、．．．」

「いや、嫌です．．．私を、私を．．．ひ、一人に．．．し、ウ
エ．．．ン、ワ．．．いやいや、いや．．．一人にしないで．．．
ひっひっく、ひひや．．．ぐすっ、ううううう．．．」

泣いた。泣いた。大泣きしたあの夜。

「あら、ノンちゃん、泣いてる、羨ましいわ、．．．」

「そう、素敵な旦那様．．．泣かないの、今日は、嬉しい日なのよ、

のんちゃん」

「あ、ありがとう、・・・感激しちゃって・・・」
誰も、知らない。私の涙の秘密を。

声を出して、泣いた。泣くしかなかった、あの夜。今でも、悔しい。天国から、地獄に落とされたような気持ちが今でも、心に在る。消えない。残り火のように、ちりちり、燃えている。岩崎さんに、抱かれている最中も、消えはしないし、セックス自体に嫌悪感を持つようになっていた。でも、抱かれている。

夫になる人、仕方が無い事だと、思っているけど、いつも森本さんを、思い続けている。今でも、大好きな私だけの森本さん。

・・・そう、このお腹には、間違いなく、森本さんの子供が生まれている。・・・

明日日、仙台空港から、ハワイに新婚旅行に行く。思い出のハワイ。いつも、豪快に笑っていた森本さんがいる思い出のハワイ。

今日の結婚式まで、あの夜から、三月が過ぎている。やっと、森本さんがいなくても、生きて行く決心がついたのは、森本さんからの手紙と、お腹の子供。私の生きる縁。

矢崎さん

「ノリコーお客さんよ、降りて来なさいーノリコー」と、私を、呼ぶ声がした。母の声だった。

森本さんとの不意の別れに耐えきれず、私の心は、ボロボロにな

っていた。あの夜、森本さんに、激しく抱かれ、愛され、これから、森本さんだけを愛していく心の決心がついて、部屋に迎えた、あの夜に、天国から地獄に落とされた。酷い、酷いと、何度も、叫んでいた日々。

森本さんは、あの最後の夜に、私を激しく、愛して、抱いて、翻弄して、そして、そして、突然、私の前から、消えてしまった。消えた、実感は、直ぐには、湧かなかったけれども、時間と共に、心にじわじわ沁みてきた。辛い日々の始まりだった。別れは、突然だった。

別れに、その苦しさに、何度、死のうと思ったか、分からない。逢いたくて、逢いたくて、奥様がいても構わない、何度も何度も、東京に行こうと思ったけど、森本さんは、最後まで、東京の入院先を教えてくれなかった。声が聞きたくて、逢いたくて、抱かれなくて、森本さんを確かめたくて、携帯電話番号を、何度も、何度も、毎日押し続けた日々。でも、何度も、何度も、繰り返し電話をしても、次の日からは、繋がる事は、無かった。

・・・・・・どうして、どうして、出てくれないの・・・・森本さん・・・・・・
・・・・・・お願い・・・・・・

森本さんの存在が不意に消えたあの夜以来、毎日、毎日が、針の筵に座っているような日々が続いて、心も身体も、ボロボロになっていった。住んでいる部屋には、森本さんとの思い出が有りすぎる。ベッドを見ると、敷かれた布団を見ると、初めて森本さんを受け入れ、処女を捧げた、あの日が、そこに在り、目に浮かぶ。あの日から始まった、森本さんとの恋。

最初は、三か月くらいで終わるだろうと思っていた、森本さんとの関係が、処女を捧げたあの日から、恋して、愛して、抱かれて、愛されて、私の心も身体も、全て奪われて、毎日、毎日が、森本さんと共に過ぎ、めくるめく時間と共に、こんなに時間が過ぎてしま

っていた。

大好きだった森本さん。私の身体を愛した森本さんの思い出がありすぎるこの部屋には、住み続ける事は出来無かった。

．．．．．待つわ．．．．．きつと、帰ってくるわ．．．．．森本さんわ．．．．．

そう、何度も思った。部屋で待とうと何度も思ったけど、時間が経てば経つど、森本さんの存在が消えた事が、肌身で実感し、辛さが増していった。あの夜以来、生きる希望、生きて行く心の支えというか、核心が、消えて、心に、ぽっかりと穴が空いてしまっていた。虚ろな心のままで、部屋に居ること自体に、心の痛みが続き、目にする物は、全て、無色に見えた日々。色を、人生の色を失った日々は、今も続いている。

私は、仕事も、辞めて、部屋を出て、傷心のままで、実家に、戻っていた。

「ノリコ、お客さんよ、」階下に降りると、母が、心配そうな表情で、言った。

実家に戻った私に、母も父も優しくかった。ぼろぼろになって帰った、私に、母も父も何も聞かなかったし、言わなかった。私は、岩崎さんとの、結婚を断る積りでいた、この時まで。生きて行く自信は、全く無かった。実家に帰ってから部屋に閉じこもり、毎日、死ぬ事ばかりを考えていた。

お店の外に出ると、驚いた。

「あっ、や、矢崎さん、．．．．．どう．．．．．して．．．．．」驚いて、声が、詰まった。

「暫くでした、．．．．．探しました．．．．．あの夜以来でしたね．．．．．」と、口髭を生やした、矢崎さんが、にこっと、微笑んで、低

い声で、私に言った。

私には、意外な訪問者だった。矢崎さんが、目の前にいる。あの初めて会ったお店、あの夜以来、矢崎さんとは、一度も会ってはいなかった。

「も、森本さんに．．．な、何か．．．有ったんですか．．．??」

「ここでは、なんですから、お茶でも、．．．」と言った声は、沈んでいた。

．．．き、きつと、．．．何か．．．有ったんだわ．．．もしや．．．いや．．．

「はい、．．喫茶店にでも．．．」

「ついて行きます．．．」

私と、矢崎さんは、歩き出した。駅傍には、喫茶店が何軒かある。矢崎さんは、何も言わないで、私の横を歩いている。

「矢崎さん、．．．どうして．．．」と、横を歩いていた、矢崎さんを見ながら、聞くと、

「頼まれて、来ました．．．」と、応えた。

「誰にです??」

矢崎さんに、そう聞いたけれども、心では、分かっていた。頼んだ人間は、森本さんしかない事を。

不安が、増していく。止めどなく不安が、増していく。地に足がついていないような気がして、歩いていた。

駅前の喫茶店「パフューム」に入った。店の中には、お客さんは、2組しかない静かな、店だった。

この店まで矢崎さんと二人で歩いてきたけれど、殆ど無言で歩いてきたものだから、お店の中に入っても何かしら、気まずい思いがして、席に座った。

・・・何かしら、・・・わざわざ、ここまで来るなんて・・・
話さなくちゃ・・・

「矢崎さん、何年ぶりかしら？随分お会いしていなかったですよ、ね」と、矢崎さんに無理に微笑んで、話しかけると、

「遠慮していました、森本に、・・・」静かな声で、応えてくれた。

「そう、・・・森本さん、・・・どうしています？」

「・・・是永さん、元気で、頑張ってください、死んでは駄目だと、言っていました。も、森本・・・くっ、うっ・・・」そう言うと、抑えきれないように、矢崎さんが、涙を零し始めた。

「そ、そんな〜、や、矢崎さん、・・・も、森本さん・・・まさか・・・し、・・・死んだんですか？？」

「今日、・・・今日手術・・・です、・・・昨日、東京から、帰って来ました。」と、ハンカチで目元をふきながら、静かな声で言ったのを聞いて、居ても立ってもいらなくらい、逢いたくなり、「しゅ、手術って、・・・どこの・・・どこの病院なんです・・・お・・・教えて下さい、矢崎さん、」私は、不安な気持ちを隠して、何とかして、聞きだそうとしたけど、矢崎さんは、

「済みません、・・・教えるなど言われているで、教えれません、」

「そ、そんなあ〜くぐすつ、くつくくうう〜・・・そんなあ〜森本さん・・・ひ、酷いー」

私の心は、これ以上ない深い、深い、哀しみに、沈んでいった。

・・・森本さんに、・・・捨てられた・・・捨てられてしまったんだわ・・・

「・・・な、泣かないで・・・悪く思わないで、下さい是永さん、・・・森本の事は、悪く思わないで下さい、・・・彼奴は、是永さん

を、今でも愛していますから・・・ただ・・・もう・・・」

「わ、私は、捨てられたんですねーうっ、うっううううう」
涙が止まらない。矢崎さんの言う事が、はっきり聞こえないほど、心を閉ざして、捨てられた、捨てられた、との思いに、何度も心の中で、捨てられたと繰り返していた。

「今日来たのは、これを、渡すように、森本から頼まれていたからです。」と言って、バッグから、手紙を取り出し、テーブルの上に置いた。私は、その置かれた、涙で歪んで見える手紙を、ただ、見ていた。

・・・森本さんの・・・手紙・・・

手に取るのが、あの時怖かった。でも、あの手紙が、私を、救った。

是永 紀子様へ

突然の別れに、きつと、戸惑い、怒り、悲しみ、落ち込んで、泣いてばかりいると思う。

のん、済まない、済まない事になってしまった。俺は、是永 紀子という女性の運命を狂わせた、身勝手な男なんだと、思っている。俺とあの時、あの店で、出会う事さえなかったら、全く、現在とは違った人生を歩んでいて、恋人と幸せな時を過ごし、幸せな結婚式をあげた事だろうと思っている。

・・・そ、そんな事は・・・無いですよ・・・森本さん・・・

のんの、人生を勝手に捻じ曲げてしまった。申し訳無い。結果責任をとれないのが、悔しい。

・・・うっううう・・・も、り、もとさん・・・うううう・・・

人生には、こんな非情な事もあるんだと、つくづく悟らされたこの数週間だった。検査結果は、非情だった。この非情な運命を、甘んじて受けなければならぬ、我が身の不運に、神などは存在しないと、何度もなじったものだ。だけでも、それも、終わった。なじったところで、何とかなるものではないから、自分の心に折り合いをつけ、諦める事にした。

・・・そんなあ・・・

この手紙を、矢崎君に、のんに渡すように、頼むつもりだ。この手紙が、のんの手元に渡った頃、もう、俺は、多分、この世に生きていないと思う。

秀吉が、死ぬ前に詠んだ辞世の句は、露と落ち 露と消えにし我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢、だったが、それは、どのような人間にもあてはまると、思っている。消えるんだ、露となって、儚く、この世から消えて無くなるんだ。

・・・いや、いやあ・・・死んでは、いやあ・・・うっうううう・・・森本さん・・・生きてて下さい・・・死んじやいやあ・・・あ・・・いや・・・

泣くな、のん。泣きなさんな、のん、のん、のん、・・・俺のだけの・・・のん・・・泣くな紀子さん、泣かないの、紀子・・・泣くな・・・

・・・うわあ・・・ん・・・ぐすっ・・・うっうっ・・・ええ・・・ん、うっううう・・・

携帯電話も、パスポートも、のんに関するありとあらゆるものは、処分した。何人かしか、俺とのんが愛し合っていた事を知らない。決して、冷たくしたのでは無い。連絡をしないのは、のんを捨てたからでは無い。毎日ベッドで、目を閉じて、真っ先に思い浮かぶのは、のんだった。逢いたい。逢って抱きたい。直ぐにでも、のんの元に帰って、愛したい。

・・・ぐすっ・・・ぐすっ・・・うううえええん・・・森本さん・・・
帰ってきてえええ・・・

のん、のん、こうして書いているだけで、涙が止まらない。お前に、逢いたい。もの凄く、逢いたい。

俺とのんとの出会いは、天の采配により、のんに出会い、のんに恋した「天の恋」つまり、「天恋」だと、思っている。それほどに、のんが好きなんだ。のん、愛しているよ。何度でも、言う。愛している。俺が死んでも、来世があるとすれば、必ず、のんと一緒だ。何故なら、天恋だからだ。

・・・はい、も・・・森本さん・・・私の森本さん・・・
愛していますよ、私も・・・

死ぬな。死んでは、いけない。俺の為に、生きてくれ。のんが、俺を好きで、好きで堪らない事は、分かっている。分かっているからこそ、心配なんだ。生きるんだ。人生は儚いからこそ、生きて生き抜くんだ。多分、俺の事は、忘れないだろうが、記憶が忘却の彼方へと導いてくれるはずだ。それで、良い。

矢崎君が、持っていくだろうこの手紙が、のんとの最後の別れになると思うが、生きて、生きて、絶望等せずに、頼むから・・・生きてくれ。切に願う。自殺なんかするんじゃない。美しいのんが、

死ぬんじゃない。

……だ、だってえ……も、森本さんが死んじゃう……生きていけない……うつつ……

死んでは、いけないぞ。自殺したら、あの世でも、来世でも、来るべき未来でも、一緒になれないぞ。

そうだ、力強く、生きるんだ。忘れても良い、何もかも忘れて、現在を生き抜くんだぞ、俺の可愛いのんよ、頼むから、自殺なんかするんじゃないぞ。

ここだけの、話なんだが、奇跡が、きっと、起きて、生きているかもしれないよ、のんが死んだら、二度と逢えないだろ、だから、自殺なんか、考えるな、死ぬな、必ず、生きて、復活だ……

俺の、最後の人生を、豊かにしたのは、間違いなく、是永 紀子という、女性だった。感謝しているよ、是永 紀子という女性と過ごせた、最後の何年間は、人生最大の幸福な時間だった。女房に、不満があったわけでは無いし、俺には、子供がいる。そんな、俺を愛してくれた、是永 紀子という女性に、心から、ありがとうと言いたい。ホントは逢って言いたいけれども、もう、無理だ。覚悟は出来ている。

ありがとう、是永 紀子……俺の、のん……俺だけの……のん……大好きな、愛する、のん、本当に、楽しい、幸せな人生だったよ、ありがとう。こんな結果になって申し訳ないが、爆弾を仕込んでおいたよ。直ぐに気がつくだろう。自分の幸せを考えるなら、……任せるよ。

あの手紙に、はつきりと、爆弾を仕込んだと書いていた。その通りに、赤ちゃんが、私の、お腹に、愛する森本さんの子供がいる。私が、妊娠している事を、この結婚式の会場で知っているのは、何人かしかない。でも、この子は、岩崎さんの子供だと、思っている………

………違うわ………これは、森本さんが、仕掛けた、………私を、束縛する………爆弾………残酷だわ………森本さんは………でも、………でも、………森本さんの、子供が、私の、お腹の中にいる………こんな、幸せは………無いわ………ありがとう………森本さん………この子と、………この子と………生きて行きます………死にません………きつと、………逢えます………抱いて下さい………森本さん………うっうっうー

「大丈夫かい、辛かったら、………休んだら良いよ………明後日は、新婚旅行だよ………大丈夫なの??」
優しい夫は、そう、言っ、私の肩を優しく、抱いてくれた。

ピーーーーーと、指笛が鳴った。

「おーおうおう、岩崎よ、未だ早いぞ、未だ、ここは未だ式場だぞおう」友人が、怒鳴ったように話している。

「そうよ、ノンちゃん嬉しくて、泣いてるのよ、」

「ごめんなさい、………少し、………うっぐっす………」

「良いのよ、ノンちゃん、幸せになるのよ………ねって、………うっ、わ、私まで、泣いちゃってえ」友人のチイちゃんだった。

………ごめんね………ごめんね………私は………

そろそろ、終わりにするけど、是永 紀子さん、本当に楽しい時間を一緒に過ごせた事は、本当に感謝している。もう、のんの、優しい顔、泣いた顔や笑った顔、特に怒った時のあの、恐ろしい顔を見る事は無いだろうね。とても、悔しいよ、悔しくて、悔しくて、人知れず何度も泣いたよ。泣いても泣いても、迫って来る死への恐怖は消えない事は分かっていたけど、自然に涙が落ちるんだ。のんに逢いたい、逢いたいと思えば思うほど、涙が零れるんだ。そして、ベッドに寝て電気を消されると、もう、のんとの思い出が走馬灯のように目の前で浮かび上がるんだ。

あの、初めての夜、あのスキー場、岩手の海岸岬、東京、仙台の夜、京都、ハワイと、色んな処の思い出が浮かんでは消えていくんだ。書いていても、思い出せばいくらいに、あちこち行っただね。

本当に楽しかったよ、のん、紀子、紀子さん、あーもう呼ぶことも出来ないんだのんって。

生きて、生き抜いて下さい。それが、最後のお願いだよ、のん。

俺とのんの恋は、天が巡り合わせた、天恋、死さえ阻む事の出来ない恋、天恋なんだ。この世での恋も幕切れ寸前だが、次には必ず、巡り合えるよ、俺はそう思っている。良くあるだろ、世代を超えた、二人が巡り合う物語、きっと巡り合えるよ。それまで、時代が進もうと、時間が過ぎゆくとも、のんの寿命が終わっても、きっと俺とのんの恋は成就する。そう思って、生きるんだ。死んではいけない。

先に行って、待ってるよ。

のん、のん……逢いたい……のん……

待っているよ、奇跡が起きる事を……

本

森

……うっぐすっ……うっうっ……森本さん……私の森本さん……いや……

森本さんの手紙は、今も、隠れて読んでいる。森本さんの手紙には、愛が溢れている。いつも豪快に笑っていたけど、神経がとても細やかな人だった。優しく、いつも私を暖かい眼差しで見えてくれた、森本さん。森本さんの言う通りに生きていきます。

……明後日、仙台空港から、新婚旅行に旅立ちます……思い出のハワイへ……

結婚式は型どおりに終わって、私は、岩崎 紀子として生きていく事になった。結婚式を挙げる前に、妊娠している事を告げると、勇さんは嬉しくて堪らないらしく、急いで入籍しようという事になり、急遽、二人で市役所に行って、入籍を済ませた。父も母も妊娠を喜び、落ち込んでいた私がこれでやっと、元気になると思ったようだった。

入籍を済ませて車に乗ると、

「幸せにするよ、ついて来てくれ、」と雄さんは、入籍を済ませた車の中で力強く言ってくれた。

「はい、・・お願い致します」と、応えていたが、心は、雄さんにごめんなさい、ごめんなさいと、謝っていた。それでも、もうこの時点で、私は、雄さんの新妻となっている現実が、私の心を益々重くしていた。

住まいは、岩崎家の離れにして頂いて、住み始めている。若い夫婦のお邪魔にならないように、そして、今日の、結婚式。沢山の人々に、喜んで貰えた、傍目には素晴らしい結婚式だった。

でも、私の心は、会場にはいなかった。結婚式場に、何の色も無かったような気がしていた。

再び

森本さんからの、あの手紙が、私のこれからの人生の生きる、生きて行かざるを得ない、支えになってしまった。森本さんが、私の前から消えたあの土曜日の夜以来、毎日、毎日、死にたい、死んで森本さんの元に行きたいと思った日々を終わらせたのは、矢崎さんが、配達してくれた、森本さんからのあの手紙。

・・・あの手紙に救われた私とお腹の赤ちゃん・・・私たちの恋は、天恋。・・・

あまりに残酷な現実が目の前に出現した事に、恐怖し、その仕打ちに苛立ち、打ちひしがれてしまった日々。森本さんの元にいると決めて、部屋で抱かれたあの夜が、憎かった日々。私から、森本さんを奪ったあの土曜日の夜。

森本さんと一緒に過ごした、あのときめきの日々はもう帰らない。思い出の中でしか逢う事が出来ないけれども、私の心に、今も鮮やかに蘇る数々の思いで、誰も知らない二人だけの秘密。

迫る、恐怖に、来るべき最後の事態に、その仕打ちに何度も恨み、懺悔し、お会いしたことも、一度も会ったこともない奥様に謝ったり、神様にもお願いもしてみた日々。

でも、でも、後悔は無い、後悔なんかしない。後悔していることは、もっともっと愛せば良かった、愛が足りなかった事に後悔している。

現世で、共に過ごせなくても、次の、又次の、いつかの時代に、必ず逢えると森本さんは書いていた。信じます。信じてこれから生きます。再び巡り逢えると信じ、それを、信じていなければ生きて、生きていけない、生きたくない、そんな強い思いが、結婚式までの僅かな時の流れの中で、私の生きる確固たる信仰にまでなっていた。

再び

仙台空港、何度も森本さんと旅立った思い出の空港に、今は、岩崎 紀子として、夫の雄さんとやってきた。車の中から見える空港の建物は、森本さんと来たときとちつとも変わらない、ただ、高速を走り仙台市街を走っても、見える物全てに色が無いように感じていた。

空港の駐車場に入り、車の中から何気なく空港玄関に目をやると見た事のある男の人が立っていた。

・・・あれえゝ矢崎・・・さん・・・どう・・・して・・・も・・・も・・・
生き・・・生きて・・・いる・・・森本さん・・・えゝ

く、い、生きている……

不意に、涙が、溢れ出た。ぼろぼろ零れ出して地面に落ちていく。構わずに遠くに見える森本さんの姿が、涙で歪んで見える。目にする物全てに色がついて見えだした。

「どうしたの？ 泣いたりして？」急に泣きだし涙を流した私を見て、雄さんが言った。

「う、嬉しくて、……ハ・ワ・イ旅行うー……ぐすっ、うっううう」雄さんの前でも、構わずに泣き出していた。

「馬鹿だな」泣かないで、さあこれから楽しい旅行、新婚旅行だよ、これからだよ、さあ着いたよ、荷物を」と何も知らないで言っている。

……ゴメン……ごめんなさい……もうだめ……

「は、はい……ごめんなさい」

涙を拭きながら、空港玄関を再び見ると、確かに矢崎さんと、車いすに座って帽子をかぶっている男の人が見える。

……車いすに座っているのは、……間違いないわ……森本さん……森本さんだわ……ぐすっううう……い、生きていた……あ……生きている……嬉しい……逢いに行きたい……逢って抱かれない……でも……

「さあもう泣かないで、

行くよ」何も知らない夫の雄さんは、楽しそうだった。

「はい……」

……き、来てくれたんだわ……今日が、新婚旅行なのを知って……きつと、矢崎さんが調べたんだわ……ハワイから……

・・・電話・・・してみる・・・きつと・・・今度は・・・
通じるわ・・・生きている・・・あ～～生きてるなんて・・・
・

仙台空港の表玄関の左側に、矢崎さんと森本さんはいた。私と勇さんは荷物を持って、近づいて行く。心臓の鼓動が速くなっている。

・・・どきっどくんどきっどくん・・・

姿が、大きくなって、はっきりと見える。

・・・も、森本さん・・・だわ・・・生きていたんだわ・・・
・・・生きていてくれた・・・

涙が、ポロリと、頬を伝わって又、零れ落ちた。

「もう、皆に見られるよ、もう、泣かないの、折角の美人が、」困った顔で言った。

「ごめんなさい・はい、嬉しくて・・・」

「うん、僕も嬉しいよ・・・こうして、一緒にハワイにいけるんだから・・・」

「はい、・・・グスッ・・・」

森本さんと視線がぶつかった。あの熱い視線が、再び私を見ている。隣の雄さんに気付かれないように、少し遅れて歩いて、森本さんから視線を外さない。森本さんも、じっと、見つめている。

・・・あ～～森本さん・・・好き・・・愛しています・・・
良かった・・・逢える・・・死なないで良かったあ～～・・・
再び・・・逢えた・・・

じっと見つめる森本さんの視線は、私に、話しかけ、言っていた。

・・・待ってるよ・・・と。

森本さんは、待っていると、視線で私に言っていた。確信があった。森本さんに伝えたかった。傍に行って話したかった。抱き締めたかった。抱かれたかった。

・・・森本さんの・・・赤ちゃんがいます・・・このお腹の中に・・・

何もかも捨てて、傍に行きたい、そんな思いを抱きながら、森本さん達の脇を通り過ぎて行くときに、森本さんが携帯電話を手に持っているのが見えた。

・・・あっあの携帯は・・・分かりました・・・

見覚えのある携帯電話だった。あの土曜日の夜に、私の恥ずかしい写真を撮った、あの携帯電話だった。

表玄関からロビーに入ると、旅人があちこちにいた。

「着いたんですね、たくさんの方がいるんですね、凄いですね、」
と言いながら雄さん気付かれないように、周囲を見渡すように、身体をゆっくり回して玄関の向こう側に視線をやると、森本さんは、もうそこにはいなかった。急に、淋しさに心が支配されて、周囲の色が消えていく。

「やっと到着したよ、もう泣かないでね、お腹空いたね、食事しよう、ね」

「はい、二回のお蕎麦屋にしましょう。」

「うん、時間はまだあるよ」

「えーもう泣かないですよ、」

「そう、そうせっかくの美人が台無しだよ、これから楽しい新婚旅行なんだからね、」

「はい、そうですね、嬉しいですよ、」

そう言ったけど思いは此処にいなかった。

「……なんて、事かしら……森本さんが……生きているなんて……あんなに悩んでもう少しで、死ぬところを、生きろって……書かれた手紙……生きてるなんて……結婚するんじゃ無かった……生きてるなんて……私は、もう勇さんの奥さんになってしまったわ……」

「……生きてるなんて、何だか騙されてしまったみたい……結婚してしまったなんて……」

「どうしたの？元氣ないよ、疲れたの？」

「いいええー、嬉しくて……」

テーブルに座っても、森本さんの事を考えてしまう。

「何する？」

「雄さんと同じで良いですよ、」

「じゃ、天ざるにするよ、」

「はい、」

注文した、雄さんは、すっかり夫になりきっている。それは、当然だと思った。

「……ハワイ……行きたくない……抱かれない……生きてるなんて……結婚しなければ良かった……そうだ……お腹の調子が悪いと……抱かれない……森本さん……」

・
・・・抱かれない・・・このまま帰ってしまったら・・・出
来ないわ・・・

私の心は、乱れ始めた。

・・・そう、ハワイに行ったら、抱かれないようにしなくちゃ・
・赤ちゃんのせいにして・・・

「雄さん・・・トイレ行ってきますね・・・少しお腹が・・・」
」

「動いてるの？大丈夫なの？」心配そうな顔を見せながら聞いた。

「えゝゝ大丈夫だと思いますけど、今一番大事にしないと・・・」
「そうだ、大事にしなくちゃ・・・」

私は、トイレに入って、思いを整理する事にした。

・・・是永 紀子・・・諦めなさい・・・雄さんの奥さんなのよ・
・今は・・・岩崎・紀子よ・・・

と、鏡に映る自分の姿に話しかけて見る。そう言って自分に言い聞
かせても、生きている森本さんを見てしまっただけからは、再び、燃え
だした赤い炎は、たった少しの時間しか経っていないにも関わらず、
物凄い勢いで増すばかり。まるで、逢えなかった時間を取り戻すよ
うに、抜け殻になった自分の心に、愛を溢れさせるように、あの別
れた憎い土曜日の夜に時間を巻き戻すかのように、どんどんその大
きさを増していく。今も。この時も。森本さんを見た瞬間、喜びが、
身体の中で爆発していた。

・・・生きてるなんて・・・結婚してしまった・・・運命は・・・

・不条理だわ・・・
・・・・もう、抱かれない・・・帰って来たら・・・森本さんに逢うわ・・・決めたわ・・・

「ごめんなさい、あつ、お蕎麦頂きましょう。」

「うん、大丈夫かなあゝ心配だよ、飛行機・・・大丈夫かなあゝ」

「ごめんなさい、勇さん・・・大丈夫ですから・・・ねっ・・・」

「うん、分かった・・・食べよう」

飛行機の中から下に見える、陸地と海は、美しかった。白い打ち寄せる波が、陸地にぶつかってはあつという間に消える海岸線がどこまでも続いている。波は、繰り返し陸地を目指して打ち寄せる。大海原の先には、思い出のハワイがある。森本さんと何度も行った、あのハワイに向けて飛行機は飛び立った。

急速に、角度が変わり、海が消えた。

・・・・行ってきます・・・森本さん・・・お電話します・・・
・待っていて下さい・・・
・・・・愛しています・・・森本さん・・・身体が・・・不自由でも構わない・・・もう離れないわ・・・もう絶対・・・離さない・・・
・私だけの・・・赤ちゃん・・・だけの・・・もの・・・私の恋・・・

長い間、読んでくれた方々にお礼を言います。ありがとうございます

ございました。この物語は、携帯とパソコンで書きましたし、不慣れで、誤字脱字、稚拙な文章、何せ初めての小説でしたから、御勘弁下さい。

ただ、この物語は、今でも、好きで、この続きを書いて見ようかと思っております。

平成22年10月20日

千

原樹 宇宙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4009o/>

天恋

2011年10月3日22時25分発行